
SEASONS

COLOR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SEASONS

【Nコード】

N7965H

【作者名】

COLOR

【あらすじ】

偶然見かけた下級生に一目惚れした主人公・柊了希。ほぼ同時に学年一の美少女と謳われるクラスメイト・朝倉麻梨子に告白される。▼一目惚れした下級生のことを諦められないまま、了希は麻梨子の告白を受け入れてしまう・・・。

資料室（前書き）

ここではSEASONSに登場する、人物や舞台を説明しています。
物語が進むに連れ、この資料室も更新されます。

資料室

◆登場人物

柊 了希（ひいらぎ りょうき）♂・・・初登場#一

三年G組

物語の主人公。テニスが巧い。

二年生の時にテニスでインターハイ優勝。

三年の体育祭では史上初の同一個人種目三連覇を達成（男子テニス）。

朝倉 舞衣（あさくら まい）♀・・・初登場#一

一年E組 演技部所属

柊了希が一目惚れした相手。

朝倉麻梨子の妹。

朝倉 麻梨子（あさくら まりこ）♀・・・初登場#二

三年G組

柊了希のクラスメイト。

前年の文化祭で密に行われたミスコンで見事グランプリを獲得。密かな行事ゆえ、本人はその事を知らない。

佐久野 豊（さくの ゆたか）♂・・・初登場#一

三年G組

柊了希のクラスメイトで幼馴染。

夏休みのキャンプ時に月島 由実と付き合い始める。

柊の陰謀で二期の学級委員を務める。

伴城 武士（ともしろ たけし）♂・・・初登場#一

三年G組 男子テニス部主将

柊のクラスメイトで男子テニス部キャプテン。

亜津 純一（あつ じゅんいち）♂・・・初登場#二

三年G組

柊のクラスメイトで幼馴染。

月島 由実（つきしま ゆみ）♀・・・初登場#八

三年G組 女子陸上部主将

柊たちのクラスメイトで女子陸上部主将。

最後の総体で短距離で全国大会に進出。

夏休みのキャンプ時に佐久野 豊と付き合う。

佐久野豊と共に二学期の学級委員長を務める。

水野 美夏（みずの みか）♀・・・初登場#一八

三年G組

柊たちのクラスメイトで夏休みのキャンプに参加。

朝倉麻梨子の親友。

相島 法子（あいじま ほうこ）♀・・・初登場#一八

三年G組

柊たちのクラスメイトで夏休みのキャンプに参加。

細川 優利香（ほそかわ ゆりか）♀・・・初登場#二〇

三年G組

朝倉麻梨子と並ぶ美女。

恩田正人と学校中の公認カップル。

夏休みのキャンプに参加。

恩田 正人（おんだ まさと）♂・・・初登場#二〇

三年A組

サッカー部主将で細川優利香のカレシ。

夏休みのキャンプに参加

真矢 唯（まや ゆい）♀・・・初登場#二〇

三年E組

夏休みのキャンプに参加

久川 香奈（ひさかわ かな）♀・・・初登場#二〇

三年A組

夏休みのキャンプに参加。

広瀬 由比（ひろせ ゆい）♀・・・初登場#三八

二年C組 女子テニス部所属

二年生にして女子テニス部エース。

さらに全国大会個人戦優勝者。

以前から内に秘めていた想いを終了希に告げる…。

体育祭では公言どおり個人種目の女子テニス連覇達成。

柄沢 明（からさわ あきら）♂・・・初登場#六三

三年B組 演技部部长

一年の時は演劇部に在籍していたが、二年進級と同時に自分の理想を追求して退部。一緒に退部した数名の同級生と演技同好会を設立。

文化祭で上映した自主映画が口コミで評判になり、三年の進級とともに愛好会から部に昇格させる。

自分自身演技は出来ないが、類稀なる想像力と統率力で部を牽引。

部員のほとんどが柄沢の魅力で入部した事に本人は気付いていない。

映画の事なら天才的な能力を発揮するが、普段はおっとりした性格。

城美 純子（しろみ じゅんこ）♀・・・初登場#一

光応学園教諭・3年G組担任

柊達、三年G組の担任で三年の社会科教師。

教師二年目の若き女教師。若さとルックスから彼女を崇拝する男子生徒が多数存在し、教師らしからぬ気さくな性格から女子生徒の人望も篤い。

柊 ゆかり（ひいらぎ ゆかり）♀・・・初登場#一四

…了希の二歳年上の姉。

母親がデザイナーを務める洋服ブランドのアンテナショップ店員をしながら、自身もデザイナーになるために服飾学校に通っている。

朝倉 泉美（あさくら いずみ）♀・・・初登場#一四〇

…朝倉麻梨子、舞衣の母。

毎日忙しく世界を飛び回っているため、家に居る時間は年に数日だけだとか。

◆舞台

▼光応学園高等部こうおう

柊 了希達が通う学校。

中高大一貫の私立校。

高等部は山の上に立てられた緑あふれる校内。
体育祭はプチオリンピックと呼ばれ、結構有名。

▼ショッピングセンター

地域最大の大きさ。大手スーパーを中心にレストラン街、専門店、映画館、室内遊園地を備える。

柊と朝倉が初めてのデートで訪れ、物語で度々登場する。

▼PRESSURE Village

柊達が夏休みのキャンプで訪れたキャンプ場。

コンビニから露天風呂まであるキャンプに関しては便利すぎる施設を有する。

夜には満天の星空と遠くに光る街の夜景が同時に楽しめる。

#1 目撃（前書き）

一学期

春の陽光に誘われて
少年は少女を目撃する…。

#一 目撃

カツツ、コツツ、スー

心地良い陽気を感じながら黒板に白い文字が刻まれていく様子をただボーッと眺めていた。

ゴールデンウィークも明け新しいクラスにも少しは慣れ始めてきていた五月初旬。とはいえ、この学校は中、高、大、一貫の私立学校。さすがに6年も通っているとクラスが変わっても知った顔がほとんどなのだが…。

そんな事を考えながら黒板に次々と書き込まれていく文字を自分のノートに写していった。雲間から降り注ぐ陽の光が机の上を照らした…、窓際の席はこうなると冬場は暖かくて良いのだが初夏の氣候が日に日に強くなってくるこの時期は暑くて嫌になる…。

そんな陽光に誘われて窓の外に目をやる。

周りを木々に囲まれているこの学校は四季によって様々な色を楽しめる。既に桜の花びらは散っしまっていて桜の木は緑の葉を身に着けている。それを囲むようにあたり一面はさらに緑の壁に覆われている。

「ざわざわ」

急に下の方が騒がしくなってきた…。目線を下にやると体育の授業が終わった生徒達が戻ってきたところだった。袖の色が緑という事は一年生。

この学校では入学した年で体操服の袖の色が異なり、今年の一年は緑、二年は黄、三年は赤。と色分けされている。この色分けはローテーションになっていて来年入ってくる新一年生は、今の三年生の色、赤になる。

ぼんやりとその群れを眺めていた次の瞬間目に入ってきた一人の少女に釘付けになってしまった！

一年とは思えない姿。スレンダーと言った方がシックリくる体付き、ぼんやりとしか見えない顔はかわいいというより美人という言葉がピッタリだと思った。

その姿が見えなくなっても彼女が歩いて行った先を見詰めていた…。

「柊^{ひいらぎ}！」

その時、一際甲高い声が教室中に響いた！

ハッと我に返りその声の方を向いた！目の前に居たのはウチの担任で社会科担当の城美純子先生^{しろみじゅんこ}だった。

「何ボーっと外を見てるの？ちゃんとノートをとりなさい」

少し強い口調だったが心底怒っているという風ではなかった。

「す、すいません」

…そんなに長い時間見ていたのだろうか？

先生はくると振り向くと教壇へと戻って行った。気の強い女性だがまだ教師二年目の二三歳という若さ。クラスの生徒からは『純ちゃん』と呼ばれている。本人も『先生』と呼ばれるよりその方が良いのか？止めさせようとはしない。しかし気の強い性格から怒ると怖い…。気さくな性格とルックスが美人家庭教師を連想させるため男子女子問わず生徒の人気はかなりのもの。

『キーンコンカンコン〜』

そうこうしている内に終業のチャイムが鳴った。

「じゃあ、ここまで」

そう言っただけで挨拶を済ませ純子先生は教室を出て行った。

「おう、良かったな」

背後から声がした。友人の佐久野豊だ。^{さくのゆたか}

「何が良いんだよ？先生に怒られてんのに」

豊は大の純子先生ファンだ。

「ま、お前には解からんか？いや、弁当にしようぜ」

そう言っただけで豊は椅子を俺の机の前に移動させた。そんな事をしな

くても俺がそのまま後ろを向けば早いのに…。

豊と他愛のない会話をしながら昼食を摂っていたが先刻の一年生の事が頭から離れなかった。

その事を意識すると自然に箸の進みが早まっていった…。

「お前早いな！どうしたんだ？」

「ん！？ちよっと用があって…」

豊の問い掛けに適当に答え、残りの弁当を口にかき込んだ。自分でも何がしたいのか判らなかったがただ行動しなければ居ても立ってもいられなくなった。

「豊っ悪い、お先っ」

言って、早々と片付けを済まし教室を出た。

（何してんだ俺！）

頭では冷静になれ！と念じているが、体がそれに従わなかった。

足早に階段を駆け下りていく…、一年のフロアへは四階から一階へ下りてさらに中庭を横切り隣の校舎へ行かなければならい。

途中で、三年である自分が一年生のフロアへ行くのはどうかと思いい瞬足を止めたが、もう一度あの一年生を見たいという気持ちに負けてしまいゆっくりと歩を進めた。

とにもかくにも一年生のフロアに到着してしまった…。想像したとおり廊下ですれ違う一年生は一往に『何だ！』という表情でこっちを見ている。アッチからすれば何事だ！？という感じなのだろう。あまりにもバツが悪いので足早に見て回った…。

一年生のフロアは西棟の一階と二階の全フロアと三階の一部という広さ。ちなみに三年は東棟の二階の一部と三階、四階。

二階へ上がろうとしたがさすがに居た堪れなくなり、これ以上の探索は諦め一年のフロアを後にした…。心残りの何とも言えない気分を抱えながら。どうしてこんな気分になるのか自分でも解からなかった。

・
・
・
・
・
・
・

教室に戻ると数人の男子しか居なかった。

(そうか、五時間目は体育か…)

渋々着替えを済まし、グラウンドへ向かった。今日の体育の内容は確かテニス。

・
・
・
・
・
・

「終い」

力の無い声が俺を呼んだ。クラスメイトの伴城武だ。ともしろたけし

「何だよ？ トモ」

大体の見当は付いているが訊ねてみた。

「勝負しよーぜ、俺の相手になんのお前だけだから」

「あゝ！？ オメー、テニス部だろ。俺が勝てるわけねーじゃん」

「謙遜すんなよ。お前が居なくなったら俺がキャプテンになれたんじゃない」

「……」

俺は三年に上がる前までテニス部に在籍していた。今は何の部活にも所属していない。

「：別に良いけど」

あまり気が進まなかったが伴城との勝負を受けた。

先生も俺とトモの試合を快く許したためコートには俺とモモしかない。

パカアーン ポカアーンッ

激しく行き来するテニスボールを先生を含む全員が追っていた。

トモとは何度も試合をしたことがあるが一度も負けた事は無い。しかし、今相手をしているトモはその時とは比べものにならないほど強くなっていた。俺が現役を退いて腕が鈍っているのもあるだろうが、テニス部主将になった実力だ。強くなっていて当たり前か。パコーンッ

鋭い閃光の様なボールがトモの脇をすり抜けた！

「ゲームセットっ、ウォンバイ柊っ」

審判をしていた先生が叫んだ瞬間周りで見ていた生徒達から自然とどよめきの様な歓声が挙がる。

「ふーっやっぱ強いよお前は。…テニス部に戻れよ、今からならまだインハイ間に合うぞ」

トモは笑顔でそう言うと言わんとラケットを回しながらその場を去った。

そう言われても俺はテニス部に戻る気はない…というより今更戻れないだろう。

そんなこんなで一日はおわっていく。心残りだけを残して…。

同じ学校の生徒だまたいつか会える…そう自分に言い聞かせた…。

#2 放課後の教室

教室の窓からあの下級生を見てから一ヶ月が経とうとしている。あれ以来胸にモヤモヤしたものを抱えながら季節は夏になろうとしている。

制服も冬服から夏服に衣替えした六月の頭。今一学期の中間テスト真っ只中。

「どうだった？」

豊と共に中学時代からの友人、亜津^{あつ}が訊いて来た。

「んっ？まあまあかな」

そう答えた俺に亜津は、

「いゝよなあお前らは。俺なんか他の大学に行くから受験勉強もしないといけないんだぜ」

この学校は、中、高、大のエスカレーター式になっているから大学入試というものは実質無いも同然だが毎年何人かの生徒は他所の大学を受験するらしい。

亜津は工業系の大学に進学を希望している。

「僻むなよ。自分で決めたんだろ？」

俺がそう言うのと亜津は軽く微笑んで、

「そうだな。ちょっと愚痴っただけだ」

と言って少し足早に教室を出て行った。

しかしエスカレーター式といっても三年間の成績が悪ければ当然進学は出来ないため、うかうかしてられないのだが…。

未だにあれ以来見つける事の出来ないでいるあの一年生の事で今の俺にはテストどころではなかった。

・
・
・
・
・
・
・

どうにかこうにか三日間の中間テストを終えた。

これでしばらくは自由な時間を過ごせる。部活をやっている者なら高校生活最後の総体に向けて練習も本格化してくるので自由に過ごせる時間は無いのだが、今の俺には関係のない事だ…少しさみしい気もするが…。

・
・
・
・
・
・
・

テストから数日経ったある日の放課後。

忘れ物に気付いた俺は家に着く直前で教室に戻った。

下校時間が過ぎて数時間。教室にはもう誰も居ないだろうと思っていたが、教室のカギが開いていた。

(閉め忘れか?)

そう思いながら俺は戸を開けた…。戸の間から教室の中を窺うと、そこには一人の人影があった。

戸を全開にしその人影を確認した。オレンジ色が混ざった逆光に女性のシルエットが浮かび上がった…。俺はそのシルエットが誰なのか確認しようと近付いた。

その時！

「柊…君…」

シルエットの女性が俺の名を呼んだ。その声には聞き覚えがあった。クラスメイトの朝倉麻梨子^{あさくら まりこ}だった。

#三 下校

「こんな時間まで何やってんだ？」

俺は朝倉に声を掛けた。

朝倉と話すのは初めてではないが何となく緊張した。

「え！ちよっちよっと調べ物を…」

明らかに動揺している声で俺の問いに答えた。

「ふーん…俺は忘れ物を取りになっ」

俺は朝倉の動揺に気付かないふりをして言い、自分の机から昼間豊に借りたDVDを取り出した。

「じゃあ俺行くけど、いくら日が長いとはいっても遅くまで居ると帰り危ないぞ」

俺は朝倉にそう言って教室を出ようとした。普段は明るい朝倉だが今は何だか暗かった。あくまで普段遠目に見ていての判断だが。

「待って！！」

突然朝倉が俺を呼び止めた！

「そっその…あ、あの…」

「？」

朝倉は色白の顔を真っ赤にしながら、

「一人で帰るの？」

訊いてきた。

「ん！？一人だけど…」

俺がそう答えると、朝倉は何か意を決した様に勢いを付けて、

「一緒に帰らない？」

「！」

朝倉からの思いもしない申し出に俺は絶句した！

「あ…別にいいけど…」

今度は自分が動揺した。

「ありがとう」

朝倉は俯いてはいたが微かに微笑んでいるのを確認できた。

まさか：同学年一の女子と帰ることになるとは…。

朝倉は去年の文化祭で密に行われていた企画、ほぼ全男子生徒の投票で決まるミスコン。それで見事にグランプリに輝いた経歴の持ち主である。

「じゃ、じゃあ帰ろうか？」

まだ動揺している俺…。

「うん」

朝倉は明るく返事をした。

・
・
・
・
・
・
・

校舎を出ると周囲はすっかり夕暮れに染まっていた。

さすがにこの時間になると下校している者はいない。その事に俺は安心した。学年一の女子と一緒に帰るという事は同学年、いや全男子生徒の敵になるかもしれないのだから、誰にも見付からないにこした事はない。

「柊君…」

先に口を開いたのは朝倉だった。

「なに？」

俺が答える。

「その…嫌じゃない？」

「何が？」

「その…私と一緒に帰るのって…」

朝倉はとんでもないことを訊いてくる…。

「何で？別に断る理由もないし、全然嫌じゃないよ」

と答えると、朝倉はすぐさま明るい口調で、

「うれしい…良かった…」

と答えた。

うれしそうな顔をしている朝倉を見ると、昨年のミスコンに選ば

れた理由が何となく解かった気がした。すごく笑顔が似合う子だ。普段は眼鏡をしているが、おそらく外せばまた違う美女の素顔になるんだろう。

実は俺は、あのミスコンには投票しなかったのだが、あの時にこの朝倉笑顔を知っていたら間違いなく朝倉に一票投じていただろう…。

「朝倉」

「ハイッ」

急に声を掛けられ、驚いたように返事をする朝倉。

「家：こっちで良いのか？」

「ええ：」

まだ何か言いたそうな朝倉。

「どうした？」

すかさず俺は訊いてみた。

「：あのね、ちょっと寄り道しない？」

朝倉が不安そうに問いかけた。

「いいけど」

俺が笑顔で答えると朝倉はテンションを上げて、

「うふっ、じゃあこっち」

言って朝倉は俺の右手を掴んだ！突然の朝倉の行為に俺はドキツとしたが、そんな俺の動揺など知らない朝倉はそのまま少し早足で歩き出し、十字路を右に曲がった。

#四 告白

着いた場所は住宅街の小さな公園だった。

ブランコとすべり台、それに砂場があるだけの本当に小さな公園。その二つある一人用のブランコに一台ずつ座った。

「まだ…家に帰りたくないの…」

言いながら朝倉は俯いて軽くブランコを揺らした。

「迷惑…じゃなかったら、少し話…しない？」

その申し出に俺は笑顔で頷いた。

「ありがとう…あのね」

朝倉は噛み締める様にゆっくりと話し始めた。

俺も朝倉の言葉に合わせる様にゆっくりとブランコを揺らしながらしばらく話をした。

内容は学校の事や休日の過ごし方等たわいもない事だった。

気が付くと周囲はすっかり薄暗くなっていた。

「…もう、結構遅くなったなあ」

俺は朝倉の事を思って会話を終わらせようとした。

「うん…」

俺の言葉に寂しそうな顔をした朝倉。放課後の教室で出会ってから笑顔の中にも時折覗かせていたこの寂しそうな表情…。

そんな朝倉に俺はもう一度あの質問を投げ掛けた。

「先刻…あんな時間まで教室で何してたんだ？」

「えっ！」

俯いていた朝倉が驚きの表情で俺を見た。明らかに彼女は焦っている。

「調べ物してたって？」

俺は畳み掛ける様に問いただした。

すると次の瞬間、思いもかけない光景を目の前にした！

「だって…」

かすれた声でそう言うのと彼女の目から大粒の涙がこぼれていた。

「あっ…」

俺は思わず声を出してしまった。心ならずも大切にしていたグラスを割ってしまった様な体の芯が冷気に晒された感覚を覚えた。

「ご、ごめんっそんなつもりで訊いたんじゃない！」

慌てて言い訳をする…そんなつもりとはどんなつもりなのか？ともかく自分でも意味が解からないほど焦っていた！

「ごめんなさい…泣くつもりはなかったの…」

そう言って朝倉はしばらく黙った。

本当にどうして良いのか？どうすべきなのか？ただただ答えのない自問自答を繰り返していた。俺は朝倉が落着くのを待つ事にした。というより、ただ待つ事しか出来なかった。

唯一の救いは、俺が彼女を落着かせるためにベンチへの移動を促がしたのを彼女が抵抗なく受け容れてくれた事。

二人でベンチへ移動してから何時間過ぎただろう…。

実際には十分間くらいのもものだろうが、この状態だったのでそういう時間の感覚になったのだろう。

「あのね…」

沈黙を破ったのは朝倉だった。

先刻より幾分落ちついたトーンのその第一声が「あのね…」だった事に安堵感を覚えた。

「こここのところ三日間くらい、私はあの教室に暗くなるまで居たの…」

朝倉は細々と話し始めた…。

「こんな事聞くと多分軽蔑するでしょうね…」

不安そうに喋る彼女に俺は沈黙という行為しか出来なかった。

そんな俺に彼女の話は続いた。

「私、誰も居ない教室で、ずっと…あなたの事を考えてたの…」
！

その言葉を聞いた瞬間から俺の鼓動が早くなっていくが判った。

驚く俺を尻目に朝倉はさらに続ける。

「私、中学の時から：あなたが好きなの：」

その前の言葉で何となく頭の片隅で予測出来た言葉だが、彼女はあまりにあっさり言い放ったので身構える事の出来なかった俺はその言葉に心臓を撃ち抜かれる思いがした！

「きっかけは、中二の時：一緒のクラスになった時から。気付いたら好きになってたの：」

数分前までは思いもしなかった事態に胸の鼓動は頂点に達していた。

何か言葉を発しなけねばならないと解かっていた。でも何も言えなかった：。俗にプレイボーイと言われる男なら何か巧い事を言うのだろうか：。

「あの時、素直に告白していれば：」

続けて、

「それ以来ずっとあなたを見ていたわ：テニスの試合も必ず見に行っただの：」

テニスの試合：その言葉で俺は少し理性を取り戻せた。

「今年、三年生になって、また同じクラスになれてとてもうれしかったわ。今度こそ自分の想いを伝えようと決めたの：」

朝倉の気持ちを知ってしまった俺だが、素直にそれを受け入れる事は出来なかった：。

理由は一ヶ月前に見たあの一年生：。

今まで気付かなかったが、今はっきり解かった。あれは一目惚れだ：。

あの事がなければこの朝倉の告白は素直に嬉しかっただろう。

「ごめんね、勝手に私の想いをぶつけちゃって」

相当な覚悟で告白してくれたであろう朝倉に、俺はちゃんと応えなければならぬ。

「朝倉：」

俺はゆっくり喋り出した。

「ありがとう：軽蔑なんかしないよ。そういう事、好きな相手になら、俺もするだろうから：」

朝倉はそれを聞いて俯いて恥かしがる。

俺は意を決して次の言葉を口にする：。

「でも：ごめん：」

朝倉は『どうして！』という表情で俺を見た。

構わず俺は続けた。

「今俺：、好きな子がいるんだ：。：好きな子がいるっていつでも、付き合ってるとかじゃなくて、その子の名前は知らないし、ましてや告白なんてしていない：ただ一目見た瞬間、その子を好きになっ
ていた：」

俺は一呼吸置いて続けた、

「その気持ちを隠して君の気持ちに伝えるのは簡単だ：、でも、それをしてしまうと、結果、君をもっと傷つけてしまう事になると思うから、今の俺は君の気持ちに伝えられない：いや、こんな俺に
える権利なんてない：」

俺は自分の想いを告げた。

「やさしいのね：」

彼女から返ってきた言葉は思いがけない一言だった！さらに、

「名前も知らない：告白もしてないっていう事は、その人とはまだ恋人関係じゃないって事よね？」

朝倉が訊いてくる。その口調はいつしかしつかりしたものになっていた。

「え！：うん」

俺が答えるとすかさずに、

「じゃあ、その人と恋人同士になるまで私を恋人にして！」

朝倉はとんでもない事を言い出した！

「こんな事を言うとおかしな女だと思うでしょ？そう思われても良い：自分でもおかしいと思うもの：でも、もう自分でも抑える事が出来ないほどあなたが好き！：愛してるの」

「・・・・・・」

俺は呆氣にとられた。

最高のルックスを持ち、全男子生徒に崇拜される学校一の美女は、愛する人には自我を抑えられないほど一途になってしまう情熱を内に秘めていたのだと知った。

そしてその情熱は今、他の誰でもない、俺に向けられている！

そう考えると無意識に、

「あ、朝倉は…それで良いのか？」

問いかけていた。

「うん」

言って、彼女は俺の胸に寄りかかった！

俺も思わず彼女を抱きしめてしまった…。彼女の切ない想いを考えると咄嗟にそうしてしまった。

「あなたには迷惑を掛けません…これは私の問題。…あなたの恋人である自分暗示を掛けさせて…」

そんな事まで考えているとは…何故そこまで俺なんかの事を…

「わかった…それで後悔しないね？」

「うん」

朝倉は俺の腕の中で嬉しそうに答えた。

俺は朝倉を受け容れてしまった…。これで彼女を台無しにしてしまいかもしれない…。解かっていたが、俺は彼女を拒めなかった。

「もう少し…このまま…」

彼女の希望に応えしばらくそのままだった。

『ピーピリリ』

突然朝倉の携帯が鳴った！彼女は慌てて電話に出る。

「ごめん！うん、ちょっと友達と話し込んで…、うん、あと少しで帰るから。ハイ、じゃあ」

忙々と電話を切る。おそらく親からだろう。

「遅くなったな…家まで送るよ」

「ありがとう」

俺達は公園を後にした。

途中、彼女と会話しながら歩いた：公園に付く前に話していた様な事を。この会話の内容に俺は安堵した。公園での出来事で変わってしまってもおかしくない関係がこの会話でまだ保たれている気がしたから。

公園から少し離れた所に彼女の家はあった：。豪勢な門の前で、
「今日は本当にありがとう」

朝倉は笑顔で言った。さらに、

「：良かったら上がっていかない？一緒に夕飯でも：」

いきなり彼女の家に誘われた！そんな急に行くわけには！というより俺の心の準備が出来ていない！

「い、いや、今日はもう遅いし：帰るよ」

俺が答えると、

「そう：また明日学校で：ね」

寂しそうに彼女が言った。

「ああ」

そう言っ俺は朝倉の家を後にした。

#5 約束

眠れない……。数時間前の出来事を思い出してしまい眠ることが出来ない。

突然の朝倉からの告白……。考えるなという方が無理な事。どうしても考えてしまう。状況が状況だったために……。

ロクに眠ることが出来ないまま朝をむかえ、登校した。

少しドキドキしながら教室に入る。登校中も様々な事を考えていた。昨日の出来事はもしかしたら夢だったのかもとか……。

教室を見渡すと既に自分の席に着いていた朝倉と目が合った……。すると彼女は軽く微笑んだ。それは周りで見てもおそらく判らないほど僅かなものだった。その朝倉の仕草を見た瞬間、昨日の事は現実の出来事だったと再認識した。

しかし朝倉とはそれっきりで、その日一日彼女と接点がないまま放課後になった。

下校しようとした時、朝倉が歩み寄ってきた。近付いてくる彼女と目が合った瞬間、俺は身構えてしまった。身構えるといっても、野生の動物が危機に瀕した際に身構えるそれとは違い、動揺する自分を如何に隠すかという身構え。そんな俺とは対照的に彼女はスツと俺の視線から視線を逸らすと、脇に移動し、すれ違う格好になった。だがその瞬間、力なくぶら下がっていた俺の手に彼女の手が触れたのが判った。一瞬手を握られた感覚を覚えたが直ぐにその感触は消え、変わりに手の中には何か異物が握らされていた！

一連の動作を彼女は止まることなくやり通した事に俺は少し驚いた。手に握らされた物が紙だと判った瞬間、彼女を目で追ったが朝倉は既に教室から出て行ってしまった後だった……。

少し茫然としていたが、俺も直ぐに教室を出て渡された紙を確認した。そこには携帯のメールアドレスが書かれていた。朝倉のものだろう。メールアドレスの下には彼女の携帯番号も書いてあったの

でそちらに電話を掛けた。

『プルルル〜プルルル〜』

何度かコール音がした後、

『プルッ…はい…』

受話器から朝倉の声がした。まるで何年かぶりに朝倉の声を聞いた感じがした。

「もしもし？俺、柊だけど」

と名乗ると、朝倉は嬉しそうな声で、

『あ、ありがとう…まさか、電話してくれるなんて…』

俺が電話してくると思っていなかった様に言った。

「一緒に…帰らないか？」

『え！良いの？嬉しい』

俺の問い掛けに素直に答えてくれた。俺も朝倉と話をしたかった。

「どうしようか？今どこ？」

『今、バス停の前のハンバーガーショップの前…』

「OK、じゃあ直ぐ行くから、中で待ってて」

『はい』

（朝倉がファーストフードか…）

何となく意外な気がした。

学校の直ぐ近くという事でたまに帰りによる店だが、学校の生徒が大挙して押し寄せているためゆっくり食事出来ないのが難点なのが今から行く店。

そんな事を考えているうちに着いてしまった。

店内に入り周囲を見回してみる…。

どうやら一階には居ない様だ。この店は二階建ての造りになっている。二階へと続く階段を上り、二階のフロアへと歩を進めた…。階段を上がり切った所でフロアを見渡したが朝倉は見当たらない。一階で見落としたのか？ともう一度一階へ下りようとした時に思い出した！この二階には奥に行かないと見えない席があったことを。

俺は足早にその席に歩いて行った。やっぱりそこに彼女はそこに

居た。

「ごめん、お待たせ」

俺が声を掛けると、朝倉は『やっと会えた!』というような安堵の表情を浮かべた。

「ううん、私こそこんな所に居て…」

席の事で謝る朝倉だが、ここは他人には見られ難い場所だから都合な場所だ。多分彼女も同じ考えでここを選んだのだろう。

幸い今この店には知っている者は居なかったが。

「あ、俺も何か注文してくるから、先に食べててよ」

「うん…」

・・・5分後。

「さてっと…」

俺はテリヤキバーガーとコーラを持って彼女の向かいのイスに腰掛けた。

結構時間が経ってしまったので朝倉の前に置かれたトレイはジュースだけになっていた。性格からだろうか? 綺麗に折りたたまれているのはエビカツバーガーの包みのようだ。

「ちよっと意外だな」

俺が言くと、朝倉はきょんとして、

「何が?」

と訊いてきた。

「いや、朝倉もこういうの食べるんだなあと思ってさ」

「そう? ここのって美味しいじゃない? よく食べるわよ」

「へえ、そうなんだ…」

どうやら俺は勝手に朝倉麻梨子という人物像を形作ってしまっていた…。現実の朝倉麻梨子は俺が勝手に想像していたお嬢様ではなく、どこにでもいる普通の女子学生だと気付かされた。なんだか彼女に申し訳なさを感じながら俺も自分のハンバーガーを一かじりした。

「やっぱり男の人って豪快に食べるのね」

「へ、そうか？」

「うん」

彼女は笑って言う。

しばらく彼女と話している内に俺のハンバーガーもなくなった。これまで朝倉としっかり話しをした事はなかった。昨日が初めてだった。なのに彼女と話をしていると、まるで何年も前からこういう関係だった様な錯覚になった。

朝倉と会話していると凄く心地良い…。

氷が解けてすっかり味が無くなってしまったコーラを一口飲みして、話の本題に入ることにした。本題とは今日の学校での朝倉の事である。

「なあ、一つ訊いていいか？」

「何？」

「どうして今日、学校で俺と一度も話しをしなかったんだ？」

「どうしてって…学校で話し掛けると、あなたを困らせると思ったから…」

やっぱりそうだったか…周囲に朝倉との関係を知られたくないという、俺の心情を理解してのこと…。

「ありがとう…でも、無理することはないんだから…」

俺がそう言う。

「いいの、学校で話せなくても、こうして放課後にあなたに会えたからしあわせなの」

朝倉は笑顔で言った。

本当にそうなのか？本当の恋人同士ならこんな関係で満足できるはずがない。でも、今の自分には彼女に…彼女の想いに100%応える事は出来ない…。出来ないが、今自分が出来る精一杯の事を彼女にしてあげようように決めた。

「朝倉、今度の日曜日、暇？」

「え！うん…」

「デートしよう！」

「え！」

思いもしなかったであろう俺の発言に朝倉はびっくりしただろう。言った自分も恥かしい…。

「うん！」

朝倉は満面の笑みで返事をしてくれた。その笑みにつられて俺も嬉しくなる。

「じゃあ、日曜までに行きたいとを決めといて」

「分かったわ」

「あ、ちょっと待って」

言って、俺は自分の携帯を取り出し、朝倉の携帯に空メールを送った。

「それ、俺のアドレス。気兼ねしないでいつでも送って来ていいよ」「ありがとう…」

朝倉はそう言って、自分の携帯画面を見つめていた。

・
・
・
・
・
・

しばらくして俺たちは店を出た。

「送っていかなくて大丈夫か？」

「うん、平気、まだ明るいし。…またね」

そう言って彼女は帰っていった。

#6 初デート

朝倉とデートの約束をしてから早3日…日曜の朝をむかえた。

あれから朝倉と直接話しをしていない…。けど、頻繁にメールのやりとりはしている。

もちろん、あの一年生は未だに見付けられてない。実を言う自分の中で、もうあの子を諦めようかという気になっている。

理由は簡単だ、一度しか見ていない女の事で朝倉には言いようのない位の迷惑を掛けている…。そんな朝倉の為にもう諦めて彼女に応えてあげた方が良く決まっている。…俺も、朝倉の事が…好きだ。今の様な関係になってまだ数日だが、どんどん彼女に惹かれている。その事は自分自身良く解かっている。朝倉と一緒に居ると心地良い。

（今日のデートで朝倉と別れる前にこの問いに答えを出そう！）

身支度の途中、俺は決心した。

そんな事を考えていると時が過ぎるのは早いもので、あと少しで待ち合わせの時間となっていた！俺は慌てて家を出た。

待ち合わせの時間に少し遅れて待ち合わせの公園に到着した。
が！

公園内を見渡しても朝倉の姿はなかった…。

（良かった…間に合ったみたいだ…）

「！！」

と思った瞬間、俺は「ヒィ！」と奇声を発しそうになるのを必死で抑えた！突然、頬を冷たい感覚が襲ったからだ！

「おはよっ」

背後から声がしたので振り返ると、コーラの缶を持った朝倉が立っていた。

「ハイっ。走ってくかと思って買って来たよ」

そう言って彼女はコーラの缶を差し出した。

「ごめん…」

言って、俺はそれを受け取った。

「ううん、気にしないで」

そう言って、朝倉も持っていた自分のコーラの缶を開けた。

「カンパニー」

朝倉は自分の缶を俺の缶に近付けた。

「どこに行く？」

そう訊ねると、朝倉は笑顔で、

「うふふ…来て」

俺の手を取り、公園を後にした。

辿り着いた先は隣町のショッピングモールだった。

「ねえ、映画って好き？」

朝倉が訊ねた。

「うん」

社交辞令ではなく、俺は本当に映画が好きだ。

「よかった。一緒に観たいのがあったの。あっ！もしかして観たいのがある？」

「いや、特に無いけど」

とは言ったものの実は気になっているものがあつたのだが、今日は彼女の想いに応えようと決めているので彼女を尊重する。

俺達はショッピングセンター内の映画館へと向かった。

このショッピングモールは郊外型の大型店で地域最大。大手スーパーマーケットが主体となって、数十店のレストランに映画館、さらには室内遊園地、室内プールまである。特に目的が無くても一日過ごせる場所だ。

「これなんだけど…」

映画館に着くと彼女は一枚のポスターを指差した。そのポスター

を見て俺は少し驚いた。それはちょうど気になっていた映画のポスターだった。

「じゃあ、チケット買ってくるからここで待ってて」

俺がチケットを買いに行こうとすると、

「待って！私が払うから」

朝倉がそれを静止した。

「いや、誘ったのは俺だから、俺が出すよ」

しかし彼女もゆずらない！少し言い合ったが、どうしても朝倉はゆずりそうもないのでここは彼女に払ってもらった…。

・
・
・
・
・
・

2時間半後、劇場を出た。

「昼、どうしようか？」

俺が訊くと、彼女は、

「んー。何食べようかなあ…」

悩む…。

時刻はもう2時を過ぎていた。

「ちゃんとした物にすると時間が…」

朝倉はボソッとつぶやいた。

おそらく彼女は今の状態を1秒たりとも無駄にしたくないのだろう…。朝倉は今日のこの状況をどう思っているのだろうか？もしかしたらこれが最初で最後になるなんて思っているのだろうか？俺はこれっきりにする気なんて全く無いのだが…。何を考えたところで所詮は俺の予想の範疇でしかない。今すべき事は彼女の悩み解決してあげる事だ。

「よし、ファストフードでも良いか？」

俺が提案すると、朝倉は大きく頷いた。

（速いって事で思い付きで言ったが、何にするか…あ！）

俺はある好奇心を抱いてしまった！

「朝倉、牛丼屋って行った事あるか？」

朝倉はキョトンとして首を横に振った。

「よし、行こう！」

「えっえ！？ちよっ」

朝倉に何も言わず少し強引にショッピンセンターを出て向かいにある牛丼屋に入った。

朝倉にとって初めての牛丼屋は新鮮だったのか？辺りをキョロキョロと見回している。

「いらっしやいませっ」

歯切れの良い口調で店員がお茶を置いた。

「じゃー、牛丼並、つゆだくでギョク」

俺が注文すると、朝倉は俺を見て、

「じゃ、同じのを…」

朝倉も注文した。

「ハイッ。牛丼並つゆだくふたちよう！玉ふたちよう！」

注文を受けた店員が奥に向かって声を挙げた。

その光景を朝倉は少し呆然として見ていた。

「ねえ…」

すると朝倉は小声で俺に話し掛けた。

「何？」

俺も小声で返す。

「今の注文、どういう意味なの？」

やはり解からずに注文したようだ。

「あれはね…」

俺は一つ一つ教えてあげた。

「ふん…」

一通り説明を聞いた彼女だが、イマイチ理解しきれていない様だ。

「へい、おまたせっ」

そうこうしている間に、目の前に二つの牛丼が運ばれてきた。

俺がやる仕草を真似る朝倉。この光景が見たくて牛丼を選んだの

だ！普段見る事が出来ない朝倉を見たかった。少し前に生まれた好奇心が達成された瞬間に俺は酔狂した。

ボくっと彼女を見詰める俺に気が付かず、朝倉は最初の一口目を口にする。まるで子猫が初めて毛糸の玉に触れる様で、たまらなく愛らしい。

「……………おいしい…」

朝倉の一言で俺は我に返った！そうだ、彼女が気に入ってくれなければ本末転倒。

「良かった、口に合って」

内心からホッとしながら言うと、朝倉はニツコリと微笑んでくれた。

#7 出せない答え

「さて、どうします？」

牛丼屋を出て直ぐに俺が訊いた。

「じゃあ、室内遊園地でジェットコースターに乗らない？」

「あれか…」

俺は道を挟んだ向かいのショッピングモールの壁から突き出ているジェットコースターのレールを見上げた…。

このショッピングモールに内にある室内遊園地。この名物アトラクションがこのジェットコースター。しかもそれは室内だけに留まらず、壁を突き破って屋外へと出ている！しかも一ヶ所だけではなく何ヶ所もそれがある。俺はこれに乗ったことは無いが、乗ったことのある豊曰く、『壁に突っ込む時の恐怖感は一日本一』らしい…。言い訳ではないが、このテの絶叫マシーンは苦手ではない！苦手ではないが、乗らずに済むなら乗らないにこした事はないという主義…。

しばらくして俺たちは長蛇の列の最後尾に並んだ。

「すっげー並んでる…さすが一番人気のアトラクション…」

「二〇分待ちだって…」

「……………」

どっかのテーマパークじゃなくてただのショッピングモールの乗り物に二〇分も並ぶことになるとは……。

そんなこんなで列に並んでから一〇分程が経った時。

「終…!？」

列の外から名前を呼ばれた！

声が出た方を見ると何とそこに居たのは…!!

「じゅっ純子先生…!!」

咄嗟に俺は叫んでしまった！俺の声に反応した朝倉と先生の目が合った！

「朝倉あゝ!?!」

先生はかなり驚いている。

俺たちは半分くらいまで並んでいた列を外れ、純子先生の所に行った。どうやら先生もデート中の様で、先生の後ろには気まずそうにしている男の人が立っていた。

「ふゝん、あなたたちが付き合ってたなんてねえ。担任のあたしですら気付かなかったわ」

先生は品定めでもしているかの様に、俺と朝倉を交互に見ながら言った。

「あ、あの…」

「付き合ってますん!!」

俺が言おうとしたのを遮る形で朝倉が否定した!

普段おとなしい朝倉が突然声を張り上げたので先生は驚いる。

「またあ、大丈夫よ。誰にも言わないわよ。ほらっあたしたちもデート中だから、おアイコよ」

先生は笑いながら言った。

「すいません…」

沈んだトーンで朝倉は謝った。

「いいのいいの、お楽しみ中に声を掛けてゴメンね。じゃっ」

言って先生は彼氏の手を引いて歩いていった。

「朝倉…」

「……………」

「気にしなくていいよ。純子先生怒ってないよ」

「……………」

「行こっ」

俺は朝倉の手を取ってもう一度ジェットコースターの列に並び直した。そういえばこれが初めて俺から彼女の手を取った瞬間だった。

周囲はすっかりオレンジ色になっている：俺たちは川原に居る。
あれからジェットコースターに乗り、ペットシヨップで犬とじや
れたり、シヨッピングをして、帰り道にこの川原に着いた。

先生の事を気にしていた朝倉だったが、途中からはすっかりいつ
もの彼女に戻っていた。

「なんか、今日は色々あったな」

夕焼け空を見上げながら朝倉が言った。

「そうだな。けっこう疲れた」

「ねえ：もう少し話をしていかない？」

朝倉が問う。

「いいよ」

俺たちは川原の遊歩道の脇に腰掛けてしばらく今日観た映画の話
をした。

「朝倉がこんなに映画好きだったとはなあ：」

「でも、家で良くDVDは観るけど、映画館にはあまり行かないの」

「そうなの？映画館の大画面と迫力の音響で観るのが気持ちいいの
に」

「そうだけど：家でもそれなりの物があるから：」

「それってホームシアターってやつ？」

「うん：」

一度朝倉の家に行った時（って言っても門の前だが）にかなりデ
カイ家だと驚いた。それなりの設備があってもなんら驚くことはな
いか：。

「そうだ、私の家に来ない？」

「え！良いの？」

「もちろんよ。なんなら今からでも」

「いや、今からは：迷惑だろ：」

それにまだ彼女の両親に会うのは気まずい：。

「全然迷惑じゃないわよ。あつ、もしかして、親の心配とかしてる
？」

ギクッ!!

「あっそうか、まだ言っていなかったわ。私の両親は二人とも今海外に行って家には居ないのよ」

「え!じゃあ朝倉ってあの家に一人暮らし?」

「ううん。妹がいるの。それに今はお姉ちゃん夫婦と一緒に住んでるの」

それで告白された日にいきなり家に誘ったのか。いくらなんでもあのタイミングで即家に招待はしないよな…。

「お姉ちゃんは放任主義だから、帰りがめっちゃ遅くならない限り大丈夫だし」

それはそれで問題がある気がする…。

「もし良かったら…」

正直迷った…今日のデートが終わるまでに“答え”を出すと決めているのだから…。

「ううん…、今日はやめとくよ。また誘って」

「わかった…ごめんなさい…強引に…」

「気にすんなって、必ず約束するから」

「ありがとう」

彼女がそう言った瞬間。

『ポツリッ』

一粒の雨粒が朝倉の眼鏡を濡らした。それを拭こうと彼女が眼鏡を外した…素顔の朝倉を初めて観た…。

「!」

(似てる…!)

あの春の日に窓から見た一年生に!

「どうしたの?」

朝倉が呆然としていた俺に不思議そうに問いかけた。

「いや、べつに…」

朝倉の言葉で俺は我に返った。

「雨が降りそうだから、そろそろ帰りましょうか?」

朝倉は笑顔でそう言った。

「あ、ああ…」

思いもしなかった光景で結局“答え”は出せなかった…。今日のデートが終わるまでに出そうとしていたものを…。

こうして朝倉との初デートは終わった…。

#8 予期せぬ再会

朝倉との初デート…その時に全てに決着を着けよう！そう心に決めていた。…でも、結果は何も出来なかった。

帰り道のあの川原に着くまでは決まっていた。決めていた…。

朝倉の素顔を観るまでは…。

一層強くなった葛藤と、朝倉への罪悪感を抱えたまま一学期が終わろうとしている…。

朝倉とはあれからも何度か会っている。デートと呼べる様な会い方ではないが、一緒に下校したり、途中で軽い食事をしたりはしている。こんなどっちつかずのスタンスでいつづけている俺みたいな奴の前でも彼女は嬉しそうにしてくれる…。

キンコンコン カンコンコン 〜〜

一学期の期末テストの終わりを告げるチャイムが鳴った。

「よし！！学園生活最後の夏休みだ〜！！」

教室の後ろの方から奇声が聴こえた。その奇声の主はツカツカと背後から俺に近付く…。

「なあ柊。最後の夏休みを有意義に過ごそうぜ！！」

奇声の主、佐久野豊がありえないテンションで俺に話し掛けてきた！俺とは正反対に能天気な奴…。

「…何するんだ？」

「決まってるだろ、夏といえば！」

わざとトーンを落として返事したが、豊には効果が無かった…。

「…夏といえど？」

俺は諦めて、豊に問い返した。

「キャンプだろおー！！」

大声で叫ぶ豊！恥かしくないのか？

「なにになに？ キャンプに行くの？」

再び豊が発した奇声に近くに居たクラス的女子、月島由実つきしま ゆみが反応した。

月島は我校の女子陸上部の俊足エース。ショートカットが良く似合っている。

「あなたたち、キャンプに行くの？」

月島は豊と仲が良いので、気さくに話し掛けてきた。

「そのつもりだけど…」

豊が答えると、

「じゃー、女子のメンバーは私に任せて！男だけじゃ味気ないでしょ？」

「つて、月島も参加するの？」

「なによ！私が参加したら何か不都合でも？」

「いや、そうじゃないけど。部活は？インハイ出るんだろ？」

月島と豊のやりとりを見ると、何だか元気付けられる気がした。

「8月の頭以外なら大丈夫よ。それよりちゃんと男子の都合つけていてよ。あ、そろそろ行かなきゃ！」

そう言っって月島は嵐の様に去って行った。

「おいつ聞いたか？楽しいキャンプになりそうだなあ！テンション上がってきた〜！」

「ははは…」

俺は愛想笑いした。月島は女子の人望が篤いから、実現すれば相当なメンバーになりそうさだ。

「お前、行くよな？」

豊が訊ねた。

「あ、ああ…」

「よーし！もっと声掛けねえと。こうしちゃいられねえ！」

そう言っって豊も教室から出て行ってしまった。

たしかに、学園最後の夏休みだ、こういうイベントに参加しないもったいない。

（そうだ！）

朝倉にも声を掛けてみるか。

試験が終わった開放感からか？僅か数分の間で教室に残っている生徒はあと数人になっていた。俺も帰り支度を済ませ廊下に出て朝倉の携帯に電話した。数回コール音が響き、それが切れた瞬間、

「もしもし？朝倉、一緒に帰らないか？」

間髪いれず俺が話し掛けた。

『うん、じゃあ、いつもの所で待ってるね』

「OK」

いつもの所とは、学校を出て直ぐの所にある公園。

電話を切った俺は急ぎ足で廊下を移動した。

階段を下りて下駄箱に着いた。

“ドンッ”

「キャッ」

突然、背後から衝撃を受けたと同時に、女性の声がした！

俺は背後を気にしながら、振り向いた。

「！！！！」

なんと俺の眼前に立っているのはあの一年生だった！

あの春に窓から見たあの子だった。あの時遠くからはっきりと顔を見ていないが、今、目の前に居るこの子で間違いない！そう瞬時に判断できた。

「すいません、私、携帯を見ていて…ごめんなさい」

俺はただ茫然としていた。

「あの…大丈夫ですか？」

その声で俺は我に返った！

「ん？ああ大丈夫…」

「本当にすいません」

その子は心底申し訳なさそうに何度も頭を下げている。

「いや、いいよ。気にしなくて」

「そうですか？ すいませんでした」

俺が右手を軽く挙げて応えようと、その子は最後に深々と一礼して早々と去ってしまった。

「あっ！！」

俺は何も言えなかった…。

間違いなくあの日見たあの一年生だ…。時間が経つと同時に俺の鼓動が激しくなっていく…。あの時以上に…。

しばらくその場に立ち尽くして落着くのを待ちたかったが、朝倉を待たせてはいけないという思いがそうさせてくれなかった。

靴を履いて校舎を出た瞬間、今度は激しい後悔に襲われた！ 何故もっと話をしなかったのか！ という後悔の念。その後悔と葛藤しながら朝倉の待っている公園に着いた。

#九 昼食

「どうしたの？」

いつもと違う俺を瞬時に見抜いてくれた朝倉が声を掛けてくれる。

「ん？ ああ…」

そんな彼女の言葉に俺はうわ言で答えた。

「大丈夫なの？」

「ああ」

その後の会話はまったく覚えていない…。

あの子と会えた興奮と何も話することが出来なかった後悔でほとんど放心状態だった…。

しばらくして、

「…え。ねえ！ ねええ！！」

「！！ウツ」

度重なる朝倉の呼びかけでようやく意識した！

「ねえ？ さっきからなんか変よ？」

「ごめん、ぼーっとしてた…」

「本当に大丈夫なの？」

「ああ」

「さ、着いたわよ」

朝倉に促がされて見た先にあったのは朝倉の家だった！

「あれ！？ なんで？」

俺が訊ねると、彼女は少し怒りながら、

「もう！ やっぱり適当に返事してたのね！ 今日はお昼、私が作るって言ったら、柊君『うん』って言ったのよ…」

語尾の方はややトーンダウンしていた。

無意識のうちにそんな約束をしていたのか…。

「ごめん…まだ作ってくれるなら、改めてお願いするよ」

俺がそう言うと朝倉はニッコリと頷いて、

「もちろんよ！」

言った。やっぱり朝倉は笑顔が一番だ。

「ただいま」

朝倉の後に続いて家に上がった。

「お、おじゃまします…」

ついに朝倉の家に来てしまった・・・。

「クスッ、そんなに緊張しないで、今、家には誰も居ないから」
その一言で楽になった。ゲンキな奴だな俺は…。

「どうぞ…」

俺はリビングに通された。そこは屋根まで吹き抜けになっていて自然の光が差し込んでいた。広さもかなりのもので、リビング内には大きなソファァーにテレビ、ステレオコンポ。奥には食事用のテーブルとイスが置いてあった。

「適当に座って」

俺はテレビの前のソファァーに座った…。すると“プツ”と目の前のプラズマテレビが点いた！

「ハイ、適当に観てて」

そう言って朝倉がテレビのリモコンを差し出してくれた。

「ありがとう…」

「何食べたい？」

「んー、じゃあ、オススメのもので」

「分かりました。ちよつと待っててね」

そう言っくと朝倉は制服の上からエプロンを着け、キッチンへ移動した。

・
・
・
・
・

「お待ちどうさま」

一時間後、テーブルの上に様々な料理が並んだ。

「凄い量…」

量もそうなのだが、一時間ほどでこれだけ作ったという事にも驚きだった。

「ちよつと…テンションが上がっちゃって…。あっ心配しないで、残ったのは妹が食べるから」

「妹さんは遅いの？」

「部活があるのよ、今日で試験終わったでしょ」

「え！じゃあ同じ学校？」

「そうよ。さあ食べて」

「いただきます」

まず、スパゲティサラダから口にした。

「うまいっ！」

思わず声を挙げてしまうほど美味かった。

「本当に？」

「ウソ言つてどうするんだよ。マジで美味しいよ」

それを聞いた朝倉は嬉しそうに微笑んだ。

#一〇 抑えられない感情

「ごちそうさま」

朝倉の手料理は凄く美味かった。テーブルに並んだ時には食べきれぬかどうか不安な量だったが、もうほとんど残っていなかった。

「ごめん。妹さんの分ほとんど残ってなくて…」

「良いのよ。カップ麺でも食べるから。それよりあんなにおいしいそうに食べてくれて嬉しかったわ」

朝倉は空いた食器を持って立ち上がった。

「あっ手伝うよ」

俺も空いた食器に手を掛けたが、

「あついいのよ。今日は私が勝手に誘ったんだから。ゆっくり座っていて」

朝倉は俺の行為を静止した。

「じゃあ、せめて運ぶのくらいはい手伝わせてよ」

「ありがとう」

食器を運び終え、俺は最初に座っていたソファに腰掛けた。

キッチンからジャバジャバと食器を洗う音が聞こえてきた。

テレビをボーっとしながら見つめる。ふっと先刻の一年の事が頭に浮かんだ…。

(！)

俺は最低な男だ！こんなにも俺のことを好きだと言ってくれている朝倉の前で他の女の事を考えている。

頭では解かっているがそれでもあの一年のことを諦められない。

この感情は明らかに朝倉への裏切りだ。そう思うともう、朝倉の前に居てはならないのは解かっている…。でもそうするとそれもまた朝倉を傷つけ、悲しませる事になってしまうかもしれない。

なんともやりきれない感情で叫び出してしまいたいそうになった。

「さて、どうします？」

「！」

背後から朝倉が話し掛ける。

俺は振り返り、朝倉の前に立った。

「朝倉、聞いてくれ！」

突然の俺の行動に朝倉は一瞬ビクついたが、即ち平然とした。

「多分、朝倉にとっては聞きたくない事だと思う：でも、俺は正直に言わないといけないと思うから：」

「うん：話して：」

不安そうに朝倉は言う。だが、覚悟はしている！そんな表情にも見える。俺は意を決して口を開いた。

「前にも言ったけど、俺は一目惚れした子が好きなんだ：。5月にその子を見て、それから一度も会う事がなかったから朝倉のためにも、もう、その子の事は忘れようとしてたんだ：。でも今日、偶然下駄箱でその子に会ったんだ：。そしたら忘れようとしていたのに：していたのに：」

その後の言葉が出てこなかった：。

「・・・・・・そんなに自分を責めないで。元は私が勝手にあなたに告白したのが悪いのよ」

「違う！」

俺は朝倉の言葉を激しく否定した！

「朝倉は何も悪くない：人が人を好きになるのは当たり前の事だ。その事をどっちつかずの気持ちで受けてしまった俺が悪いんだ！君を傷つけまいと選んだ：今の状況が余計に君を傷つけてしまっている。：本当に俺はバカな奴だ：」

言いながら、俺は知らず知らずのうちに涙を流していた：。

「最初に言ったでしょ。私一人があなたの恋人だと思うと：。あなたは：あなたの恋をしてください。あなたが他の人と付き合っても私は構わないの。あなたに告白して、あなたに好きな人が居ると知った瞬間からそう決めています。だから：」

そう言う朝倉も大粒の涙を流した。その涙の真意は俺には解か

らない……。自分のためなのものなのか、それとも俺に向けられたものか……。

それじゃ駄目なんだ。俺を好きでいる間朝倉は幸せになれない！「俺を好きな間、君は幸せにはなれないんだよ？」

「ううん、あなたと居る時間私は幸せです。世界で一番幸せです」

「嘘だ！二人ともが想い合っていてこそが幸せなんだ！今の俺では君を幸せには出来ない……」

「今、私は幸せです！」

なぜ……なぜこうまで俺なんか……。

「……せめて、今の俺に出来ることで君が幸せになれそうなことを教えてくれないか？」

「いいの？」

「ああ」

朝倉は突然、眼鏡を外した。

「……ッ」

次の瞬間、俺の唇と朝倉の唇が重なった！朝倉が勢い良く飛び掛ってきたので俺は思わず後ろのソファーに倒れ込んだ！そのショックで一旦朝倉の唇が離れたが、直ぐに重ね直しそのまま朝倉は俺の上に乗る掛かる格好になった！

「ん！んー」

俺は思わずもがいたが、朝倉は構わず俺の口内を貪る！

本来なら官能的なディープキスだが、今はそんな状況が違う。

朝倉を引き離そうと彼女の肩に手を掛けたが、その刹那、俺の腰に彼女の腕が巻き付いてきた！

完全に朝倉の腕でロックされた状態になり彼女を引き離すことが出来なくなってしまった。

だがその時、朝倉が息継ぎしたため唇が離れた！

ここだ！と思い！

「ちよっ」

拒絶しようとする俺に『黙れ！』と言わんばかり三度目のキスで

封じる！

次第に朝倉の息も荒くなる…。

次の瞬間、朝倉が俺の胸ぐらに自分の胸を押し付け上下に擦り始めた！

清純なルックスからは想像できないこの行為は、まるで『私は人に思われている様な女じゃない！本当の私を見て！』と言っている様に見えた。

不意に俺は朝倉の肩に掛けていた両手を彼女の脇腹に添えてしまった！

すると朝倉は俺に跨ったまま、上体を起こした。

下から素顔の朝倉を見た…。

（やっぱり…あの子に似てる…）

数時間前にあったばかりのあの一年がリフレインする…。上気する朝倉の表情で徐々に俺の理性が薄れていくのを感じた。

朝倉は上から俺を見下ろすと、ゆっくりと自分の制服のボタンに手を掛けた…。

「だ、駄目だ！」

俺は咄嗟に声を上げた！

「いいの…」

朝倉は優しくあやす様に言った。

「よくないよ…」

俺が言うのと。

「私とじゃ…嫌？」

潤んだ瞳で問いかけてきた。そのあまりに美しい瞳に魅せられてしまい、思わず…。

「そんなわけないじゃないか」

言ってしまった…。それを聞いた朝倉は安心した様な表情を浮かべた。

そして意を決し制服のボタンを上から順に外し始めた…。一つ、二つ、三つ目のボタンが外れた瞬間、胸元から白いレースが見えた。

俺は顔を背けようとしたが彼女の魅力によって体が動かなかった…。
四つ目のボタンも外され、ついに完全に彼女の胸元を覆う純白の
布が露になった！

綺麗だ…全校男子にナンバー1と認められた美女のセミヌードを
俺は今、目の前にしている！そう考えると今まで冷静だったものが
微かに反応する…。

（駄目だ！今、朝倉は俺の腰の上に居る！）

俺の欲情の変化が伝わったのか？朝倉の表情が強張った。

そして、瞳を閉じると最後のボタンを外すため制服の裾をスカ
トの中から引き出した！

その時、『ガチャッ』と玄関から音がした！！

「！！ッ」

「！」

朝倉は驚きの表情で俺から離れた！

#11 衝撃の出逢い

「ただいま」

玄関から女性の声が聴こえた！

「やだっマイが帰ってきたわ！」

朝倉は慌てて乱れた制服を正した。

俺も急いで何もなかった様に体制を整えた！

「あゝお腹空いた」

間一髪で朝倉の妹がリビングに入ってきた。

朝倉は既に制服のボタンを留め直し、妹を出迎えている。俺は気まずいのでテレビを観て目を合わすまいとしていた。

「おかえり舞衣。ちよっとお客さんが来てるの…」

「玄関に男物の靴があったけど…、なにになに？もしかしてカレシ？俺の背後で二人の会話が聴こえる…。」

「カ、カレシってほどの人じゃないのよ…」

おそらく俺への気遣いでそう言ったのだろう…。

「ふん」

何も言わないのもまずいと思い、俺は挨拶しようと振り返った。

「あゝ！！」

先に声を上げたのは妹の方だ！

「あなた！」

「？」

その二言目で俺は妹の顔を見た。瞬間、

「あゝゝ！！」

俺も声を上げてしまった！

朝倉は互いに驚きあっている二人を見てビクリしながら、

「あなた達、知り合いなの？」

と問いかけたが、それは俺になのか妹になのか判らない。おそらく両方に言ったのだろう。

「今日、学校の下駄箱でぶつかったのよ」

妹の言葉で朝倉は“ハッ”とした表情をした。

「すごい偶然！まさかお姉ちゃんのカレシだったなんて、びっくりしたー。さっきは本当にすいませんでした…」

再度頭を下げる妹。

「いや、本当に気にしなくていいよ…」

ビックリしたのはこちらの方だ。一目惚れした相手がまさか朝倉の妹だったとは…。

しかし今の状態では一目惚れの相手に再会出来た事を喜べない…。今の妹の言葉で朝倉も気付いただろう…。直ぐに朝倉に説明しなくてはならない。

「んー、じゃあ、あの映画、また今度観せてよ」

突然の俺の言葉に何の事か解からずポカーンとしている朝倉。そんな朝倉に俺は軽く合図した。

すると朝倉は“アッ”という表情をした。おそらく俺の意図を理解してくれたはずだ。

「舞衣、悪いんだけどこんなに早く帰ってくるなんて思わなかったから、お昼まだ用意してないのよ…だからカップ麺でも食べて」

「う、うん…分かった…」

そう言う朝倉は俺の方を向いて、

「そう言わないで、今日観て行って。せっかく来てくれたんだかし…ねっ!？」

俺の意図を理解していた様で、朝倉は俺に言った。

「舞衣、私たち地下に居るから何か用があったらフォンで」

「ハッ、ゆっくり楽しんでね」

台所に移動した妹がこっちを見ずに答えた。

「行きましょ」

言って、俺の手を取ってリビングを出た。

一階からの階段を下りながら、本当に朝倉の家は凄と思った。地下室に入ると朝倉はエアコンのスイッチを入れ、ドアに鍵をか

けた。

#一二 覚悟

「…ここなら声が外に漏れる心配はないわ…」

そう言って朝倉は俯いた。

「あなたの好きな人って舞衣なの？」

俯いたまま朝倉が問いかける。

「信じてくれ！今までその子が君の妹だって知らなかったんだ…」

「別にそんな事…疑ってないよ」

「……………」

少しの沈黙…。エアコンから発せられる送風の音だけが地下室に響く。

「朝倉…今から俺が言う事で君に嫌な思いをさせてしまうかもしれないけど…聞いてくれるか？」

「うん、話して…」

不安そうな声ではあったが、朝倉は躊躇なく言った。

俺は5月に初めてあの子、朝倉の妹を観た時から今までを全部話した。

教室の窓から見た下級生に一目惚れした事。それが朝倉の妹だった事実や、今までの朝倉への気持ちなどを…。

「そうなの…私の所為でそんなにあなたを苦しめていたのね…」

「違う！苦しめていたのは俺の方なんだ…」

「…もう苦しまないで、舞衣に言っただけて…」

俺の言葉を遮るように朝倉が言った。

「言えない…こんな事言う君に嫌われてしまうかもしれないけど…俺、正直に言うよ…」

「？」

「俺、朝倉が好きだ！」

「！！」

さすがに驚きを隠せない朝倉。

「決して君を喜ばせようと思って言ったんじゃないんだ。心から君が好きだ！」

俺の言葉を聞いた朝倉は今日見た中で一番嬉しそうな表情をしてくれた。

「でも、君の妹の事も好きなんだ：まだ話してもしてない状態だけど好きなんだ：今日、再会してみてもつきり解かったよ。それと同じ気持ちを君と一緒にの時も感じていた：だから君も、君の妹も好きなんだ：」

俺は自分で言って解かっていた。今自分が言った言葉が如何に身勝手な告白であるか。だが、俺は続けた。

「そして俺は優柔不断でどうしようもなく馬鹿で最低な奴だって事も解かった：」

いつそこで朝倉に蔑んで欲しかった。「最低ね！」「もう顔も見たくない！」と：。その方が楽になれたし、そう言われても当然の事を彼女にはしてしまった。しかし朝倉は、

「そんな事言わないで！私もあなたへの感情を抑えられない馬鹿な女よ、さっきみたいにな：。今私はあなたの本心の言葉を聞いたことですごく幸せです」

俺の事を罵倒などせず、自分を責める様に言って俺の胸に抱きついた。まるでこれ以上俺が俺自身を否定するのを止めさせる様に：。言い様のなくらいの優しさに包まれた感じがして、俺にこんな事をするのは許されないと解かっていたが、俺も彼女を抱きしめた。「こんな男でも良いのか？絶対後悔するよ：」

「良いに決まってるわ、どんな結末になっても私は後悔しません。でも、早く舞衣に想いを告げてね。あなたの苦しむ姿はもう見たくないの：」

その朝倉の一言に俺は感覚的に感じていた彼女の優しさを身に染みて実感した！：こんな酷い男の事を尚も心配してくれている：。

「俺なんかにもったいないよ。君は：優しすぎる」

俺は感じたままの事を言葉にした。

「そんなことない：私はあなたを独り占めしたいと思う酷い女よ：」
どうして良いのか解からない衝動に駆られた俺。彼女も同じ感覚だったのか？どちらも唇を求め合いキスを交わした。それは先刻さうきのとは違い、お互いの気持ちを確認してのキス。そして同時に覚悟の口づけだった：。

しばらくの抱擁の間、俺はこの先朝倉にどうしてあげれば良いのか、そして彼女の妹にもどうすべきなのか考えた：。

しかしその答えは容易に出るものではなく、何の答えも出ないまままだ朝倉を抱きしめていた。この先への不安とともに：。

その後見せてくれた朝倉の笑顔を記憶に焼付けながら俺は帰路に着いた。

#一三 夏が来る

教室の外では蝉が待ってました！とばかりに鳴いている。吹き込んでくる風も熱を帯びていてもうすっかり夏だ。

期末テストも終わり授業も午前中で終了。三日後には夏休みが待っているということでクラス中が浮き足立っている。

『キーンコーンカーンコーン』

そんなこの二日間、俺はというと放課後は夏休みのキャンプの予定を決める話し合いで盛り上がっていた！

しかしこの二日間で決まった事といえば、参加者と、部活が終わっているであろう8月の上旬に決行するということくらい。

参加者は男五人に女六人の計十一人！俺の予想をはるかに上回る人数になった！ちなみに朝倉ももちろん参加する。

「もー！今日中に全部決めようよ！」

先陣を切ったのは月島だった。

「よし、じゃーこの場所だ。最終候補地はこの三ヶ所」

豊がキャンプ場のパンフを机の上に並べた。この件の実権を握っているのは月島と豊だ。

「ここは駅から遠いからなあ」

「ここはシャワーがあるから、ここでいいじゃん！」

「川がある所がいい！」

等々、並べられた三冊のパンフレットを見て各々好き勝手言っている。

「今日も決まらないね」

朝倉が俺につぶやく。

「良いんだよ、皆でワイワイやるのが楽しいんだから」

「ウフ、そうよね」

結局、朝倉の言うとおり今日も具体的な事は決まらなかった。

翌日。

「お前ら！！昨日オレがネットで探してやったぜ！見ろっ」

言って豊は一枚のコピー用紙を差し出した。

「駅から近い！川がある！コテージ付き！山に囲まれている！シャワーどころか露店風呂まである！どうだ！！」

「うお〜」

一同が声を揃えて歓喜した！

「ちよっと遠くて、値段が高いんだけど…」

豊は言うが。

「いや、それで決定だ！！」

「じゃあ、いつにする？」

誰も豊の言葉には耳を貸さず、それぞれ口々に話が進んでいく…。

・
・
・
・
・
・
・
・

「あー、三日も掛けて決まらなかったのに、いざ決まればたった30分か！。この三日間は何だったんだ？」

下校途中、俺はぼやいた。

「ウフフフ、いいじゃない。皆でワイワイ出来たんだから」

俺の横で朝倉が言った。続けて、

「でも楽しみだなあ。こんな事できる夏なんて最初で最後だろうから…」

「…そうだな」

朝倉の言葉に感慨深く俺は答えた。

俺にはこの夏休みの間にやらなければならない事が山ほどある！一日たりとも無駄には出来ない。そう思いながら隣で並んで歩く朝倉を見た。

すると、その視線を感じたのか？振り向いた朝倉と目が合った。

何故か少し照れる…。

「楽しみね、8月10日…」

「ああ」

「あと、夏休みもね…」

「そうだな…」

二人はそのまましばらく黙って歩いた。

「じゃあ、ここで」

朝倉が言う。

「ああ」

「明日は終業式か。夏休みも会えるよね？」

「あたりまえだろ」

「そうよね。ごめん…じゃ」

そう言っ、朝倉は帰路について行つた

（明後日から夏休みか…学園最後の夏休み…一体どんな事が起こるのだろうか？）

そんな事を考えながら俺も家路を急いだ。途中、ふと空を見上げた。

済んだ青空に、雲が一つ浮んでいる。

そして、学園生活最後の夏休みが始まる…。

#一四 夏休み始まる（前書き）

夏休み編

高校最後の夏

少女は階段を登っていく・・・

#一四 夏休み始まる

街中では太陽が容赦なく照り付け、家の中ではクーラーがフル回転している。

学校がある日は目覚まし時計と闘う朝だが、休日は何故か目覚ましが鳴る前に目が覚める。とはいえいつもの起床時間より一時間も遅いのだが…。

とにかく今日には夏休み初日。今日から夏休みが始まったのだ！しばらくベッドに寝転んでいたかったが、あまりの暑さでジツとしていられなかった。

泣く泣く体を起こし、自分の部屋を出た。

「あんた、一体何時まで寝てるのよ」

母親の様な事を言ってきたのは2つ上の姉、ゆかりだった。

「母さんたちは？」

「母さんはショーで今朝早くにロンドン。父さんはゴルフ」

俺の母親はファッションデザイナーで年中世界中を飛び回っている。父さんはその会社の部長。

「了希、お姉ちゃんもこれから出掛けるから後頼んだわよ！」

いつもより気合の入った化粧…。おそらくデートだろう。

「分かったよ、男の前でヘマすんなよ！」

「余計なお世話よ！」

やっぱりデートか。相変わらず分かりやすい姉だ。

「じゃ、行ってくるわ」

そう言って姉は嬉々として家を出て行った。

「さて…」

一人になった家の中。俺は朝食にトーストを焼く準備を始めた。今日は海の日という事で近くの港で花火大会がある。昨日朝倉と見に行く約束をしたので、夕方に彼女の家へ迎えに行くことになっているがそれまでの数時間はゆっくり出来る。

トーストを食べながらぼんやりとお昼のワイドショーを観ていると携帯が鳴り出した。

「へーい」

俺が気のない声で言うと、

『何だよその対応は!』

携帯から少し不貞腐れた様な豊の声が聴こえた。予想通りの豊の言葉に思わず笑が込み上げてきた。

「どうしたんだ?」

『いやー、今日港で花火あんじゃん。行かねえかなーと思ってさ』
(うー!)

「あーっ悪りい。昨日他のやつと約束したんだ…」

『マジかよ! 誰? 亜津? トモ?』

「いや…違うけど…」

俺は言ってから後悔した!

『何だ!、まさか女か!?』

「あっ!! んなわけないじゃないか!! とにかく、無理なんだよ」

『分かったよ! じゃあ、亜津とか誘うから。じゃーむこうで会おうぜ』

『プッ』

(ヤバイ、ヤバイ…豊はともかく、朝倉と一緒に行くなんて亜津に知れたらただ事じゃないからな。あいつは朝倉のことが好きらしいから…。)

・
・
・
・
・

とかなんとかしているうちに早くも午後三時になってしまった。

「そろそろ行くか…」

自転車で朝倉の家へむかった。

#一五 接近!?

10分後：俺は朝倉の家のチャイムを押した。

『ガチャ』玄関のドアが開いた。

「いらっしい：」

「!!」

開いたドアの隙間から見えたのは何と浴衣姿の朝倉だった!

「あ：」

「?どうしたの？」

「あ、いや：その浴衣：良く似合うよ」

「ありがとう」

浴衣姿を誉められた朝倉は照れながら笑った。

可愛い：ヤバイくらいに可愛い：。

「あの：ちよっとお願いがあるんだけど：」

浴衣姿の朝倉に見惚れていると不意に訊ねられた!

「え! ああ、何？」

「妹も一緒に行きたいって言ってるの：」

「え!」

俺は一瞬朝倉の言ってることが良く解からなかった。

「どうかな？」

先日、俺は朝倉に一目惚れした相手は彼女の妹だと告げたばかりである。でも、朝倉自身の事も好きだと告げた：。

「いいの？」

俺は恐る恐る訊き返した。

「だって、舞衣が行きたいって：。あなたもその方が良いかな? っ
て：」

俺の事を想って言ってくれているのだから、逆に『妹に俺が取られるわけがないわ』と言っている様にも思えた：。

「俺は：朝倉が良いなら、かまわないけど：」

「じゃあ、呼んで来るね」

言って、朝倉は再び家の中に戻っていった。

妹に会えるのはうれしいが、正直複雑な心境だ。

「お待たせ」

少しして朝倉が出てきた。そのうしろには彼女の妹が立っている！

「よろしく願います、センパイッ」

朝倉とは違う元気良さが妹にはある様だ。朝倉は清楚な明るさで、妹は活発な明るさとも言おうか。

「よろしく…えっと…」

「あ、舞衣です。マイって呼んでくれて良いですよ」

朝倉の妹：舞衣はニッコリ微笑んで言った。

「わかった、じゃっ行こうか？」

「ハイ」

自分でもビックリするほどスムーズに会話が出来た！朝倉はそれを静かに見ていた…。多分、あまり良い気はしてないだろう…。

#一六 バレた関係

三人でゆっくり歩いて30分ほどで花火大会の会場に到着した。

「すごい人…」

「浴衣着てる人結構居て良かったねお姉ちゃん」

浴衣姿の朝倉に対して舞衣の服装はカジュアルだ。この美人姉妹にすれ違う男共の視線は釘付けになっている。

「早く始まらないかな…?」

朝倉は俺の左手を軽く握りながら言った。おそらく周囲の視線を感じ取ったのだろう。そう考えると離れて歩いている舞衣のことが心配になってきた!

「妹、大丈夫かな?」

「何が?」

「その…ナンパとか…」

「そう? 何で?」

「何でって、こんなにカ…」

俺は慌てて言い掛けた言葉を止めた! こんなかわいい子と言い掛けた…。

「…そうね、面倒になる前にね」

そう言って、朝倉は舞衣に注意を促がした。

ポーン!! ポーン!!

少しして花火大会開始の合図である白煙弾が薄暗くなりかけた空に打ち上げられた。

「お、始まるぞ!」

「うん」

二人で空を見上げていると、

「終ゝ見付けたぞ！」

突然背後から豊の声がした！

振り返りたくなかったが思わず振り返ってしまった！！同時に朝倉も一緒に振り返った！

「え！あ、朝倉あ！」

豊は朝倉の方に驚き、鳩が豆鉄砲を喰らった様な顔をしている。豊の声で少し離れた所にいた舞衣も何事かと振り返る。

遂にバレてしまった…。

「お前ら、付き合ってるのか？」

当たり前だが、豊が訊ねる。

「違うわ！今そこで会ったのよ。で、ちょっと話してただけよ」

朝倉が懸命に言い訳をする。

「朝倉、もういいよ。そうだ、俺は朝倉と付き合ってる」

これ以上朝倉を傷つけない！そう決めたんだ。

「いつからだよ？」

「先月からだ！」

それを聞いた豊はニツコリしながら、

「いゝな。お前、朝倉を落としたのか！」

「そんな言い方するな！」

「悪い悪い、そーかー、良い夏休みになるな」

豊は俺と朝倉を交互に見て頷いている。

「心配するな。亜津にはだまっててやるよ」

「お前も…」

「おう、がんばるよ！じゃあな。邪魔しちゃ悪いよな」

豊は颯爽と去って行った…。

俺は月島のことを言おうとしたのだが…。

「ねえ、亜津君がどうかしたの？」

不思議そうな顔で朝倉が問う。

「あ…んー、アイツ朝倉のことが好きなんだよ…」

「ウソ！！亜津君が私のことを…！」

俺の言葉に朝倉は狐に摘まれた様な顔をしている。

「朝倉はモテるんだよ…」

そう言われて、朝倉は初めて気付いた様だ。

舞衣は俺たちのやりとりを複雑な表情で見ていた。

『ドーーーーンッ!!』

その時、最初の花火が薄暗くなった夜空を彩った。

#一七 計画

8月1日：夏休みも早十日が過ぎた。

何かしなければもったいない！とは思っているもののいざとなるとそんなにアグレッシブに動けるものじゃないと実感した。結局、ほとんど特別な事はしなかった十日間だった。

今日は夏休みで一度だけの登校日。本来なら別に出席しなくても良い：と、俺は勝手に思っているのだが、キャンプの最終打ち合わせがあるので学校へ行った。

朝だというのに真夏の太陽光線が容赦なく振り注ぐ：。今日は一体何℃あるのだろうか？俺の体感温度はゆうに四十℃を超えてるんじゃないだろうか？

ぐだぐだしながら教室に入った。

「柊、遅い！」

「！！」

教室に入るなりいきなり純子先生に怒られた！ホームルームの時間は既に15分も過ぎていた！

自席に歩いて行く途中室内を見回すと、ほぼ全員来ていたことに少し驚いた！

しばらく純子先生の説明が続き、ホームルームが終わった。

「じゃあ、皆、残りの夏休み、体に気を付けて有意義に過ごしてね」
純子先生は最後にそう言って教室を出て行った。結局30分くらいで放課後になってしまった。一体この日は何のためにあるのだろうか：。

早速、キャンプに行く十一人が一斉に豊の席に集まった。違うクラスの者もいるのに何という結束力！

「じゃー、コテージを二つ借りて、後は各自が用意するって事で」
豊が手際よく段取りの説明をする。その光景を見て俺は、二期の学級員はコイツを推してやろうと密かに思った：。

「で、必要な物は全部前日に皆で買出しに行くって事で良いか？」
豊が訊くと、

「「意義なくし」」

一同声をそろえて言う。この十一人の連帯感は素晴らしい…。

・
・
・
・
・
・
・

「そうか、この10日間海外にいたんだろ？」

「うん」

「どこ？」

「ニューヨークとロンドン…」

「すごい！いいな」

「良くないわよ。時差に慣れたと思ったらまた移動だもの」
全ての最終確認が終わり、朝倉と一緒に下校している。

「ねえ…」

「ん？」

「この後、暇？」

「特に予定はないなあ」

「じゃあ、お昼一緒に食べない？」

「あ、いいね」

「実は昨夜からカレーを作っておいたの」

「マジ！ご馳走になっていいのか？」

「もちろん」

朝倉の誘いで、再び彼女の手料理をご馳走になった。昨夜から仕込んでいたというカレーは絶品だった。

しかも、今回は舞衣とも一緒に食事をしたのだが、言うまでもなく何の進展も無かった。

#一八 買い出し

真夏の容赦ない太陽光線も今日の曇り空に遮られて降りてこないが、相変わらずの熱風で直ぐに汗ばんでくる。

時刻は午前十一時。外の灼熱地獄から逃げる様に俺は店内に入った。明日のキャンプの買い出しのために朝倉と初デートの時に訪れたあのショッピングセンターに来ている。

（やっぱり中は涼しくていいな）

などと思いながら待ち合わせ場所のエントランスへ着いた。

「うゝす」

俺が挨拶すると、既に到着していた豊たちが手を挙げた。

「よし、これであと一人だな」

豊が言う。

「あと一人って、誰？」

俺は訊ねた。昨日、豊から買い出しに参加できるやつはここに集合というメールが送られてきただけで誰が来るのかまでは聞いていなかった。

「あ、朝倉だよ」

豊は俺を気にしながら言った。

（朝倉が遅れるって珍しいな…）

一〇分後、朝倉が謝りながらやって来た。

今日の買出しに集まったのは五人。俺、朝倉、豊に水野^{みずの}、相島^{あいしま}の二人の女子。月島は大会のために今日は来ていない。

朝倉は水野たちと会話している。あの三人は仲が良いようだ。

「なあ、柊」

豊が小声で話し掛けてきた。

「ん？」

俺が返すと、

「もう、やったのか？」

豊の問いの意味は即に解かったが、アホらしいのでとぼけることにした。

「何を？」

「バカ、解かってんだろ？朝倉としたのか？」

「したって何を？」

こういう質問にはとぼけ通して、相手に核心を言わせる状態になれば大抵は相手が引くものだ。そうなるまで俺はとぼけ通すつもりだ。

「とぼけるなよ。決まってるだろう！？」

（コイツしつこいぞ…）

「決まってるって、だから何をだよ」

「もー！！エッチに決まってるだろう！」

（コイツ臆気もなく言いやがった！）

「してるわけないだろ、バカかお前」

ついに俺も反論してしまった…。

「バカって何だよ！じゃー、キスクらいはしたんだろ？」

…しかしコイツは引かずにズバリ訊いてくるなあ…。本当の事を言ったら朝倉の印象が悪くなるかもしれないのでここは否定した。

「そっか、じゃあ明日から狙いだな！」

豊はニヤニヤしながら言った。俺と朝倉の本当の関係を知らないからしかたないか…。

俺は首を傾け、両手を少し上げて手をぶらぶらさせた。

そう言えばあのファーストキス以来、キスはしていない…。朝倉はどう思っているのだろうか…？

#一九 買出しの後：

途中寄り道などしながら、キャンプ用品売りに着いた。

消耗品以外の物は全てキャンプ場に揃っているらしいので、ここでは皿やコップ等を買った。

「じゃあ、次は食材だな。夕食は何がいい？」

豊が問うと。

「もちろん、キャンプといえばカレーじゃない？」

水野が言う。

「そーよね、ちょっとベタだけどカレーよね」

それに相島も同調した。

それを聞いた俺と朝倉が目を合わせた。すると彼女が苦笑いを見せた。この前、彼女にカレーをご馳走になっているからだ。

「そーだな、カレーなら皆反対しないだろうからな」

豊がそう言い、皆はそれぞれ分かれて食材を探しに行った。

しばらくして、会計係になっている朝倉がレジから出てきた。

「ふう：重い」

朝倉は食材がいっぱい入ったカゴを台の上に置いて言った。

「ごくろうさま」

俺が声を掛けると朝倉は笑顔を見せてくれた。同時に各々が袋を持ち、カゴから袋に移し始めた。

「ちょっと佐久野君！そういう軟らかい物の上に重い物を置くと潰れるでしょ！」

「ああ！悪い」

いきなり相島に怒られている豊。

他の三人は一斉に笑った。

「よーし、今日はこんなものか。ま、足りない物があれば、キャンプ場にコンビニあるから、そこで買えばいいだろう」と豊。

「えー!! コンビニがあんの? キャンプ場に!」

俺が聞くと、

「あるぜ」

豊はあっさり答えた。∴コンビニがあるって、なんか価値がないような気がする…。

じゃー、今日はこれで。明日は朝の6時に西駅集合な」

「おう!」

「あ、柊。荷物半分持ってくれ。女子に持たせるわけにはいかないだろ」

「わかったよ」

袋を受け取る際に豊は小声で、

「俺らはここで消えるから、後は朝倉と二人で遊べよ。荷物があるけど生ものは俺が引き受けたから∴じゃあな」

言って、豊は水野と相島二人を連れてそそくさと去って行ってしまった。

「豊が二人つきりにしてくれたんだけど…」

俺がそう言くと、ポカーンとしていた朝倉だったが、待ってましたばかりに腕を組んできた。

せっかくなので豊の厚意を使わせてもらう事にした。

#二〇 キャンプ・出発

小学生の時の遠足の前夜、楽しみで楽しみで興奮して眠れなかった…。

今になってはそういう事はなくなつたが、昨夜はキャンプの事を考えると、久しぶりにあの感覚で眠れなかった…。まだまだ俺も子供なんだな…。そんな事を思いながら駅へとむかった。

「おえゝす」

内心はハイテンションなのだが、それを他の者に悟られたくないのでワザと気のない挨拶をした…。こういうところも俺はまだまだ子供だ…。

「おう、今日は遅れずに来たな！ちゃんと昨日の食材持って来たか？」

やっぱり発起人の佐久野豊さくの ゆたかは早いな。多分、あいつも俺と同じで興奮して眠れなかった部類だろう。

「悪いなー、昨日行けなくて…」

そう言ったのは伴城武士ともしろ たけしだ。

「そう思ってたんなら、これ半分持ってくれ」

ここぞとばかりに、俺は昨日の荷物の半分をトモに差し出した。

「…おいおい、かなりの量だな！何するんだ？」

「そうよ、今晚何にするの？」

俺から荷物を受け取りながらトモが言うと、同調して、同じく昨日居なかった月島由実つきしま ゆみが訊いた。

「カレーよ」

答えたのはカレーの提案者、水野美夏みずの みか。

「ま、お約束よね」

さらに乗ってきたのは相島法子あいしま ほうこ。

「そうそう、昨日渡すの忘れてた」

言って、朝倉麻梨子あさくら まりこが豊にレシートを手渡した。

「そっか、麻梨子がサイフ係だったね」

朝倉と並んでクラス最高の美女と謳われる細川優利香ほそかわ ゆりかが言った。

「あと来てないのが…亜津と恩田と真矢に久川か」

豊が確認した瞬間、恩田正人おんだ まさとが到着した。

「正人、おそーい」

細川が恩田に駆け寄る。細川は恩田と付き合っている。クラスで二分する二人の美人、朝倉と細川だが、誰もが知っている細川と恩田のカップル。だから自然とクラスの男は朝倉狙いになる…。

「豊、電車大丈夫か？」

「あっえーと、あと一五分くらいある…」

「かなり余裕の集合時間だったんだな」

俺がボヤいた。

「月島、真矢と久川に電話してくれ！俺は亜津に電話するから」

「OK」

豊と月島がナイスコンビプレイを見せる！つーか、さっさと付き合えよお前ら。ってかその前にもっと早く電話しろ！！

「亜津はもうすぐ来るらしい」

豊がホッとした表情で言う。一方。

「唯はそこまで来てて、香奈はもう次の駅で待ってるって」

月島が言った時に、亜津純一あつじゅんいちと真矢唯まや ゆいが同時に着いた。

「よーし、とりあえず全員揃ったな。行くぞ！！」

ようやく電車に乗り込んだ俺たち十人。

全員楽しみにしていたのか？自然とテンションが上がってきている。

次の駅で久川香奈ひさかわ かなも合流して一気にヒートアップする！

#二一 キャンプ・到着

俺たちが住んでいる所は都会ではないが、田舎というほどでもない。いくなれば町といった所。なのに電車で三駅ほど行くと周囲はすっかり田舎の風景に変貌する。さらに電車を乗り換え、山の中へ進んでいく。しばらく車窓から覗く田園風景を眺めていると今回のキャンプ場の最寄駅に到着した。

「よし、良い天気だ！」

駅を出るなり、豊が伸びをしながら叫んだ！良く叫ぶやつだ…。他の皆は豊と対照的に早くも暑さにやられはじめている…。

しかし、駅から少し歩かないといけないのだが、今の皆のテンションならこの炎天下も問題ないだろう。と思った瞬間、恩田と細川はラブラブモード全開で歩いている！

「たくっアイツら！」

そんな二人にキレながら歩く亜津。

朝倉は羨ましそうに二人を見ている。

んー、誰も居なければ俺も恩田たちみたいに朝倉とラブラブモードで歩いてあげられるのに…。そういえば、朝倉たち女子はいつの間か日差し除けの大きな目の帽子を被っている。さすが女子はそういうところはしっかりしているんだなあと感心したのと同時に、どこにあんな帽子をしまっていたのか疑問に思った。それとは対照的に男どもは直射日光に対して無防備に浴び放題だ。

そうこうしながら歩いて行くとキャンプ場に着いた！

木で作られたゲートをくぐると受付のログハウスがあった。

「あのー、予約した佐久野ですがー…」

豊が受付で手続きをしている。

しばらくして豊は二つの鍵を持って来た。

「じゃー、17番コテージが女子。オレらが18番」

言って、月島に鍵の一つを手渡した。

「とりあえず荷物置きに行こうぜ」

俺がそう言うと、皆一斉にコテージへ走り出した！皆まだまだ元気だ！

荷物をコテージに置いて再び全員が集合した。

「まず昼にするか」

まだ一時だが、皆早く遊びたいのだろう。

「あの食堂でいいじゃん」

恩田が建物を指差した。

本当にここは何でも揃っている。コンビニ、キャンプ用品などのレンタルショップ。食堂に銭湯、露天風呂まで…これでキャンプ場と言えるのだろうか…。

俺たちはそのままその食堂で昼食を摂ることにした。中に入ると食堂というよりレストランの様な気がした…。

#二二 キャンプ・終の過去

昼食を終えて全員が食堂の前に立っている。

「まあ、あんなものだろうな…」

「つか、学食の方が美味しいな」

皆思い思いの感想を述べる。

「ね、伴城君、そのカバン何？」

久川がトモに訊ねた。

「おう、これか…」

（その形はまさか…！？）

トモが肩から掛けていているバッグの形を見た瞬間中身が何であるか判った。

「ラケットだー！」

（やっぱりそうか…）

というより、それしか入れる物がないか…。

「ここってテニスコートもあるからさ、一応持って来たんだ」

（何が一応だ、何が！）

「そういえば柊君って、去年の総体で個人優勝したのよね？」

「えー！そうなの？すごい」

「唯、あんた知らなかったの？」

「去年って、二年生の時に…！」

女子達は勝手に盛り上がっている…。

「ねえねえ、私たちにテニス教えてよ」

「賛成」

（おいおい…）

「いいねえ、ラケットは六本あるから皆で使いなよ」

「ありがとー伴城君」

トモ！いらぬ事を！

「お前モテモテだな」

「豊。代わってやるよ」

「オレ、テニスなんてやった事ねーもん」

そしてやむなくテニスコートへと移動した。

平日とはいえ夏休みだからなのか？客の入りが多い。七面あるコートは一つしか残っていなかった。

そこで俺とトモで軽く女子にテニスを教えてあげていた。

しばらくすると俺達のところへ数人のグループがやってきた…。

「俺と勝負して、負けたらここ譲ってくんない？」

その中の一人がおもむろに言ってきた。おそらくどこかの大学生だろう。一緒に居る女にいいところを見せようってところか…。そんな事に関わりたくないのだが。

「いいっすよ」

トモがその挑発に乗った！

「よし柊、軽くヒネってやれ！」

やっぱり俺かよ…。受けたおまえがやれよ…。

しかし女子たちをはじめ、豊たちもアイツらに腹を立てている様だ。

「しゃーねーな…」

俺はラケットを持ってコートへ移動した。

「お、やってくれるか？悪いが負けても文句言うなよ」

言って来た大学生はもう勝った気にいる。

「ワンゲームマッチでいいっすか？早く終わらせるために」

「ああ、もちろんいいぜ」

俺の提案に大学生は相変わらず余裕の表情でニヤニヤして答えた。

「ちよっとは手加減してやれよー」

奴等の仲間が言う。

「お前からのサーブでいいや」

言って大学生は俺にボールを投げてきた。

（やれやれ）

二、三度ボールをバウンドさせ、俺はサーブの体勢に入った。

#二三 キャンプ・満喫

スパーンッ！！

「ゲ：ゲームセツトツ6ー0：」

審判をしている奴等の仲間が信じられないという表情でコールした。

「ナイス、柊」

トモが俺のところに駆け寄る。まったくコイツは…。

「強えー…」

完膚なきまでにやられ、落胆する大学生に俺は、

「ここ使って良いですよ。俺たち、もう行くんで」

そう言って皆の所へ行った。

「ゴメン、勝手にここ空けちゃった…」

俺がそう言うと、相島が、

「ううん、いいよ。スカッとしたもん！ねえ、皆？」

相島が訊くと、皆一往に頷いた。

「じゃー汗も掻いたし、川へ泳ぎに行くか？」

テニスコートから出たところで亜津が言った。

「えー！亜津君、私たちの水着が見ただけでしょ！」

「うわぁ、スケベー」

水野と久川が亜津の提案を否定した。

が、

「でもまぁ、こんな機会って無いんだし、せっかく来たんだから良いんじゃない？」

真矢が問い掛ける。今までやっていた試合がなかった様にその話で盛り上がり始めた…。

「でも、水着なんて持ってきてないわよ…」

朝倉が言った。

「大丈夫、レンタルショップにあるよ！」

何が何でも水着にしたいのか亜津よ…。

「じゃー、水着のレンタル代は亜津君のおごりね」

月島が言うと、

「賛成ー！！」

女子たちが声を揃えた。

「おいおい…」

そうは言うが、亜津は嬉しそうだ。

「まったく、俺も水着なんて持ってきてないぞ！！」

・
・
・
・
・
・

「それー！！」

『ドボンッ』

切り出した岩から水野が水面に飛び込んだ！

「良い眺めだな」

水面に顔を出して女子を見ながら豊が言う。

「まったく、お前は…」

女子全員がレンタルの水着を着ている。というか、亜津以外全員水着を持参していなかったため、レンタルしたのだが。どうやら女子のワンピース系の水着が無かった様で、全員ツーピース型の水着だ。最初は恥かしがっていたが、いざ川に着くと周囲は全員ビキニだったのと、時間と共に慣れてきたのか？途中からはまったく気にしていない様だった。

「そこっ！！何してんのよっ！」

月島が俺と豊を見付け、皆の輪の中に引き入れた。一瞬、彼女たちを見ていた事がバレたのかとビックリした…。

しかし、水着の美女に囲まれると刺激が強いな…。

その後レンタルしたビーチボール等で楽しんだ。

#二四 キャンプ・夕食の支度

「じゃー、晩ご飯のカレーを作るか」

あれから三時間、川で遊んでいた俺たちは夕飯の準備の為に女子のコテージに集まっている。時刻は午後五時を少し回ったところだ。「んじゃ、クジで係りを決めるか？」

豊が手際よくコテージにあったメモ帳で簡易のクジを作り、それを皆で引いた。クジの結果、俺は米係りになった。早い話が米をといて炊く係りだ。なんだか家庭科の調理実習みたいでちょっと楽しい…。

流しで米を洗っていると後ろから、

「麻梨子あんた天才じゃない！」

「すげー、朝倉うめーじゃん！」

真矢と亜津の声がした。

「そうかな？ただのジャガイモの皮剥きじゃない…」

そういえばキャンプに来て朝倉とまともに会話していないことに気付いた。朝倉はどう思っているのだろう…。

「俺、料理の巧い子って好きだなー」

「ちよっと亜津君、今のって何気に麻梨子にコクった？」

「バツ、バカ真矢！！なんてこと言うんだよ！！」

その会話に俺は思わず振り返ってしまった！！

朝倉は俯いて黙々と皮を剥いている。

「あー！ごめん、麻梨子…」

真矢が慌てて謝る。

「ううん、気にしないで」

朝倉は笑顔で言うが、明らかに困惑している。亜津の気持ちを朝倉は知っている。教えたのは俺だが…。

「ねー、見て見て！」

凍り付いた空気を打破したのは月島だった。

「プッ！由実何その顔！」

真矢が思わず吹きだす。月島は人参の輪切りを顔中に貼って現われたからだ！

「これって美容に良さそうじゃない？」

「ハハハ、そんなわけないよ」

月島のおかげで場の雰囲気緩和だ。

「あ、柊君、お米磨けた？」

「あ！お、おう」

朝倉たちのやりとりを見て、実はほとんど手が動いてなかった！

・
・
・
・
・
・
・

「さて、あとは寝かせるだけね」

月島がコンロの火を消した。

「結局、キャンプに来て屋内で仕度してんだな」

俺が何気に言った一言で全員の動きが止まった…。

「ま、まあ外でやると何かと用意が要るしな」

「そ、そうよ。それに外は蚊とか虫が…ね」

「たしかになんかアジがないよな」

皆口々に言う。

「じゃあ、食う時くらい外で食えば」

「そうね！そうしよ」

恩田の気のない一言で落着いた。

#二五 キャンプ・真実

食事の準備も一段落して、各々それぞれに時間を潰し始めた。俺も何もする事がないので、何かないかとコテージ内を見回した。朝倉は水野たちと話しをしている。豊たちが男同士で何か話しをしているのでそれに加わることにした。そういえば恩田と細川の姿が見えない。

「ねえ？」

豊たちの所へ行こうとした時、月島に声を掛けられた。

「ん？」

俺は近くにあった椅子に座って、月島の相手をする事にした。月島はそのまま構わず立っている。つい二、三日前まで大会に出ていた月島はショートカットの髪型に小麦色の顔をしている。

「このメンバー、どう思う？」

唐突な言葉から会話が始まった。

「どう思うって？」

俺は会話の意図が解からなかった。

「佐久野君に男子のメンバーを先に聞いてから女子のメンバーを集めたのよ……」

「へ？なんで？」

「好きな人同士を恋人同士にしてあげるために……私って結構そういう相談されるのよ」

へーそれは初耳だ。まあ、女子陸上部で2年からキャプテンを務めるくらいだから、面倒見は良いのだろう。

「だから、この際くっつけてあげようと思ったの。余計なお世話よね？」

「まー、人によってはそう思うかもしれないだろうけど。俺はそうは思わないぜ」

「そう……ありがと。でも想像と現実は違うわ……。例えば、亜津君は

麻梨子のことが好きだけど、麻梨子の好きな人は他の人……」

(ドキッ)

「麻梨子が見てるのは、柊君なのよ……」

月島の言葉になんて答えれば良いのか解からない……。

「柊君は、気付いてた？」

「……」

沈黙する俺に月島は続ける、

「麻梨子の想いに答えてあげる気はないの？」

もうここまでか……。俺は決心した。

「……月島、誰にも言わないって約束するか？」

月島は一瞬ビククリして、

「?……ええ……」

言った。

「実は……俺と朝倉は、もう付き合ってるんだ……」

「ウソ！」

「シッ！」

あまりの驚きだったのだろう。月島が声を荒げた。幸いそれに反応する者はいなかった。

「いつから？」

「六月から……今日、ここにいるメンバーで知ってるのは豊だけだ」

「……まったく気付かなかったわ！」

この時の表情が一番驚いている。

「あまり知られなくなかったからな……特に亜津には……」

「じゃー、唯と法子には悪いことしちゃったかな？」

「は？」

おそらく月島からすれば不意に言った言葉だったのだろうが、俺にはかなり効いた一言だった。

「あの二人、柊君に気があるみたいなのよ」

「えっ!! マジ!!」

「悪いんだけど、二人には勘違いさせないでね」

「あ、ああ…」

「そっか…」

他人事なのに、自分の事のように月島は嬉しいがる。

「月島は優しいんだな」

「え？何が？」

不思議そうに問い返す。

「何となくそう思っただけ…」

「はぁ？」

ますます訳が解からないという表情をする月島に俺は続けて、

「豊なら大丈夫だよ。勇気を出して言ってみたら」

「え！！」

驚く月島に俺はさらに続けて、

「このキャンプの打ち合わせしてた時にピンっと来たよ、なんとなくだけで」

「………」

俺の言葉に月島は黙り込んでしまった。

「余計なお世話かもしれないけど、アイツなら月島を傷付ける様なことはしないよ、俺と違って…」

「え？」

「ごめん、勝手にベラベラと」

そう言って去ろうとする俺に月島が。

「柊君！ありがとう」

俺は微笑んで軽く手を挙げた。

#二六 キャンプ・宴

「これで最後ね」

月島が最後の皿にカレーを掛けた。

「ちよっと！結局仕上げは女子がやってるんだから、運ぶのくらい男子がやってよね！」

カレー皿が載ったトレイを持った相島が言った。コテージ内で食べるのではせっかくキャンプに来たのにもったいないという事で、外にあったテーブルで食べることにした。

「豊、持ってやれよ」

「お前も手空いてるだろ！」

何だかんだいって、全員分のカレーと飲み物を男子が手分けして運んだ。

外に出ると周囲は薄暗くなっていたものの、肉眼で十分視認できる明るさだった。設備が整いすぎているこのキャンプ場だが、辺りにはキャンプファイヤーを楽しんでいるキャンパーがチラホラ居て、キャンプらしい雰囲気醸し出している。

「うわゝ、場所空いてるかな？」

そんな周囲の状況を見て、月島が不安そうに言った。

「ここ空いてるぞ！」

先に場所を探しに行っていたトモが手を振りながら戻って来た。

「良かった」

テーブルとテーブルの間が少し空いてたが、ちょうど十一人座れる場所が空いていた。それぞれ席に着き、用意が終わったところで、「カンパァー！！」

誰ともなく一斉にオレンジジュースの入った紙コップを掲げて言っ
った！

「あゝ腹減った！いただきます」

亜津が先陣を切ってカレーに手をつけた。

「美味い！」

一口、口に入れると同時に亜津は絶賛した！

「味付けは麻梨子がやってくれたのよ」

水野がまるで自分のことの様に自慢した。

それを聞いて俺も一口。：確かに朝倉の味付けだ。この中でこの味を知っている者はおそらく俺だけだろう。

「お！美味い」

「ほんとう…」

皆順々に食べ始め、皆一言目は絶賛の声を上げている。“この味を前から知ってるんだぞ”という事がなんとなく優越感に思えてきた。

「柊君どう？」

「え！」

突然月島からふられた！

「麻梨子の味付けはどう？」

再度訊いてくる月島の顔は含み笑いを佩びている。さっきの会話を武器にしているのだろう…。

「：美味いよ」

（月島！）

「柊君も美味しいって。良かったね麻梨子」

「えっ！」

朝倉も急に月島にふられて困惑する。絶対に確信犯だ！

俺の心配をよそに他のメンバーは黙々とカレーを頬張っている。

朝倉の味付けに救われた。

「おかわりっ」

亜津が一番乗りでおかわりをコールした。

「お前早いな」

恩田が驚嘆と呆れが混ざった口調で言った。

・
・
・
・
・
・

「ごちそうさま」

結構大量にあったカレーだが、結局鍋は空っぽになってしまった。途中で炊いた米が無くなり、予備で買っておいだレトルトのご飯までたいらげてしまった。

「さ、片付けてコテージ戻りましょうか？」

「そうだな」

食後、しばらく皆で談笑しているとキャンプファイヤーを楽しんでいた人たちもまばらになり、周囲はどっぷりと暗くなってしまった。全員で手分けして手際よく片付けをして、コテージに戻った。

「で、どうする？まだ寝るには早いだろう」

再び女子のコテージで皆が集まっている。

「ランプならあるわよ」

久川が言った。

「いいね」

「じゃあ、大富豪でもやる？」

一時間くらいは皆で遊べればと思っていたが、あまりにも盛り上がってしまい、

「あ！もう一時よ！」

午後九時過ぎに始めたランプだが、気が付けば四時間も熱中してしまった！

「そろそろ、おひらきにするか…」

「そうね…」

皆後ろ髪を引かれる思いでランプを片付け、各コテージの自室に戻って行った。二つのコテージで、それぞれ全員分の部屋を取っている。

俺は自室に戻ると直ぐにカバンから携帯を取り出し、朝倉にメールを送った。内容は“今から会えないか？”というもの。

数十秒後、朝倉から返信が来た“うん”っと。俺は昼間遊んだ川で待ち合わせすることにした。

#二七 キャンプ・深夜の密会

自室の扉をそっと開け、見渡した廊下は電気が消えていて真っ暗だ。そのまま俺は廊下に出て、またそっと扉を閉めた。そしてなるべく足音を立てないようにしてコテージを抜けた。

コテージの外は夕方までの騒々しさはなく、ひっそりと静まり返っていた。今の風景を見ると、山の中にキャンプに来たんだなあと思えた。時折する虫の鳴き声を聴きながら川へと続く外灯の光を頼りに急いだ。

川の畔に着いたと同時に俺は暗闇の中で目を凝らして朝倉を捜した。しかし、川の流れる音と、虫たちの鳴き声だけが聴こえ、人の気配は全くなかった。

俺は少しホッとした。思えばこれまでこういう待ち合わせではないとも彼女を待たせてしまっていた。特に今日はこんな真夜中の山中、女の子を一人で待たせることにならなくて本当に良かったと安堵した。俺は朝倉に判るように外灯の下で彼女を待った。

数分後、コテージの方から走ってくる足音が聞こえた。等間隔に置かれた外灯の下で見え隠れする人影が朝倉だと認識できた瞬間、俺は素直に嬉しさを噛み締めていた。

「うれしい…」

開口一番、息を切らしながら朝倉は言った。

「大袈裟だな」

そうは言ったが、俺も朝倉と同じ感情を抱いていた。

「だって、このまま話も出来ないまま終わるのかと思ったんだもん！」

本当に不安そうな表情で訴える。

「ごめん、俺の所為で」

「ううん。そんな事ない！ちゃんとこうして二人っきりで会えたんだから…」

外灯の下から月明かりの下へと移動した。すると朝倉は、

「ねえ、昼間良い所を見付けたの。行かない？」

「ああ」

それを聞いた朝倉が月明かりを頼りに歩き出した。

「オイ、危ないぞ！」

慌てて俺は朝倉の手を取った。

「うふ、ありがと」

朝倉と手を繋ぎながら、彼女の先導をうけて進んだ。

テニスコートを抜けた所に丘があった。その丘を登りきると林に囲まれた場所に出た。

「ねえ、空を見て」

朝倉が夜空を指差して言った。

「おお！！」

木々が円を描き、ポツカリと穴が開いたように空が見えている。

その夜空一面に大小様々な星がびっしり広がっていた！

「夕方に美夏と一緒にこの辺りを歩いた時にもしかしたらって思ったの。でも、こんなに……」

朝倉自身も眼前に広がっている光の粒に驚いている。そんなに山奥って感じでもないのに、こんなに星がきれいに見える場所があった事に俺もただただ驚いていた。

「普段じゃ絶対に見れないな……」

空ばかりを見上げていると首が疲れてきたので、いつしか二人で芝生に寝転がって星空に見入っていた。

しばらくしてから朝倉が口を開いた。

「星空も良いんだけど、もう一つあるの」

「何？」

朝倉は起き上がると、俺に手招きした。

俺も起き上がって、彼女に導かれるままに林を抜けた。

「ねえ、見て……」

今度は真っ直ぐ指差す朝倉。その先には遠く離れた街のネオンが

光っていた。

「こんな所から夜景が見れたのか…」

俺がそう言くと、朝倉が。

「実はね…ここの夜景って、前に見た情報誌に載ってたの…」

「え！すつげー偶然じゃん」

「うん、このキャンプ場の名前を聞いた時にその本の事を思い出したの」

「へ」

俺たちはかなり貴重な物を目撃しているような気がした。満天の星空と遠くに見える煌びやかな街のネオン…。

「！」

滅多にない情景に浸りきっていたその時茂みの中から女性の声が聴こえた！

#二八 キャンプ・驚きの関係

「朝倉…今の聴こえた？」

「うん…」

恐る恐る朝倉に訊いてみる。彼女も恐る恐る頷く。二人同時に同じ声を聴いたことで一瞬にして場が凍り付いた！

「もしかして、お化け…？」

朝倉が真顔で言う。

「そんなわけないじゃん」

幽霊の類は信じないのだが、二人が同時に声を聴いたという事は茂みの奥に誰か居るということは確かだ。

恐怖心はあるがそれ以上の好奇心に負けて俺たちは声のした方へ歩み寄った。

『あ…う…』

今度は完璧に聴こえた！近付いて行くにつれ、その声はよりクリアになる。

『ああ…』

（なんか色っぽいなあ…）

腰の高さほどの草を掻き分けると、とんでもない光景が飛び込んできた！

月光の中、男女の絡み合う姿が浮んでいる。

（つたく、中でやれよ！）

俺はそう思いながら、朝倉が気になり彼女を確認した。

朝倉はその光景をまじまじと見つめながら言った。

「由実…佐久野…くん…」

「え！」

朝倉の声で俺も再度確認した！

たしかに豊と月島だ！二人とも全裸で、月島は前かがみになり木の幹を抱きかかえる様にして掴んでいる。豊は月島の腰を持ち、自

分の股間を月島のヒップに密着させている。いわゆる後背位の体勢だ！

目の前で演じられているのは知人の情事！見てはいけないと判っているが、俺たち二人はその場を動けずにただ見入っていた…。

『ん、ああ』

控えめだった月島の喘ぎ声が徐々に大きくなる。多分月島は初めてではないのだろう…。

俺は朝倉に小声で、

「行こ」

言って、朝倉を連れてその場を離れた。

「ビックリしたー！」

テニスコートまで戻って来たところで、堰を切ったように朝倉が言った。

「由実って佐久野君と付き合ってたのね！」

まだ落ちつかないといった口調で朝倉が言う。

「いや、少なくとも夕食の時にはまだ付き合ってたよ…」

「えー！」

「夕食前に月島とそんな話しをしたから…」

朝倉は理解出来ないという顔をしていたので、夕方の出来事を話した。

「そうだったの…」

「どっちかがコクって、直ぐにああなったって事かな？」

さっきの事がフラッシュバックして、俺は少し複雑な気分になった。

「それって凄いこと…よね」

「え、なんで？」

朝倉の一言で正常な思考に戻れた。

「だって、告白してすぐにああでしょ…私は…キスだって二回しかしてないのに…」

途中言葉にしなかったが、朝倉が何を言いたいのか解かった。

赤くなりながら落ち込む朝倉を俺はきつく抱きしめた！

「きゃっ！」

突然の事に驚き、朝倉は声を上げた。今の朝倉を見ているとたまらなく愛しく感じて抱きしめてしまった。

「朝倉：キスしていい？」

俺が訊ねると、彼女は軽くうなずき瞳をとじた。

#二九 キャンプ・終焉

ドンドンドンッ！

翌朝、俺の部屋のドアを激しくノックする音で目が覚めた。

『終ゝ起きろ！！』

ドアの向こうで豊の声がした。なかなか開かない目で何とか携帯の時計を確認した。

「まだ、9時前じゃん…」

ドンドンドンッ！

『おい！！』

容赦なくドアを叩きつける豊。しかし元気な奴だ…。

『おい』

「起きてるよ！」

たまらなくなり、俺も声を上げた。

『早く用意しろ！行くぞ！』

「行くなってどこに？」

『遊びに』

「………」

『とにかくあと5分で用意しろよ！』

豊の呼び掛けに無言を突き通した。

『お前、また寝たのか！？』

再び怒涛のノックが始まった！

「あー！起きてるから止めろっ！」

『早くしろ！あと4分だぞ！』

「たくっ」

夏休みに入って以降、久しぶりの目覚めの悪さに思わず悪態をついてしまった。

昨夜あれから朝倉としばらく話しをしていて、コテージに戻ってきたのはもう空が明るくなり始めた頃だった。豊がいつ戻ってきた

のかは知らない。

「ん〜」

立ち眩みを起こしながら思いっきり伸びをして服を着た。

「遊ぶって、何するんだ？」

皆が集まるリビングみたいな所で、俺は豊に訊いた。

「まだ決めてないけど、色んなものがあるから何か出来るだろ」
「.....」

俺はもう一度寝たくなった…。

何だかんだ言いながらも、その後時間まで皆でワイワイやって、キャンプを締めた。

豊と月島は、まるで昨夜の事が俺と朝倉の幻覚だったかのように普段と変わらなかった…。

ともかく、人によっては何も変わらず、人によっては大きく変わったキャンプが終わった。俺たちは何か変わったのだろうか…？

#三〇 二人の夜

始まった時は一ヶ月以上もある！と息巻いていた夏休みも気が付けば残り十日を切ってしまった8月21日。時刻は午後8時32分…。

大きなプラズマテレビで毎週チェックしているバラエティ番組を観ている俺の後ろで朝倉が食後のコーヒーを煎れてくれようとしている。今、俺は朝倉の家に居る…。

「はい、コーヒー煎れたよ」

「あ、ありがと…」

どうしてこんな時間まで朝倉の家に居るのかというと、キャンプから帰ってきた3日後に朝倉とデートした。デートといっても街へ彼女の買出しについて行っただけのもの。その買い物とは、久しぶりに家に帰ってきた両親と行く、ヨーロッパ旅行に必要な物の買い物。そして、そのまま朝倉たちはヨーロッパへ旅立った。で、その旅行から一昨日帰ってきたらしい。

そして今日の昼に朝倉の両親はまた仕事で海外へ渡航。同じく、妹の舞衣も今日から三日間の部活の合宿で家を空けた。さらに、ヨーロッパへの旅行に行かなかった姉夫婦が入れ代わるように昨日から旅行に行ってしまったという。したがって二日間朝倉はこの家で一人つきりになってしまう。

その事を知ったのがつい二時間前。女の子一人にする訳にはいかないで、俺は朝倉の家に泊まる事になった。しかも2日！もちろん朝倉に頼まれての泊まりだ！

『カチャッ』

飲み終えたコーヒーカップをテーブルの上に置いた。

「……………」

何故か沈黙が二人を包んだ…。

「まだ…」

朝倉が何か言おうとして止めた。

「ん、何？」

「まだ、寝るには早いから、映画でも観ない！」

何か違う事を言うつもりだったのだろう…。

「いいね、そういえば結局あのシアタールームで映画観てないもんな」

何となくよそよそしい雰囲気は俺もアてられてしまったのか？ 口調がおかしいことに気付いた。

「そうね…行こ」

俺たちは地下のシアタールームへ移動した。暗くなったりビングはこの家には俺と朝倉しか居ないという事実を痛感させてくれた…。改めて足を踏み入れたシアタールームは驚きの連続だった！ 興味の無い人には本当にどうでもいい物ばかりかもしれないが、俺は興味津々で部屋にある機材を見回した！

「すげ〜…」

「全部、お父さんが揃えたの」

「へ〜」

機材によってメーカーがバラバラな所に逆にこだわりを感じた。普段、その辺の家電量販店ではお目にかかれない高級品の山にただ目を奪われていた…。

「なに観る？」

「お！」

朝倉の言葉で現実に戻った！ 朝倉が指差した棚にはDVDのケースがズラリと並んでいた！ ざっと見た限り二百枚は有に超えているだろう。

「朝倉はこれ全部観たの？」

俺は棚に並んだDVDを吟味しながら言った。

「まさか！こんなに観れるはずないわ…」

たしかに、まだ封を開けてない物も何枚がある。

「じゃー、朝倉がまだ観てないのにしようか」

「んー…」

朝倉も俺と並んで棚のDVDを選別し始めた。そして一枚のDVDを取り出した。

「これ…観た？」

朝倉が取り出したのは大ヒットした海賊三部作の最終作だった。

「あ、二作は観たけど、最後はまだ観てないなあ」

「じゃあ、これで良い？」

「うん」

言って、朝倉はまだ開けていない封を解いてディスクをデッキに入れた。

観るものがアドベンチャーもので良かった。この状況で恋愛ものを観るのは何となく気まずい感じがした…。でも、これって結構長かったはず…。その間密室で二人つきり…。

そんな事を考えていると、朝倉は手馴れた仕草で天井からスクリーンを下ろし部屋を暗くした…。プロジェクターでスクリーンに画面を投影させる。その機材を見て俺は再び感激しながらソファーに腰を下ろした。

「何か飲む？」

「え？」

朝倉の言葉で彼女の方を見た。すると彼女の横には腰くらい高さのボックスがあった。

朝倉はその小さな箱の扉を開けた。それは小型の冷蔵庫だった。

「すげー」

またまた驚く俺。

「しばらくここ使ってたから、何もないわね…。コーラで良い？」

「あ、うん…」

「あ！しばらく使ってたって言っても賞味期限は大丈夫よ」

「いやっそうじゃなくて、冷蔵庫まであるんだと思ってさ…」

「お父さんが頻繁に出入りするときはおつまみなんかも置いてある

んだけど、今はないみたいよ」

「はあゝ」

朝倉の家は驚きの連続だ。

用意を終えた朝倉が少し躊躇しながらソファに座ろうとした。俺は自分の隣に招待してみた。すると彼女は嬉しそうにそこに座ってくれた。映画が始まる頃いつしか二人は密着していた…。

#三一 不安な夜

3時間後、映画が終わり朝倉がリモコンで照明を点けた。

「んー、んー…」

朝倉はそのまま大きく伸びをした。少し小さめのTシャツから彼女の腹部が見えたので俺は慌てて目を逸らした！

「私ここを片付けてるから、先にお風呂入る？」

「あ！」

「え！？」

いきなり俺が声を上げたので朝倉はびっくりした様だ。

「着替え…持って来てない…」

そう、今日はただ朝倉の家に遊びに來ただけで、泊まることになったのは急に決まったこと。当然着替えなんか持って来てない…。

「取りに帰るよ…」

「…うん」

朝倉の表情が少し気に掛かったが、俺は太急ぎで自宅に戻った。自転車を飛ばして自宅に着くと家の中はもぬけの殻だった。ウチも今日は両親が居ない。姉キは多分デートだろう。俺は適当なカバンに着替えとパジャマ、洗面用具を詰めて再び家を出た。

・
・
・
・
・

30分後朝倉の家の呼び鈴を鳴らすと、即ぐにドアが開き中から朝倉が飛び掛るように抱きついてきた！

「良かった…戻って来てくれた…」

「どうした？何かあったのか！？」

突然の彼女の行動に俺は何かあったのかと危機感を感じた。

「ううん、違うの…ごめんなさい…不安だったの」

「不安？」

「あなたが戻って来なかったらって思ったら…」

「朝倉：信じてくれよ…」

微かに震えている彼女を胸の中で感じた。

「ごめんなさい…本当に、ごめんなさい…」

「俺、本当に君が好きなんだ、決して口だけで言ったんじゃない…だからそんなに不安がらないでくれ…」

そう言いながら、俺は朝倉を愛しく感じていた。

「…舞衣の事は？」

今にも泣き出しそうな顔で問いかける朝倉。彼女は一体どんな答えを求めているのだろうか…。

「ごめん…」

「謝らないで…私は平気よ。舞衣と付き合っても…」

「もうやめよう！こんな話」

これ以上お互いを傷つけたくなかった。

俺は彼女を抱きしめたまま無理矢理玄関に入り、ドアを閉めると彼女にキスをした。これ以上の彼女の言葉を封じるため。朝倉は嫌がることなく受け入れてくれた。まったくこんな事、他人が見たらどう思うのだろうか？おかしいと言われて当然かもしれない。でも、今の俺にはどうして良いのか解からない。今はただ、ギリギリの二人が壊れない様に保っていくしかない。

『くちゅ　ちゅぽ』

このキスはこれまでの中で最も官能的なものになっていた…。お互い止めようとせず求め合い、続けていた。二人とも互いの舌を絡ませ合い互いの口内を貪る…。

「ハア…ハア」

「ハア…ハア…」

互いの首に腕を回したまま一度口づけを止めた。お互い息が荒くなっている。

「ん…」

再び熱い口づけを交わす。

「ハア：ねえ：もう：」

今度は朝倉から止め、切なげに言葉を発した。

「ま、待って：」

俺はそれ以上の言葉を静止した！

「何故？私とじゃ：嫌？」

「そうじゃない。先に：先に風呂に：急いできたから、汗も掻いたし：」

「分かったわ：」

何とか冷静になりたかった。朝倉にも冷静になって欲しかった。出来ればこのまま何事もなければ良いと思った。流れで彼女を傷つけたくないから：。

リビングの時計は12時50分を指していた。

#三三 はじまりの夜

『ガチャ』

風呂から上がった朝倉がバスタオルを一枚だけ体に巻いてリビングに入ってきた！

「ちょっちょっと！」

俺は慌てふためく！

「私、覚悟は出来てます…」

俺は先に風呂に入っていたので、先刻取りに帰ったパジャマを着ている。

「来て…」

そう言って朝倉はリビングから俺を出し、電気を消して、二階へと上がっていった。

「どうぞ…」

朝倉の部屋へと通された。朝倉は自分も入室すると扉を閉め、鍵をかけた。

真っ暗だった朝倉の部屋の電気が点けられると、その空間が想像以上に広がったことに少し驚いた。本棚、机にベッド、テレビ（リビングにあるようなプラズマテレビではなく、小型の液晶テレビ）CDデッキにタンスと鏡台が置かれ、部屋の真ん中にはフロアリングの上に丸いピンクの絨毯が敷かれている。

部屋にばかり目を奪われていたが、ふと朝倉に目を移した。すると、胸元に巻かれているバスタオルを解こうとしていた！

「…良いのか？」

俺が最終確認をすると、彼女は大きく頷いて自らの裸身を解放した！

「……………」

彼女の裸体を目の当たりにしながら、俺は何も言えなかった…。

朝倉は頬を紅く染め、羞恥心に必死に耐える表情…雪のように白

い肌：胸にはその存在を誇示するような双丘、その頂点には桃色の突起物：その下方には薄っすらとした若草…。

「…朝倉、綺麗だ…」

ようやく言葉が出た…。その言葉に少し現実に戻ったのか？

朝倉は、

「ああ…やっぱり恥ずかしい…」

艶かしい吐息とともに言った。

「大丈夫、朝倉だけに恥ずかしい思いはさせないよ」

彼女がここまでしてくれているのだから、これ以上拒むわけにはいかない！俺は言っ、パジャマとともに下着を脱ぎ、一気に全裸になった。

男の裸を目の当たりにした朝倉はまじまじと俺の体を見ている…。さすがに俺も恥ずかしい…。

「すごい筋肉ね」

昔取った杵柄とでも言うのか、テニス部時代はもっと筋肉がついていたが…今でも毎日軽く筋トレはしている。

「ッ！！」

下を向いた瞬間、朝倉は絶句した。それがどういう事なのか直ぐに判った。

「…これが男だよ…」

俺は一応優しく言ったが、朝倉の美しい裸身で膨張しきった男根を見てしまった朝倉はあからさまに恐怖している…。

「あ、朝倉は…」

ストレートに訊くことが出来ず、言葉を止めてしまった。しかし、彼女は俺が何を言おうとしたのか理解したようで、『コクッ』と頷き、

「ずっと…」

言った。

「ずっと？」

「…ずっと初めてはあなとって想ってたの…」

恥じらいながらも思い切った告白に俺は胸がキュンとなり、思わず彼女を抱きしめた！自分の股間が触れないように下半身を引き気味にしながら（笑）

そしてどちらともなく唇を求め合う…。互いの想いをぶつけ合った熱いキスをかわしながら、俺は“はじまり”を実感した。

#三三 慣れ始めた夜

朝倉の胸が俺の胸の下にあたっている。何とも言えない心地良い弾力を感じる。

キスを止め、朝倉をベッドに横たわらせ、彼女の眼鏡を外した：俺は彼女の眼鏡をベッドのヘッドボードに置いた。数センチの所に朝倉の素顔がある…。大きな瞳が俺を見詰める…まるで吸い込まれる様な魅力を放ちながら…。

（やっぱり可愛い！素顔の方が可愛い…）

俺は内心でそのフリーズを連呼していた。もちろん、眼鏡を掛けた普段の彼女も凄く可愛いのだが。

「ちゃんと見える？」

そのまま何時間でも見入ってしまいそうになり、思わずしょーもない質問をしてしまった。

「うん、裸眼でも一応視力はあるから…」

「そうなんだ…」

「それより…電気消さない？ 恥かしいから…私、初めてだし…」

「あ！」

俺は慌てて部屋の隅に移動し、スイッチを押した。豆電球が点いているので目が慣れれば不自由はなかった。

俺は朝倉のもとに戻り、

「いい？」

再度訊いた。

「うん…」

恥かしそうに瞼を閉じ、言った。

「あ！」

「どうしたの？」

俺は大事なことを思い出した！

「いや…あの、このままで良いの？」

「え？」

「だから…まあ、最後は外に出すけど…ほら、もしかしたら…」

「あっ!!」

朝倉も気付いたようで、顔を赤くして驚いた。

「ちよっと待って、お姉ちゃんの部屋にあると思うから見てくる！」

そう言って、朝倉はベッドから起き上がるとそのまま何も羽織らず部屋を出て行った!…慣れとは怖いものだ…。

しばらくして朝倉が戻って来た。

「あったわ!ホラッ新品の一箱持ってきた」

「そんなに沢山…って俺ら凄いい話してるな…」

「!…そうね…慣れって怖いわ…」

俺と同じ事を言っている。

おもむろに朝倉は俺の横に座った。

「あれ、縮んでる…」

「あー、さっきは興奮してたから…」

朝倉に指摘されても先刻ほどの恥かしさはなかった。これも慣れなのだろう…。

「興奮って…私に？」

「当たり前だろ!…ってかもう平気なんだな？」

「だって、いきなりあんな大きいのって…今のはなんかカワイイ感じ…」

「ハハ…」

俺は今の二人の状況に対して、「平気なんだな？」と訊いたのだ…。

「ねえ…」

今度は真顔の朝倉、

「あなたは初めてじゃないの？」

問う。

「…一度だけ…。正直に言うと、去年、テニス部の先輩マネージャーと…」

言いながら彼女を確認した。朝倉はガツクリした様に頷き、

「その人と、付き合ってたの？」

「違う！」

俺は激しく否定した！

「優勝のお祝いになって…。信じてくれ！一回だけなんだ…。その先輩、他にも何人も男がいて…。それで、俺、何もかも嫌になって…。テニス部を辞めたんだ…」

あの時は悔しかったのだろう…。あの時は嫌になったと言聞かせていたが、今になって考えればそう思う…。

「ごめんなさい…。嫌なことを思い出させて…」

慌てて謝る朝倉。

「いいんだ、総体も優勝出来たしテニスに未練は無い」

「本当に？」

「ああ、それに、あの時は我を忘れてて何も覚えてないから、君が始めての女性だ」

言って、朝倉の肩を抱いて、キスをした。これで何度目のキスだろうか？一度そのキスを止め、朝倉を見つめた。すると彼女は『コク』と大きく頷いた。美しい大きな瞳が微かに潤んでいる。俺は激しい欲情に駆られ、再度キスをする、そのまま左手で彼女のバストに手を掛けた。風船を割らない様にそっと彼女のバストを上下左右に揉みほぐした。緊張からか？俺の掌に汗が滲んできたのが判った。

#三四 愛しい夜

「ん！」

突然の俺の行為に朝倉はキスしながら思わず声を漏らした。俺はその声を聴き、苦しくならない様に口づけを止めた。

「あっ…」

刹那、艶かしい声を出し、朝倉は俺の肩に自分の顔を乗せた。彼女の少しウェーブの掛かった髪が俺の鼻に触れた。シャンプーの香りが鼻腔を刺激する。

「いい匂い…」

冷静に考えれば、今日は俺も同じシャンプーを使わせてもらったのだから、当然同じ匂いがするのだろうが、朝倉の放つ香りですます興奮してきた。

・
・
・
・
・
・

「朝倉…いいか？」

「うん…きて…」

俺は恐る恐る最終確認をした。朝倉はそれに答える。

ここで彼女が躊躇ってくれば楽になれる。そう思っていたのだが、彼女はほとんど躊躇する事はなかった。

ここは俺の覚悟次第なので！

「ん？」

再度自分の覚悟を決めるためにヘッドボードに視線を移し、そこに置いた箱に手を伸ばした。すると箱の横に伏せられた写真立があるのに気付いた。

「これは…？」

俺は言いながらその写真立を手を取った。

「あ！それは…」

朝倉が困惑する。

「これは…」

写真立に収まっていたのは俺の写真だった…テニス部時代の。おそらく試合中のものだ。

「堂々とあなたの写真が撮れるのって、その時だけだったから…」
切なげに言う朝倉に俺は胸が熱くなった。

「ありがとう」

言って写真立を置いて、代わりに取ったスキンを手早く被せ、朝倉にキスをした。

互いに愛情をぶつけ合う口付け…。

「我慢できなかったら直ぐに言ってくれ」

「うん…分かってる」

俺は張り詰め、はちきれんばかりの欲望の化身を朝倉の秘部に押し当てた。先端がまるで彼女の中に吸い込まれていく様に挿入された…。

「くっ…」

やはり朝倉の表情は苦痛に歪んだ。

「朝く」

「大丈夫です！あなたの思うようにして」

こっちが大丈夫か？と訊く前に彼女に答えられてしまった！

その言葉に、俺は朝倉に申し訳なく感じながら、自分のものを彼女にゆっくり押し込んだ。

「もう少しだから…」

必死にシーツを掴みながら、苦痛に堪える朝倉。俺はそんな彼女の手を取り、自分の指と絡めるようにして握らせた。

「は、入ったよ…」

俺がそつと話しかけると、朝倉は目を開き、

「…うん」

言った。

「今、朝倉と…」

「うれしい…」

朝倉は笑みとともにそう言った。

「え!？」

「こんな事、実際に出来るなんて思ってたから…」
言葉と同時に彼女の瞳から涙が溢れた。

「泣くな…」

俺の手を握る彼女の手を解き、そっとその涙を拭った。

「ごめんなさい…私、幸せで…」

「俺、もう…」

「もう平気だから、あなたのしたいようにして…」

俺は頷き、本格的に律動を開始した。

思わず欲望と快感に身を任せたかったが、なんとか冷静を保ちつつ、ゆっくりと彼女を穿った。朝倉はなるべく苦痛を表情に出さない様にしてくれているが、それを隠し切る事は無理な様だ。痛々しい朝倉の表情を見ながら、俺も早く終わらせてあげようと思った。

・
・
・
・
・

「大丈夫…か？」

心地よい疲れが全身を襲う。そのままその感覚に身を委ね眠りに落ちていきたかったが、何とか意識を保ちながら朝倉に聞いた。

「うん、すごく幸せだった。あなたが私を傷つけない様になっていう気持ちに凄く伝わってきて…」

満面の笑みでそういう彼女にたまらなくなり、俺は軽く彼女にキスをした。

「ねえ…」

後処理をしていると、朝倉が妙に恥かしげに話しかけてきた。

「ん？」

「その…まだ出来る？」

「へ？」

朝倉の言った意味が解からなかった。

「これって、回数をこなさないとダメなんですよ？」

「う…ん」

「もっと私に教えて…」

とんでもない申し出だ！俺だって経験は無いに等しいのに…。一度知ってしまうと、女性の方が積極的になるというのを聞いたことがあるが、本当なんだと実感した。

「いいのか？」

「うん…」

俺は少し戸惑いながらも一度彼女を抱きしめた…。

#三五 過ぎ行く夏・・・

「今日も暑いなー」

容赦なく照りつける太陽光線の下、俺は独り呟いた。今、豊の誘われたカラオケに向かって自転車をこいでいる。

二時間前まで朝倉の家に居たのだが…。あの夜、あれから二度朝倉と繋がった…。そのまま二人ともそのまま眠ってしまい、俺が昼過ぎに目が覚めると既に彼女は起きていて、「遅い！」と怒られてしまった。それから二人で遅めの昼食を摂ったあと、街に出て買い物などを楽しんだ。夕方に夕食の食材を買って再び朝倉の家に帰って夕食を作って食べた。

その後、また二人っきりの夜を迎えたが、今度は男女の仲はなかった。とはいえ今さら二人別々に寝るのもなんか変な感じがしたので、彼女のベッドで眠った…。

そして、今日午前一〇時に豊からカラオケの誘いの電話で目が覚め、一度荷物を置きに家に帰り、そのままカラオケ店にむかっている。

受付で部屋の間所を確認した。

（大部屋…一体何人居るんだ？）

普通の部屋で大体五、六人は入るだろうに大部屋を取るって…。そんな事を考えながら、その部屋を見付け、扉を開けた。

「おい柊、遅いぞ！」

開口一番豊が言った、しかもマイクを通して！

「わりい…あ！！」

何と部屋の中には朝倉が居た！確か彼女の家で別れた時は誘われた様子はなかったのに…。

「よし、全員揃ったな！」

俺の思考などお構いなく豊の仕切りが始まった。

メンバーは豊、月島に細川、恩田、そして朝倉に俺…。六人だっ

たらわざわざ大部屋を取らなくても良いんじゃないのか…。

「えー、この度俺、佐久野豊は、月島由実と付き合うことになりました！」

「おーいいぞー！」

マイク片手に豊が叫んだ！それに同調する恩田。恩田ってこんなやつだったのか…。それより今の状況を何の説明も受けてない俺はただ訳が解からなかった。

「つきましては…」

「うるさい！」

月島が豊を突き飛ばし、自分のマイクで話し始めた。

「要は、今日はカップル同士集まってワイワイやろうって事よ」

月島が要領よく説明した。

「一体、何の意味があるんだ？」

俺が問うと、月島は、

「別に意味は無いわよ。ただ皆で騒ぎたかっただけよ」

「あ、そう…まあいいか」

良く解からないが納得してしまった…。って良く考えると俺と朝倉のことが恩田たちにバレたって事か！

「っかし、朝倉は柊を選んだか…」

俺の考えを見透かしたように恩田が俺と朝倉を交互に見て言った。

「実は俺も朝倉を狙ってたのになー」

「バカッ！」

恩田の発言にすぐさま細川の鉄槌が入った。

「「ハハハハハ」」

全員が爆笑していると、店員が料理を持って入ってきた。

「さー、料理も来たし、みんな盛り上がるー！」

「「お〜〜」」

こうしてみると、この夏休み、皆それぞれに色んな事があったんだなと実感した。

そんなこんなで学園生活最後の夏休みも終わろうとしている…。

#三六 答えは・・・(前書き)

二期編

季節は夏から秋へ

ゆっくり変わっていく季節に併せて・・・

#三六 答えは・・・

●相手の良いところが欲しい愛

●愛されて、愛す愛

●その人の幸せを願う愛

これはとある大学教授が唱えた愛の三タイプらしい…。

昨夜夏休み最後の恒例行事である宿題に追われている最中に聴いていたラジオで言っていた言葉。その時は宿題のことで手一杯だったのであまり気にしなかったが、寝る間際にふと思い出して考えしまった。

（俺の舞衣への気持ちはどれか？では、朝倉の俺への気持ちはどれなのか？）

そんな事を考えているうちに、

（朝倉も舞衣も好きだが、一体どっちの方がより好きなのだろうか…？）

という事まで考えが及んだ。

（今は朝倉との関係の方が深い…。舞衣とは会話することすら少ない…）

などなど、答えなど出るはずもない自問自答ばかり考えていた。

結果、寝不足のまま二学期の始業式直後に行なわれた夏休みの復習テストを受けている…。

キーン コーン カーン コーン 〵〵

テスト終了を告げるチャイムが鳴った。何故か懐かしい気がする。

「ハイイ、そこまで。後ろの人から回収して」

純子先生が言った。先生は夏休み前と変わらず白い顔だ。

俺はとりあえず空欄を無理矢理埋めて提出した。

小テストとはいえ、テストと名の付くものから開放された安堵感

に浸りながら周りを見回してみた。クラスメイトは皆一応に“夏休みを満喫した”という顔色をしている。

「じゃー、今日はこれで終わり。明日から一週間は午前中までだら」

先生が簡潔に今後の予定を告げると、ホームルームが終了した。

「ふあゝ」

「なんだか眠そうね」

思わず大あくびをした俺に細川が言った。

「何？昨日は遅くまで麻梨子とたのしんちゃった？」

細川は悪戯な笑顔で言う。この前の恩田に続き、細川の意外な面を見た気がした…。

「バーカ、昨日ずっと宿題やってたからだよ！それより何？」

「そうそう、これ」

言って、細川が何かを差し出した。

「ん？ああ写真かー」

「そ、皆に配ってるの」

そう言っただけに俺に五枚の写真を手渡した。

「で、こっちは麻梨子に渡して」

もう一つ写真の束を手渡された。

「おう、サンキュー」

細川は笑顔で手を振った。

（しかし美人だ。恩田と付き合ってたならさぞ大変だろう）

そんな事を思いながら朝倉の席を見た。

（あれ、もう居ない！）

慌てて携帯を取り出し、電話を掛けた。

「もしもし？どこ？」

「玄関？ちょっと待ってて」

電話を切って直ぐに玄関へ駆けて行った。玄関を出てすぐの所に朝倉は居た。

「ごめん、待たせて」

「ねえ：由利（香）となに話してたの？」

いきなり不安そうな表情で訊ねられた。しっかりと見ていたよう
だ。

「ああ、これ貰ってたんだ」

俺は細川から貰った写真を朝倉に渡した。

「あ、これってキャンプの：」

その写真をまじまじと見ながら言った。もう彼女から不安の色は
消えたいた。

「そういえばカメラ持って来てたのって由利だけだったわね」

「そうだなあ。あまり撮ってた印象はなかったけど、実は結構撮っ
てたんだな」

俺たちはキャンプの話をしながら歩き始めた。

こうして二人きりで居ると、朝倉が世界一好きだと思う。昨夜か
ら考えている問題の答えは出ていない。が、こうして朝倉と一緒に
居れる今の時間の間に必ずその答えを導き出してみせる！

朝倉麻梨子

朝倉舞衣

この姉妹と俺の関係の答えを。

#三七 体育祭にむけ

二学期が始まって早くも一週間が経った。

午前中までだった短縮授業も終わり、本格的に二学期が始まった。学校に居る時間が増えたがまだまだ残暑が厳しい日が続いている。

この二学期は一年で一番長い期。俺たち三年にとっては一番大事な時間になるのだろうか…。

『ピッ』

歯切れの良い笛の音がグラウンドにこだました。

今は体育の授業中。来月のアタマにある体育祭のための練習をしている。

我校の体育祭は“プチオリンピック”という別名が付いているほど有名なのだ！何かかというと、まず競技が多い！

クラス単位で得点を競う“全体競技”と、個人が好きな種目に出る“個人競技”の二つの種目に分かれている。

全体競技はたぶん、普通に目にする体育祭の形式。でも個人競技はちょっと違う。光応学園全生徒約八百人がそれぞれ自分の得意な種目に出場して、トップを目指すのだからそれはちょっとした見応えのあるものになる。

個人競技の種目は、花形の陸上競技全般から野球、サッカーという球技に水泳まである！さらに運動系が苦手な人用にゲームの様なものまで用意されている。俺が変わり種だと思うのは炭酸飲料の一気に飲み！もはや体育とは何の関係もない！

ちなみに俺は過去二年、テニスで優勝している。それしかとり得がないからな。

今年は違う種目に出ようとも考えたが、三年連続で同じ種目で優勝した者はいないということなので、せっかくだから新記録を狙ってみる事にした。テニスは最近人気があるので、今年はかなりの人数が集まっている様だ。人気がある種目もあれば、ない種目もある

のだが…。

今日の体育の授業は全体種目の練習。個人種目の練習は一回しかない。

全体種目は走り幅跳びと、混合リレーに出場する俺。

そんなこんなで授業が終わった。

「ったく！」

グラウンドから教室に帰る途中、怒りながら伴城が現われた！

「今年こそ体育祭で優勝できと思ったのに、またお前が出てくるんだもんな」

個人種目で俺とトモが出るテニスの事を言っているのだろう。トモの言い分はもっともだ。

「ハハっ三年連続優勝は新記録だっていうからな、こうなったら狙ってやろうと思って」

「ま、一年もブランクのあるやつには負けられねーからな」

少し本気の口ぶりでトモは言った。

「そうそう、今日コート借りれるから練習しようと思うんだけど、どうだ？」

俺をライバル視しているトモが誘ってくれた。

「そうだな…行くよ」

トモの誘いに少し戸惑ったが、いつまでも引きずっていても仕方がないのでこの際に吹っ切ることにした。

テニスコートはいつも体育等で使っているグラウンドの横の丘の上にある。あそこは風通しが良く、年中心地良い風が吹いている。俺はあの風が好きだった。

#三八 先輩

「よう、新キャプテン、やってるか？」

放課後、テニスコートに着くなりトモは二年生に声を掛けた。しばらくはやら二人で話していたので、俺は一年ぶりのコートを見回していた…。

「え！ 柊先輩？」

一人の部員が俺に気付いて声を出した！すると。

「え！ マジ？」

「どこ！」

「ほんとだ！」

「先輩ッ！」

一瞬にして数人の部員に囲まれてしまった！

「おい、お前ら！！！」

その事態に気付いたトモと新キャプテンが怒鳴った！

「だって俺らにとっては憧れの人ですよ」

部員が残念そうに言った。

「：トモ、やっぱ帰るよ。ジャマになりそうだから：」

「そんな！！ ジャマなんて…、せっかくなんですから練習して行ってくださいよ」

今部員に激を飛ばしていた新キャプテンも残念そうに言った。

「そうだな…悪かったな柊」

トモが引き止めることはせずに言った。

「ああ、気にすんな。じゃ皆、体育祭でな」

「「ハイッ」」

俺の言葉に皆一斉に返事をした。

皆にチャホヤされるのは悪い気はしなかった…ちよつと残念な気がしながらテニスコートを後にした。

「柊センパイ！」

丘を下ったところで背後から俺を呼ぶ女子の声が出た！

振り返ってみると、テニスウェアを着た女の子が立っていた。

「！？」

その女子に俺は見覚えがあった。

「センパイ、覚えてますか？」

おもむろにその子が訊いてきた。

「ひ、広瀬……？」

#三九 告白、再び

「うれしい！覚えててくれて！」

おぼろげながら発した名前が合っていたようだ。彼女は一学年下の女子テニス部員の広瀬由比^{ひろせ ゆい}。

「どうしたんですか？コートに来るなんて」

その広瀬が不思議そうに問う。

「いいや、ちょっと体育祭の練習に……」

「じゃあ、センパイ今年もテニスに出るんですか？じゃあ、私と一緒にアベック優勝ですね！」

「あ、ああ……そうなるように頑張るよ」

俺は広瀬の勢いに押される様に返事をした。

「ところでセンパイ、知ってますか？」

広瀬のテンションに若干ついていけない俺にさらに捲くし立てる！

「私この夏、センパイに並んだんですよ！」

（なんの事だ？）

「総体の個人戦で優勝しました！」

「マジ！すげーじゃん、おめでどう」

驚きながら俺は広瀬に賞賛の言葉を贈った。

「なに言ってるんですか、センパイだって二年で優勝してるじゃないですか」

広瀬は少しテレながら言った。たしかに去年、男女混合戦で見た時にセンスがあるなあと感じた覚えがあるが、まさかそこまでの実力だったとは……。そういえば広瀬は特待生だったか。

「これでセンパイに堂々と言えます！」

「は？」

「私、ずっとセンパイが好きでした！」

何を言われたのか一瞬判らなかった。

「去年からずっと言いたかったんですが、私とセンパイじゃ釣り合

わないと思ってて…。この一年、まずはテニスでセンパイと同じ位置に行こうと思って頑張りました…」

「ひ、広瀬…」

突然の嵐に会った様な衝撃を受けた。

「すいません…勝手にこんな事言ってます…」

「……………」

「返事はいつでもいいです。すいません、失礼します」

広瀬の告白にただ沈黙することしか出来なかった俺に深く一礼して、広瀬はコートの方へ走り去ってしまった。

独り残された俺は広瀬に告白された事より、『勝手にこんな事を言ってる』という言葉が耳から離れなかった。

朝倉に告白された時も同じ事を言われたからだ…。

#四〇 相談

「なににする？」

「いや、別に気を使わなくていいよ…」

「遠慮しないで」

「じゃあ、コーヒーで」

「ハイ」

嬉しそうに朝倉が冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出して、ヤカンに火にかけて。

そう、俺は今朝倉の家に居る。

秋晴れの日曜日、本来なら外で伸び伸びしたい天気だが、朝倉がどうしても相談しておきたい事があるというので彼女の家に来ている。

「どうぞ」

言って、朝倉がコーヒークップをテーブルに置いた。

俺も広瀬の事を話さないといけない。あれから二日経っている。

「…で、良い？」

朝倉は自分のカップに一口、口を付けて話し始めた。

「ん、ああ」

「あのね、一昨日の事なんだけど…」

俺はその言葉で一瞬ドキッとした！朝倉は続ける。

「告白されちゃった…」

彼女が続けた言葉によって、鼓動がもっと早くなった。

「あー、亜津だろ？」

「ううん、違うの…全く知らない人」

その朝倉の言葉に俺は嫌悪感を抱いた。

「ふーん。朝倉はモテるから仕方ないよ」

俺はあえて気のないフリを言った。

「えー！！じゃあ、あなたは良いの？」

「え!?!? どういう意味?」

朝倉から返ってきた言葉は全く予期していないものだった!

「だから、あなたは私が他の人に告白されても何も思わないの?」
いつもの朝倉とは違い、口調は荒くなっていた。

「何も思わないわけないだろ!」

朝倉にコクった男への嫌悪感から俺もつい声を荒げてしまった。
それに気付き、直ぐにトーンを落として言った。

「俺、朝倉を信じてるから…」

「え?」

「どんな男が告白して来ても、朝倉と俺の関係は変わらないって…」
俺がそう言うと、朝倉から怒りの色が消えた。

「君に他の奴が言い寄って来るのなんて想像したくもない! 今の俺から朝倉を取られるのは絶対に嫌なんだ!」

俺は素直に自分の気持ちを彼女にぶつけた。

「嬉しい…ありがとう…」

「嘘じゃないよ。今の俺には君しか…」

「でも、舞衣は?」

そういう朝倉にもう不安の色は無い。

「…正直解からないんだ…。舞衣ちゃんを本当に好きなのか…」

本当に今は解からない。ほとんど話もした事がない舞衣と、深い時間を過ごしている朝倉。一緒に居る時間が長い朝倉の方が、今は好きなんだろう…でも、舞衣の事をあきらめる事が…出来ない…。自分で解かっている、こんな感情を持っている俺は最低な奴だと。

「私のことは朝倉で、舞衣は舞衣ちゃんなんだ…」

「え!?!?」

独りで葛藤していると、朝倉が不意に言った。

「ううん、なんでもない。ちょっと不思議に思ったの…」

「ま、麻梨子…」

「え!?!? どうしたの? 急に!」

朝倉に言われて初めて気が付いて、思わず名前で呼んだが恐ろし

く恥かしい！」

「いや、名前で呼んでみたくなって…」

「ぷっ。変なの、今までどおりで呼んで。何か恥かしいよ…」

「ごめん」

「良いの。それより私はあなたの事が大好きよ。でも、あなたを苦しめたくないの…。前にも言ったけど、舞衣ともちゃんとコミュニケーションをとって、あなたの気持ちを確認して」

「どういう事…？」

「もしかしたら、私の所為であなたの心を乱しているかもしれないから」

「なんという女性だろうか…。自分を抑えて、俺の事を最大限尊重してくれている！朝倉は俺なんかが触れてはいけない女性だ。」

「朝倉はすごいよ…」

「は？何が？」

俺は感じた事をただ口にした。

「なんていうか、とにかくすごいよ」

「？変なの…」

朝倉は何の事を言われているのか全く解かっている様子だ。それでいい、これは俺の感覚なのだから。

「舞衣ちゃんに告白する時は、ちゃんと君に言うから…」

俺のともすれば常識を逸した言葉に彼女は頷いてくれた。

#四一 柊の相談

朝倉からの相談が終わったのを見計らって、今度は俺の事を話すことにした。

「なあ…、俺も一ついいかな？」

「うん」

「実は俺もこの前、コクられたんだ…」

「え！誰に？」

さすがに驚く朝倉。

「一年下の女子テニス部の広瀬ってコに…」

「やっぱりテニスなんだ…」

朝倉は複雑な表情を浮かべた。

「トモと体育祭の練習をしようとテニスコートに行った時に…。答えを言う前に去って行ったから、まだ断れてなくて…」

「そう…」

「決して朝倉のを聞いたからじゃなくて、最初から今日言うつもりだったんだよ」

そう言うと言計に言い訳っぽくなってしまった。

「分かってる。そんな事疑うわけじゃない…。で、断るの？」

「あたり前じゃないか！広瀬にはちゃんと言うよ。これ以上君を傷つけたくない…」

「ありがとう…もう、この話は止めにしない？」

朝倉はやわらかい笑みでそう言ったが、多分無理をしている…。

「ああ」

俺は残っていたコーヒを一気に飲み干した。朝倉も同じ様に一気に飲み干した。静かなリビング…。

「ねえ…」

その静寂に堪えられなかったのか、朝倉が切り出した。

「まだ、時間ある？」

「うん、今日は別に一日することないし」

「じゃあ、私の部屋へ行かない？」

少し恥らいながら朝倉が言う。

「う…ん」

「？」

不自然な俺の態度に朝倉が気付いたようだ…。

さっきからずっとトイレに行きたいのを我慢していたのだが、コーヒーの一气飲みが効いたのか？その衝動がピークに達した！

「あの…トイレ、貸してほしいんだけど…」

他人の家でトイレを借りるのには抵抗がある。ましてや今は女の子の家に居る、余計に抵抗があったがもう我慢の限界に来ていた。

「どうしたの改まって。この前泊まった時はそんな事言わなかったのに」

可笑しそうに朝倉が言う。

「じゃあ、先に二階に上がってるから、来てね」

「わかった」

拍子抜けするほど朝倉は淡白だった。単に俺が考えすぎていただけか…。

#四二 戸惑いのなかで

用を済まし、階段を上がった。

階段を上がりきった左手に舞衣の部屋がある。この前来た時は部屋の扉は閉まっていたのだが、今日は開いていた。ダメだとは解かっているながらも、つい横目で室内を伺ってしまった。

罪悪感を感じながらも好奇心に負けてしまった俺の目に入ってきたのは、薄紫に染まった室内だった。バルコニーに出られるのか？大窓にはカーテンが掛けられていて、そのカーテンが紫。太陽の陽によってその紫が室内を彩っている。さらに壁紙も薄紫に統一されているため部屋一面が薄紫に染まっている。ここまで統一されると薄紫の部屋というのも何だか逆に落着く…。

もう行こうとした瞬間、ベッドの上に置かれていた雑誌に目が止まった。その雑誌はテニスの月刊誌で、その置かれていたテニス誌には見覚えがあった。表紙に写っているのは自分なのだから。

昨年の一〇月号。表紙は俺…。この雑誌はアマチュアテニスにも力を入れていて、昨年の総体、二年で優勝したという事で俺を表紙にしてくれたのだ。自分のウチに三冊もあるので、見慣れている…。(雑誌社から送られてきたものと、母親、姉が一冊ずつ購入)

どうしてあの本が舞衣の部屋にあるのか疑問に思ったが、さすがにこれ以上ここに居るわけにはいかなーかと思ひ朝倉の部屋に行った。朝倉の部屋の扉を開けると、彼女はベッドに座って音楽を聴いていた。

「お！フロルド」

俺が言うと、朝倉は、

「この前のカラオケであなたが唄ってるの聴いて気にいっちゃった…」

「たしかこの前是一枚も持ってなかったよな？」

「うん、あの後買ったの。でも昔のCDって置いてなかったから、

最近のだけしかけなかったけど…」

「へー、俺、全部持ってるから今度貸してあげるよ」

「うん、ありがとう」

男性四人組のバンド、FROM CHILD略してフロルド。曲調はロックというよりポップがメインのバンド。デビュー当時からラブソングが好評で売れている評判のバンド。

しばらく寄り添いながら二人で聴き入っていた…。

「ねえ…」

「ん？」

「好きよ…」

突然朝倉が言いながら、自分の頭を俺の肩にもたれさせた。

「え！」

朝倉の突然の行為に戸惑う。

「あなたに告白してきた誰よりもあなたが好き…それだけは胸を張って言えます」

「あっ朝倉…」

突然のこの状況にどうすれば良いのかまったく判らず、ただ彼女の名前を呼ぶだけの俺。

「キス…しよ」

「う、うん…」

彼女の求めるままに応じて、ベッドの上でキスを交わす…。

（この後どうなるのか？というか雰囲気の流れされて俺は何をしてるんだ！）

（キスだけで終わるのか？）

キスを交わしながら俺の頭の中はパニックっていた！雪崩のように次々と押し寄せる思考…。

すると、ゆっくりと唇を離れた朝倉はベッドから立ち上がると部屋のカーテンを閉め、さらに扉には鍵を掛けた！外からの陽光がカーテンに遮られ、部屋の中は一面淡い水色に染まった。その光景に彼女がさらなる行為を求めている事を悟った…。

#四三 抑えられない感情

「朝倉…」

困惑と共に俺は言った…。

「嫌？私…我慢できないの…」

「！」

俺以外の前では決して言わないであろう言葉を発する朝倉…。言わせてしまったのは間違いなく俺…。

「嫌なわけないだろう、俺だって男なんだ…」

「して…」

これ以上ないシンプルかつ官能的な二文字…。

二人で倒れこむようにベッドに転がり、絡み合う。

幾度か口づけを交わし、互いの衣服を脱がせ合う。朝倉のTシャツに手を掛けると、彼女は両手を上げ脱ぎやすい体勢になってくれた。Tシャツを取るとすかさず彼女の肘から下へ舌を這わせた。

「キャッ！」

思いもしなかったであろう俺の行動に驚きの悲鳴にも似た声を出した。しかし、構わずに俺は脇から胸元へと舌を這わせた。ブラをずらし、右胸だけを露わにさせると。

「いや…恥かしい…今日はどうしたの？」

朝倉が消え入りそうな声で問い掛けたが、俺はあえて返事をしなかった。本当の朝倉麻梨子という女性を引き出すために。

俺は両手で彼女の右胸のみを掴むと、舌先を胸元から先端へと進ませた。

「ああ…」

舌先が先端の突起物に触れた刹那、朝倉は色っぽい吐息を漏らした。その反応を聴いたところで、俺は舌先でその先端を強く弾いた。「あゝっ！」

そのまま口に含み、ワザと『チューチュー』と音を立てて吸い付

いた。

「やだっ！ 恥かしいの！」

その言葉で俺は一旦口を離した。

「気持ち良くない？」

俺が問うと、彼女は目を逸らしたが首を横に振った。

「じゃ、続けて良い？」

意地悪な質問をしている事は自分でも解かっていた。しかし、そんな問い掛けに彼女はゆっくり頷いた。再び可憐な突起物を口に含む。すると、最初より固く尖っていることに気付いた！

（感じてる：朝倉も興奮してるんだ！）

それを知った俺もますます興奮してきた！ 強く吸ったり舌で転がしてみたり、さらには歯で軽く噛む。

「あっああっんっ」

俺の行動に併せて朝倉が反応する。たまらなく愛らしい！ そのま片方だけずらしたブラを取り除き、キスしながらゆっくりと自分の右手を彼女のショーツへ持っていた。

「ちよっちよっ」と！

突然朝倉が声を上げた！

「！どうした？」

ビククリして訊ねたが、その瞬間答えが解かった。

（濡れてる…）

指先に触れたショーツが微かに湿っている事が解かった。大半は汗だろうが…。それでも彼女を安心させようと、

「恥かしがることないよ。それが自然なんだから」

「でも…」

「俺、嬉しいよ」

「え？」

「俺が：した事で君が感じてくれているから：」

俺が言うと彼女の表情からは不安の色は消えたが、替わりに羞恥心からか？ 頬を赤らめた。それを見計らい、これからの愛の行為に

邪魔な布をゆっくり、やさしく取り去った。

#四四 それがたとえエゴでも

「ハア…」

完全に裸体を露わにした朝倉がなんとも言えないため息を吐いた。

「ねえ…」

『ピリリリ〜ピリリリリ〜』

朝倉が何か言おうとした瞬間、彼女の携帯が鳴り出した！

「もう！ムード台無し！」

朝倉は怒りながら携帯を手を取った。

「うっ舞衣からだわ！」

苦笑いを浮かべながら電話に出る朝倉。俺はその間に後始末を開始した。

「もしもし？…うん、任せる。アッ！三人分お願いね。はい、ありがとう。じゃ」

「どうした？」

「今日の夕飯は舞衣が担当なの、それで何が食べたいのかって」

「じゃあ、もうすぐ帰ってくるんじゃない？」

「まだ、三〇分くらいは時間があるから…その…」

急にもじもじし始めた朝倉を見て彼女の言いたい事はすぐに解かった。

「朝倉が嫌じゃなきゃ俺も…ほら…」

恥かしいが、また膨張しきった欲棒を見せた。

「！」

それを見た朝倉はあからさまに驚いていたが引いてはいないようだった。

「ああ…好き…あなたが好き」

これで今日何度目の口付けだろうか…。そのまま彼女と一つになった瞬間、俺は朝倉が好きだと改めて実感した。

.....

「どうぞ…」

そう言ってテーブルにズラリと料理の入った皿を並べた。並べたのは舞衣だった。

先刻までの朝倉との行為を思うと、こうして面と向かっている舞衣にたいして罪悪感しか湧いてこなかった…。舞衣は知らない、俺は自分のお姉さんとさつきまで…。そんな男が自分に好意を抱いている事を。

「どうしたの？いつもは質素なのに、今日は気合入ってるわね」

「ちよっと、お姉ちゃん！」

朝倉の失礼な発言に舞衣が怒った。

朝倉は今どんな気持ちで妹と接しているのだろうか？今の外見からではまったく想像がつかないが、自分と同じ感覚なのだろうか？そんな事を考えながら、しばらく朝倉と舞衣のやりとりをぼんやり眺めていた。

「どうしたの？さあ、食べましょ」

「どうぞ、食べてください先輩」

「ん！ああ…。いただきます」

朝倉と舞衣。どちらか一人を選ばなければならない。たとえそれがどんな事になって…。

舞衣は本当の事を知らない…。このまま知らずにいた方が良いのかもしれない。でも、知らせなければならない気がする。朝倉のためにも…。

そう思うのは単なる俺のエゴかもしれない…。でも、近いうちに舞衣に真実を言おうと決めた。

#四五 断わり

夏の夕日より秋の夕日の方がキレイに思えるのは俺だけだろうか？
昼中の時間が一学期より短くなっていることを実感しながら、俺はテニスコートに居る。

「よー柊、そろそろアがるか？」

一緒に打っていたトモが言った。

「ん、ああ、そうだな…」

体育祭のための練習とトモに言って付き合ってもらったが、実はそれは広瀬に会うためにテニスコートに来るための口実だった。

手早く昔使っていたテニスウェアから制服に着替えた。

「なー、帰りに何か食ってこーぜ」

「あ、悪いい…、ちよつと寄ってくところがあるんだ…」

トモが誘ってきたが広瀬に会うためにそれを断った。トモは意外にあっさり引き下がってくれた。

（んー、どうしようか…女子のコートの前で待ってるわけにもいかないしな…）

トモと別れたはいいが、まだ女子テニス部の練習は終わっていないかった。練習時間が終わるまで男子のテニスコートの周りをウロウロしている、

「すいませーん！！」

まだ練習していたテニス部員が叫んだ。声の方を向くと真直線に俺の方へテニスボールが飛んできていた！俺は慌てて持っていたラケットをケースに入れたまま振り抜き、飛んできたボールを打ち返した。フツク気味に弧を描き、声を上げた部員のラケットにヒットした。

「うわっ！」

「あー、悪い」

「いえ、ありがとうございます」

部員は深々と頭を下げた。生身のラケットなら部員の前でバウンドするはずだったのだが、ケースごと打ち抜いたので理想とは程遠い返球になってしまった。

そんなこんなで、ふと女子のコートを見るとちょうど女子の練習が終わろうとしていた。本当は帰りまで待ちたかったが、着替えを待つのもどうかと思いテニスコートから部室までの道で目に付きやすい場所で待つ事にした。あとは広瀬がそれに気付いてくれるかどうか…。

（なんか、ストーカーみたいだな…）

ちようどいい場所を見付け、そこに立ちながら思った。
すると都合よく広瀬が一人でやって来た。

（良かった）

俺は安堵しながら手を上げてアピールした。広瀬がそれに気付き駆け寄ってきた。

「センパイ！」

「広瀬、この前の答えを言いに来たんだ」

あまり時間を掛けるのは良くないと思い、俺は早速本題を切り出す事にした。

「いいですよセンパイ、気にしなくて」

広瀬はニツコリ微笑んで言った。

「え！」

「断られるんでしょ？ 見れば判りますよ、それにそんな予感もしてましたし」

そう言う広瀬の表情は信じられないくらい明るい。

「…うん。今、付き合ってるコがいるから…」

「わかりました。でも私はセンパイのこと諦めませんからね、もし今付き合ってる人と別れても、私が居ますから安心してください」

「広瀬」

「失礼します」

広瀬に言葉を掛けようとしたが、それを遮るように一礼して走り

去ってしまった！その時の広瀬の笑顔が印象に強く残った…。結局最後まで広瀬は笑顔を崩さなかった…。

#四六 エビフライ

眼前の景色はオレンジからネイビーブルーに変わろうとしていた。
（腹減ったなあ、今日は家に誰も居ないんだったな…どこかで食べて帰るか）

そんな事を考えながら校門まで来た時に、

「せんばーい」

背後から女性の声がした。辺りには俺しか居ない。ということは俺に向けられた台詞だ。振り返ってみるとそこにはなんと朝倉舞衣が居た！

「あっ…！」

言葉が出ない俺に対して、舞衣は笑顔で、

「先輩、一人ですか？」

訊いてきた。

「ああ…」

「お姉ちゃんは？」

「ああ、俺今日はテニスの練習をしてたから、先に帰ったよ」

「えっ！テニス？」

麻衣の表情が一変した。

「体育祭の個人種目が出るからその練習」

「あー、それで…」

「ま、舞衣ちゃんはこの間まで何してたの？」

初めて舞衣の前で名前を呼んだ…。

「やだー、ちゃん付けしなくていいですよ、舞衣って呼び捨てにしてください。私は文化祭の準備です」

俺が恥かしいのを必死で堪え、呼んだ呼び方をあっさり拒否されてしまった…。

「文化祭？もう？」

俺は平静を装って訊き返した。

「はい、演技部は映画を上映するんです」

「え？」

「ああ、上映って、自分たちで撮った映画を上映するんですよ」

「いや、そうじゃなくて。演技部に入ってるの？」

「そうですよ。あれ、お姉ちゃんに聞いてないんですか？」

「う、うん、まったく…」

「そうですよね、私のことなんて別にどうでもいいですからね…」
少しさびしそうな顔をした舞衣。

「先輩、今日この後何か予定ありますか？」

すぐに気を取り直したようで、明るいい口調で舞衣は言った。その問い掛けに俺は焦った！

「え！いや、どこかでメシを食って帰ろうと思ってただけだけど…」

「じゃー、ウチで食べませんか？」

「え！？」

「今日の夕飯当番私が担当なんですよ。何にしようか迷ってたんですけど、よかったらリクエストしてくれませんか？」

思いもよらない舞衣の誘いに俺は困惑した…。本来なら喜ぶべき状況なのだろう…。舞衣はニコニコしながら俺の答えを待っている。

「…じゃー…エビフライ…」

子供っぽいリクエストだが、何故かそう言ってしまった。

「わかりました」

笑顔で返事をした舞衣。その笑顔がとても可愛い。

そして、俺と舞衣は一緒により一層紺色に染まった学校を後にした。

#四七 舞衣との買い物

「んー、ちょうど良い大きさのエビが無いな」

小声でつぶやきながらスーパーの魚売り場を眺めている舞衣。

そんな舞衣の後ろで食材が幾つか入ったカゴを持って、俺が立っている。

「ソースは何がいいですか？」

不意に舞衣が質問した！

「え！あゝ、…タルタルソース…かな…」

「はいっ」

いつもはウスターソースをかけるているのだが、またも何故かタルタルソースと言ってしまった…。

「じゃあ、パセリが要るなあ」

言って舞衣は野菜売り場へと方向転換した。

「もしかして、イチからタルタルソースを作るのか？」

まさかと思って訊いてみたが、

「はい」

ニツコリと返された。

この姉妹は本当に料理が巧いのだと実感した。この前ご馳走になった舞衣の料理も朝倉とは違う味付けだったがそれがまた絶品だった。

「いや、そこまでしなくてもいいよ、時間がかかるだろう？完成品で十分だよ…」

「そうですか？タルタルソースなんてすぐに出来ますよ」

「いや…面倒じゃん…」

普段は普通のソースをかけて食べているなんてますます言えなくなっただけ。

「先輩がそう言うなら、市販のにしますね」

（あ…）

少し残念そうな舞衣の表情。

その後もどんどん他の食材を選ぶ舞衣。その後について行く俺。

(なんかこういうのも良いな…)

そう思いながらスーパ―を後にした。

#四八 ドッキリ

「本当ですか？」

「本当だよ、この前の料理凄く美味かったよ」

「ありがとうございます」

という会話をしていると朝倉の：舞衣の家に着いた。

「ただいま」

家に入るなり舞衣が元気よく言った。

「どうぞ、先輩」

言って、舞衣は来客用のスリッパを差し出してくれた。

「おじゃまします…」

もう何度もおじゃましている朝倉の家だが今日は凄く緊張した。

まるで初めて来た時のような感覚だ。いや、初めて来た時より緊張しているかもしれない…。

靴を脱いでスリッパに履き替えた瞬間、

「舞衣、遅かったじゃない！何してたの？」

玄関を入ったすぐ左手にある階段の上から朝倉の声がした。

「お姉ちゃんごめーん、買い物してたら遅くなったのー」

舞衣が二階へ向けて言った。

『トンツトンツ』

その舞衣の声を受けて、階段を下りてくる足音がした。

「先輩っ早くリビングへ！」

「え？え？」

舞衣が悪戯な笑顔で俺をリビングへ通した！

『ガチャッ』

何も知らない朝倉がリビングへと入って来た…。

「今日のメニューな！」

言い掛けていた朝倉が俺と目が合った瞬間、まるで幽霊でも見た様な表情をした。

「や、やあ…おじゃましてます…」

苦笑いしながら俺は挨拶した。舞衣はそんな朝倉を見て笑っている。

「何してるの？」

普段目にしないインナーを着た質素な朝倉。俺はそんな彼女に新鮮さを感じていたが、当の朝倉の表情はあきらかに強張っている…。

「帰りに会ったので、今日の夕食一人って聞いたから一緒について…」

「そ、そういう事…」

舞衣の説明についてい乗ってしまう自分…。

「あっそう」

そっけない言葉とは裏腹に表情は引きつっている…。

舞衣は何気ない気持ちでの悪戯心からだろうが、朝倉は…。

・
・
・
・
・
・
・
・

「いただきます…」

料理が出来て最初に口を開いたのは朝倉だった。

先刻より幾分か表情は和らいではいるが、まだ機嫌は悪そうだ…。

（この空気をなんとかしたいなあ…）

そう思いながら舞衣のつくってくれたエビフライを一口食べた。

「うまい！」

思わず率直な感想が口を吐いて出てしまった！

「そうですか！よかった」

嬉しそうに返答した舞衣…だが、朝倉の表情は…。

「舞衣の料理はおいしいからね」

朝倉がトゲのある言い方で言った。

（うわぁ、もうここに居たくねえ）

俺はそう思ったが、あきらかに不機嫌な朝倉とは逆に舞衣は嬉し

そうにしている。

朝倉の不機嫌な表情を作った責任の一端は俺にもある…。その罪悪感を感じながら食事を進めた…。

#四九 予感

食事が終わると朝倉は自分の部屋へと行ってしまった。

舞衣は台所で後片付けをしている。

「手伝うよ」

言いながら俺は台所へ移動した。

「え！？でも、お姉ちゃんが…」

「大丈夫、後でちゃんと行くから。ご馳走になるだけじゃ悪いから片付けだけでも手伝わせてよ」

「…ありがとうございます」

舞衣はニツコリしながら残りの皿を洗い始めた。

ジャバジャバと水が跳ねる音が無言の二人の言葉のようにキッチンに響く。

「あの…先輩…」

「ん、何？」

「あ、えっと…その…もういいですから、早くお姉ちゃんの所へ行つてください」

「え、ああ…ごめんね、ごちそうさま」

俺がそう言うのと舞衣は笑顔で会釈したがさっきから少し様子がおかしい。そんな舞衣も気になるが食事の前からずっと不機嫌だった朝倉の方が今は気になった。

階段を上りきり、朝倉の部屋の前に立った。

（うゝ、何か緊張するなゝ）

一度深呼吸をして扉をノックした。

「あっ朝倉、俺だけど…開けてくれる？」

鍵が掛かっているかどうか確認せず彼女に問いかけた。

『…どうぞ…』

少し間を置いて朝倉の返答が来た。

扉を開き恐々朝倉の部屋へ足を踏み入れた。部屋に入り扉を閉め

ると、

「した…の？」

「え！？」

突然の朝倉の質問に困惑した。

「舞衣に、告白…したの？」

「してないよ、片付けを手伝ってたんだ。前にも言ったけど、告白する時は…君にも知っていてほしいから…」

「ごめんなさい…」

突然朝倉が謝った！

「あなたに迷惑をかけないって決めていたのに…あんな態度であな
たを困らせて…」

「気にする事ないよ」

そうだ、自分の好きな男が違う女と一緒に居れば誰だってそうなる。例えそれが自分の妹でも。

「ううん、私が一方的な愛を押し付けているのに…」

朝倉の愛…。

「あなたと一緒に居る舞衣を見ているとなんだか嫉妬してる事に気付いて…妹に嫉妬している自分が怖くなって…どうして良いのか解からなくて…それで…」

「朝倉…」

俺みたいな男をここまで愛していてくれるとは…。

「！」

たまらなくいとおしくなり、朝倉を抱きしめた。

「俺みたいなの…こんなどうしようもない馬鹿な奴なのに…」

「好き…」

自分を詰る俺に朝倉は優しい口調で言ってくれた。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「じゃあ帰るよ。ご馳走様でした」

「いえ、また食べに来てくださいね先輩」

「玄関まで送るわ」

少し朝倉の部屋で過ごした後、朝倉と一緒に家を出た。

「ねえ…」

俺は気になって仕方ない事を訊くことにした。

「どうして…舞衣に嫉妬なんてしたんだ？」

「え!?!」

「ごめん、言いたくなかったらしいよ」

「…あなたを見る舞衣を見て…舞衣はあなたの事が好きなんだって感じたの…」

「えっ!?!」

とんでもない答えが朝倉から返ってきた!

#五〇 体育祭開幕

スポンッ

「ゲームセツツ！ウォンバイツ柊。6ゲームトウ0！」

審判が高らかに叫ぶ。同時に歓声がコート中に響く。

「ナイスゲーム」

トモが俺に向けて親指を上げて合図する。俺も軽くラケットを上げて返事をした。

今日は体育祭の一日目で個人競技の日。

俺はテニスに出場して、今三回戦を勝利した。

「一緒に食おうぜ、弁当」

伴城が歩み寄りながら言ってきた。

「おう、豊たちも一緒だぞ」

「かまわねーよ」

俺とトモは豊たちのいるグラウンドへと移動した。

「っかし、お前はすげーよ！」

「なんだよ急に」

「いや、ブランクがあるとは思えねー勝ち方だからよ」

「そうか？今までの相手は一年生と補欠の二年だったからだよ」

「あと一つ絶対勝てよ！そしたら次は俺だからなっ」

トモが真剣な表情で言う。

「ああ、その前にお前も勝たねーとな。次は新キャプテンだろ？」

「バーカ、お前の相手より楽だろ。なんてったって次のお前の相手は元副キャプテンで今年の県ベスト四の実績だぞ！」

俺の言葉に強がってみせるトモ。

「ばーか、俺は去年の全国チャンプだぞ！」

そんな会話をしながらグラウンドに到着した。

「よう、おつかれ」

豊が迎えてくれた。

「豊、どうだった？」

俺が豊の成績を訊ねると。

「ハハッ予選落ち」

頭を掻きながら豊は答えた。たしか豊は砲丸投げに出ていたはず。

「ったく！ポイントにならねーじゃねーか」

トモが言う。

「すまん…」

個人競技で上位の成績を残すと、明日の全体競技のクラスポイントになる。

「まっつーわけだから、午後からは皆の応援に回るよ」

申し訳なそうに豊は言った。良いやつだ。

日差しを避けるために、弁当持参で食堂へ移動した。

食堂や体育館、グラウンドには各競技の途中経過が張られていてその前には大勢の生徒が群がっていた。俺たちはその間を衝いて食堂の席を確保した。

「まあ、午後からはギャラリィも増えるんだろうな」

遠くで成績表に群がる生徒達を見ながら豊が言った。

「そりゃ、豊みたいに午前中で終わったやつらがいるからな」

「悪かったな！」

弁当をつつきながら俺たちはたわいのない会話を楽しんだ。

#五一 体育祭・聞いたかった声援

昼食を終え、豊たちと一旦別れた俺はテニスコートへと歩いていった。すると、途中で朝倉が立っていた！

「良かったあゝ、ここ通らなかったらどうしようかと思った…」

朝倉が安堵の表情を浮かべながら言った。

「待ってたのか？」

「うん、さっきグラウンドから食堂へ行こうとしてたのを見たから多分ここを通るだろうなあと思ったの」

「なんだ、さっき声掛けてくれれば良かったのに…」

「佐久野君だけならそうしたけど…伴城君もいたから」

また朝倉に気を使わせてしまっている。

「頑張ってるね、私お昼からする事がないからずっと応援してるから！」

「ああ、サンキュー」

「それと、これ…タオル地で作ってみたの」

そう言って差し出したのは手作りのリストバンドだった。

「あ、これって朝倉が作ったのか？」

「うん」

そういえば朝倉は昔…。

「ありがとう、絶対に優勝するよ！」

俺は朝倉から貰ったリストバンドを握り締めて言った！

「うんッ」

一番聴きたかった声援が聴けた気がした。

午後からの四回戦は俺の同学年で、トモとテニス部の主将の座を争った実力者。さらに今年の夏の大会で個人県ベスト4の実績を挙げた真田高水さなだこうすい。ちなみにトモは今年の夏の大会の成績はベスト8。つまりキャプテンの伴城より好成績を収めている。

去年全国を制した俺と、今年の我が校一の成績を収めた真田との

一戦はギャラリーの関心も高かったのようで、午前中とは比べものにならないくらいの数だった。

が、その大衆の期待感とは裏腹に、

「ゲームセツツ！ ウォンバイ、終っ！ 6ゲームトウ0」

大勢のギャラリーには申し訳ないのだが、あっけないほど短時間で試合は終わった。朝倉が見ている：そう思うと自然と体が軽かった。自分でも相手に付入る隙を与えないといえる完勝だった。

もっとと接戦になった方が見ている者には良かったのかもしれないが、手加減すると相手に持っていかれる試合だった。

これで次の準決勝の対戦相手は伴城武士だ！：トモが無事に四回戦を勝てばの話だが…。

#五二 体育祭・女子決勝

俺とトモの試合の前に、五面ある男子テニス部のコートの四面の真ん中にある中央コートで女子の決勝が行なわれる事になっている。その間全てのテニスの試合は行なわれないので観客となっている生徒の注目は女子の決勝一点に注がれる！

俺は人込みの中から朝倉を見付け出し、一緒に見ることにした。決勝進出者の二人がコートに姿を現わすと男子の歓声が上がった！女子のテニスだから…。

「あの子でしょ？この前あなたに告白したって子」

決勝進出者の一人、広瀬由比を見て朝倉が言った。

「あ、ああ…」

朝倉に改めて訊かれると何となく気まずさを感じた。そして試合が始まる。

広瀬の相手はこの夏まで女子テニス部の主将だった三年の板坂李帆^ほ。戦前から女子テニス部を知っている者なら誰もが予想したとおりの決勝戦となった。二年で全国大会優勝の広瀬対その広瀬を指導してきた板坂。実績なら広瀬だが勝負の行方は判らなかった。

だが、決勝戦は現役全国ナンバー1の広瀬のワンマンショーとなった！板坂のレベルも決して低くはないが広瀬の格が違いすぎた。結果は6－0。しかも広瀬は板坂に1ポイントも与えないパーフェクトゲームでの勝利だった。

「すごい…」

俺の横で朝倉がつぶやいた。テニスをしていない朝倉でさえ広瀬の凄さが判ったようだ。

「すごいよ…広瀬に勝てる同年代はいないよ」

「あなた…でも？」

朝倉の質問に少し考えたが。

「男子と女子じゃ試合にならないよ」

俺はそう答えたが、現役の頃ならまだしも今の俺では勝てないかも…と思った。

「そういうもののね…」

女子の決勝戦が終わった直後のコートでは早くも男子の準決勝の準備が整いつつあった。

「じゃあ俺、そろそろ行くから」

「うん、応援してるね」

「ああ」

笑顔で送ってくれる朝倉と別れ、再びコートに戻った。

#五三 体育祭・宣戦布告!

「これより男子テニス準決勝第二試合、三年G組伴城武士対同じく三年G組終了希の試合を始めます!」

審判をしているテニス部顧問の村越先生が高らかに試合開始を告げると周囲からは大歓声が上がった!この後の組み合わせを考えるとこれが事実上の決勝といえる一戦。

コート中央、ネットを挟んで立っていた俺とトモがその場を離れる。

「手加減なしだぜ」

去り際にトモが言った。

その言葉に俺は深く頷いた。俺も手加減なんかまったくする気はないし手加減してもらいたくもない!先刻の広瀬の試合に負けない試合をしようと決めたからだ。

「1セットマッチ、サーブ伴城!」

トモが天高くボールを放り上げ、鋭いサーブを俺のコートに送り込んだ。

だが俺はトモのサーブ球が自分のコートに達する前にボールの落下点をつかみその場所でリターンの体制に入る。トモのサーブを返し、トモを見る。

(ロブか…)

本音はリターンエースを狙っていたのだが、そんなに巧くはいかない。

予想通りのロブが来る、2ターン目でいきなりのロブ。これで体勢を崩させようという魂胆だろうが、そんな手では俺は崩れない!ボールの落下点より一歩下がった位置でタイミングを見計らい、渾身のスマッシュを放った!

トモも俺の動きを察知し、そのスマッシュに対応しようとしたが、ボールはトモの脇をすり抜け後方へと飛んでいった。

周囲の歓声が静まる。

その後もトモの攻撃を総て跳ね返し、

「ゲームセット！ ウォンバイツ 終っ6ゲームトウ0！」

審判が試合終了を告げるとコートの周りの観衆が大歓声を上げてくれる。

その歓声の中、コート中央でガッチリ握手を交わす俺とトモ。

「くそーっやっぱり強えーよお前さんは。すげー動体視力だよどこへ打っても全部返されるんだもんなー」

トモが頭を掻きながら言う。

「わりいーな、今年も勝って」

「まったくだ、ここまで来たんだから今年も優勝しろよ」

「ああ」

そう言って俺とトモはコートを後にした。

「おめでとっ」

俺は朝倉と待ち合わせていた場所で彼女と落ち合った。

「ありがとう」

俺は彼女から手渡されたタオルを受け取った。

「その人がセンパイの彼女ですか？」

俺と朝倉の横から声がした。振り向くとそこには広瀬が立っていた！

「はじめまして、私テニス部二年の広瀬由比つていいいます」

広瀬はおもむろに朝倉に自己紹介をした。朝倉も動じずに、

「はじめまして、話は聞いてるわ。朝倉麻梨子よ。よろしくね」

自己紹介を返した。

「そうですか…」

朝倉の返答を受け、少し沈んだトーンになった広瀬。

広瀬にとっては自己紹介が先制パンチになると思っていたのだから？ それに微塵も動揺せず朝倉が返した事で広瀬の空気が明らかに変わった…。

（二人の間に嫌な空気が…）

俺は朝倉と広瀬の間に不穏な空気が流れ込んでくるのを感じた。
「センパイ、アベック優勝まであと一つですよ！頑張ってくださいね。それでは失礼します」

すると広瀬は朝倉の方から俺の方に向き返り、言い放って去って行った…。

「……………」

「近くで見るとカワイイ子ね…」

何を言っただいのか迷っているうちに朝倉が半笑で言った。表情とは裏腹に言い方に少しトゲを感じた。

「あのさ…気にしない方がよいよ…」

「分かってますっ」

（ああ…怒ってる…）

広瀬の先制パンチは少なからず朝倉にダメージを与えたようだ…。
この二人を今後二度と会わずまいと心に強く誓った。

……………

「それではこれより表彰式に移ります。まず女子の部、優勝2年C組広瀬由比。二年連続の優勝です！」

テニスの表彰式が始まり、女子の部の優勝者広瀬が表彰台に昇がった。見物人からやんやの喝采を浴びる広瀬。それに堂々と応えている。さすがに場馴れしている。

「続きまして、男子の部優勝3年G組終了希！新記録の三年連続のチャンピオンです！」

広瀬に続き自分が呼ばれ、表彰台に昇がった。

決勝の相手は準決勝の相手だった伴城よりかなり格下の相手だったので、楽勝といえる結果だった。

女子優勝の広瀬の横に立たされ、並んで表彰を受ける。その際、広瀬は俺の方を見てにこっと合図した。

「いいぞー！」「柊っ！」

群衆の中から豊とトモの声がした。まったくアイツら。

「終クーン、カッコイイ」

今度は聴いたことのない女子の声がした！

「静粛に！」

ざわめき出した観衆を一括する声がこだました！

優勝の表彰状と金メダル、トロフィーを受け取、俺は両手を高らかに挙げた。

瞬間、表彰式を見ている見物人から歓声が上がった！

久しぶりの感覚。心地良い歓声に包まれて体育祭の一日目が幕を閉じた。

#五四 体育祭・二日目

「七八ポイントよ、皆！」

前日の秋晴れを丸写しした様な晴天の下、担任である城美純子先生が激を飛ばした！

七八ポイント・・・これは前日の個人競技の結果我がクラスが得たポイントの合計である。

各競技一位に一〇ポイント、二位に五ポイント、三位には三ポイントが加算される。

ウチのクラスが獲得した七八ポイントの主な内訳は、俺の男子テニス、月島の一〇〇メートル走、この二つの競技の優勝で二〇ポイント。伴城がテニスで三位の三ポイントを得ていたり、炭酸飲料一気飲みでポイントを稼いだ者もいる。

現在ウチのクラスは総合で三位に着けている。

今日はこのポイントを元にクラス対抗戦が行なわれる。

俺は午前中の走り幅跳びとメインのクラス対抗の混合リレーに出場する。

「おーい、柊」

呼んだのは豊と月島だ。

「柊君、麻梨子が出る一〇〇メートルが始まるよ」

月島がわざわざ教えてくれた。幅跳びが始まるまでの時間を持て余していたのでちょうど良い。でも、朝倉には「見るな」と言われていたのだが…。

朝倉は決して運動が苦手ではないと思う。むしろクラスの女子の中では上位と言っているはずだ。

月島が女子の二〇〇メートルに出場するので、朝倉が一〇〇メートルに出場する事になった。

「お、来たぞ！」

豊が出場者の中から朝倉を見付けた。

「なあ柊、朝倉の短パン姿最高だなあ」

「何言ってるのよ！バカッ！！」

横に居た月島がいち早く反応して、豊を叩いた！

そういえばあの姿の朝倉は初めて見た…。

『パーンッ』

乾いたスタート音が響き、一斉に走り出す！

「！」

朝倉の美麗なフォームに思わず目を奪われた。

オリンピック等で見るそれは「速さ」に驚きはするものの、そのフォームまで注目する事はなかった。だが、今の朝倉のレースは朝倉のフォームしか目に入っていなかった…。まるで朝倉だけがスロ―モーションの様に。

「あーっ惜しい」

月島の声でレースが終わった事に気付いた！

「二着かぁ、惜しかったけど予選は通過だな」

「そうね、良かったわ」

豊と月島の会話で朝倉の着順が把握できた。

『お知らせします。男子走り幅跳び予選に出場の生徒は、第二グラウンドの砂場に集合してください。繰り返しです』

突然校内放送で走り幅跳びの予選開始が告げられた。

「あっ！俺、行かないと」

「え！？麻梨子に会わないの？」

「もう時間が…わるいけどよろしく言っというてよ」

「OK、後で行くように言っとくわ」

そう言って月島たちと別れ、第二グラウンドへ向かった。

走り幅跳びは得意ではないが、苦手な種目でもないので予選くらいは突破できるだろうとフンでいる種目。

#五五 体育祭・思い出

数十分後、納得の出来るジャンプで無事走り幅跳びの予選を突破できた。

「おめでとう」

それをいつのまにか見ていた朝倉と豊が言った。

「あれ、月島は？」

「ああ、自分の種目で走りに行ったぜ」

「そっか、まあ、月島なら楽勝だろ」

「まあな。あっそろそろ俺の出番だ！じゃ、行って来る」

そう言っただけで豊は俺と朝倉を置いてそそくさと行ってしまった…。

「…そういえば、アイツ何に出るんだ？」

「そういえば佐久野君って何に出るんだっけ…？」

「あ、そうだ、朝倉予選突破おめでとう」

「ありがとう…ってどうして知ってるの？」

「え？」

墓穴を掘ってしまったか！？朝倉には見るなと言われていたのに！豊たちは俺と一緒に見ていたことを言っただけだったんだ。

「いや、自分の競技に行く前に…豊から聞いたんだよ…。でも大変だな、昼前に準決勝があるんだろ？」

「うん…。でも平気よ。あなたも決勝頑張っただけ」

俺の咄嗟の言い訳に訝しげな表情を浮かべたが、朝倉もそれ以上は言及しなかった。

「おう。ちょっとそこの日陰にでも行くか？」

まだまだ強い夏の残り日を感じ、彼女に提案した。

「うん…でも、もっと人の居ないところで話したいの…」

「じゃあ…」

俺と朝倉は部室棟の裏へ移動した。

「へえ…こんなところ、来るの初めてよ」

「放課後はチラホラ人が来るけどね。日中はほとんど来ないよ。そっか、朝倉は部活やってないからこんなとこ来ないか」

「でも一年の時は手芸部だったのよ。って運動系じゃないからこの部室棟は来たこと無いけど」

「あ！」

「なに！？」

朝倉の言葉で俺は昔の事を思い出した。

「朝倉って中学の時も手芸部だったよな？」

「そうよ、もしかして忘れてたの？」

「いや…」

正直忘れていた…。そう、朝倉は中学の時手芸部に所属していて、その時の俺は彼女と接する機会があったのだ。

「そうよね…。あの時の私も今の自分を想像してなかったもの…」

俺が忘れていたという事もあるのだろうが、それとは違う別の何かが彼女の気分を沈めていた。

「ど、どういふこと？」

俺は彼女の沈んだトーンを和らげてあげようと質問した。

「ううん…思えばあの時がはじまりだったのよ…」

「へ？」

朝倉は自身で答えを導いたかのように、沈んでいた表情がぱあっと明るくなった。

「ごめんなさい。今は私だけの思い出にしたいの」

「は？」

朝倉の言葉にますます解からなくなった。

「いつか絶対話すから、今は、ごめんなさい」

「え、うん…」

目を思いつきり瞑り、顔の前で手を合わせていわゆる“お願い”のポーズをしながら言った。彼女が何を導いたのか気になったが、その朝倉のポーズがあまりに可愛かったので何故か納得してしまった。

『あの時の私も今の自分を想像してなかったもの』『思えばあの時
がはじまりだったのよ』朝倉が独り言を呟く様に言ったこの二つの
言葉が何かを意味しているのだろうか…。

「でもどうして手芸部を辞めたんだ？」

いつまでも気にしていてもしかたがないので、話題を戻した。

「本当は続けたかったんだけど、元から海外出張が多かったお父さ
んに続いて、お母さんも海外に行くようになっちゃって、同時にお姉
ちゃんもお嫁さんにいっちゃったから夕食とか家の事で手一杯にな
って…。でも、舞衣には部活を勧めたの」

「で、演技部に？」

「みたいね、あの子昔からそういうのが好きだったから」

朝倉の言葉を聞いて、俺は舞衣の事を何も知らないという現実に
改めて気付かされた…。舞衣だけじゃない、朝倉の事も何も知らな
い…。

『女子100メートル準決勝に出場の生徒は、第一グラウンドに』
少しの会話を楽しんでいると放送が入った。

「じゃあ…行くね」

「ああ、頑張って」

「あ、恥かしいから見に来なくていいよっ」

念を押すように強い口調で言った。多分、先刻の予選を見ていた
事を薄々感づいているのだろう。

「…分かった」

と言いつつ、俺はこっそり朝倉のレースを見る事にした。

#五六 体育祭・昼食

「あれ？今までどこに居たんだ？」

第一グラウンドに行くと、豊が居た。

「ん、日陰」

っていうか、俺はお前が何の競技に出て、どんな成績で、何でここに居るのかを訊きたい。

「ちょうど良い時に来たな、次の組が朝倉だぞ」

そんな俺の心のツツコミは豊には伝わっていない…。

「次って、今始まったばかりだろ？」

「麻梨子は準決勝の二組目なんだって」

いつの間にか、俺の横に月島が立っていた！

「あ、月島。どうだった？」

俺は月島が出ていた200メートルの結果を聞いた。

「それは愚問よ」

言って、月島はVサインを作った。まあ校内で月島より足が速いやつは居ないか。

「わるいな、応援できなくて」

「気にしないで、でも準決勝はお昼の後直ぐだから、その時に応援して」

「あ…俺も幅跳びの決勝が昼終わったら直ぐなんだ…」

「あら、残念ね」

「心配するな月島、俺がちゃんと応戦してやるから」

「あんたに応援されてもねえ」

豊の言葉に冗談っぽく言う月島。

「そんな言い方するなよ。それでも俺はお前のカレシだろ？」

「ツ……」

最後の豊の一言に月島は急に赤くなって俯いた。何だかんだでこの二人大丈夫だな。俺はそう思った。

「お、始まるぞ」

そうこうしている内に二組目の走者がスタート位置で準備を始めた。

「柊、もっと前に行こうぜ！」

「あ！おい！」

豊は無理矢理俺を牽いて最前列へと進み出した！

朝倉には見るなど言われていたので目立たない後ろの方で見ているようにしていたのだが。しかもこともあろうに豊は！

「おーい」

スタート位置に居る朝倉に向かって大きく手を振って呼びかけた！スタート位置に居た八人の女子が一斉に豊を見る！当然朝倉もこっちを見た。瞬間、彼女と目が合う、朝倉は「アッ！」という表情を浮かべた！

・ ・ ・ ・ ・

「もう！見なくていいって言ったのに！」

「ごめん……」

朝倉が昼食の準備をしながら言った。俺は素直に謝った。

「ははは」

その光景を見ていた豊が笑う。お前の所為だ！！そもそもなんで俺が謝らないといけないんだよ！

「もしかして、俺が見ていた所為か？」

俺は心配になって朝倉のに訊ねた。

「ううん」

彼女は明るく否定した。

「どうして柊君に見られたくないのよ？」

月島が朝倉に訊いた。昼食は月島、豊と一緒に摂ることにした。

「だって、足速くないし……」

「そんな事ないじゃん。それにすげー、綺麗なフォームだったし」

すこししょぼんとしたトーンで言った。そんな朝倉に俺は即と言った。

「そうよ、麻梨子のフォームはその辺の陸上部員より綺麗よ」

月島もそう言った。

「そう…?」

「現にさっきの準決勝も僅差の三着だったんだし」

準決勝は全部で三レース行なわれ、各レース上位二人が無条件で決勝に進出出来る。そして全体の三着以下のタイム上位二人も決勝に進めたのだが。準決勝第二レースで三着だった朝倉は惜しくもタイムでも及ばず準決勝で敗退となってしまった。

「でも、柊君に応援してもらえて正直嬉しかったんでしょ?」

「…うん」

月島の質問にもじもししながら答えた朝倉が可愛くて何だか俺まで恥かしくなった。

「ヒューヒュー」

豊がそんな俺にむかってチャチャを入れた。

「うるせー」

「さ、早くお昼にしましょ。それにしてもここ良い場所ね」

俺と豊のやり取りに月島が平然と弁当を開きながら言った。

「お、月島も知らなかったのか?ここ」

「うん」

俺たちは先刻朝倉と時間をつぶした部室棟の裏に来ている。ここなら昼食時でも人が少ないだろうと思いき選んだのだが、まったく人が居なかった。日向と日陰がちやうど良い具合に折り合っていて心地良い、ゆっくり過すにはもってこいの場所だ。

「あれ?柊君、お弁当は?」

パンを食っていた俺に朝倉が言った。

「ああ、今日ウチに誰も居なかったから、学校の途中でパン買って来た」

「それなら言ってくれば柊君の分も作ったのに」

「え！朝倉の手料理！？」

何故か豊がそれに反応した。

「朝倉の手作り弁当：さぞかし巧いんだろうなあ：キャンプの時のカレーも巧かったもんなあ：月島なんか一度も料理してくれた事ないんだぜ」

「悪かったわね！料理出来なくて！」

いつのまにか、豊と月島の夫婦漫才に摩り替わってしまった。

「そうだ麻梨子！今度料理教えてよ」

「いいわよ」

「やめとけて、朝倉に迷惑かけるだけだって」

「うるさいわね！」

月島の鉄拳が豊に炸裂した！

「ぶっ」

そんなこんなで午前中の競技が終わった。

午後からは各競技の決勝とクラス全員で参加する競技がメイン。そして花形競技の混合リレーがある。ここからポイントが大きく変動するので体育祭は俄然盛り上がる！

#五七 体育祭・エキサイト

『男子走り幅跳び決勝に出場する生徒は』

一時の休息を楽しんでいると午後の始まりが告げられた。俺が出る走り幅跳びの時間になった！

「あ！もうそんな時間か…」

ゴミ袋と化したコンビニの袋を持って俺は立ち上がった。

「頑張ってね」

朝倉が握りこぶしと共に言った。

「おう！」

俺もそれに握りこぶしで応えた。

「オレたちも後で応援に行くから」

「ああ」

・
・
・
・

午後いきなりの競技だった走り幅跳び。俺は陸上部の二人に次ぐ、三位という自分でもびつくりの結果で無事ポイントを獲得する事が出来た。

続いて月島が前日の個人種目の女子一〇〇mに続いて、二〇〇mも圧倒的速さで優勝。見事に二冠達成！

俺が意外だと思ったのが、トモがさりげなく決勝に進出していた男子一〇〇mハードルで並みいる陸上部のやつらを抑えて見事三位に入った！内訳は決勝に残っていた二人の陸上部員が相次いで転倒したからだ。

午後の競技が始まると同時に立て続けに個人戦の決勝が行なわれ、続いて体育祭二日目は本当のクラス対抗競技に移っていった。

クラス対抗競技は文字通り、クラス全員が同じ種目に出場する競技。

玉入れ、綱引き、大玉転がし、騎馬戦といった小学校の運動会みたいな競技がそれだ。

「つーか、毎年思うんだけど、玉入れって馬鹿らしいよな」

玉入れが始まる前に入場ゲート前で並んでいると、豊がボソツと言った。

「でもよお、いざ始まると結構熱くなるもんな」
それに亜津が答えた。

「俺の真の実力が発揮されるのは騎馬戦だ！」

トモが言った。

まあ玉入れなんか普段やらない事だから、やる前はさすがに恥かしいが、いざ始まると結構楽しい……。この二年間の経験でそう思った。

そうこうしていると入場が始まった。

グラウンドには全クラス分のカゴが所狭しと並べられている。これだけの数なんだから、外から見れば結構壮大な光景になるだろう。しかし残念ながら全校生徒が競技に参加しているため、外から見ているのは数人の教師だけだ。

自分たちの陣地に散らばっているお手玉みたいな玉を二つずつそれぞれ手に持つと、開始の笛が鳴り響いた！刹那、無数の玉が空中を行き交い始めた！俺も最初は上空に設置されたカゴに向けて投げていたのだが、

「イテッ！」

背後から玉をぶつけられた！その方向を見ると案の定豊が腹立たしい無邪気な笑顔でさらに俺に照準を定めていた。

（あの馬鹿！）

俺は持っていた玉を豊が投げる前に顔面にヒットさせた！それでも怯みながらも豊は俺に投げ返してきた！しかし顔面に玉をくらい狙いを定められなかった豊の玉はあさつての方向へ飛んでいった。

俺と豊のやりとりを見ていたのか？トモと亜津が一斉に豊に集中砲火を浴びせた！その間に俺は競技に復帰した。

『ピッピ——ッ!!』

終了の笛が鳴り響き、空中に飛び交っていた玉がまばらに止み始めた。

（お！結構入ってんじゃない！）

俺は自分のクラスのカゴを見て驚いた。あの馬鹿（豊）が余計な事をしていなければもっと入っていただろう。その馬鹿はトモと亜津にやられて既にヘトヘト状態だった。

計数の結果、我がクラスは三位で三ポイントを獲得した！あの馬鹿がちゃんとやっていたれば優勝できていたかもしれない。当然、あいつは皆の批難の的になったが。

続く騎馬戦では良いところなかったが、綱引きでは玉入れで批難轟々を受けた豊が奮起し、なんと三位。ポイントを獲れないだろうと半ば諦めていた種目での三ポイントは大きかった。

個人が出場している競技で高得点を叩き出し、さらに玉入れや綱引きのようなクラス全員が参加する競技でもコンスタントにポイントを稼いだ結果、最終種目男女混合リレーを前に我が三年G組は全体で五位という高ポジションに着けていた！

残るリレーで優勝できれば総合優勝の可能性もあるという状況だ！各クラス選抜された男女四人ずつの計八人が出場する。当然全クラスが足の速い者八人でメンバーを組んでくる。走る順番は各クラスが自由に決められて、我がクラスはエース月島がアンカーを務める。

その月島にバトンを渡すのが俺だ！

#五八 体育祭・最高の瞬間

『ただ今より、体育祭最後のプログラム、男女混合リレーを始めます。出場選手の入場です』

放送部が担当するアナウンスが第一グラウンドにこだますると、見ている生徒から大歓声が起こった。優勝の行方を左右する最後の種目だけにほとんどの生徒達が注目している。

一周二〇〇mのトラック。そこに正面と、むこう正面の二手に出場選手が分かれる。七番手走者の俺は正面で待機した。

全校生徒が見守る中、スタートを告げる号砲がグラウンドに響いた！俺の眼前でスタートを切ったファースト走者達！ウチのクラスの一番手走者はスタートは決まったものの、コーナー出口で一人にかわされ、3番手で二番手走者の伴城にバトンタッチした。

トモは絶好のタイミングでバトンを受けると猛チャージを見せ、一気に2番手をかわすとその勢いで先頭走者の女子に並び掛けた！正直、トモがこんなに足が速かったとは思わなかった。

数秒間のデッドヒートの末、ついに先頭に立ったトモ！

（いいぞ、トモ！）

近付いてくるトモに俺は心の中で賞賛の言葉を送った！そのままトモは先頭で三番手走者にバトンを繋いだ。

「お疲れっトモ！」

肩で息をするトモに俺は声を掛けた。

「ああ：やったぞ：ぜえぜえ」

そう言いながら渾身のガッツポーズを見せてくれたトモ。

そのトモの姿を確認して直ぐにレースに目を移した。しかし、そこには二人にかわされてしまい3番手で四番手にバトンを渡そうとする、三番手走者の女子の姿があった。

四番手走者は亜津！

実は、亜津は中学時代、陸上部で、短距離走者として県大会ベス

ト一六に入ったこともある隠れた俊足。

その亜津は一人をかわし、先頭とほぼ同時に五番手走者にバトンを渡した。

五番手走者は先頭に差を空けられたものの、3番手との差は広げて順位を保ったまま六番手走者の朝倉にバトンを託した。

朝倉がバトンを受け取る頃、俺はその反対側のコースに陣取った。懸命に先頭を追う朝倉！

朝倉が近付いてくるにつれ、今から自分が走るといふ緊張感とは違う別の緊張感を同時に感じていた。

（な、なんだ！この感覚は？）

俺は無意識に昨日朝倉から貰った、左手首に巻いているリストバンドを右手で掴んでいた。

いよいよ朝倉がバトンタッチの体勢になった！

僅か数十秒間の“待ち時間”が数分間の様に感じた。

「おねがいっ！」

俺の左手に朝倉からのバトンが手渡された！

「任せとけっ！」

（よし！あとは月島を目指して走るだけだっ）

順位は2番手！前を走る背中が徐々に近くなってくる！

「イケる！」

しかし、俺はコーナーで足を滑らせてしまった！

だが、コケるわけにはいかない！皆が繋いできたこの順位とバトン。懸命に片足を踏ん張り転倒を免れることが出来た！ロスにはなかったが、順位は変わっていない。

コーナーを抜け前との距離を少し詰め、アンカー月島にバトンを渡した！

「ごめん、頼む」

俺の声に月島は振り向き、

「大丈夫、まかせて！」

笑顔で言った。

その月島を観た瞬間、『月島ならやってくれる!』そう確信した! 先頭に行く、男子陸上部員にコーナーで並びかけると、コーナーの出口であっさり抜き去った。最後の僅かな直線はまさのにウイニングラン状態!

最高潮に達した大歓声の中、両手を高らかに上げてゴールのテープを切る月島! 一斉にざわめき出す我が三年G組!

月島は凄い! 凄すぎる! 全校生徒が注目する中で見事に主役の座に就いた。

・
・
・
・
・
・
・

『発表します! 総合優勝は・・・三年A組です!』

全ての競技が終わり、傾いた太陽がオレンジ色に輝き、熱戦が繰り広げられたグラウンドを染めている。

そのグラウンドでは体育祭の総合表彰式が行なわれている。優勝は三年A組だった。俺たちの三年G組はたった一ポイント差で総合準優勝だった。A組が最後のリレー二位でなければG組が優勝できていたのだが…。

最後の体育祭がこの結果…残念でたまらない結果だったが、皆は清々しい顔をしていた。やりきったという充実感が皆をそういう表情にしているのだと思った。

これだけの人数で、同じ目標に向かって共に力を併せる事なんかこの先もうないかもしれない。なんとも言えないこの感覚をこの三年G組の皆と体感できて本当に良かった。悔いのない終わり方だと俺は思った。

でも、本音を言うと優勝しなかった。

こうして、最後の体育祭が終わった。

#五九 文化祭にむけて

体育祭から明けて二日、今度は一ヵ月後に迫った文化祭の本格的な打ち合わせが始まった。

「えーっと、オレたち三年は模擬店をやるんですが、何がいいですか…?」

よそよそしい言い回しで二学期の学級委員・佐久野豊が言った。キャンプの打ち合わせの時、密かに豊を二学期の学級委員に推してやろうと考えていたら、現実のものになった。

「ネイルサロンやろうよお」

「たこ焼き屋でいいんじゃないの?」

「クレープだよー」

「射的!」

「金魚すくい」

皆思い思いに口走る。

(こんなんじゃない決まらねーな)

「喫茶店は?」

誰かが言った。

「え! いいじゃん、キツサテン」

「それでいこう、それで!」

何故か皆いきなり肯定的になった。

「じゃあ、喫茶店で良いですか?」

それを受けて豊が皆に問う。

「いいよ」

あっさりと決まってしまった。

「じゃあ、皆の役割ですが…」

もう一人の学級委員、月島由実が言った。

俺が豊を学級委員に推薦したら月島が自ら立候補し、豊と月島がめでたく二学期の学級委員になった。コイツらカップルでなにやっ

てるんだ…。まあ二人が付き合ってるのを知っているのはこのクラスでは俺と朝倉、細川だけだが。

「オレから一人推薦！」

豊がいきなり言い出した！

「ウェイターには是非、柊君が良いと思います！」

（ハッ！）

「えっ！！！！」

思わず叫んでしまった俺！

「そうね、柊なら先の体育祭で有名人だから集客力がありそうね。よし、柊やりなさい！」

ウチの担任、城美純子先生が協の教員席から口を挟んだ。

「マジっすか！？先生！」

「マジっすよ、柊っ」

純子先生は笑顔で頷いた。

最後の文化祭をゆっくり楽しむつもりだったのに豊めく！何を言っても覆らないだろうからもう諦めた…。

幸い一日目の午前中だけという事になったので二日目はゆっくり出来そうだ。

・
・
・
・
・
・

「私は嬉しいわ…あなたと一緒に…」

暮れかけた公園のベンチで朝倉が言った。

「そうだな、一緒に乗り切ろうか」

「うん」

朝倉も俺と同じく、一日目の午前中にウエイトレスをやることになった。それが唯一の救いでもあり、幸せなことだ。

高校最後の文化祭。なにが起こるんだろうか・・・。

俺は何故テニス部の顧問村越が自分を呼び出したのか解らないまま、残りの弁当を食べた。もっとゆっくり朝倉の作ってくれた昼食を食したかった。

・――・――・――・――・――・――・

つというわけで、今職員室の前に居る…。

『トントントン』

職員室の扉をノックした。

「失礼します…」

扉を開け、職員室の中に入った。

「おー、柊、こっちだこっち」

村越先生が立ち上がり、手を振る。

「体育祭おめでとう」

「あ、ありがとうございます…」

「今日はそんな事で呼んだんじゃないんだ…」

そう言って、散らかった机の上から一つの封筒を取り出した。

「単刀直入で言うぞ。これを見てくれ」

その封筒を手渡された。俺はその封筒の中から一冊のパンフレットを取り出した。

「どうだ？」

「へ？」

パンフレットを見る前に問われ、俺はパンフに目を移した。

「アジア学生交流戦…？」

パンフの表紙に一番大きく書かれていた文字をおもむろに読み上げた。

「そうだ、今年から始まった企画でな、お前にもオファーが来たんだ。日本代表だぞ！」

「えー！」

言われた事の意味を悟り、驚いた！

「今年の総体の個人優勝、誰か知ってるか？」

「いえ…」

「去年、準決勝でお前と闘った九州の椎名、覚えてるか？」

「えー、まあ…」

去年の総体で一番の強敵だった。

「その椎名が今年の優勝者なんだ」

（やっぱりそうか。あの椎名なら納得できる）

「本来なら今年の優勝者が代表になるんだそうだが、去年お前に負けた椎名が今年の優勝者って事だから、去年の優勝者のお前にもオファーが来たんだ。俺はお前にもチャンスがあって然りだと思うぞ」

「そうですか…」

「なんだ？もっと喜べよ。それだけ評価されてるって事だぞ」

「はあ…少し考えさせてもらって良いですか？」

「ああ、まだ締め切りまで三日あるからな、じっくり考えろ。我が校から二人の代表者が出るチャンスだからな」

二人…、もう一人は今年の総体優勝した広瀬だろう…。

俺は受け取ったパンフレットを持って職員室を後にした。

（香港か…）

パンフレットの中を確認しながら教室へ帰った。

去年テニス部を退部したがテニス自体を嫌いになった訳ではない。アジアの交流戦とはいえ、日本代表に選ばれたという事は素直に嬉しい。先生にこの話をされた瞬間に即OKしたかったが、一年間のブランクがそれを許さなかった。

（今の俺が通用するのか？）

それが足枷になっていた。

#六一 今の状態

「あっ？椎名？」

下校中、一緒に帰っているトモに昼休みの事を話した。

「俺も実際に見たわけじゃないからな…」

「そうか：俺は椎名に勝てるかな？」

「どうだろう：ブランクが無けりゃ余裕だろうと思うけどな。現に去年勝ってるんだし」

「やっぱりブランクか…」

「でも体育祭の時のチカラなら、去年くらいのチカラは出てるだろう？」

「そうかな…」

「何だ、自分ではあれでも不満か？」

「んー：まだ体が動き切れてないっていうか…」

「あれだけ動けてまだ上を望むかぁ。ま、それなら特訓あるのみだな！幸いウチには今年の日本一が居るんだからよっ、なにかしらの参考にはなるんじゃないか」

トモが誰の事を言っているのか即に分かった。広瀬のことだろう。

「そうだ、明日今年の大会が載ってる月テニ持って来てやるよ」

「ああ、サンキュー」

「なあ、ずっと気になってんだけど…」

急にトモが話題を変えた。

「ん、なんだ？」

「いや、何で朝倉がいるんだ？」

俺と一緒に帰っている朝倉を見て、トモは不思議そうに言った。

「何でって…」

（そういえばトモにはまだ俺たちが付き合ってるって言ってなかったんだ！だからさっきから朝倉は少し距離を置いてたのか）

いつの間にかそういう感覚が無くなっていた事に気が付いた。

「あ、トモは知らなかったんだな…」

俺はワザと気が付いていないフリをして言った。

「俺たち、付き合ってるんだよ…」

俺はトモに告げた。改めて宣言するとやっぱり照れる…。

「やっぱりな、キャンプの時から何となくそうじゃないかと思ったよ」

トモは笑いながら言った。

「じゃあ、二人の邪魔をしちゃ悪いから、俺、消えるよ」

「あっ！おいつトモ！」

「分かってるって、誰にも言わねーよ。あと、ちゃんと本も持ってくるからよ。じゃあ、朝倉」

言いながら伴城は去って行った。

「ごめんなさい…私の所為で…」

「いや、気にすんなって、俺が途中でトモを呼んだんだから」

「でも…」

「いいって。そうだ何か食おうぜ」

落ち込む朝倉を元気付けようと近くのハンバーガー店に入った。

#六二 気になる・・・

「何でも好きなもの言って、って、ファストフードだけど」

「えッ悪いわ…」

「いいから、いいから」

朝倉は遠慮するが、ここは俺強が引に押し切った。

「じゃあ…ありがとう」

「うんうん」

注文した品を持って、二階のテーブルフロアへ上がった。

「うわっ」

近くに三つの学校があるため、夕刻はいつも込み合っている。

「ほらっあそこ空いてるっ」

朝倉が指差した。

その席に着き、二人でハンバーガーを食べ始めた。

「あんまりカップルっていないのね…」

朝倉が周囲を見回して言った。

「そうだな…」

言われてみれば、周りは男同士のグループや女同士のグループが目立つ。俺から見える所には男女で居る者はいなかった。

「なんか、浮いてない？」

朝倉が周囲をキョロキョロしながら言った。

「大丈夫だよ、案外向うは俺たちを羨んだりするんだって」

「それはそれでやだな…」

「そうだ、これ見てよ」

言って俺は昼に貰った例のパンフレットを取り出し、朝倉に見せた。

「アジアテニス交流…？」

「先刻、トモと話してたの」

「ああ…」

パラパラとパンフを捲る朝倉。

「香港？」

「そう、場所は香港なんだって」

「これに出るの？」

「いや、正直迷ってるんだ…」

「どうして？」

「去年の今頃なら喜んで出てただろうけど、現役を退いて、もう一年経つし…」

「でも、こうして誘われてるんだからやってみれば」

そう言う朝倉の表情にはどこか期待感が感じられた。

「ん…」

『そんなの無理です！』

朝倉の言葉で揺るぎかけた瞬間、後ろの席から女性の声がこだました！突然騒がしくなった後ろの席を確認しようと後ろを振り返ったが、壁があり見る事が出来なかった。

「…こういうのって、気にならないか？」

俺は小声で朝倉に聞いた。

「なるけど…あまりいい気はしないわ…」

「同感…」

と言われても、気になるものは気になる…。

#六三 聞き耳

『でも、どうしても必要なんだよ』

先のは女性の声だったが、今度は男の声がした。

『それは分かりますが、私はやりません!』

最初の声よりずいぶんトーンダウンしたため、俺には聴こえるが朝倉には聴こえていない様だ。それとも朝倉は聴こえているがあと聴こえていないフリをしているのか?

『そこを何とか、頼むよ、ね』

後部席のやりとりはまだ続いている。

(なんだ? カップルの別れ話か? 女の方の声にはなんだか聴き覚えがあるんだが...)

『ね、頼むよ、君しかいないんだよ』

『いくら部長の頼みでも無理なものは無理です!』

(部長? って、OLと部長: 不倫か? こんな所で...) などとしょーもない考えを巡らせていると、

『お願いだ! あさくらっ』

『ブーッ!』

『キャッ!』

後ろの席の男の言葉に俺は思わず口に含んでいたコーラを吹き出してしまった!

『もう! 何よ急に!』

幸い吹き出したコーラは朝倉にはかかっていなかったが、やっぱり怒っている。

『ごめん、でも今の聴いた?』

『聴いてないけど、どうしたのよ?』

『いや、今、後ろからあさくらって聞こえたからさ...』
「え!」

朝倉も驚いた表情で聞き耳を立てた。

『とにかく、どんなに頼まれてもこれだけは私やりませんから。他の人に頼んでください。失礼します部長』

『待ってくれ、朝倉』

今度の『朝倉』という言葉は聴こえた様で、ハツとなる朝倉。その時、席を立った女性が俺たちの席の横を通った。

「舞衣！」

向かい合うかたちになった朝倉が、その女性を見て言った！

「お姉ちゃん！先輩！」

聴き覚えがあつた声はやっぱり朝倉舞衣だった。

（部長ってことは！）

俺は立ち上がって後ろの席を確認した。

「柄沢！」

俺の言葉にうなだれていた柄沢が顔を上げ、

「柊さん！」

言った。

その光景を見ていた舞衣が。

「部長、柊先輩を知ってるんですか？」

「ええ……」

柄沢が答えた。

知ってるも何も柄沢と俺は二年の時、つまり、昨年クラスメイトだった。

舞衣の所属する演技部は、昨年この柄沢が一人で立ち上げた部なのだ！

「……って訳」

俺は柄沢との関係を手短に朝倉と舞衣に話した。

「そうだったんですか……部長が一人で作った……」

舞衣が驚きの表情で言う。柄沢は少し照れている様に見えた。

「で、何もめてたんだ？」

「それは……」

柄沢たちが居た席で事の顛末を聞いた。

#六四 解決

・ ・ ・ ・ ・
「そりゃ断られるだろ、柄沢」

事の顛末を聞き終わった俺は柄沢に言った。

「だけど…この話にはどうしてもキスシーンが…」

要するに、柄沢が部長を務める演技部は文化祭で自主映画を上映するらしい。その映画を今撮影中で、そのヒロインが舞衣なんだとか。その映画の中で舞衣のキスシーンがあるという…。その事で言い争っていたらしい。

「どうしてもって、そんならべつに本当にしなくても良いんじゃないか？」

「え！」

俺の次の発言を心待ちにしている柄沢。普通のやつならすぐに気付きそうなことだが、この柄沢というやつは…。

「本当にしなくても、してる様に見せれば良いんじゃないのか？お前ならそうやって撮れるだろ？」

俺の出した提案に柄沢は、

「そっか！そうやればいいんだ！ありがとう柊さん！」

「ったく、すぐに気付くだろ…普通」

柄沢以外は皆呆れ顔だ…。

「朝倉君！それでもダメか？」

柄沢が再度舞衣と交渉する。舞衣は一瞬俺を観た後。

「…分かりました…それなら、良いです…」

舞衣がOKした。

「やった！ありがとう、朝倉君、柊さん。また助けてもらって」

「ああ、気にするな」

・ ・ ・ ・ ・

「何か大変だったな」

ハンバーガー店を出て、朝倉、舞衣と三人で帰路に着いている。

「ええ、でも先輩のおかげで助かりました。部長あいう、ちよつと抜けた人ですけど、脚本は本当に良い物なので出れて本当に嬉しいんです」

「アイツの作る物語は良いからな。なんてったって、演技愛好会を部として確立させたんだから」

「そんなに良いの？」

朝倉が、俺と舞衣の会話に割って入る様に言った。

「あつ、朝倉は去年の文化祭のアイツの映画観なかった？」

「ええ…そんなのやってることすら知らなかったわ…」

「あー、やっぱりね。去年はまだ部じゃなくて愛好会扱いだったから視聴覚室が使えなくて科学室で公開してたからなあ…しかもギリラ的に。去年の内容はクイズ王の苦悩と挫折の話。俺もちよつとモギリを手伝ったんだぜ」

「あー、それ私観ましたよ。感動しました！」

「はあ？そんなので感動できるの？ってか、全然話が見えてこないし…」

朝倉が混乱する。

「実はアレに俺、エキストラで出てたんだぜ」

「えっ本当ですか！どこですか？」

舞衣が訊く。朝倉はまだ混乱している。

「クイズ王がデパートのエレベーターの中でカップ麺食べてるシーンがあったろ？」

「はい」

「あのシーンで、クイズ王の後ろで俺サッカーしてたんだ」

「ああ！あのシーンですか。今度また観てみます」

「何そのシーン…ますます話が見えなくなったわ…」

朝倉はさらに混乱してしまった様だ。

・
・
・
・
・
・
・
・

「…じゃあ、俺ここで」

少しゆっくり話しながら帰っていたが、俺と朝倉の家への分岐に差し掛かった。

「待って！…家へ来て…夕飯ご馳走するわ…」

自分の家へ帰ろうとする俺を朝倉が引き止めた！

#六五 朝倉の包容

『チック。タック、チック、タック』

一瞬の静寂がリビングを包み、時計の秒針の音だけが響いている。

「さあ、作るわよ」

制服から私服に着替えた朝倉がキッチンに立った。

「なあ、先刻食べたのに何作るんだ？」

俺の質問に朝倉は、

「え！お腹空いてないの？」

朝倉のこの言葉に俺は瞬時に失言した事を悟った。

「まあ…そっか、朝倉はサラダしか食べてないからなあ…ごめん、任せるよ」

弁明には到底ならないと思ったが、

「いいの？」

朝倉の言葉は俺の考えていたものより深刻にはなっていない様だった。

「ああ、ちゃんとご馳走になるよ」

「うん、任せて。おいしいもの作るから」

朝倉は『力こぶ』をつくるカッコウをして言った。

少しして、舞衣がまだリビングに入ってこない事を確認しつつ。

「なあ、作業をしながらでいいから、聞いてくれる？」

俺から話を切り出した。

「え？」

突然話し掛けられた朝倉が手を止めた。だが俺は構わず話を続けた。

「ずっと考えてたんだ…」

「何…を？」

「ま、舞衣に言わないといけないって…」

「そうね…あなたがしたいようにしてください…私はどうなっても」

いいの：元は私の勝手であなを悩ませてゐるから：」

朝倉は俯き、作業を再開しながら寂しそうに言った。

「朝倉っ俺は朝倉が好きなんだ！」

「！」

改めての俺の告白に再度俺の方に向き直り、驚きと嬉しさを滲ませる朝倉。

「でも、：舞衣と接する時も君と一緒に居る時の気持ちと同じなんだ：」

「じゃあ、舞衣のことも好きって事じゃ：？」

これ以上彼女にこんな事を言いたくなくなかった。でも、彼女には俺の気持ちを全て知っておいてほしいと思った。

「朝倉の気持ちを知っていて、こんな事を言ってる俺はどうしようもないバカで最低な男だっ」

俺は自分を詰る様に吐き捨てた。

しかし、

「あなたはそんな人じゃない！」

叫びに近い声で俺の言葉を否定した朝倉。

そしてそのまま彼女はキッチンを出て俺の居るダイニングへと歩み寄ると俺の前に立った。

「私に知られずに舞衣に告げれば何も問題はないはず：。でも、それを私が知った時たぶん私は傷つくはず：それは想像も出来ないものかもしれない：。でもそうなる前にあなたは先に言ってくれたわ私、それがとても嬉しいの：」

俺は何も言えず、ただ朝倉の言葉を聞いていた。今の彼女の言葉は絶対に無理してるはずだ。

「今日あなたが舞衣に真実を告げて、それがどんな結果になっても私のあなたに対する愛は変わらない。それだけは忘れないで：」

その言葉を聞いた瞬間、俺はその場に倒れこみそうになるのを必死で耐えた。

朝倉は俺の総てを包んでくれている：。酷い俺を許し愛をそそい

でくれている…。聖女。

「!ッ」

なんとも言えない感情に駆られ、夢中で彼女を抱きしめた!

「ごめん、俺にはこんな事する資格なんてないのに…」

朝倉のことを想うと自分でも理解できず、こうしてしまった…。

そのまま力が抜けその場に座り込み、彼女の腰に手を回したまま俺は涙を流していた…。

「柊君…」

朝倉が久々に俺の名を呼んで彼女もしゃがみ込み、両手で俺を包み込んでくれた。

何とも言えない暖かさ…心地良さ…至福に包まれている。

「苦しくないで…」

朝倉の優しさに涙が止まらなかった…。また彼女に救われた。

#六六 不意の質問

『ただいま』

しばらくして玄関から舞衣の声がした。

「買い物に行ってもらてたのよ：」

そう言って、朝倉はリビングを出て行った。

あれから20分程経っている。少しは落ち着いた二人。

『ガチャッ』

「ふ」

いつの間にか買い物に行っていたという舞衣がスーパーの袋を提げてリビングに入ってきた。

「ごくろうさま」

俺は冷静を装って、舞衣に声を掛けた。

「あ、せんぱい？」

舞衣が俺を見て言葉を詰まらせた。

「ん、どうかした？」

「あっいえ、何でもありません」

俺の質問に慌てて否定した。

「さー、これで本格的に取り掛かれるわ、舞衣っ手伝って」

言いながら朝倉もリビングに戻ってきた。

「ハーイ、先輩待っててくださいね」

そう言って二人でキッチンに入ってしまった。

カウンター越しに美人姉妹が並んで調理している…。この光景を見ている俺は今凄く幸運なのかもしれない。

・
・
・
・
・
・

1時間ほどするとテーブルの上にはパスタ、ピザにサラダなどイタリアンな料理が並んだ。

「いただきます」

先陣を切って舞衣が言った。

「…いただきます」

「いただきます」

朝倉に続き俺も言った。

「二人に聞きたい事があるんだけど…」

・
・
・
・
・
・
・

一通り食事に手をつけたところで、舞衣が言った。

「えっ!？」

「ん!？」

舞衣の問い掛けに朝倉と俺は瞬時に反応した。

舞衣はそんな二人を見ながら続けた。

「二人はどうやって付き合い始めたのですか？」

「!」

(いきなりなんという質問をしてくるんだ!)

思わず顔を見合わせてしまった俺と朝倉。

「・・・私が告白したのよ…」

朝倉が話し始めた。『言いたくはないが仕方なく。でもいつかは言わなくては…。』そんな口調に感じた。

「え!お姉ちゃんがコクったの!？」

「なによ!そんなに驚くこと?」

先とは一転、朝倉の口調は姉妹の会話のものになっていた。

「だって、お姉ちゃんが告白だよ。考えられない」

朝倉はそんなに内気なのだろうか?少なくとも俺の前ではそんな素振りは全く無いのに。

「それを先輩は受け入れたんですね?」

舞衣は俺へ質問を投げ掛けた。

「え!」

「でも：彼には、他に好きな人がいたのよ：」

答えにつまる俺を尻目に、朝倉が答えた！

「ウソ！　どういう事？　先輩はその人よりお姉ちゃんを選んだって事ですか？」

さらに舞衣は質問してくる。

困惑した俺は不意に朝倉を見た。目が合う：朝倉は軽く頷いた。

朝倉は俺にチャンスくれた！

舞衣に俺の本心を告げるチャンスを：。

朝倉は相当な覚悟を持ってこの話を始めたに違いない。その朝倉の覚悟に俺も向き合わなければならぬ。

俺も朝倉に返す様に軽く頷いた。

#六七 舞衣の真実

そして俺は舞衣を見ながら口を開いた。

「君だよ…」

自分の鼓動が二人にも聴こえるんじゃないか！というほど大きくなっている。それは舞衣への告白の緊張だけではなく。愚かな行為を許してくれている朝倉への何とも言い様のない気持ちへの罰ではないかと感じた。

「え…どういうことですか？」

思いもしなかったであろう突然の俺の告白に、舞衣は『何のことか良く解からない？』という表情をしている。

「朝倉に告白された時、俺が好きだったのは…舞衣、君なんだ…」

「ウソ…そんな…」

まるで『この世の終わり』という様な表情で驚く舞衣、そしてする様に舞衣は朝倉を見るが、

「本当よ、私が告白した時彼はあなただが好きだったのよ…」

追い打ちをかけるように朝倉は舞衣に言った。

朝倉にとっては出来れば来ないで欲しかった瞬間だったであろう…。

俺と朝倉から出された真実を必死に理解し、受け入れようとしているであろう舞衣。

「信じられない…先輩が…私の事を…」

だが次の瞬間舞衣の口から思いもしない言葉を俺は耳にした。それはこの前朝倉に示唆された事が本当なのではないか？そう思わせるに十分な言葉…。

この場に居る朝倉の胸中を思うと、俺は直ぐにでも嘘だったと否定してこの空気を乱したかった。しかしそんな事は出来ない。どんな結果になっても真実を受け止める。そう覚悟を決めた朝倉のためにも俺も覚悟しなければならぬ！それがどんな結果になっても俺

は受け入れると。

僅かな沈黙が三人を包んだ：そして俯いたまま、舞衣が話し始めた。

「実は私：三年前から先輩を知っていたんです。知っていたといってもお姉ちゃんの部屋にあった先輩の写真を見ただけなんですけど：。その時はこのひとがお姉ちゃんのカレシなんだと思っただけだった：」

淡々と話す舞衣の言葉を俺と朝倉は黙って聴いていた。

「でも、お姉ちゃんはまったく先輩を家に連れて来ないし、ずっといつもと同じだった：。もしかしてお姉ちゃんの片想いなんじゃないかって考えて：。昔からお姉ちゃんがモテてたのを知ってたから：そんなお姉ちゃんが好きになった先輩に興味が湧いてきて、クラブのテニス部のコに先輩の事を聞いたらそのコが先輩の事を知っていて、一度見に行った事があったんです」

一度話を止め、落ち着くために水を飲んだ舞衣。

「私、テニスって自分でやったことがなかったんですけど、テレビでは何度か見たことがあったんです。でも実際に本物を見たことがなくて、初めて見たのが先輩の試合でした。そこで見た先輩はカッコ良くて：先輩を見ているうちに、自分がドキドキしているのが分かったんです：後でこれは恋なんだと気づきました：」

赤裸々に、臆気もなく自らの気持ちを吐露した舞衣。朝倉の言った通りだった：。

「あの時の私にはどうして良いのか解からなくて：それにお姉ちゃんと同じひとを好きになったという罪悪感が私の中に満ちてきて：」

「バカね：誰が誰を好きになっても良いじゃない。それは仕方ない事なんだから」

黙って舞衣の話を聴いていた朝倉が口を開いた。

「お姉ちゃん：」

俺はまたも朝倉の聖女の一面を垣間見た！

「さあ、続きを聞かせて：」

朝倉が舞衣に言った。

#六八 自然な会話

「先輩に何も言えず、気付いてもらうなんて出来ないままお姉ちゃんと先輩は高校へ進学してしまつて先輩を見ることも出来なくなつて：でも去年、本屋で先輩が載つてゐる本を偶然見付けてすごく嬉しくなつて買つたりもしました：」

（それであの本が舞衣の部屋にあつたのか）

あの時の疑問が解消された。

「今年やつと自分も高校生になつて、一年間だけだけど先輩の近くに居れる事が嬉しかった：。そう思うとまた先輩の事が頭から離れなくなつて：。7月に先輩を偶然学校の玄関で見掛けた時は胸が張り裂けそうなくらいドキドキして気が付いたら：先輩の方へ向かつて行つてて：」

「あゝ！」

あの時の事を思い出して俺は思わず叫んだ！

「あの時かあの玄関で俺とぶつかった：」

「はい：あの時私はワザと先輩に：先輩に私の事を知つて欲しくて：」

「知つて欲しくてもなにもあの時にはもう、君の事：」

その続きを言おうとしたが朝倉の事が気になり言えなかった。しかし朝倉はそんな俺を尻目に会話を聴いている様だった。

「え？」

舞衣はその続きを望んでいた：。

「俺、舞衣の事を五月から知つていたんだ。初めて教室の窓から君を見た時から：：：好きになつていたんだ：」

意を決して俺の本心を舞衣に告げた。自分でも驚くほどあっさり言えた気がした。だがその時朝倉が見せた表情が激しい痛みとなつて俺の胸に突き刺さつた様に感じた。

その激痛を抱えたまま俺は話を続けた。

「あの玄関で会った時、俺は凄く後悔したんだ。どうして引き止めてでも君と話しなかったんだって」

「…私も…もっと先輩と話をしたかったんです…でも恥かしくて…逃げるようにして…」

「それも驚いたけども…と驚いたのはその後だよ、君が朝倉の妹だって分かったんだから…それまで名前も知らなかったんだから」

「私も驚きました。家に帰ると先輩が居て。お姉ちゃんが見事に片想いを実らせたんだって驚きました」

「ははは…」

いつの間にか自然な会話をしている俺と舞衣。
が、

「舞衣、ありがとう…話してくれて、ここから先は私が居ちゃダメね。部屋に行くわ」

言って朝倉が席を立った。

#六九 舞衣の決意

「朝倉！」

「お姉ちゃん！」

俺と舞衣が同時に叫んだ。

「大丈夫よ、こうなる事は予測してたから」

朝倉は笑顔でリビングを出て行った…。

（くそっ！）

俺の心はどうしようもないどうして良いのか解からない。ジレンマでいっぱいだった。こんな気持ちになるのは覚悟していたが、実際はただ力いっぱいの握りこぶしを作ることしか出来なかった！

それはこれ以上傷つけないと誓った朝倉を今これ以上ないというほどに傷つけてしまった自分への怒りだ。もっと何か誰も傷つかなかった良い方法はなかったのか？と今更になって模索している。

「私…」

朝倉がリビングから去った後の重苦しい静寂を舞衣が破った。

「この席に座った瞬間からこうなる事は覚悟していました…」

消え入りそうな声で舞衣は話し始めた。

「先輩の気持ちは解からなかったんですが、今日この席で先輩に私の気持ちを知ってもらおうと決めていました…。お姉ちゃんと先輩が一緒に居るこの席でと…」

「………」

徐々にトーンを上げて話す舞衣に俺は沈黙を守ることと聞いていた。

「最初、私の先輩への想いは憧れみたいなものでした。お姉ちゃんと先輩が付き合ってる事を知ってから、私の中では『先輩との距離が一気に縮まった』そう思えて嬉しかった…。自分の気持ちと距離が縮まっていけないのに、お姉ちゃんが先輩を家へ連れて来てくれる…そして先輩に会えるというだけで嬉しかったです。その時気付

きました。この気持ちは恋ではなく憧れだって。先輩は自分が応援しているアイドルみたいな存在なんだって。お姉ちゃんが先輩を家に連れて来てくれて私も一緒にその場に居る…それだけで満足でした」

もう何度こんな光景があっただろうか。俺はまたも何も出来ずにただ舞衣の話を聞いていただけだった…。

「でも…お姉ちゃんがうれしそうに話してくれる先輩の事を聞いているうちに私の先輩への想いが憧れから恋に変わっていくのが解かったんです…。それから先輩の事を考えると切なくて…お姉ちゃんに嫉妬している自分に気付きました。…そんな自分がとても嫌で嫌で…ズツ」

最後は涙を流していた…。

それを見た俺は舞衣もまた独りで苦しんでいたのだと悟った。

「舞衣…」

「聞いてください！」

舞衣に言葉を掛けようとした俺を拒絶して舞衣は話を続ける。

「今日、ハンバーガー屋さんで私の知らない先輩を知って私の気持ちを先輩に知ってもらおうと決めました。さっき言ってみたに…お姉ちゃんの気持ちを踏みにじる行為だって事は十分承知していました。だからせめてもの罪滅ぼしを…と思ってお姉ちゃんの前で…。でも、お姉ちゃんは途中で…最後まで聞いて欲しかったのに…。…きつと…お姉ちゃんは…私の事…」

朝倉への想いからさらに涙を流した舞衣。

舞衣もまた他人を尊重する女性だと俺は感じた。

（朝倉は君の事を怒ったりしてないよ…）

心ではそう思っていたがそれを言葉に出来なかった。

「舞衣…」

俺はただ舞衣の名前を呼ぶことしか出来なかった…。

#七〇 動き出した運命の針

「私はこんな人間ですが…先輩が…好きです…」

五ヶ月前、偶然一目惚れした女性からの告白を噛み締めた…。

「いや、俺の方が最低な男だよ…」

俺の為に勇気を振り絞って全てを告白してくれた舞衣に今度は俺が言う番だ。

「俺の…君は…俺の事を知らなすぎる…。だから、俺という人間を知って欲しい…」

俺がそう言うのと舞衣は涙を拭いながら頷いた。

「俺は、君の事が好きなのに朝倉と付き合ってる。最初、朝倉に告白された時彼女はそれで良いと言ってくれた…。でもそれは単に朝倉に俺が甘えているだけなんだ。このままじゃ君も朝倉も傷付けるだけだ。こんな状況をいつまでも続けるわけにはいかないって事は解かってるんだ。どちらか一人にちゃんと言わないといけないって…。でも今の俺にはそれが出来ない…。君も朝倉も同じくらいに…好きだから…俺はこんな奴なんだ…」

最低だろ？そう続ける前に、

「先輩…」

舞衣が言った。俺はその言葉を無視して、

「だから、もっと俺という奴を知ってからちゃんとした答えを出して欲しい…本当の俺を知ればきっと俺のことが嫌いになるから。その前に知って欲しい…。俺は憧れの対象になれるようなアイドルなんかじゃないから」

「そんな…」

少々キツイ俺の言葉に舞衣は不安げな表情をした。

「ただこれだけは覚えておいてほしいんだ。俺は舞衣が好きだ。だから君を悲しませたくないんだ」

「はい…」

「俺の事を知るために君が望む事はなんでも言ってくれ…」

朝倉にも同じ事を言っている…。本来ならこんな事を言うことすら許されないのかもしれない…。でもこんな俺を好きでいてくれる二人のために…。

「じゃあ今までどおりお姉ちゃんの恋人でいてください」

「え!？」

いきなり発せられた舞衣の言葉に俺は驚いた。困惑する俺に舞衣はさらに続ける。

「もし、お姉ちゃんが許してくれれば…私を…私も先輩の恋人にしてください」

追い打ちをかけるように舞衣はさらに驚きの言葉を発した!

「……………」

俺はその言葉に返答する事ができなかった…。

・
・
・
・
・
・
・

「そう…舞衣がそんな事を…」

あれから三〇分ほどが経った。今、俺は朝倉の部屋に来ている。

舞衣との会話が終わった後で舞衣と二人で夕食の後片付けをしてから朝倉の部屋へむかった。

正直朝倉が俺に会ってくれるか心配だった。でも朝倉は自室の前で俺を待っていてくれた。その時朝倉は、

「不安だった…あなたが来てくれないと思って…良かった…来てくれた…」

朝倉の顔に安堵の色があふれた。

そして舞衣との事を全て話した。舞衣もそれを望んでいた。

「私はあなたに従います」

それは一番難しい事だろう。だが朝倉は最後に、

「私は今まで通りである事を願います…」

小声でそう言った。

最後に舞衣に言われた言葉の答えは出せていない…。それはあの舞衣の言葉には答えを出してはいけない気がしたから。

この日、俺と朝倉そして舞衣。この三人の運命の針が動き出したのを感じた。

#七一 宣戦布告

運命の針が動き始めて三日が経った…。

あれから毎日朝倉と舞衣に会っている。二人とも今までと変わらないコミュニケーションを取れている。しかし俺が知らない所での朝倉と舞衣はうまくやっているのか？それが気掛かりだった…。でも二人の様子からすると大丈夫だと思うが…。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

そして今日はあのオフアールに答えを出さなければならない！

香港で行われるテニスのアジア学生交流。

この三日トモと相談していくうちに俺自身もやる気が出てきたしなにより朝倉や舞衣も応援してくれる！そんなこんなで交流戦の参加を決めた。

だが、

「おう柊。お前なら絶対に受けると思ってもう参加の手続きしといたぞ」

「え…？」

職員室に入ると開口一番越村先生が言った。

「だから、一昨日参加するって提出しといたぞ」

「は、はあ…」

三日待つと言いながら、先生は既に参加の手続きを済ませたのだという…。

「頑張って来いよ」

「は…い」

（この三日の葛藤はなんだったんだ…。それにもし、俺が出ないと

言ったらどうするつもりだったのだろうか？)

俺は驚きよりも呆氣に取られてた：なんだか意気込みが空回りしたような気がした：

『ガラガラ』

「ね、どうしたの？」

職員室の前で待っていてくれた朝倉とトモ。俺の表情を見て朝倉が訊ねた。

「ああ…。先生、俺が言う前にもう参加の手続き済ませたって…」

「え？」

「はあ！」

俺の言葉に朝倉とトモが反応する。

「一昨日勝手に参加するって言ったみたいなんだ」

「ははは：越村らしいなあ…」

トモが呆れ笑を浮かべながら言った。

「ま、とにかく出場するって事で…」

「頑張ってね」

「せっかくだからアジアも取って来いよ」

朝倉とトモが激励してくれた。

「ありがとう」

「一緒に頑張りましょうね、センパイ」

突然、背後から女の子の声がした。

「広瀬！」

言っただのはトモだ。

「ごめんなさい、職員室に来たらセンパイを見付けたので近寄って行ったら聴こえたもので。これでまた私とペア出場ですね。一緒に行けない朝倉センパイの分まで私が応援しますから心配しないで下さい。あ、私先生に呼ばれてるので失礼します」

言うだけ言って、広瀬は職員室に入ってしまった。

「なんだ：今の？」

「ハハハ…」

トモの一言に俺は愛想笑いした。朝倉は薄っすらと笑みを浮かべている。最後の広瀬の明らかな朝倉への挑発を受けての表情だろう…。

#七二 嫉妬？不安？

「で、大会っていつなの？」

朝倉が訊いてきた。おそらくテニスのことだろう。時刻は午後3時30分。今は下校時間だ。

「大会ってほどのものでもなくて、単なる交流だよ」

朝倉と一緒に帰っている。もうこれが当たり前になっている。

「でも伴城君との話を聞いてるとそんな軽そうなものって感じがしなかったから」

「あゝ、やっぱやるからにはやっぱり負けたくないからなあ…」

「そういうもののなの？男の子のそういう感じって解からないなあ…」

「そうかな？朝倉がこんな立場だったら解かるんじゃないか？」

「どうかなあ？体育会系のノリが解からないわ…。で、それっていつからなの？」

話がいつの間にか横道に逸れてしまっていた。朝倉がもう一度同じ質問をした。

「ああ。十一月一〇日から三日間。っていつでも実際に試合するのは一日だけであとはセレモニーとか」

「私も一緒に行きたいなあ…香港」

朝倉がぼやく様に言った。

「…そうだな、朝倉と行ったら楽しいだろうな」

それに俺は答えた。

「それ、本心で言ってる？」

「なんだよ、一体？」

俺はワザと低いトーンで言った。

「ごめんなさい…本当は舞衣と行きたいんじゃないかって…」

「俺は本当に君と行きたいんだよ…」

表には出してなくてもやっぱり内心は不安なんだと思った。

「ありがとう…。本当はあのコと一緒に行くのが嫌なの…」

「あのコって…広瀬？」

「うん…あなたを舞衣以外の女に奪われたくないの…」

聖女だと思っていた朝倉もやっぱり普通の女性と同じなんだと感じた。

「心配するなって、俺広瀬の事何とも思っていないからさ」

「でも、この先どうなるのかなんて絶対解からないじゃない。昔の私には今のこの状況ですら予想してなかった事だから…」

（朝倉…）

「絶対にどうにもならない様、俺努力するよ！」

何とか朝倉を安心させたかった。

「ありがとう…」

再度礼を言った朝倉に明るさが戻ったのを確認した。

「なあ、今日暇か？」

「え？ええ、今日は舞衣が夕飯当番だから夜までは…」

「ちょっと寄って行かないか？話したい事があるからさ」

「え？ちょっと！」

戸惑っている朝倉の手を取って俺は足早に歩き出した。

#七三 初招待

『ピッピッピッ』

「つと、」

『スーッ』

自動ドアが開く。

「ここ…どこ？」

「俺ん家のマンション」

「え？」

「見せたい物があるんだけどさ、今日学校に持って来んの忘れたから。明日でも良いんだけど早く見せたいから」

テンション高めの俺、困惑する朝倉。二人の温度は確実に違う…。

「オートロックを開けるところって初めて見た…」

『ガチャンッ』

ロビーからエレベータに乗って自分の家のドアを開けた。

「さ、どうぞ」

俺は扉を開け朝倉を先に通した。

「お邪魔します…」

朝倉の家には何度もお邪魔している俺だが朝倉を俺の家に呼んだのは初めてである。

「すごいマンション…」

部屋の中を見渡して朝倉が言う。

「何言ってるんだよ、朝倉んちの方がすげーじゃん」

言いながら冷蔵庫にあったアップルジュースをグラスに注いだ。

「どうぞ」

「あ、ありがとう…」

とりあえずリビングでジュースを飲んだ。

「さ、俺の部屋へどうぞ」

そして自室へと導いた。

#七四 二人のチケット

俺の部屋は六畳の空間にベッド、デスク、本棚、テレビにテレビゲームが床に無造作に放置されている。朝倉の部屋は八畳位あるから俺の部屋は彼女の部屋からすれば狭く感じるか…。

「そのクッションにでも座って…あ、ベッドでもいいけど…」

言っただ後にベッドはまずかったか？と思ったが、朝倉はニッコリしながらベッドに腰掛けた。

「本当は学校で見せようと思ってたんだけど、朝遅れそうだった忘れてさ。これ…」

俺は机の引き出しから取り出した物を朝倉に手渡した。

「…チケット？」

手渡された物を見ながら朝倉が言った。

「そう、チケット。フロルドのアーリーナチケット！」

俺が高テンションで言った言葉でチケットを確認する朝倉。

「すごい！」

俺のテンションが伝染った様に彼女のテンションも上がった。

「一二月一日の土曜、行こうよ朝倉っ」

「え！でも…」

「あ、都合悪かった？」

朝倉の言葉に上がっていた俺のテンションが一気に引き下がった…。

「ううん、そうじゃないの…。その…私で、良いの？」

「何言ってるんだ？」

「舞衣じゃなくて、私で良いの？」

どうやら朝倉は先刻の帰り道と同じ事を考えているようだ…。

「いいか、舞衣じゃなくて君を…朝倉麻梨子と行きたいんだ！君といる時は君の事しか考えない！例え舞衣の事だろうと考えない…」

「……………」

朝倉は俺の言葉を噛み締める様に聴いてくれている。

「俺の君への愛は本当だよ、だから…そんな事言わないでくれよ、朝倉…」

思えば、“愛”と言う言葉を俺が言ったのは初めてだ…。

「…ごめんなさい…じゃあ、舞衣という時は私の事を考えないで…お願い…」

「朝倉…」

朝倉の言葉はとても印象的だった…。

「必ず見つけるよ、二人を悲しませない方法を…」

その言葉は重い決意になるという事を俺は十分解かっている。

「一緒に…行ってくれるか？」

俺は彼女の持っていたチケットの反対側を持ち言った。

「うん…」

受託と同時に俺の胸に飛び込む朝倉。

俺はそれをしっかりと受け止めた。こんなに心地良い抱擁はごく久しぶりに感じた…。まるで何か軟らかく暖かいものを抱いている感覚…。

「ああ…幸せ…」

朝倉も同じ気持ちなのか？ため息混じりに洩らした。その言葉が妙に色っぽい。

「ねえ、おねがいしてもいい？」

抱きついたまま朝倉が言った。

「ん？」

「キス…」

これも久しぶりの様な気がする朝倉のリクエスト…。女の子が勇気を出して言ってくれてるのだから拒否するわけにはいかない…。

「んっ…」

『したくても、出来なかったから…』

まるでそう言っている様に朝倉は情熱的なキスを求める。俺もそれに応える。

「うれしい…」

そう言う朝倉の顔は何か曇りが晴れたように思えた。

#七五 誓い・・・

俺の部屋は六畳の空間にベッド、デスク、本棚、テレビにテレビゲームが床に無造作に放置されている。朝倉の部屋は八畳位あるから、俺の部屋は彼女の部屋からすれば狭く感じるか…。

「そのクッションにでも座って…あ、ベッドでもいいけど…」
言った後にベッドはまずかったか？と思ったが朝倉はニツコリしながらベッドに腰掛けた。

「本当は学校で見せようと思ってたんだけど、朝遅れそうだった忘れてさ。これ…」

俺は机の引き出しから取り出した物を朝倉に手渡した。

「…チケット？」

手渡された物を見ながら朝倉が言った。

「そう、チケット。フロルドのアーリーナチケット！」

俺が高テンションで言った言葉でチケットを確認する朝倉。

「すごい！」

俺のテンションが伝染った様に彼女のテンションも上がった。

「一二月一日の土曜、一緒に行こうよ朝倉っ」

「え！でも…」

「あ、都合悪かった？」

朝倉の言葉に上がっていた俺のテンションが一気に引き下がった…。

「ううん、そうじゃないの…。その…私で良いの？」

「何言ってるんだ？」

「舞衣じゃなくて私で良いの？」

どうやら朝倉は先刻の帰り道と同じ事を考えているようだ…。

「いいか舞衣じゃなくて君を…朝倉麻梨子と行きたいんだ！君という時は君の事しか考えない！例え舞衣の事だろうと考えない…」

「……………」

朝倉は俺の言葉を噛み締める様に聴いてくれている。

「俺の君への愛は本当だよ、だから…そんな事言わないでくれよ朝倉…」

思えば“愛”と言う言葉を俺から言ったのは初めてだ…。

「…ごめんなさい…じゃあ、舞衣という時は私の事を考えないで…お願い…」

「朝倉…」

朝倉の言葉はとても印象的だった…。

「必ず見つけるよ二人を悲しませない様に…」

その言葉は重い決意になるという事を俺は十分解かっている。

「一緒に…行ってくれるか？」

俺は彼女の持っていたチケットの反対側を持ち、再度言った。

「うん…」

受託と同時に俺の胸に飛び込む朝倉。

俺はそれをしっかりと受け止めた。こんなに心地良い抱擁はごく久しぶりに感じた…。まるで何か軟らかいものを抱いている感覚…。

「ああ…幸せ…」

朝倉も同じ気持ちなのか？ため息混じりに洩らした。その言葉が妙に色っぽい。

「ねえ、おねがいしてもいい？」

抱きついたまま朝倉が言った。

「ん？」

「キス…」

これも久しぶりの様な気がする朝倉のリクエスト…。女の子が勇気を出して言ってくれてるのだから拒否するわけにはいかない…。

「んっ…」

『したくても出来なかったから…』

まるでそう言っている様に朝倉は情熱的なキスを求める。俺もそれに応える。

「うれしい…」

朝倉の表情から曇りが晴れたように思えた。

#七六 姉登場！

『ガチャッ』

部屋を出た俺と朝倉に突然、

「あら、帰ってたの？希？」

いつの間にか帰ってきていた姉キがどこから声を掛けてきた！

「帰ってきてたの？って玄関に靴があっただろっ」

俺は姿の見えない姉キに言った。

「誰…？」

「ああ、姉キ」

少し恐る恐る訊いてきた朝倉に俺が答えた。

「なんだ？今日は早いじゃん」

言いながら俺たちはリビングに移動した。

「今日は暇だっ・・・あら？」

姉キが俺の横にいる朝倉を見て言葉を詰まらせた。

「あっ！えっと、おじゃましてます。初めまして…朝倉麻梨子とい
います…」

焦りながら自己紹介する朝倉を姉キはニコニコしながら見ていた。
…と思ったら、

「了希、こんなかわいい彼女がいるんならもっと早く紹介しなさい
よ。私は了希の姉、ゆかりです。はじめましてよろしくね」

姉キがおもむろに自己紹介を始める。

「いえ、こちらこそよろしくおねがいします」

朝倉と姉キの自己紹介が終わった。

「じゃあ朝倉、送って行くよ」

「え！もう帰るの？」

面倒になることになる前に朝倉を帰そうとしたが姉キがそれを引き
止めた！

「よかったら夕飯一緒にどう？」

「え！」

「せっかく、弟が彼女を家に連れて来たんだからお姉さん腕を振るっちゃうわよ」

「でも…」

姉キの突然の申し出に困惑する朝倉。予想通り面倒な事になりそうだ…。

「何か予定でもあるの？」

さらに引き止める姉キ。

「いえ、特には…」

「じゃあ、どう？」

「おい姉キ！」

いいかげんに俺は姉キを制止しようとしたが、

「わかりました…では、お言葉に甘えて…」

「OK決まり！」

観念したのか朝倉は姉キの申し出を受けてしまった。

「良いのか？」

「うん」

俺の問いに笑顔で答えた。観念したのではない様だ…。

#七七 召使い

「了希！それそっち！それからこれを入れて！」

姉キにいいように手伝わされている俺を朝倉がリビングのテーブルから見守ってくれて（？）いる。

「お鍋テーブルに持て行って！」

「ハイハイハイ！」

俺は昆布と出汁の入った鍋を持ってリビングへ行った。

「手伝わなくていいの？」

「いってそこに座ってて」

鍋を持って来た俺に朝倉が言った。

「まだ鍋の時期には早いつて言ったんだけどさあ…」

『くすっ』と笑う朝倉。

「あっ！家、大丈夫？」

「うん、さっき舞衣に電話したらまだ学校だって。帰りに何か食べて帰るみたい」

「そう。まだ学校って大変だな」

時計を見ると既に七時半を過ぎていた。

「こらっ！油売ってないでこれ取りに來い！」

台所から姉キが叫ぶ！

「ごめん、もうちょっと待ってて」

「うん」

そう言って朝倉はかわいい笑顔を返してくれた。

#七八 気分爽快

「カンパニー！」

姉キが缶ビールを高らかに掲げて言った。

「ったく何がカンパイだよ。俺らはウーロン茶だぜ」

「じゃあ飲むか？ビール」

「バアカ」

言って俺はウーロン茶を一口飲んだ。

「さ、朝倉さん食べて。味付けは私のオリジナルだから」

「いただきます…」

今日の鍋は鮭がメインの寄せ鍋だ。冷蔵庫の中にあった物を使っ
てつくった物とは思えないほど豪勢に出来ていた。

朝倉は鍋から白菜を取って口に入れた。朝倉の反応が気になるの
かその一部始終を見つめる姉キ。

「…おいしいです」

「そう、よかった」

本気で安堵する姉キ。

「あの、もしよければ味付け教えてもらえませんか？」

朝倉が姉キのパンドラの箱を開けようとしている！

（あゝ朝倉く！そんな事訊いたら何時間も語られるぞ！）

「簡単よ、昆布出汁に醤油を少し入れてそれにくくくよ」

俺の危惧に反して姉キの説明はあっさり終わった…。

「へへ今度家で作ってみます」

「麻梨子ちゃんは料理するの？」

（おいおい…もう麻梨子ちゃんかよ…）

「うち、両親が海外に居る事が多いので…」

「じゃあ、ほぼ独り暮らし状態？」

「いえ妹がいますから…それに近所に姉夫婦住んでるので」
少しの間姉キと朝倉の会話が続いた。

・ ・ ・ ・ ・

「……で、その時コイツ泣き出したのよ」

「本当ですか？今からはまったく想像できないです…」

「ハハッ、コイツ小さい頃はほんつとに怖がりだったのよ」

「へ」

ぼけけと鍋を食しているとどうやら俺の事を言っている事に気付いた。俺の幼少の頃の暴露話だ…。

「意外なものね」

朝倉が俺を見ながら言った。

「麻梨子ちゃんはコイツのどこを見て好きになったの？」

「え？」

「姉の目から見てコイツの良いところなんてないよ。テニスくらいか？」

不躰な姉キの質問に戸惑う朝倉。

「無視していいよ、酔っ払いの話なんか」

朝倉を助けるために俺は言った。

「なにおう！誰が酔っ払いだ」

「十分酔ってんじゃない」

狙い通りノツてきた姉キ。

だが、

「全部です…」

「え！」

「え！」

「全部が好きです…」

答えないだろうと思っていた朝倉の答えに俺と姉キは同時に驚いた！

「そ、そう…あんたモテるわね…」

姉キは焦りながら俺に言った。

「朝倉…」

俺も焦ったが、素直にうれしかった。

「さて、お鍋も誰かのおかげでほぼ片付いたし、おひらきにしようか」

誰かっでもちろん俺だ…念のため。

#七九 洋服

姉キが席を立とうとした瞬間、

「気になっていたんですけど…素敵なお服ですね。お姉さんの服ですか？」

朝倉がリビングの壁に吊るしてある服を見て言った。

「え！ああ、あれ？あれは母がデザインした新作の試作品なのよ、気に入ったの？」

「え、ええ。素敵だなあって…」

「…麻梨子ちゃんならサイズ合いそうね。本当は私にとって母さんがくれたんだけどあいにくサイズが合わなくてね…」

「ダイエットさぼってるからな」

「うるさい！」

俺の冷やかしに瞬時に反応する姉キ！

「麻梨子ちゃんにあげるわよ」

「え！そんな…悪いです！」

「いいのいいの、うちにあっても誰も着れないから」

「姉キダイエット成功しないからな」

『カコーンッ！』

姉キが投げた空き缶が俺のデコにヒットした。朝倉が驚く。

「ちょっと待ってて」

言って姉キは自室に入ってしまった。

「だ、大丈夫？」

心配してくれる朝倉。

「うん大丈夫、大丈夫。それよりごめんな、付き合わせて」

「ううん、こちらこそ楽しい食事をご馳走してもらって、それに服まで…」

「いや、服の事は姉キ言って」

「うん」

「あつたあつた」

姉キは壁から服を取ると部屋から持って来た袋に入れた。

「はいどうぞ、これとおそろいのコートも入ってるから冬に着てね」
「すいません…ありがとうございます」

「気にしないで、バカ弟と付き合ってくれてるんだからそのお礼よ。
それにこのままずっと吊るしてあるより着てもらった方がいいもの」
「バカは余計だ」

俺はすかさず言った。

「遅くなったわね。了希送って！」

「あっ片付け、手伝います」

「いいのいいの、お鍋だけだから」

「そうですか…。今日は本当にありがとうございます…色々」

「また、いつでも来てね」

「ありがとうございます…失礼します」

『ボタンッ』

俺は朝倉と一緒に外に出て玄関のドアを閉めた。

「ふっ」

「どうしたの？」

大きく息を吐いた俺に朝倉が覗き込みながら言った。

「いや、何とか姉キを凌げたなあって」

「何故？私はすごく楽しかったわ、素敵なお姉さんよ」

「どこが？小言がうるさい女だよ」

「何言ってるのよ、お姉さんに悪いわよ！」

とかなんとかで俺たちはマンションを出た。

「お見送りありがと、また明日ね」

「なに言ってるんだよ家まで送るよ、もうすぐ一〇時になるし」

「そんな、わるいわ」

「良いんだよ、元は俺が無理に付き合わせたんだから。さっ」

俺は朝倉の手を引いて歩き始めた。

「もうすぐ十月も終わりだな…」

「そうね、あつという間ね、3年生も…」
まばらだが、夜空に光る星を二人で見上げて歩いた。

・ ・ ・ ・ ・

「じゃあ、おやすみ」

「うん、おやすみなさい：気を付けて帰ってね」

「あー！せんぱーい、お姉ちゃん！」

無事に朝倉を家まで送りどけて帰ろうとした時丁度舞衣が帰ってきた！

「舞衣…」

「お姉ちゃんも今帰ったの？丁度良かったハンバーガーあるよ。先輩もどうですか？上がって食べて行ってください。いっぱいあるの
で」

大きめの袋を提げながら舞衣が言った。

「い…や…もう遅いしさ…」

俺が言うのと。

「じゃあもって帰ってください、私たちだけじゃ食べきれないので
どうぞ好きな選んでください」

そう言って舞衣は袋を広げて中を見せた。

「ありがとう…すげー量…」

「ほんとうね…アンタ、いくら使ったのよ？」

「あっこれ、全部部長の奢りなんです」

「柄沢すげー…」

ハンバーガーを数個もらって朝倉の家を後にした。

#八〇 文化祭前日

憂鬱な中間テストが終わった次の日。厳しかった残暑も今はすっかりなくなり気候も冬に向けての準備期間に入っているように感じる。

脱がなくては暑かった冬服のジャケットにも違和感がなくなった。

「おーい！そっち持ってくれ」

『トントントントントント』

今日は一〇月三〇日、明日十一月一日は文化祭初日。

今日は日曜だがほぼ全生徒が朝から文化祭の準備のために学校に來ている。

生徒達のはりきって(?) あちらこちらで作業している。

「おーい、誰か手の空いてるやつ体育館で釘を貰って来てくれないか?」

体育館は舞台設備の為に専門の業者が來ていて大工道具が揃っている。

「あー、俺が行ってくる」

「わりいー、柊頼む」

ちようど自分の作業が終わり教室に居るのも退屈に思えてきたので自ら名乗りを挙げた。

前にも言ったが。俺たち三年生は模擬店をやる。大体はグラウンドで店を出す露店だがウチのクラスは喫茶店なので外ではなく教室で店を出す。

(行くって言ったのはいいけど体育館まで遠いんだよね)

少し後悔しながら同じように文化祭の準備を進めている生徒が行き來する廊下を歩いた。

(んー青春だねえ)

その光景をどこか客觀的に見ながら歩いていると廊下に張ってある一枚のポスターが目に入った。

「ん！演技部の映画『モーニングムーン』前売り券三〇〇円、当日券五〇〇円：」

舞衣たちが所属する演技部の出し物、映画の告知ポスターだった。（前売り券三〇〇円って、なんという中途半端な価格設定：アイツの作品ならもっと取っても良いと思うけどなあ：）

少しそのポスターの前で立ち止まって見ていた。

（視聴覚室か：帰りに寄って行くか）

どうやら今年は視聴覚室を確保できたようだ。去年はまだ部としては認めてもらえずに愛好会として活動していて申請が遅れたため確か科学部かどこかに視聴覚室を押さえられて結局は空いててスクリンが使える場所ということで科学室をなんとか確保した状態だったからな。

去年は自分のクラスの出し物をそっちのけで柄沢を手伝ってやった。あれはあれで楽しかったけど。サバイバルみたいで。

#八一 チケットゲット

体育館で釘をもらって教室に帰る途中ポスターに書いてあった視聴覚室へとむかった。

「お！」

前売り券を買いに来た生徒だろうか？視聴覚室の前には十五人ほどの列が出来ていた。

（去年を知ってるやつらだな）

今年は自分には何の関係もないのに何故かその列を見ると嬉しく感じた。

俺はその列の最後尾に並んだ。

「あれ！先輩！」

視聴覚室から出てきた舞衣が俺を見付けて言った。

「何してるんですか？」

「いや、体育館に行った帰りなんだけど」

俺は釘の入ったケースをカラカラと振りながら言った。

「舞衣はなにやってるんだ？」

「私は列の整理です。中にも三十人ほど並んでるので」

「え！そんなに並んでるの！？」

「ええ…チケットの販売に手間取って…」

「そうか…」

「あつ部長にも会って行ってください、ちょっと待っててください」
言って舞衣は視聴覚室へと戻って行った。

「あ！柊さん、来てくれたんですか！」

一、二分後柄沢が出てきた。舞衣の姿はない。

「どうだチケットの売れ具合は？」

「凄いですよ、去年なんか比較になりません、でも二年と三年ばかりですね…」

「まあ一年は去年の事を知らないからな。心配すんな、去年みたい

に口コミで広がるだろ」

「そうだと良いんですが：で、どうしたんですか？」

「いや、前売り券を買おうと思ったんだけど、こんなに並んでるとは思わなくてさ、時間が：」

「ははは：ちよっと席の管理に手間取ってまして：。そういうことなら僕が何とかしますよ」

「マジ！」

「はい、今なら何とかありますから。いつが良いですか？」

「明日は無理だから、明後日ならいつでも」

「じゃあ、明後日の一〇時三〇分の回なら席を取りやすいのでその真ん中空けときますよ」

「サンキュー、期待してるぜ！」

「今チケット無いんで、後で取りに来てもらえますか？」

「OK OK、じゃあ：」

「あ！良いですよ！」

サイフを取り出そうとした俺に柄沢が言った。

「お世話になってるんですからお金は要りません」

「え！良いのか？」

「はい」

「サンキュー。あ、悪いんだけど二枚いけるか？」

「もちろんですよ！」

「ほんとにすまないな」

「いえ」

「じゃあ俺、一旦教室に戻らないといけないから」

「じゃあ、後でチケット取りに来てください」

「ああ」

柄沢と別れ俺は急いで教室に戻った。

#八二 拉致

「わりいー、混んでて遅くなった」

軽くウソをつきながら教室に戻り持って来た釘を教台に置いた。

「柊く〜ん」

すると突然女子に甘い声で呼ばれた！

「ん！」

振り向くと相島を筆頭にクラスの女子三人が立って居た。

「何…？」

このメンバーに声をかけられる所以がないため、少々驚きながら答えた。

「ウェイターの衣装、合わせてほしいんだけど…」

言ったのは相島だった。キャンプの夜に月島に言われた事が脳裏に甦った。

「衣装…？べつに良いけど…」

「よかったあ、ちょっとこっちにきて！」

「え！え？」

すると手際良く三人の女子に拉致されてしまった！

・
・
・
・
・
・

連れて来られたのは家庭科室の前だった。

「なんか良い匂いがする…」

不意に鼻腔をくすぐる甘い香り…。

「中で明日出すクッキーを焼いてるのよ」

相島が答えてくれた。

「ささ、入って！」

あとの二人に押されるように家庭科室に入った。

「柊…君！」

家庭科室に入ってきた俺に真っ先に気付いたのはエプロン姿の朝倉だった。おそらくクッキーを焼いていたのだろう。

「じゃあ、ブレザー脱いで！」

女子たちが大勢居る前で相島たちが半ば強引に俺のジャケットを剥ぎ取った！

「お、おい！」

「ちょっと、何してるの！？」

突然の目の前の光景に声を上げる朝倉。まるで人のカレシに何するの！と言う様に…。

「何って、明日の衣装合わせよ。柊君が一番暇そうだったから」

（そんな理由で俺が選ばれたのかよ…）

相島の一言がなんだか虚しかった…。

「そうだ、麻梨子も着てみてよ」

言って相島は朝倉に袋を渡した。

「じゃあ、私たちが着せてあげる」

他の二人の女子がいきなり袋を渡され呆然とする朝倉を隣接する被服室へと連れて行った！

（この行動力と手際の良さ…。この三人でなんかとてつもない事が出来るんじゃないか？）

「で、柊君にはこれをつと」

その光景をただ呆然と見ていると、残った相島から蝶ネクタイを渡された。

#八三 衣装合わせ・・・

「で、麻梨子とは巧くやってるの？」
「え！」

手渡された蝶ネクタイを受け取ろうとした時、周囲に聞こえない程度の小声で相島が言った！

「麻梨子と付き合ってるのよね、柊君……」

「なっなんで知ってるんだ？」

俺も小声で聞き返した。

「やっぱり付き合ってるんだ……」

しまった相島にやられた！

「ずっとそうじゃないかって思ってたんだけど……ううん、気にしないで」

キャンプの時に月島から相島が俺に気があるという事は聞いていた……。

「相島……」

「んー、この色イマイチね……こっちのは？」

俺が着けた蝶ネクタイを見て言う相島は無理に作り笑いをしているように見えた……。

「相島」

「大丈夫よ、誰にも言わないから。バレると他の男子に恨まれるもんね」

『違う！俺の言いたいのはそんな事じゃない！』そう言いたかったが、言えなかった……。あくまで相島の気持ちを俺は知らないふりをしなければならいだから……。

「よし、完成！紫が良く似合うわ」

相島の事を考えていると、不意に彼女が言った！

「へっ！？完成って、これで終わり？」

「そうよ」

「この蝶ネクタイだけ？」

「そうよ」

「ならわざわざここまで来なくても…」

「皆には明日まで内緒にしたかったから」

さつきより明るい表情で相島は言った。

「こっちも完成したわよ」

隣の被服室から女子たちが出て来た。しかも大勢…。

「ちょっと、こんな格好で！」

「似合ってるわよ、麻梨子っ」

水野に引っ張られて、朝倉も被服室から出て来た。

「！」

朝倉が恥かしがるのも無理はない！朝倉の、いや、女子の衣装は典型的な“メイド服”だった！

「麻梨子…あんた、似合いすぎ…」

「何よ！無理矢理着せといてその言い方っ」

少々呆れ気味の相島に怒る朝倉。あんな格好の朝倉は新鮮だ…。

「失敗ね…去年売り上げナンバーワンだったメイド喫茶に便乗して

今年のうちがって思ったけど…、麻梨子のはモロ…だわ…」

相島の言葉に少しトゲを感じた。

しかしそんなので客をとろうとしてたのか…。

「分かったわ、明日までにはもっとソフトにしとくわ」

ソフトにつて、やっぱりこの路線で行くのか…。

#八四 いよいよ文化祭

・・・数時間後。

「皆々おつかれさま。缶ジュース持って来たわよ」

純子先生がクーラーバッグを提げて教室にやって来た。

「うわ」

皆一斉にそれに群がる！

「豊、俺コーヒーな」

「OK」

豊から缶コーヒーを受け取った。それを一口飲んでやっと開放感を味わった。

あれから教室に帰ってきて色々と雑用をしていた。とうかさせられていた。

「じゃあ、明日は調理班が七時半までに来て準備、ウェイター班は八時半集合で！それじゃあ今日はこれで解散ね」

皆それぞれジュースを片手に持ち、純子先生のあいさつで閉められた。

（せっかくの日曜だったけど、楽しかったからまあいいか。良いものも見れたし…）

家庭科室の光景を思い出しながらつついニヤけてしまう。なんとかそれを隠しながら横で一緒に下校している朝倉を見た。

「何ニヤニヤしてるのよ？」

朝倉と目が合って指摘されてしまった。

「ゴホンッ！いや、別に…」

慌てて咳払いをしてしまった。

「あゝ明日は嫌だな。あの服…」

「あゝ、そんなに悩まなくてもちゃんと直してくれるっていうんだからさ」

「でも…」

「女子はみんな同じカッコなんだから、心配しなくても大丈夫だつて。あ、そうだコレ」

朝倉の気を紛らわそうと先刻柄沢から貰った演技部のチケットを見せた。

「あつ、コレ…」

「演技部のチケット、今日柄沢に貰ったんだ、二枚」

「実は私も昨日舞衣から二枚貰ったのよ。今日言おうと思ってただけどタイミングが…」

そう言つて朝倉も自分の鞆からチケットを取り出した。

「そうか…」

朝倉が俺の持っているチケットを見て、

「私のチケットの隣だわ！」

「へー、俺は柄沢に一番観やすい席って言ったから、舞衣も同じ事考えてたのかな？」

「そうね、実は舞衣たちもまだ観てないらしいの。今日が試写会なんだって」

「じゃあ今頃観てる頃かな？…このチケット明日豊にやるよ、朝倉ので観よう」

「うん」

明日からはいよいよ文化祭。高校最後の文化祭…楽しみだ。

しかしこの文化祭が後に大きな意味を持つ事になるとはこの時の俺たちにはまったく想像も出来なかった…。

#八五 文化祭始まる

「どう？ちゃんと直してるでしょ！」

「うん：でもメイド調はそのままなんだ：」

「そこは譲れないわよ！」

文化祭当日の朝、ウェイターをやる俺たちは皆が登校してくるその一足先に教室入りしていた。

昨日試着した時に女子の衣装に不都合があったらしくその事で朝倉たちが何か話をしているのを、俺はボーっと見ていた。

今日の接客担当午前中の担当は俺を含め男子三人の女子三人の計六人。女子の中には朝倉も入っている。他に調理班も三人待機している。といっても、造り置き出来る物は昨日のうちに造ってあるそうなので、調理班といっても今日やることはそんな大変な事をするわけではない様である。

「あゝ、やな感じ：」

俺の横で同じく今日午前のウェイターを務める伴城がため息混じりに言った。

「我慢しろ、午前中だけだから客もそんなに来ないだろう」

俺が慰めの意で言うと、

「だなっ、終わったら帰ってやろ」

「何で？文化祭は？」

「別にどうでもいいよ、お前は朝倉と廻るんだろ？」

「そ、そうなるかな：？」

俺ははぐらかす様に言った。

「いいよなく彼女のいる奴は。俺はそんなコ居ないから、独りで寂しく出し物見てもおもしろくないだろ！だからか帰るよ」

トモは本心から言っている様だ。

「じゃあ、一緒に廻るか？」

せっかくの高校最後の文化祭。トモの言い分もわかるがせっかく

なので誘ってみた。

「冗談だろ？ お前たちの邪魔になるから遠慮しとくよ」

「そうか…」

俺は本気でトモを誘ったんだが…。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「おはようすっ」

そんなこんなで今日何の役割もないクラスメイトたちも登校して来た。

「今日は頑張ってくれよっ」

豊が言う。

「お前明日だよな？」

「おう、後でどんなだったか話聞かせてくれよ」

「ああ、今日はどうするんだ？」

「ヤボな事聞くなよっ」

豊は何となくいやらしい笑みを浮かべながら言った。ま、月島と廻るんだろう。

・・・そして、

「じゃあ、役割がある人は頑張って、それ以外の人は最後の文化祭楽しんでね。で、三時一五分に一度教室に戻って来てね。じゃあ、解散！」

担任の純子先生が手短に今日の段取りを説明して、文化祭一日目が始まった。

#八六 文化祭・ナンパと逆ナン

午前九時

我がクラスの催し物『喫茶店』が開店した。

「いらっしやいませ」

開店から十人以上の人が来てくれた。これは上々だろう。

開店から一〇時までの一時間限定でモーニングセットを出すことにしたが、これが好評で開店と同時にモーニングセットが飛ぶように注文された。

（さ、三時間頑張るか）

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

しばらくは慣れない事に四苦八苦していたが次第に作業にも慣れてきた。それにつれて周りを見る余裕が出来た。

基本的にアルバイトが禁止されている学校—（といってもかなりの生徒が隠れてやっているが）なので、普段目にしていても自分では経験できない接客業というものを皆楽しんでいる様に感じた。

そしてもうひとつあることに気付いた…。

それは、朝倉が客で来ている男子生徒に何度もナンパ紛いの声を掛けられているではないか！

最初その事態を目撃した瞬間ムカつとしたのだが、さすが朝倉！
と言うべきか？それを意図も簡単に流している！その光景はまるで朝倉が百戦錬磨のお姉さんの様に見えてしまった…。

だが、その光景はやっぱり腹立たしい！

やけに男の客が多いと思ったらそういう事だったか！

「柊クーン」

そんな事を考えていると、不意に名前を呼ばれた！声のする方を振り返ると。

『カシヤリ〜ン』

いきなり写メを撮られた！

：俺自身も先の体育祭の影響か？女子にチラホラ声を掛けられている…。先生はそれが目的で俺をウェイターに指名したのだが、俺なんかより朝倉を目当てにした野郎共の方が遥かに多い！それでも俺に声を掛けてくれる女子が居るのは恥かしいが、まあ悪い気はない…。でも朝倉には本当に悪いと思っているが…。もしかしたら朝倉もこんな感じなのかな？

「ご注文は？」

俺はいきなり写メを撮った女子三人組のテーブルに注文を取りに行った。

「「「柊ク〜ン」」」

三人が声をそろえて言った。

「ご注文は？」

その三人の言葉を見無視して、俺は再度言った。

「この後私たちと文化祭廻ってください〜い」

「…ごちゅうもんは？」

「だから、柊くんを」

ストレートに逆ナンされたのはこの客が初めてだ…。

「……………」

俺は黙っていると、三人もニコニコしながら俺の様子を窺っている。

「あの…俺今日はずっとこれで時間が無いんで、注文が無いなら他へどうぞ〜」

いい加減に俺もウザくなってきた。

「じゃあ、明日なら良い？」

むこうも引き下がろうとしない！

「明日は予定が入ってます」

「え〜！」

「注文が無いなら他へ」

「：じゃあ、アイスコーヒー三つ！」

俺が本気で断ると、あからさまに不機嫌になった三人組。

「かしこまりました」

（はぁ）

なんかどつと疲れた…。

三人組のオーダーを通そうとした瞬間朝倉と目が合った。彼女は表情は『ムッ』としている。今のやりとりを見ていたのか？

それから何人かの女子に誘われたり、写真を撮られたりした。

その都度朝倉を気にして、彼女の様子を窺ったが、朝倉はまったく目を合わせてくれなかった…。

（怒ってるかなあ…）

急に憂鬱になった。

そんな俺とは対照的に、トモも体育祭の影響だろうか？アイツもチラホラ声を掛けられている。その都度女子と話し込んでいる。あんな事が出来るアイツの立場が少し羨ましく思えた。女子と話が出る立場が羨ましいのではなく、何の気兼ねも無くそういう事が出来る性格が羨ましい。つか、仕事しろよ！

#八七 文化祭・すれ違い

午後一二時

ようやく自分たちの役割である三時間が経過し、午後の者に引継ぎを終えた。

「お疲れ！」

トモが朝とは全く違う表情で俺に言った。

「どうした？」

妙に明るいトモに訊いた。

「いやぁ先刻さつぎ、この後一緒に文化祭廻まわってくれて頼まれてさぁ」
照れといやらしさが入り混じった様な表情でトモは言う。

「そうか、女子と？」

「当たり前だろ！何が悲しくて野郎と廻らないといけないんだ！しかも下級生だぞ！」

「…良かったな…」

「じゃあ、お先に。お前も朝倉と楽しめよ」

「ああ…」

トモは自分の言いたい事を言うところそくさと教室を出て行ってしまった。

朝は昼からサボるつもりとか言ってたのにあの変わり様…。

トモは朝倉と楽しめよって気軽言ったが、作業中の朝倉の様子を考えると少し気が重い…。

そういえば先刻舞衣が来ていたのだが、忙しい時間帯だったのと朝倉のことが気になって、話をする事が出来なかった。一応、舞衣に気付いたという意思表示は示した。舞衣は朝倉と何か会話していた様だったが…。

（そろそろ女子の着替えが終わる頃だろう）

俺は更衣室になっている被服室の前に移動し、朝倉を待つ事にした。

『チャラララ、チャララララ』

被服室に移動中に突然俺の携帯が鳴り出した！着信を確認すると豊からだった。

「おう？」

『終わったか？』

「ああ、まあな」

『一緒に廻らないか？』

「あゝ悪いけど俺、朝倉と」

『もしもし？』

（あれ！）

急に電話の声が女になった。

「あっ朝倉？」

俺は驚きながら訊ねた。

『朝倉はもう、俺たちと一緒にだぞ！』

また豊の声に戻った。その声にかすかに笑い声が感じ取れた。

「なんで？まだ着替えてる最中かと…」

『今体育館の前に居るから、早く来いよ』

一方的に電話は切れてしまった。

（先に豊たちと合流したって事は、朝倉、やっぱり怒ってるのか？）

絶対俺を待ってくれると思ってたのに…朝倉は何も言わないで豊たちと合流した…。俺はそのことにショックを受けトボトボと体育館へ歩いて行った。

#八八 文化祭・まずは第一步

「あ、来た来た。こっちょ」

月島が手を振って呼んでくれた。

「ん？どうした？沈んでないか？」

豊が俺を見て訊ねた。

「べつに…そんな事ないけど…」

言いながら朝倉の様子を窺った。

見た目は普段通りなんだが…。

「さっ揃ったわね、行きましょ」

月島が言った。

「ねえ由実、午前中どこ廻ってたの？」

朝倉の質問に、

「え！ど、どこも廻ってないわよ…ねえ、豊君？」

「ああ…まだどこも廻ってないよ」

焦る月島と同じく動揺する豊。

「じゃあ、午前中何してたんだよ？」

すかさず今度は俺が訊いた。

「ま、何だっていいじゃん、行こうぜ」

強引に煙に巻かれてしまった…。

ま、二人が同じ様に慌てる素振りを見れば何をしてたか十分想像できるけどな…。

そんな事より気になるのは朝倉のこと。多分、朝倉は午前中の俺の態度に怒ってるはず。それを修復しなければ。あの時は声を掛けてくれた女子に気を悪くさせない様にしただけで、決して思わせぶりな事はしていない！あくまで客として扱っていただけ。

言い訳がましいがこれが本心である！既に二人の女の子を選べずにいる馬鹿な男。三人目四人目となると、それはもう人間として終わっているって解かっている！

「朝倉」

思い切って呼んでみた。

「何？」

思ったよりあっさりと応えてくれた。その朝倉の返事で少し気が楽になった。

「あの：明日の映画のチケット、豊たちにあげるけど：」

かなり恐る恐る俺は言った。

「ああ、どうぞ、私ので観るんでしょ」

普段よりよそよそしい言い方で朝倉は言った。

「うん：」

本題を切り出せなかった：。

朝倉と並んで歩いている俺。その前では豊と月島が仲良く手を繋いで歩いている。

「豊」

俺は豊に声を掛けた。

「ん？何だよ？」

振り返る豊に、

「演技部の映画、興味あるか？」

「演技部の映画：？ああ、柄沢今年もやるのか？」

「そうなんだ、チケット二枚余ってるから良かったらやるよ」

「マジ！サンキュー。去年のなかなおもしろかったからなあ」

喜んで受け取る豊。

「何？文化祭で映画やってるの？」

月島が加わった。

「あれ？由実知らなかったのか？去年もやってたんだぜ、おもしろい。そういえば、去年アイツの手伝いしてたな」

知らない間に豊は月島を名前で呼んでるようだ。

「え？佐久野君も去年のに関わってたの？」

朝倉が豊に問いかけた。その口調は普段のそれだが：。

「ああ、最初は終に無理やり手伝わされてたんだけど、途中からだ

んだん楽しくなってきたよ！なんつーかよ、ゲリラ的にやってたのが面白かったよな？」

「え！ああ」

朝倉の事ばかり気にしていたら不意に豊が俺にフツてきた！

「他に誰が手伝ったの？」

「えっと」

「トモちんに亜津だろ、あと…」

朝倉の質問に俺が答えようとしたがそれより先に豊が答えた！

「結城^{ゆうぎ}」

豊が詰まった瞬間に俺が言った。なんだか無性に腹が立った。

「そうそう結城。懐かしいなあ…二年の時はいつもあのメンバーでつるんでたな」

「へ」

「あんた達去年の文化祭そんな事してたの？」

月島も加わった。

「ああほんと面白い文化祭だったぜ、ただ見て廻るだけじゃ味わえないスリルがあったなあ」

確かに豊の言うとおりで去年の文化祭は楽しかった。

「ふうん、ありがとう柊君」

思い出話ではしゃぐ豊からチケット奪った(?)月島が言った。

「良いつて、でも、席俺たちの隣だけど」

「問題ねーよ」

俺があげたチケットを見ながら、二人はまた手を繋いで歩き始めた。

（よしっ！）

俺も朝倉の手を握った。

瞬間、『ハッ』となった朝倉だが、俺の手を軽く握り返してくれた。

午前中の事のモヤモヤは完全に消えていないが、まずは一步前進だ。

#八九 文化祭・互いの誤解

これで三回目の経験となる文化祭。毎年特に何が変わるというものでもないが、何となく雰囲気は毎年違う気がする…。そんな雰囲気を味わいながら四人で二年生の展示物を二つ見て廻った。

三年生は模擬店、二年生は自分たちの教室等で様々な展示物を展示し、一年生は3日目に体育館で演劇や合唱等を披露する。

「毎年の事だけど、大した事ないな」

豊が言った。

「まあなあ：毎年同じ出しものだからな」

「そうだな、去年俺たちがやってたのを後輩が真似する…もっと独創的な事やれないのか」

「俺たちだって去年やってたのって、先輩の真似だったじゃん」

「ま、そうだったな」

「そうだ、何か買ってきてあげるわ、何が良い？」

廊下から二年の教室を眺めながら俺と豊が喋っていると、突然月島が言った。おそらく彼女ももう興味の無い展示物に飽きてきたのだろう。

「じゃあ、俺、ホットドックで」

俺が言うと、

「私もそれで…」

朝倉も頼んだ。

「俺は…」

「アンタは一緒に来るのよ！」

豊も何か頼もうとしたが、月島が豊を連れて行った！

「え！俺も行くのか？」

「そうよ、当たり前でしょ！」

「お、おい！」

「じゃ、二人ともごゆっくり」

月島が不敵な笑みを浮かべて豊を半ば強引に連れて行ってしまった…。

「あ！おい月島！」

代金を渡す間もなく、二人は去って行ってしまった。

「……………」

取り残された俺と朝倉。

「ま、とにかくどこかで待つか？」

「うん、そうね」

とりあえず俺たちは人通りのない屋上への階段に腰を掛けた。二人とも少し沈黙していたが、

「…怒ってる？」

思い切って訊いてみた。

「え！どうして？」

朝倉は思いもしない事を訊かれた！という言い方をした。

「いや、いつもと様子が違うから…午前中の事を怒ってるのかなって…。他の女子に声を掛けられたりしたから…」

それを聞いた朝倉はまるで『なんだそんな事気にしてたの？』という様な笑みとともに、

「ごめんなさい…怒ってないわ。ただ午前中のあなたを見て思ったの…」

「え？思ったって？」

「私にはライバルが多いなあって…」

「へ！ライバル？」

「そっ、私の恋は大変よ」

「なんだよ…それ？」

朝倉が何を言っているのか解からなかった。

「今日状況を見て改めてそう思ったの」

どこことなくその状況を楽しんでいる風にも受け取れる言い方で彼女は言った。

「今日の事は多分体育祭の影響で、誰も本気で誘ってきてないよ！

それに相手は客だからあんな対応になってだけで…」

「プッははは」

突然笑い出した朝倉！

「ごめんなさい、それで怒ってるかって訊いたのね。そんな事全然気にしてないわ。私の方こそ何人も声を掛けられて怒られるかなって思ってたのよ」

「いや、俺もそんな事気にしてないよ。俺は…君を信じてるから」
「どうやら二人とも誤解していた様だ。」

#九〇 文化祭・待ち時間

「何かスツキリした」

そう言う朝倉はいつもの彼女に戻っているように感じた。

「俺も」

心からそう思った。

「…っかし遅いなあいつら」

安心したら急に腹が減ってきた。豊たちが買いに行ったホットドックが待ち遠しい…。考えてみれば朝から何も食べていない。

「由実たち、午前中何してたんだろ？」

朝倉がまたムシ返した。

「あんまり詮索しない方がいいと思うぞ」

俺が言うと、

「どうして？」

朝倉が問い返す。

「………」

俺は頭を掻きながら、仕方なく言った。

「多分だぞ」

「うん」

「してたんだよ」

「何を？」

ワザと訊いてるのか？

「…エッチ…」

それを聞いた朝倉は赤面した。ワザと訊いたわけではなかったよ。うだ。つか、言った俺自身もかなり恥かしい…。

「あの二人ならそうかも…」

なんと朝倉も同意見になった！

「だろ？ キャンプの事もあるし」

「うん…」

そして何故か二人とも黙ってしまった。

「でも、あの二人がうらやましいなあ…」

「え！」

朝倉の言葉に驚いた。

「うらやましいって？」

「その…」

急にもじもじしはじめる朝倉。

「へ、変な意味じゃないわよ」

「うん…」

俺は彼女の言葉の続きが聞きたくなった。

「学校で…そんなことが出来るのって、考えてみれば…凄く偶然でラッキーな事だなぁって…」

言った朝倉は恥かしさからか？顔を伏せた。

朝倉が言おうとしていることは何となく解かる気がする。常識で考えれば学校でというのはおかしい。でもそういう事が出来るというのは実は偶然が生み出した一つの奇跡かもしれない。好きになった者同士が、その場に居れる…。

思えば俺と朝倉は学校では会話することすら少ない。それは周りにバレたくないという考えからそうなってしまっている。今日は朝倉とこういう関係になってから学校内で一緒に居る時間が今まで一番長い。朝倉は豊と月島のようにオープンに付き合っている関係がうらやましいのだろう。

そう思うと朝倉には申し訳ないことをしている。

「朝倉」

俺が彼女の名前を呼ぶと伏せていた顔を上げた。その瞬間、

「！」

俺は少し強引に朝倉にキスした。

突然の行為に少し驚いた朝倉だが即に瞳を閉じて身を任せてくれた。

時間的に豊たちが戻ってきてでもいい頃だが俺は構わず何度もキス

した。たまらなく朝倉が愛しい。

「はあはあ、はあはあ、はあ…」

何度目かのキスを終えた二人の荒い吐息が絡み合いコンクリート壁の階段にこだました。

「ご、ごめん…急に」

高揚感と興奮のなか、俺は謝った。すると朝倉は軽く首を横に振ると、

「ありがとう」

言って、俺の頬にキスした。

先の自分の行為より全然軽い彼女の行為だが、恥かしさのあまり俺はその場から逃げ出したくなった！

#九一 文化祭・差し出す手

数分後。

ようやく落ち着いた俺はあまりに遅い豊に電話を掛けてみた。

『プルルル〜プルルル〜』

『おうっもう終わったのか?』

「はあ?」

いきなりわけの解からんことを言ってくる豊。

「何してんだ? 腹空かして待ってるのに!」

『由実が、お前らを二人きりにしてやろうって言うからさ。なんだ? 何もしてないのか?』

「バカか!」

『先刻からお前らの様子がおかしかったから、二人で話し合う時間
が要るかな? って思ってたよ』

「・・・・・・」

豊たちの思いやりに感謝しながら、朝倉を見た。

「ありがとう!」

自然とその言葉が口を吐いて出た。

『こっちこそ映画のチケットサンキューな。じゃあ明日な』

「あ? もう戻って来ないのか?」

「ああ、実はもう由実と帰ってんだ」

「そうか!」

「そういうこと、じゃあな」

「ああ」

そう言って電話は切れてしまった。

「: 豊たちもう戻って来ないってさ」

俺がそう言うと、朝倉は立ち上がった、

「そう!」

言って手を差し出した。

俺はその手を取って立ち上り、そのまま手を取り合ってその場を後にした。

#九二 文化祭・初日終了

「とりあえず何か食べないか？」

「うん」

俺たちは校舎を出て三年の模擬店が並ぶ校庭に来ていた。

他人の目が気になったが皆文化祭に夢中で俺たちの事を気にかけるやつは居なかった。

思えば、一学期の朝倉にコクられた直後は他の奴に知られたくないという気持ちが強かったが、今はそんな感情は無くなっている。

「あゝホットドックが食いたいなあ」

豊たちが買って来てくれるはずだったホットドックが無性に恋しくなった。

「ホットドックって確かB組だったはずよ」

「恩田のクラスか」

お祭の縁日の様に並んだ模擬店の中から、ホットドックの店を見つけた。

「あそこか。あ、俺が出すよ」

「え？」

また押し問答になりそうなので朝倉が発言する前にと足早に店へ行った。

「ホットドック二つ」

「あ！もう売り切れたんだけど…」

俺が注文すると、店番をしているB組の生徒が申し訳なさそうに言った。

「マジ！」

「もう、三時なんで…」

「あ…」

いつの間にかそんな時間になっていたのか…。

「また明日…」

「分かった」

少し離れて立っている朝倉に向けて、右手をヒラヒラさせて売り切れだった事をアピールした。

「残念ね」

「んー、食えないとなると余計に食いたくなるものだなあ…」

「じゃあ、帰りに食べに行こ」

朝倉がにっこりしながら提案した。

「うーん、それでも良いんだけど…せっかくだから素人が作った危ういホットドックが食いたかったなあ」

「どういう心情よ…」

未練たらたらな俺に少し呆れ気味の朝倉。

「今日は夕飯どうするつもりなんだ？」

「え？今日は舞衣が夕飯要らないって言うから、私一人で何か食べようと思ってたけど…」

「じゃあさ、帰りに何か夕飯食べに行こうぜ。俺が奢るから」

「嬉しいけど、奢ってもらうのは悪いわ」

「良いつて、ホットドックは明日の楽しみにして何か別の物を食べようぜ」

「でも…」

「何食べに行こうかなあ」

とか何とかで最後の文化祭一日目が終わっていった。

#九三 文化祭・夢

夢を観ている…。

これは夢であるという事が自覚できる夢。でも心地良い夢。

何とも言えない心地良さに包まれている空間。そこに一人の女性が現われた。

朝倉麻梨子だ。

俺は彼女のもとに近付こうとした。しかし、まるで下半身が水中にある様な感覚で、思うように進めない。水中でもがく様に夢の中の朝倉に近付いて行く俺。

だが朝倉は俺から逃げる様に遠退いていく！

もがく俺に対して彼女は地面の上を軽々歩いている様にスイスイと俺から逃げていく…。

「待ってくれ！」

どんどん遠くなっていく彼女に俺はたまらなくなり思わず叫んだ！叫びながら、思うように進まない身体を必死にもがきながら進んでいく。

しかし朝倉は得体の知れない空間でまるで人魚の様にスイスイと俺から離れていく！

「だめだ！行かないでくれ！」

必死に呼び止めるが彼女は優しい笑みを浮かべながら暗闇へと消えていく。

「…きだ！」

俺は必死にある言葉を叫ぼうとした。それは今の自分の率直な思いの現れ、考えて発した言葉ではなく、脳が、本能が叫ばせた言葉。しかし声がかすれて言葉を巧く出せない！

俺はかすれる声を必死に絞り出し、再度。

「朝倉好きだっ！」

叫んだ。

その言葉を言った瞬間暗闇に消えて行った朝倉が俺の目の前に現われた！

俺はもう二度と彼女を離すまいと力強く抱きしめた！

『きゃっ！！』

刹那、夢とは思えないリアルな声と感触を味わった！その声は朝倉のものだ。

(……やわらかい……？)

『いっ痛いよ……』

またリアルな朝倉の声がした！

目を開けると、いつもと変わらない自分の部屋の風景が目飛び込んできた…。

しかし、いつもと明かに違う箇所が一つあった…。

それは俺の腕の中だ…。

強く力を入れたその中に実物の朝倉が居た！

夢の中の朝倉を抱きしめたつもりが、現実の朝倉を抱いていたのだ！

「えっっ！！」

目は開いていたが、完全に覚醒していなかった俺の脳が一気にすっきりした！

慌てて腕を解き、頭をフル回転させて昨日の出来事を思い出した。

「あゝ！！」

思い出した瞬間無意識のうちに声をあげていた！

#九四 文化祭・回想

ホットドッグが無性に食べたくなったが、昨日は我慢して学校の帰りに朝倉と夕食を兼ねて少しデートした。

「ごめんな、なんか無理矢理付き合わせて」

「ううん、私はあなたと一緒に居れて凄く嬉しいの」

「夕食にするにはまだ早いから、その辺で少し時間をつぶさないか？」

「うん」

という事で二人は学校を出たあと最近オープンした雑貨屋へと足を運んだ。朝倉のリクエストだ。

そんなものが出来ていた事など全く知らなかった俺は、朝倉の案内でその店に着いた。予想していたものより数段おしゃれなその店構えを見た瞬間絶対に俺独りでは来ないだろうと思った。

店内はそんなに広くはなかったが、学校帰りの学生、主に女子や仕事帰りだと思われるOL風の女性で犇いていた。

「へ」

人が多くてゆっくり見ることは出来ないが、普段来る事のない空間に並ぶ商品に俺は頻りに感心した。

雑貨屋といっても結構バラエティグッズみたいな物も充実していて、見ていて飽きなかった。

「お！」

俺は店の端に置いてあった立体パズルに注目した。

「何？」

「ん、立体パズル。これを組み立てると立体の城になるんだぜ」

「あゝ、ちょっと前に話題になってたわね」

「欲しかったんだけど、どこにも売ってなくてさ。ここで見付けたのも何かの縁だし買って行こうかな…」

「へゝ、パズルとか好きなんだ」

「いや、好きじゃないけどこれは興味があつて」
と言いながら何気なく箱に付いた値段を見た。

(げ！)

その値段シールには¥七〇〇〇の文字が書かれていた。
(そんなにするのか！)

俺は手に持っていたパズルの箱をそつと棚に戻した。

「どうしたの、買わないの？」

「いや…高くて…」

俺の言葉を聞いて彼女も値段を確認した。

「こんなにするの？」

「みたい…」

本気で欲しかったのだが諦めた。

「ねえ、これ見て」

今度は朝倉が何かを見付けて言った。

「マグカップ？」

「このデザイン可愛い」

猫のイラストが入ったマグカップを片手に喜ぶ朝倉。

「ふ〜ん」

俺はそのマグカップが置かれていたであろう棚を見た。すると同じデザインの色違いの物が置かれていた。俺はそのカップを手に取り、

「よしっペアで買おう」

「え!？」

俺の提案に朝倉は少し驚いている。

「嫌か？」

「いえ、そうじゃなくて…ペアで？」

「ああ、それピンクだろ。こっちは青いからおそろいじゃん」

「良いの？」

「ああ、俺が買ってあげるよ」

「でも…」

「大丈夫。あのパズルは買えないけど、このマグカップくらいは大丈夫だから。さ、貸して」

俺が手を差し伸べると彼女は持っていたマグカップを渡してくれた。

「ありがとう…」

嬉しそうにそう言う朝倉を見ると俺も嬉しい。こんな物で喜んでくれるんだ。

#九五 文化祭・回想二

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

店を出て、俺はピンクのマグカップを彼女に手渡した。

朝倉はしばらくそのマグカップを包み越しに眺めていた。その光景に俺は幸せを感じていた。

時刻は午後六時三〇分。人は多かったが、結構な時間を雑貨屋でつぶせた。

「これで良い？」

「うん」

近所のファミレスの前で俺は訊ねた。

「いらっしやいませ。お二人様ですか？」

店に入ると同時に女性店員が迎えてくれた。

「おタバコはお吸いですか？」

「え？」

学生服を着た俺たち二人には全く無縁の質問を投げ掛けてきた！

「いえ…」

「ではこちらへどうぞ」

言って店員は禁煙席に通してくれた。しかし今の質問は天然なのか？それともいつもの流れからつい出た言葉なのか？…？そんな事を考えながら案内された席に座った。

「ご注文の方お決まりになりましたら、そちらのボタンで呼びください」

そう言って店員はメニューを二つ置いて去って行った。

「さて、何にしようかな…。朝倉も好きな頼んで」

「本当に良いの？」

「いいって、たまにはね。それにここ安いし」

「でも、もうマグカップ買ってもらったし…」

「気にするなって、ね、何でもいいから言って」

「…うん」

・ ・ ・ ・ ・

注文を終え、二人でドリンクバーのジュースを啜っていると料理が来た。

「あゝ腹減ったゝ良く考えてみたら、朝から何も食ってないからなあ」

俺は注文したダブルハンバーグセットにナイフを入れた。このファミレスは味に拘らなければ安くて学生のサイフには持ってこいの店。

「いただきます」

「あ、朝倉はここ初めて？」

「うん」

「あんまり味には期待するなよ」

「え？」

「値段相応の味だから」

それを聞いた朝倉は恐る恐る自分の注文したドリアンを口に運ぶ。

「・・・・・・」

「どう？」

「え？おいしいわよ」

「良かった、お嬢様のお口に合って」

「ちよっと、なによその言い方」

「ハハハ」

「ねえ」

「ん」

「明日の朝、起こしてあげようか？」

突然朝倉が言った。

「どうした？」

「今日のお礼に、もし良かったら…明日の朝ご飯私につくらせて欲しいなって…」

「え！」

一瞬朝倉の言っていることが理解できなかったが、直ぐにピンときた。

「それって、今晚は俺の家に泊まるって事？」

「ううん！」

俺の的外れな質問に朝倉は慌てて首を振った。

「そうじゃなくて、私が明日の朝あなたの家に行ってつくりたいなあって…」

「あゝそういう事ね。良いよ」

「本当？」

「ああ、明日は姉キも家に居ないからちょうど良いよ」

「じゃあ、明日行くね」

「うん。そうだ、鍵渡しとくから勝手に入ってきて」

そう言っただけはポケットから家の鍵を出し、朝倉に渡した。

「え！でもそれじゃあ今日はどうやって家に入るの？」

「ああ、大丈夫、スペアキー持ってるから」

言っただけ、今度はサイフからスペアキーを取り出し彼女に見せた。

「前にここに鍵入れたままにしてたから」

「へ」

その後ファミレスで少し談笑し、朝食の材料を買って家に帰った。
・。

#九六 文化祭・誰へ？

「ご、ごめん！」

昨日の出来事を思い出し、真っ先に朝倉に謝った。すると彼女は「くすっ」と笑い、

「大丈夫、気にしないで」
言った。

彼女の笑顔に安堵感を覚えたと同時に新たな不安に駆られた！
それは見ていた夢が夢だけに：さらに夢を見ながら朝倉を抱きしめていた！もしかしたら寝言を言ってしまったっていなかったのか！それが心配になってきた。

「じゃ、朝食つくるね」

俺の不安をよそに朝倉はキッチンへと移動しようとしている。

「待って！」

その朝倉を思わず呼び止めてしまった。

「ん？」

振り返る朝倉。

「その：俺：何か言ってなかった？起きる前に……」
すると、朝倉は赤面しながら、

「：部屋に入ったら：いきなり好きだって……」
（やっぱ寝言をいってたのか！）

全身に鳥肌が立つのを感じながら、めっちゃくちゃ恥かしくなってきた！

「：ねえ：訊いてもいい？」

今度は朝倉が質問してきた。

「へ？うん……」

改めて確認されるのかと思うとドキドキする。

「あれって、誰に言ったの？」

「え？」

「舞衣？でも、妬けるなあ…」

どうやら名前までは言っていなかったのか、聞かれていなかったようだ。何となく安心した俺は、

「ハハハッ何だったかなあ…忘れた」

何とか誤魔化すことに成功した・・・のか？

#九七 文化祭・二日目

十数分後。

昨日帰りに食材を買っていたので手際よく朝倉が朝食を造ってくれて、それがテーブルに並んだ。

「あゝ、こんなに朝早く起きたのっていつ以来だろ…」

朝倉が調理してくれている間に俺は顔を洗って来て、パジャマのままだがリビングのテーブルに着いた。

「え！いつもは何時に起きるの？」

七時五分を指している時計を見ながら朝倉が言った。

「んー、七時半から八時の間」

「それで間に合うの！？」

「おう、飯食わないからな」

「はあ…」

呆れながら朝倉も席に着いた。

テニス部時代は朝練もあったから結構早くに起きていたのだが、こうして考えるとかなりぐうたらな生活になってしまっているのだと実感した。

よくよく考えると、今日朝倉は何時に起きたのだろう…。単純に考えても六時前か？

・ ・ ・ ・ ・

「ご馳走様。おいしかったよ」

「お粗末さまでした。さ、用意しましょ」

言って朝倉は支度を始めた。
ほとんど会話する間もなく朝倉との朝食の時間が終わってしまった。

・ ・ ・ ・ ・

「おう、早く着いた」

のんびり歩きながら登校したのにいつもより三〇分も早く学校に

着いた。余裕があるというのは良いものだ。しかも今日の登校中の時間は楽しかった。朝食中に会話を楽しみたかったのだが、時間がなくて二人とも黙々と食していた。その反動でわざとゆっくり歩いて会話を楽しんだ。

「じゃ、また後でね」

校門で朝倉と一旦別れた。そういえば朝倉と一緒に登校するのはこれが初めてか。

しかし未だに学校内で彼女の一緒にいる事が出来ずにいる…。いい加減人目を気にするのは止めたいと思っている…。

大人の目もあるから学校内でオープンに交際するのもどうかと思うが、彼女の気持ちを考えると今の状況は絶対に駄目だと解かっている。

校庭で三年が模擬店の準備をしているのを横目に見ながら校舎に入り、教室へむかった。

「ういゝす」

教室に入ると既にウチのクラスの準備は終わっていた。昨日はもつと時間が掛かってたが。

喫茶店用のレイアウトに並んだ椅子に座り、時間が来るまでぼーっとして過ごした。

その間亜津と話をしていた。

途中で朝倉が教室に入ってきた。どうやら調理室の準備を手伝っていた様だ。その時彼女と目が合い今朝の夢を思い出してしまい急に恥かしくなった！それを亜津にバレない様に必死に振舞った。

#九八 文化祭・期待感

「柊、行こうぜ」

豊が声を掛けてきた。昨日と同じように皆が登校したところで朝のミーティングが行なわれ、それぞれ今日仕事があるもの、自由に文化祭を廻る者と分かれていく。

俺は演技部の映画『モーニング・ムーン』を観るために豊、月島、そして朝倉と視聴覚室へ行った。

「あゝ楽しい」

朝倉が言った。

「あれ？舞衣には何も聞いてないのか？」

「うん、真っ白な状態で観たかったから。それにこの前去年の話をあなたと舞衣から聞いて余計に楽しみになったわ」

あの時の会話か…。あれで朝倉にとってハードルが高くなっていなければいいのだが…。

「何？知り合いが出てるのか？」

俺と朝倉の会話に豊が入ってきた。

「うん…妹がね…」

それに朝倉がテレながら答えた。

「へー、麻梨子の妹が出てるの！」

月島も驚いている。

「朝倉って妹居たのか？」

豊が訊ねる。

「うん、居るよ」

答える朝倉。

「そうかあ…」

そう言う豊。俺はその一瞬浮かべたいやらしい表情を俺は見逃さなかった！

（コイツ何考えてるんだ！？）

急に俺は何故か恐怖心を覚えた…。

「結構並んでるんだな…」

今日二回目の上映だが、視聴覚室の前にはもう既に数十人が列を作っていた。

「ま、俺たちは前売り券があるから何人並んでようが問題ないけどな」

豊が自分の手柄のように得意げに言った。

「ねえ、どんな内容なの？」

月島に訊ねられたが、

「いや、観てからの楽しみだと思って何も知らないんだ」

「ふーん。麻梨子も？」

「うん」

「前売り券を持ってる人はこちらにどうぞ」

演技部員らしき生徒が違う入り口の前で叫んでいた。

#九九 文化祭・上映前

「あっちか」

呼んでいる方の列に並ぶと前に並んでいるグループの会話が耳に入った。

「この映画、昨日カズが観たって言ってたんだけど、ヒロインのコめちゃくちゃイイ感じらしいぞ!」

「イイ感じってどんなよ?」

「カワイイし、本物の女優みたいだったって」

「マジ!そんなにカワイイのかよ?」

「あんなコがウチの学校に居たのかってアイツ驚いてたぞ」

「早く観てえ」

等と言っている。

「ヒロインって…」

「舞衣の事よね…」

それを聞いた俺と朝倉は驚いた。それを見ていた後ろに居る豊と月島も驚いている。

少しして前の回の客が視聴覚室から出てきた。その客(生徒)たちも口々に。

「ヒロインのコ最高だな」

とか、

「マジ、カワイイ!」

等、男共だけでなく。

「私もあんなふう撮られたーい」

と、女子にも好評な様だ。

もちろん舞衣に関する賞賛の声だけではなく、映画自体も好評の様だ。

そしていよいよ俺たちの番になった。

「柊さん、待ってましたよ」

部屋に入ると柄沢がモギリをしていた。

「十分堪能させてもらうぞ」

俺がそういうと柄沢は笑顔を見せて、

「自信はありますよ！」

言った。

その表情を見た俺はますます期待感が強くなった。

「ここだな」

自分たちの席を見付け辺りを見渡すと、先刻出てきた前の回の客も多かったが、この回も満席になりそうだった。

「寒くない？」

人が多いからか？すこし強めにエアコンが効いていて、肌寒さを感じたので自分のブレザーを朝倉の膝に掛けてあげた。

「ありがとう」

『それではこれより演技部の催し、映画モーニング・ムーンの上映を開始します。開始にあたりまして』

演技部の鑑賞中の注意放送が始まった。

「なお、この回の上映終了後、演技部の挨拶がありますのであわせてお楽しみください」

「そんなのがあったのか？」

豊が訊いてきた。

「いや、俺も今知った」

（だから舞衣も柄沢もこの回を勧めてくれたのか）

アナウンスが終わると室内が暗転し、映画が始まった。

#100 文化祭・違う雰囲気

一時間一五分後、映画が終わった。

去年はコメディ作品だったが、今年のは真面目な恋愛作品だった。

『グスッ』『ズッ』

終盤からはそこらじゅうで、感動のすすり泣く声が聴こえていた。隣に座っている朝倉も感動している様だ。俺は持っていたハンカチを手渡した。

「由実」

隣で豊が小声で名前を呼んだ。どうやら月島らしい。

エンドロールが終わり部屋が明るくなると、出演者である演技部員が壇上に姿を現わした。

途端に視聴覚室に居る観客がスタンディングオベーションで彼等を迎えた。

部長の柄沢を筆頭にそれぞれ役名と共に自己紹介をしていく。そしてヒロインを演じた舞衣の番になると一際大きな歓声が視聴覚室に轟いた！

その光景に舞衣は恥かしそうにしているが、堂々と自己紹介をした。

「あの子が麻梨子の妹？」

「ええ…」

月島が朝倉に訊いている。

「カワイイなあ」

豊が言った。

「……………」

さっきの嫌な予感が的中した…。

今日の前に居る舞衣は普段俺が知っている舞衣ではない様な感じがした…。

今騒いでいる観客達はスクリーンに映し出された舞衣に魅力を感じ

じたのだろう。その魅力を引き出したのは間違いなく監督を務めた柄沢だと俺は感じた。

昨年以上に柄沢の凄さを見せ付けられた。

「もちろんあのコと知り合いなんだろう？」

映画と演技部の挨拶が終わり視聴覚室を出たところで豊が小声で訊いてきた。あのコとは舞衣のことだろう。

「ま、まあ……」

俺と舞衣の関係を考えると何故か俺も声を下げて返事をしてしまった。

「じゃあ、そろそろ行こうか？」

月島が豊に言った。

「え？」

「私たち午後からウエイターでしょ！」

「あっそうか……あゝめんどくせー」

「じゃあ私たち行くから。あとはお二人で」

言って午後からの接客のために、月島は半ば強引に豊を連れて教室へ戻っていった。

「じゃあ、行こうか」

二人を見送った後、朝倉に言った。

「うん」

#101 文化祭・高鳴り

・ ・ ・ ・ ・

しばらく朝倉と二人であちこちの催し物を見て廻った後、テニスコートのある丘の木陰に腰を落とした。

文化祭のメインは校舎と校庭、中庭に体育館でおこなわれているため、それらから離れたこの場所に人が来ることはなく背中に覆い被さる山から秋の風が吹き降ろされてきた。

校舎の方から微かに聞こえてくる文化祭の喧騒がなんだか過去の出来事のように感じる。

「ふう：これだけ一気に廻るとさすがに疲れるな」

「そうね」

テニス部の見学のために置いてあると思われるベンチに腰掛、念願のホットドックを食べようとした。

「はい、あゝん」

俺は自分のホットドックを食べようと準備していると、不意に横から朝倉が言った。

「え！」

満面の笑顔をした朝倉が彼女のホットドックを俺の口元に差し出していた。

「えゝ！」

「はい、あゝん」

朝倉は再度満面の笑みで言った。

妙に照れくさく凄く恥かしい！が、俺は彼女の差し出してくれたホットドックを一口食べた。

「ちゃんとあゝんって言わないと」

「むんもうんっ！」

さらに彼女は恥かしいリクエストをしてきた！

「はいもう一度、あゝん」

これは朝倉の言うとおりにしないと終わらないと悟り、急いで口の中のホットドックを飲み込み、

「あ、あゝん…」

「うふふふ、カワイイ」

最後の朝倉の言葉が一番恥かしい！

（くそくそ！）

一緒に買ったコーラで口の中を片付けると、今度は俺のホットドックを彼女に差し出し、

「はい、あゝんして」

俺の恥かしさを朝倉にも認識させようと、同じ事をやり返したのだが。

「あゝん」

朝倉は待つてましたとばかりに俺の差し出したホットドックを一口食べた！その朝倉を見ていると逆に俺がまた恥かしくなった。

「う、うまいか？」

「うん、あなたが食べさせてくれたから」

「ッ！」

「んんん！」

あまりにも悔しいので、まだもぐもぐしていた彼女の頬に無理矢理軽くキスした。

「もう！いきなり」

「なんか悔しかったから…」

本気で怒ってはいないであろう彼女と目が合った瞬間、今朝の夢を思い出した！

すると自分の鼓動が激しく脈を打ち始めた！思わず彼女から目を逸らそうとしたができなかった。それどころかますます鼓動が強くなる！

先刻スクリーンに映し出された舞衣を覗いていた時もドキドキしていた。でもその時とは異質な鼓動が俺を襲っている！

#102 文化祭・正直に…

(もしかして、これが…)

その時、

「どうしたの？」

朝倉が不思議そうに声を掛けてきた。

「あ？あ！別に…」

「そう？」

俺は慌ててコーラを胃に流し込んだ。

危ないところだった！もう少しで朝倉を抱きしめるところだった。

「まだホットドック残ってるよ。はい、あ〜ん」

朝倉が三度目の“あ〜ん”をせまる！

「なっなあ、豊たちの働きぶりでも見に行こうか？」

これ以上この二人しかいない空間に居ると、俺自身何をしでかすか判らなくなりそうだったので移動を促がした。

が、

「う、うん…でも出来れば私…このまま二人きりで居たい…誰にも邪魔されない場所で…」

朝倉は拒否した。

正直俺もこのまま二人きりで居たいと思っていた。その正直な気持ちに素直になり、そのまま彼女の横に座り直した。

どちらともなく唇を求め合う…。

「こっち…」

このままこの場所でも今日は人が来ないとは思うが、俺は彼女を連れて立ち上がった。

コート整備の用具が入れてある物置の影で二人は愛のダンスを始める…。

#一〇三 文化祭・気付きかけた気持ち

「びえつくしょんっ」

「きゃ!…だっ大丈夫?」

乱れた制服を正していると不意にくしゃみが出た!

「大丈夫:ちよっと寒いなあ」

「ごめんなさい:こんな所で:私」

「いや、俺だってその:」

情事の跡を見返すと恥ずかしくなる。

「ちよっと罪悪感:」

「!ッ何が?」

急に朝倉が言った言葉に驚く俺。

「学校で:こんな事って:」

「って、やっちゃった後に:」

「そ、そうよね:それに昨日、ちよっと期待しちゃったてたし:」

「あっ朝倉:」

いきなりの赤裸々告白!

「だっ誰にも見られてないよね?」

急に不安そうな顔になる朝倉。

「大丈夫!」

「絶対?」

「絶対!」

何とか彼女を安心させたかった。

「.....」

「.....」

二人が同時に沈黙した。

俺は先刻までの光景がフラッシュバックした。もしかして朝倉もそうなのか?

急に静かになると、校舎の方から文化祭の喧騒が良く聞こえる。

その音が耳に入ってきた瞬間、現実を引き戻される。今俺たちは文化祭が行われている学校に居るという現実。

「そ、そろそろ行きましょう」

「あっああ」

朝倉も俺と同じく現実を引き戻されたかのように言った。

「ねえ」

「ん？」

「校舎に戻るまで、腕、組んでも良い？」

「ああ」

「ありがとう」

今、俺が感じているものが本当の自分の感情なのだろう。

明日は文化祭最終日。一日中体育館で生徒会が用意した余興と、一年生による舞台演出を見ることになる。

#一〇四 文化祭・最終日

「おはようすっ」

今日は文化祭最終日。イコール、俺たち三年にとっては文字通り最後の文化祭の日。

前日まで喫茶店として稼動していた自分の教室。まだほとんど片付けをしていないため、教室内は昨日までの喫茶店の名残を色濃く残している。

「あゝ、今日はだりいゝなあ」

豊が心底気だるそうに言った。

今日三日目は体育館で全体イベント。自由観賞のバンドコンテストから始まり、強制鑑賞の一年による舞台発表と生徒会が企画した余興が今日のメイン。一日中体育館のパイプ椅子に座らされ、興味の無いものを強制的に見させられる…。

「バンドコンテストどうする？」

豊が訊いた。

「あゝ、今年は知り合いもないしなあ…。適当に流すか？」

「そうだな」

ウチのクラスは三日目は店を出さないが、他のクラスの模擬店は午前中営業しているとところもある。

「じゃあ、適当にウロウロするか？」

豊が言った。

「そうだな」

「朝倉は？」

「今日は水野と廻るって」

「そっか、俺も由実を誘おうかと思ったけどやめとくか」

「大丈夫か？」

「大丈夫だろ」

言いながら豊は向うに居る月島に目配せした。

「亜津たちも誘うか？」

「そうだな」

こうして俺は、豊、伴城、亜津の四人で適当に午前を過ごした。

#一〇五 文化祭・終了

「やっぱり今年も寂れてるな」

「ま、しゃーねーよな」

人影がまばらな校舎内を歩きながら俺たちは会話している。

三日目の最終日は、体育館でのイベントがメインの一日。

午前中は有志のバンドコンテストが行われていて、生徒の鑑賞は自由。我が校の文化祭で唯一バンドのメンバーとしてなら部外者が参加できるこのバンドコンテストは毎年かなりの盛況具合で、自由鑑賞だがほとんどの生徒が体育館に集まっている。

なので、校舎や校庭で行われている出し物に来る生徒の数は激減する。それを見越して最初から三日目は模擬店を出さない三年のクラスもある。ウチのクラスがそれだ。

「結局やってた模擬店って二店だけだったな」

豊が残念そうに言う。

「しかもあからさまに昨日の残りだったしな」

「そろそろ体育館に行くか？」

「そうだな。今からなら最終のバンドに間に合うか？」

「どうかな？」

という会話をしながら午後からの全体イベントの為に体育館に入った。

「あら？ バンドコンテスト終わってら」

「みたいだな…」

俺たちが体育館に入ると、舞台上ではバンドコンテスト様の機材の取り外しが行われている。

とはいえ先刻まで行なわれていたバンドコンテストの熱気が残っているのか？ 館内は少し蒸れているように感じられた。

（そんなに盛り上がったのか？）

そう思うと見ておけば良かったか？ と少し後悔した。

辺りを見回してみると、実行員が生徒たちにアンケート用紙を配っているのが目に入った。

一応コンテストという名目が付いているので、鑑賞した生徒たちにはアンケート用紙が配られ、それに各々気に入ったバンド名を記入する。

一番投票の多かったバンドにコンテスト優勝として何かしらの賞品が授与されているらしい。

そのアンケート用紙を持った実行員が俺たちの所にもやってきたが、見ていないものを評価できないので、丁重にお断りした。

「さあ、俺たちの席はつと…」

クラス分けたされたパイプ椅子に座り、正直どうでも良い一年生の舞台発表を観賞した。

途中、生徒会のサプライズでプロのマジシャンを招いてのマジックショーがあり、事前に生徒会が何の余興をするのか知らされていなかった事も加味してあれは楽しめた。

・
・
・
・
・
・
・
・

「結局今日はあのマジックだけっだな」

「そう？一年生だって今日の為に一生懸命練習したんだからそんな言いかたしちゃダメよ」

「練習したか？俺たちの時だって適当に歌いたい曲をやっただけだったぞ。カラオケみたいなもんだよ」

辺りはすっかり夕焼け色に染まり、下校時刻、朝倉と一緒に居る。今日は学校では一緒に居れなかったが、こうして一緒に帰れている事に嬉しさを感じている。

「午前中何してたの？」

朝倉が訊いた。

「特に何もしてないよ。豊たちとたこ焼き食いながらダベってた。朝倉は？」

「私は美夏と美夏がまだ廻ってなかった所を廻っただけよ…」
語尾がなんだか寂しそうだった…。

高校最後の文化祭。しかも最終日、出来れば朝倉と一緒に居たかった…。そう思うと最後の文化祭という事実が余計に胸に染みてきた。

「なんか…あっという間の三日間だったな…」

「本当ね…」

「一ヶ月近く準備して、たった三日か…」

空を染めるオレンジ色が今日はやけに濃く見えた…。

こうして高校最後の文化祭が終わった…。

#一〇六 あっけない結末

窓の外には深いブルーが広がっている。そのまま視線を落とすとまるで綿アメを敷き詰めた様な白い絨毯が広がっている。

俺は今国際線の飛行機に乗っている。香港から日本への帰国便だ。「センパ〜イツ、お菓子食べませんか？」

後ろの席から広瀬由比が話しかけてきた。

「いや、もう寝るからいいよ…」

「えゝ、寝るってあと二時間もすれば着きますよ」

「それでも寝るんだ」

「えゝ」

「うるさいぞ広瀬っ！他の乗客にも迷惑だぞ」

なかなか引き下がらない広瀬に俺の横に座っている引率の男子テニス部顧問越村先生が一喝した。

「はぁゝい…」

渋々黙った広瀬。

「それにしても残念だったな」

続いて先生は俺に言った。

「何がですか？」

「試合、したかっただろ？」

「いや、逆に恥さらしにならなくて良かったですよ。練習不足で」

「そうか？体育祭を見る限りそこまで落ちてる様には見えなかったぞ。それに初日の練習の時も注目集めてたしな」

「そう言ってくれるのは嬉しいっすけど…」

俺と広瀬はアジア高校テニス交流で香港に行っていた。だが、予定より一日早く帰国の途に着くことになった。

昨日香港入りして、昼間に合同の軽い練習があった。

その後、夜にはウェルカムパーティと題されたセレモニーがあった一日目が終了した。

そして明けて今日。本来なら今日、明日と各国の選手と試合が予定されていたのだが、今日は朝から豪雨に見舞われてしまった！

最初の数時間はその雨が止むのを待っていたが、全くそんな気配はなく、今日の試合は全て中止に。それだけではなく、天気予報ではこれから台風が来るとかで、明日は今日の豪雨がより強くなって降り続くという予報で、スケジュールの都合から予定されている試合の消化が不可能と判断され、今回の交流戦自体が中止に。

帰国便の欠航の可能性も出てきたため、今日の最終便で日本へと飛ぶことになった…。

せっかく香港まで来たのに結局なにもせず、しかも観光など全く出来なかった。飛行機が予定より数時間遅れたため、空港内をブラブラしただけだった。

その時広瀬がここぞとばかりに…。

広瀬への対応はテニスの試合より疲れるかもしれない…。

ともかく、今は無事飛行機で日本へ向かっている。

明日は学校を休んでも良い事になっているが、家に居ても暇なだけなので行こうと思っている。

とかなんとかで飛行機は順調に俺たちを日本へと運んでくれた。

#一〇七 驚かれる登校

翌日。

「いやゝ、日本は快晴だねえ」

俺はキャラに無い陽気さで登校した。目の前に居る豊とトモは啞然として、

「ってか…何でお前が居んの？」

「負けてから帰って来たのか？」

豊に続きトモが言った。

「じつは、しかじかかくかくでゝゝ」

俺は事の顛末を話した。

「なんだそりゃ。拍子抜けもいいところだな」

呆れながらトモが言った。たしかに今回の事に関しては拍子抜けな事ばかりだ。

「で、時間が無かったからたいして買い物できなくてさ」

俺はキーホルダーを二人に手渡した。

「お！おみやげあんの？サンキュー」

おざなりな土産にも二人は喜んでくれた。

「あ、豊、わるいけどこれ月島にも」

豊にもう一つキーホルダーを渡した。

「あれ？亜津は？」

俺は教室を見渡しながら言った。

「ああ、亜津は受験勉強で休んでるよ」

「あっそうか…」

豊の言葉で実感した。俺たちは本来受験生なのだと。この学校に居るとまったく実感が無いが、もうそんな時期なのだと…。

「でもよお、昼から来るんだったらいつそ休めば良かったのに」

そうなのだ、登校したといっても今はちょうど昼休憩なのだ。昨日飛行機が遅れて、日本に着いたのが深夜で結局今朝は寝坊してし

まった。

「ま、家に居ても暇なだけだからな…」

「あれ、柊君…」

豊たちと話をしていると、食堂から戻ってきたらしい朝倉が声を掛けてきた。

朝倉もどうしてここに居るの？という表情をしている。

「あ、予定より早まって…」

#一〇八 お呼ばれ

「…そうだったの？」

「大変だったよ」

やっぱり午後から登校すると学校が終わるのが早い。

というわけで今は下校中。もちろん朝倉と一緒に。帰りながら朝倉に今回の顛末を説明した。

「そうだこれ、おみやげ。大した物じゃないけど…」

言って、朝倉に空港で買ったペンダントをプレゼントした。

「ありがとう…」

朝倉はそれを手に取り、目の高さで眺めながら言った。

「ねえ、この後暇？」

朝倉が嬉しそうに訊いた。

「うん…」

「お礼に夕食をご馳走するね。それに舞衣も喜ぶだろうし」

「あ、ありがとう…」

朝倉の好意は嬉しいが、なんだか舞衣と会うのは恥かしい気がした。文化祭の演技部の映画が原因だろうか？

とか何とかで朝倉の家に着いた。

「ただいま。舞衣？」

玄関に置いてあった舞衣の靴を確認して、朝倉が言った。

「お帰りお姉ちゃん…先輩！」

俺の顔を見た舞衣が驚いた。

「おじゃまします…」

「今日は早かったのね」

「うん、文化祭が終わって部も暇だから」

しばらくリビングで朝倉と舞衣のやりとりが続いた。

#一〇九 思いがけない約束

「さて、私は着替えたら夕飯の支度しないといけないから」

「あ、手伝うよお姉ちゃん」

「大丈夫よ、そんなに手の掛かる物じゃないから。話してて」

話しててとはどういう意味なのか？朝倉はそう言うのと、そそくさとリビングを出て行ってしまった…。

僅かな沈黙の後、

「あっそうだ、これ。香港のおみやげ。安物で悪いんだけど…」

言って、俺は鞆から舞衣へのおみやげを手渡した。

「え！ありがとうございます…。香港って…？」

「あれ？聞いてなかった？実は昨日までテニスの交流戦で香港に行つてたんだ」

「へー、そうだったんですか。結果はどうだったんですか？」

「いやそれが大雨で中止になって、一試合もしてないんだ…」

「あ…残念です…」

トーンダウンしながら俺が渡したみやげに視線を落とした。舞衣にはブレスレットをプレゼントした、ちなみに朝倉のと同じブランド品だが、値段は安い…。

「文化祭の映画…良かったよ、今頃だけど…」

「あ、ありがとうございます…」

不意に言われたからか？少しテレながら舞衣は続けた。

「最初の一、二回目の上映は恥かしかったんですが、だんだん慣れてきました。でも先輩の観ている回はすごく緊張しました」

最初とは打って変わり饒舌に話す舞衣。

「ハハハっ」

そういえばこうして舞衣と話すのは久しぶりだ。でも以前のそれとはどこか違う感じがする。

「正直、お姉ちゃんが羨ましいです…」

急に舞衣が小声で言った。

「え！」

つられて俺も小声で聞き返した。

「お姉ちゃんはいつも先輩と会えるんですね？」

「え？…まあ、同じクラスだから」

「でも私は、こうしてお姉ちゃんが家に連れて来てくれる時にしか会えないんです」

「！」

「私だって、先輩の事好きなんですよ」

（ドキッ！！）

いきなり舞衣にストレートに“好き”と言われて思い切り焦った！

「先輩！」

「ハイ」

何かを決断した様な口調で舞衣に呼ばれた！

「今度の日曜、暇ですか？」

「え！いや、特に用はないけど…」

「じゃあ、デートしてください！」

「ええ！」

舞衣の申し出に思わず大声を出してしまった！

「どうしたの？」

俺の叫び声が聴こえたのだろう、朝倉が言いながらリビングに戻ってきた。

「お姉ちゃんちょうど良かった。日曜日に先輩とデートして良い？」

舞衣に言われた瞬間、真っ先に頭に浮んだのが朝倉だった。朝倉に内緒で舞衣の申し出を受けてしまっただけなのに？と。でも、舞衣はそんな俺の思考を見透かしたように自ら朝倉に許可を申し出た。

「…もちろんよ」

一瞬口籠った様に感じたが、朝倉は笑顔で言った。本当は拒否したかったのだろうか？彼女の真意は俺には窺い知ることが出来ない。「お姉ちゃんの許可は得ました。先輩、お願いします」

思わず朝倉を見てしまった。しかし彼女はそれを意に介していない様だった。

「分かった…」

「本当ですか？」

「ああ…」

（ごめん、朝倉）

言葉に出来ない懺悔を朝倉に向けた。しかし朝倉は既にキッチンで夕飯の支度を開始していた。

#110 再現

「お待たせ…」

少しして朝倉がリビングへカセットコンロを持って戻ってきた。

「お姉ちゃんもしかして今日はお鍋？」

「そうよ、今日は寒くなったから」

「やった！今年初めて」

朝倉が夕食の支度をしている間、舞衣とのデートのプランを話していた。

朝倉公認とはいえ、俺は後ろめたい気分だった。でも次第に、そんな気であること事態二人にとって失礼な事ではないか？そう思えてきた。

「ごめん舞衣、ちょっと取りに来て」

「はあーい。あ、先輩は座っててください」

立ち上がろうとした俺に舞衣は言いながらキッチンに行った。

（そうだな）

俺はもう考えない事にした！それが二人にとっても良いことだろうと自分に言いきかせて。

舞衣が持ってきた土鍋には既にだし汁が入っていた。それをカセットコンロに置き、火をつけた瞬間、

（あれ？）

コンロの熱気に乗って漂ってきた覚えのある香り…。

「朝倉、これって」

「そうよ」

俺が続きを言う前に朝倉が言った。

「だよな」

「何？」

俺と朝倉の会話に舞衣が困惑気味訊いた。この時の俺の思考にはもう先刻の自問自答はなくなっていた。

「この味付け」

「舞衣、食べてみれば分かるわよ」

俺が説明しようとしたが、朝倉がそれを阻止する様に言った。
「??」

ますます困惑する舞衣。

朝倉は下準備していた材料を手際よく鍋に入れて蓋をした。

「あと5分」

「どんな味付けなんだろう、楽しい」

ぐつぐつ煮たってゆく鍋を見つめながら舞衣が言った。

・
・
・
・
・
・
5分後。

「どうぞ」

言って朝倉が鍋の蓋を開けた瞬間リビングに湯気が広がった。

「んゝ良い匂い」

舞衣は待ちきれないという表情だ。

「鍋好きなのか？」

「え！」

舞衣の表情を見ると、自然と質問してしまった。俺の質問に
恥ずかしそうにする。

「そういえば、冬になると結構お鍋をせがむわね」

「お姉ちゃん！」

「どうやら好きな様だ。」

「はい、どうぞ」

「サンキュー」

朝倉が取り皿を渡してくれた。

「いただきます」

一番最初に鍋に箸を付けたのは舞衣。

「あれ？いつもと味が違う…」

「どう？」

「おいしいけど…」

「これね、柊君のお姉さんに教えてもらったの」

「え！先輩、お姉さんが居たんですか？」

「居たみたい…」

「どう、再現できてる？」

今度は俺に投げかけた朝倉。

「いや、実は姉キ鍋って、あの時初めて食ったからどうとも言えないんだけど…」

「そうなの？」

「ああ、姉キ普段家で料理なんかしないから、あの時だってどんな物が出てくるのかドキドキもんだったから」

「そうだったんだ…」

「でも、姉キの味付けの基本はウチの味付けだから、この味は再現できてると思うよ」

「良かった」

「………」

その時、少し寂しそうに鍋を突いている舞衣が視界に入った。

#111 舞衣との初デート

「あつごめん…遅くなって…」

「いえ、私もさっききたところですから」

今日は舞衣と約束した日曜日。駅で待ち合わせしてたのだが、事もあるうに少し遅刻してしまった。舞衣は笑顔を見せてくれていたが、絶対にかんりの時間待っていたはずだ…。

俺と舞衣は軽い挨拶を済ませると、そのまま電車に乗り込んだ。

舞衣と二人だけで会うのは初めてではない。以前下校中に会って、そのまま一緒に買い物をした事があった。しかし今回の様にどこかに二人きりで出掛けるのはこれが初めてだ。

前日までは今日の事を考えると緊張するだろうと思っていたが、実際には緊張感は無かったが、やっぱり普段の自分ではない部分が出ているだろう。

それに朝倉への背徳感…。朝倉の前で舞衣と今日の約束を交わしてからの数日間、朝倉とはいつも通り顔を合わせ、これまで通り接していた。すくなくとも俺にはそう思えた。でも今日の事を彼女は良くは思っていないだろう。

多分舞衣にもそんな部分は一切見せていないだろう。

車窓からは秋晴れの青空が広がっている。そして横には朝倉舞衣が居る…。

五月の時点では想像もしなかった事が今現実のものになっている。あの時の気持ちのままなら、この今の状況は天にも昇るほど嬉しいだろうが、今の俺の気持ちはあの頃とは全く違う…。僅か半年でここまで変わってしまうのか？と自分でも困惑するくらい。

「今日はよろしく願います」

改まった言い方をする舞衣。それが妙におかしくて。

「ふっ…」

おもわず吹きだしてしまった。

「ごめん、そんなに改まらなくても」

舞衣の緊張を解すために言ったのだが、

「すいません…」

先より低い声になってしまった舞衣。どうやら余計に緊張させてしまったかもしれない…。

『舞浜く舞浜く』

「おっ着いた」

舞衣の行きたい場所ということで、初デートは超有名な遊園地にやって来た。

「久しぶりだなあ」

ゲート前のチケット売り場を前にして舞衣がいつもの口調で言った。どうやら電車内での緊張感はなくなった様だ。

早速フリーパスを購入して中に入った。

俺自身もここに来るのは中学の遠足以来。住んでいる県にあるという事でいつでも来れるという気持ちに逆足に足を遠ざけている。

今日は日曜という事もあり園内は人でごった返していたが、そんな中を舞衣と夜までしっかりと過ごした。

朝倉にも『舞衣という時は舞衣のことだけをかんがえろ』と言われた。俺はそれを実行した。

・
・
・
・
・
・
・
・

「今日はありがとうございました」

帰りの電車に乗り込むと、舞衣が言った。

「え！いや、ことらこそ…」

突然の舞衣のお礼にたじろいた。

「でも、人が多くてあまり動けなかったなあ…」

「私は楽しかったですよ」

「え、マジ？」

「ええ、待っている間先輩とたくさん話しが出来て、すっごく楽しかったんです」

そう話している舞衣の顔は本当に楽しそうだ。

「そう？なら良かったよ」

「また先輩の魅力を知りました」

「え？」

「ふふふ…」

舞衣が最後に見せた笑顔が強く心に残った。

俺達と同じ場所で楽しい時間を過ごしたであろう多くの人が乗り合わせた電車がそれぞれの住む場所へと運んで行く……。

俺の朝倉への姉妹の思いも一緒に乗せて。

一二 勉強会

ついに一二月に入った。一年の最後の月。そして俺たちの高校最後の二学期も終わる月。

街は俄かにクリスマスモードに移行しつつある。

しかし学生にとってはその前に苦しい事がある！

二学期の期末テストだ！

このテストでそこその点を取らないと冬休みは返上で補修授業！さらに地獄の三学期が待っている！

という悩みなんか多くの高校生にとってはなんて事ない悩みだろう。本来ならこの時期は受験という大きなものが間近に迫っているのだから……。それが無い分、俺は幸せだ。

それでも期末テストが俺にとって今一番の難敵である事は変わらず、この一週間一人で頑張っていたのだが限界を悟った。そんな折り、朝倉から『一緒に勉強しよう』と誘われた。俺は天から女神が降りてきてくれたと思い、彼女に甘えさせてもらう事にした。

これまでのテストでは朝倉に少し助言をもらうことはあったが、一緒に勉強するのは初めてだ。本番前日の一夜漬けだがやらないよりはマシなはず！

「おじゃまします」

下校途中、そのまま朝倉の家へおじゃましました。

・
・
・
・
・
・
・
・

「そろそろ休憩しない？三時間も経ってるし」

朝倉が言った。

「え？もうそんなに！」

朝倉の家に着くなり早速勉強を開始し、ノンストップで早くも三時間が経過したらしい。時計を確認すると午後七時を過ぎていた。

勉強でこんなに時間を忘れて集中したのは初めてだ！それもこれも朝倉のおかげ。彼女の的確な指摘が効率良くさせてくれた。

「はい、コーヒー淹れたよ」

「ありがとう」

朝倉が淹れてくれたコーヒーを飲みながら。

「でも、ごめんな」

「え？」

「俺の所為で君の勉強が止まって…」

「ううん。私は良いの。それよりあなたと二人で冬休みを過ごしたいから…」

「朝倉…」

朝倉の言葉に胸が熱くなった。

「あっそういえば、舞衣は？」

まだ帰ってこない舞衣の事が気になって訊いてしまったが、言うてから“しまった！”と思った！舞衣の事を気にしていると朝倉に思われてしまったかも！そんなつもりはまったくくないのに…。

「舞衣も友達の家で勉強会。毎回やってるわ」

朝倉が気軽に言ったので、少し安心した。

コーヒーを飲み干すと僅かな休息は終了し、再びノートとのにらめっこが再開された。

一一三 勉強会から合宿へ

・ ・ ・ ・ ・

「ねえ…」

しばらくして朝倉が口を開いた。

「ん？」

「今日だけじゃなくて…テストの間毎日こうして一緒に勉強しない？」

「え!？」

「へっ変な意味じゃなくて、一人でやってると煮詰まるじゃない？それに二人でこうしてると楽しいし…」

少し焦りながら言う朝倉が可愛らしい。

「こちらこそ、ありがたいよ」

「良かったあ。そうだ、どうせならその間うちに泊まらない？」

「っ!！」

どういう事なのか？一瞬解からなかった。

「いや、泊まるって…」

「だって毎日夜遅くまでウチで勉強して、そこから帰ると寝る時間が無くなるわ。あっ…ごめんなさい…あなたの都合があるわよね…」

女の子が二人しか居ない家に泊まるって…しかも今週ずっと…!

「いや、俺の都合は別に良いんだけど…」

「私はあなたと一緒に居たいの…」

(ドキッ)

「朝倉が良いなら…そうするよ…」

ここは断らないといけないところかもしれないが、本当に今の自分の成績を考えると藁にも縋る気持ちだ。背に腹は替えられない!俺は朝倉の好意に甘えさせてもらう事にした。決して下心から承諾したのではない!

でも、舞衣はどう思うだろうか?

「やったあ」

朝倉はこの通り喜んでくれているが…。

ひよんな事からテスト中朝倉の家に泊まることになった。

会話が一段落したところで再びノートと睨めっこするがしばらくその事が頭に残っていて、勉強が手につかなかった…。

一四 夜食

「ただいま」

午後一〇時を過ぎた頃、舞衣が帰ってきた。

「あっ先輩！こんばんは」

そのままりビングに入ってきた舞衣。

「こんばんは」

先刻の事を舞衣に話し、俺は自分家に着替え等を取りに帰った。

「了希、その鞆なによ？」

家に帰り、身支度をしていると姉キが言ってきた。

「え…、豊たちとテスト勉強の合宿！」

咄嗟に姉キに嘘を吐いた。

「ふうん、で、いつまで？」

俺の言葉に何の疑問も持たなかったのか？姉キはそのまま訊き返してきた。

「テストが終わる金曜まで」

「あっそ、あちらさんの迷惑にならないようにしなさいよ」

「分かってるよ」

なんとか姉キを誤魔化して、俺は自分の家を出た。

身支度といっても日中は学校に行くのだから、着替えは替えのYシャツだけ、あとはパジャマと洗面具しか用意しなかった。

再び朝倉の家に戻った。

「お帰りなさい」

玄関の扉を開けると同時に朝倉が言った。

「ただただいま…」

その朝倉につられ、思わず言ってしまった。その俺の言葉に彼女は笑顔になる。

「！」

リビングに入ると、いい匂いがした。

「まだ夕飯食べてなかったから、作ったの」

そういえば、夕食も食べずにテスト対策をしていた。

「急ぎで作ったから大した物じゃないんだけど…」

謙遜して言うが、十分立派な夕食がテーブルに並んでいた。

「舞衣」

リビングの出入り口から朝倉が舞衣を呼んだ。

「夜食するんでしょう」

「ハイ」

朝倉の料理を目の前になると今まで忘れていた空腹感が甦ってきた。

「食事したらどうする？」

「まだ自信が無いからもう少しやるよ」

「じゃあ、私も」

「ありがとう」

こんな俺に付き合ってくれる朝倉に心から感謝を告げた。

「お夜食なに？」

言いながら舞衣がリビングに入ってきた。

#一一五 テスト終了

・
・
・
・
・
・
・

「もうこんな時間だけど、どうします？」

「え？」

朝倉に言われてリビングの壁の時計を見た。時刻は午前一時過ぎ。俺と朝倉の夕食が済んだ後、途中まで舞衣も一緒に勉強していたのが、〇時を前に自室に戻った。今はもう寝てしまっているだろうか？

「んー、ここで寝るよ」

「え？」

「このソファーを使わせてもらおうから」

「私の…」

言いかけて止めた。

「舞衣が居るから…」

「そっそうよね…何考えてるんだろ私…」

「…」

「じゃっじゃあ、布団持ってくるわね」

「ありがとう」

（なんとか風邪ひかないようにしないとな…）

幸い、寝心地の良い高級オフアーだったので、朝までぐっすりと寝ることが出来た。

・
・
・
・
・
・
・

『キーンコーン カーンコーン 』』

（終わったー！！）

チャイムが鳴った瞬間、俺は心の中で叫んだ。

火曜から始まった二学期の期末テストが、今終わったのだ！

そして明日は土曜で学校は休み。そして待ちに待ったフロルドのライブに朝倉と行く事になっている。

・
・
・
・
・
・
・

「あっそうだ、ありがとう朝倉」

「え！」

学校の帰り道、俺は朝倉にお礼を言った。朝倉のおかげでなんとか納得のいく回答が出来た。あとはそれが点に結び付くのだが、自分を犠牲にしてまで俺に付き合ってくれた朝倉のためにも良い点を取っていなければならない！

だが、突然言われた朝倉は何の事か判っていないのか？驚いている。

「いや、朝倉が教えてくれたから、俺なんとか格好がついたからさ。ありがとう」

俺が言くと、朝倉も。

「ううん、私こそ。あなたとずっと一緒に居れて嬉しかったの…私の方こそありがとう」

そうこうしている間に、朝倉の家に着いた。

四日間、考えてみれば四日間も朝倉の所に泊まったのでかなりの荷物がある。それを取りに来た。

ちなみに勉強以外の事はしていないぞ！

一六 封筒

家に入る前にポストから郵便物を取り出した朝倉。その中の一つが『パラッ』と落ちた。

朝倉はそれに気付いてないので、俺はそれを拾い上げた。その際に宛名が目に入った。“朝倉 舞衣様”の文字。

「あっ一枚落ちたぞ」

「え！ありがとう」

朝倉がそれを俺から受け取ると、

「あら、舞衣に？」

朝倉はおもむろに封筒の裏を見た。

「エンタープロダクション？」

「！」

朝倉の言葉を聞いた瞬間どこかで聞いた名前だと思った。

「座ってて、何か飲み物入れるわ」

彼女の家のリビングに通された。

「あっ！！」

リビングのソファーに座った瞬間、さっき朝倉が言ったエンタープロダクションが何なのか思い出した！

「どうしたの？急に…」

俺が突然叫んだので驚く朝倉だが、それ以上に俺の方が驚いているだろう！

「エンタープロダクションって、芸能プロダクションだよ！ほら、新木由貴とか小釘純とかがいる！」

「ウソ！」

思わず絶句する朝倉！

「一体何だろう…気になる…」

興味津々の朝倉だが、その封筒を他の郵便物と共にリビングの棚に置いた。

「勝手に…開けちゃ、まずいでしょ？」

「ああ…そうだな」

言いながら、俺も何なのか気になっているのだが…。

「舞衣が帰ってきたら何なのか聞いてみましょう」

「いや、俺…その前に帰るよ…」

「え!どうして？」

「こういう場に他人が居るのはおかしいからさ…」

「他人って…あなたは…」

「いや、俺荷物だけまとめたらずぐに帰るよ…ごめん…」

「そう…」

悲しそうな顔をする朝倉…。

本当は俺だってあの封筒の中が何なのか知りたい!でももし、舞衣が芸能人になってしまったら…。そう思うと急に怖くなった…。

その怖さが何なのか?会えなくなる事への恐怖か?自分でも解からなかった。とにかく今は封筒の中身を知りたくなかった。

・
・
・
・
・
・
・
・

「ごめん…もう少し一緒に居たかったけど…」

俺は荷物をまとめ。玄関に立った。

「ううん、大丈夫」

「じゃ、明日二時に駅で」

「うん、気を付けて帰ってね」

「うん」

「あっ待って！」

朝倉が俺を呼び止めた。俺が振り返った瞬間、
『ちゅっ』

彼女は俺に抱きつき、口づけした…。

明日は待ちわびたフロルドのライヴだ。

一七 ライブ

『心の鐘を鳴らしてしてよ』

『今君と居る場所が想像と違ってよ』

『全てを失ったとしても、護りたいものはただ一つ…』

「君なんだよ…」

ステージで歌うフロルドに合わせて思わず口ずさんでしまった。
その時頭に浮んだのは…朝倉だった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

（あゝ、やっぱり良いよ）

俺は初めて生で堪能するフロルドに陶醉した。

（あっ！）

俺は楽しんでいるが、隣に居る朝倉はどうなのか！？

「どう、楽しんでいる？」

俺が訊くと。

「うんっ」

ニッコリと答えてくれた朝倉。

『輝き続けるんだよ…』

最後の曲が終わった…。

“ギュッ”

いきなり右手を握られた！

もちろん朝倉にだ！

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「あゝやっぱりフロルドは最高」

アリーナを出ると時刻は午後一〇時前になっていた。俺はライブ中に溜め込んだ想いを吐き出す様言った。

「クスッそうね」

そんな俺を見て軽く笑いながら朝倉が言った。続けて、

「ねえ何か食べましょ。チケットのお礼に私が奢るわ」

「え！いや、いいよそんなの」

「いいからいいから、ねっ」

言って、朝倉は俺の手を取って歩き出した。

一一八 封筒の真相

「いらっしやいませ、メニューをどうぞ」

慣れた手つきでウェイターがメニューを置いていった。

朝倉に連れられて一軒のレストランに入った。

看板にはファミリーストランと書いてあったが、結構高級そうな店構えに俺は内心ビビっている…。

「ここって、高いんじゃ…」

小声で朝倉に言った。

「え！そんな事ないわよ。見た目は高そうだけど値段は他とそんなに変わらないわよ。昔このチェーン店に家族で来たもの」

言って、メニューを開く朝倉。

「あ、本当だ…」

値段を見てホッとした俺…。しかし、俺ってつくづく小市民だと実感した…。

・
・
・
・
・
・
・
・

しばらくフロルドのライブの話しで盛り上がっていると、注文した料理が運ばれてきた。

「じゃ、いただきます」

言って俺はステーキにナイフを入れた。

それを見て朝倉も自分のハンバーグを一口大に切り分けた。

ちなみに、俺がステーキセット、彼女はレディースハンバーグセットを注文した。

とりあえず食事が一段落したのを見計らって昨日の事を訊いてみようと思いい口を開いた。

「あ…」

「昨日の事…」

俺が言うより先に、朝倉が先に言った！

「え！？」

「昨日の事なんだけど…」

「な、なんだった？」

俺は緊張した！

「それが、舞衣も心当たりがないって…」

「え？どういう事？イタズラ？」

「んー、でもなさそうなのよ…」

どうにも要領を得ない朝倉の言葉だが、俺は少し安堵感を覚えた。

「あの中、見た？」

「うん：でもイタズラでもなさそうなの：女優として、我がプロダクションにお越しくださいって内容で、連絡先が書いてあったの：」
「じゃあやつぱりスカウトだったんだ。過去にオーディションとか受けてたって事か？」

「ううん、そんなの受けてないはずよ：たぶん」

「じゃあ、なんであんなのが：？」

「さあ？気味が悪いから舞衣は無視するつもりみたい。私もその方が良くなってる」

「そうか：」

もしかしたら、舞衣が芸能人になるかも！という危惧から少しばかりの安堵へと変わり、今度は何故あの封筒が舞衣に來たのか？という謎へと推移した。

しかしいくら考えてもその答えなど出るはずが無い。本人、舞衣にすら解からないというのに。

残りの料理に手を付けようとした時、閃いた！

「もしかしたら：」

「心当たりがあるの！？」

俺の言葉に瞬時に反応した朝倉。

「まあ：ね」

言葉を濁す俺に“焦らさずに早く言って！”という表情をする朝

倉
・
。

一一九 推理

「もしかしたら、柄沢が関係してるかも…」

おぼろげに浮んだ考えを俺は言葉にした。

「柄沢君が？」

「文化祭の時の映画を何かのコンテストみたいなのに応募して…それを見たあのプロダクションが舞衣に目を付けた…みたいな事かなって…？」

「あゝあ！」

ぼんやりとした俺の考えだったが、朝倉にも十分伝わった様だ。

「ま、とにかく舞衣も柄沢に相談するだろうし…」

「そうね、月曜日には解かるかも」

気が付けば食事中の会話の大半がこの話題になってしまっていた。「あゝあ、せっかく二人きりの食事だったのに気付いたら舞衣の話になったわね…」

(！)

少し残念そうに朝倉が言った。その言葉を聞いた瞬間、俺は後悔した！

今日は朝倉と色んな話を話したかったのに、また彼女に…。

その残念そうな表情を浮かべる朝倉を見て俺は決心した。幸い今日は土曜日。明日は日曜でもちろん学校は休み…。

(よしっ！)

二人の食事が終わったのを見計らって、俺は気合を入れた！

「朝倉…今夜は、一緒に居よう！」

おもいきって彼女を誘った！もう何度か一緒に夜を過ごしている。でもそれは事の成り行きで、思えばちゃんとこうして誘った事がなかった。この言葉を言うのはもの凄い勇気が要り、緊張した。

「本当…？」

驚きながら朝倉が返事をした。

「ああ、もっと色んな話をしよう」

「うんっ」

笑顔で応じてくれた。

#一二〇 ラブホテル

レストランを出た俺と朝倉。

「やっぱり一二月になると寒いなあ」

吹いてくる風にたまらず俺はコートのボタンを締めた。

もうすぐ終電の時間。この場所からだと一度乗り換えなければ帰れないので、もしかしたら途中で電車がなくなってしまうかもしれない状況。長く食事しすぎた。

「家に連絡しなくて良いのか？」

「うん：舞衣には何も言っていないの。今日あたとライブに行くって事も：」

「えっ！」

「舞衣に悪いと思って：」

「でも帰らないんだから、言っておかないと：」

「うん：」

朝倉は舞衣に、『友達の家泊まる』と告げ、本当の事は言わなかった。おそらく俺と舞衣に気を使つての事で他意はないだろう：。

その後、俺たちはラブホテルの一室に入った。

「ここで：良かった？」

「うん」

恐る恐る訊ねてみたが、意外にもあっさり彼女は答えた。こんな夜遅くに二人きりになれる場所なんかそうそうなく、唯一思い浮かんだのがここだった：。

深夜のラブホ街の雰囲気は独特で、時間を掛けて選んでいる余裕が無く、一番近くに避難する様にここに入った：。

誰にも会わずに入室できるシステムだったが、初めての場所になりドキドキした：。傍から見限り冷静な朝倉。彼女はどんな気分なんだろう？

「ふう…」

椅子に座った瞬間、俺は大きく息を吐いた。

「うふっ」

それを見た朝倉が笑った。

「ごめんなさい、何か可笑しくて…こういう所初めてだから緊張しちゃって。でも、今のあなたを見てそれも抜けちゃった。ふふっ私、シャワー浴びてくるね」

言って、バスルームへ移動していった。

彼女も同じ気分だったんだと変に安心した。そう思うと俺もリラックスしてきた。

「！ッ」

バスルームの方を見て俺は驚いた！さすがラブホテル！ベッドがある部屋からバスルーム内が丸見えになっている！つまり全面ガラス張りなのだ！もちろんシャワーを浴びている朝倉の姿も確認できる！俺は慌てて目を逸らし、バスルームの方を見ないようにした。絶対朝倉もその事に気付いているはずなのに、何も言わない…。

じっとしているのもなんなので、俺は初めて入ったラブホを探索し始めた。

ワンルームとバスルームだけがある安い部屋なので特別な物は無かったが、照明のスイッチをパチパチしたり、有線をいじってみたいした。

しかしそんな事をしていても直ぐに飽きてしまった。朝倉はまだバスルーム…。

「？」

棚に一冊の大学ノートが置いてあった。

（なんだ？）

俺は何気なくそのノートを手に取り、中を見た。その内容はこの部屋を使った時の事が綴られていた。生々しい援助交際？の内容や、エッチの内容…。ご丁寧にプリクラまで貼ってあったりした…。

（かゝっすげーなあゝ）

等、ついつい読み耽っていると、

「どうぞ」

朝倉がバスルームから出てきたので、慌ててノートを戻した！
振り返ると、朝倉はバスローブを纏っていた！

「あれ？」

「これ、バスルームに置いてあったの」

「あ、ああ…もしかして…下着、着けてないの？」

「…うん」

…俺は彼女と朝まで話をするのが目的でその気は無いのだが、
しかして朝倉はそうなのか？

「じゃっじゃあ…俺も入ってくるよ…」

「はい。中丸見えよ」

「ぶっ！」

朝倉のご忠告に思わず吹き出してしまった！やっぱり彼女も気付
いていたようだ。さっきのノートとバスローブ姿の朝倉に変な気を
起こしそうになるのを抑えながらバスルームに入った。

#一二一 トーク

バスルームから出ると、棚の上にはもう一着バスローブが置いてあった。朝倉も身に着けているのだから自分もそうする事にした。

しかし入浴中バスルームのガラス張りが気になって仕方なかった。別に今更見る見られるはいつでも良いのだが、やっぱり気になった…。

「おまたせ…」

朝倉はベッドに腰掛けていて、こっちを向いてニツコリした。

「何か飲むか」

言って、俺は部屋に置かれている自動販売機を見た。

「つか、部屋の中に自販機があるって変な感じだな…。何がいい？」

「んー、じゃあ何か炭酸系…」

「オツケー」

俺は適当に二つ買い、朝倉の隣に座った。

「じゃ、カンパニー」

『カンッ』

朝倉が言って、乾杯した。

「！」

「何これ！」

二人同時に缶に口を付け、一口飲んで違和感を感じた！慌てて持っている缶を確認した！

「これ、チューハイだ…」

適当にボタンを押したためこうなってしまった様だ…。

朝倉は驚きながらもまた一口飲んで、

「ま、良いか…」

言った。

自動販売機を確認すると、ジュースの類は端の方に三種類あった

だけだった…。

「何の話をする？」

朝倉が嬉しそうに言った。

「そうだなあ…」

いっぱい話をするためにこうしてここに居るのだが、いざとなると何を話すのか迷う…。

「とりあえず、何か音楽でも聴くか」

言って俺は有線放送を流した。

「慣れてるのね」

「へ？何が？」

急に朝倉が言った。

「なんかラブホに慣れてるなあって」

「バっ俺だって初めてだよ！」

「だって手馴れてるもん」

「有線の点け方なんてどこも同じだろう、修学旅行のホテルにも付いてたじゃん」

「…ごめんなさい」

「いや…」

なんか沈んでしまった…。

「そういえば今日のパンフは？」

なんとか沈んだ空気を変えたかった。

「鞆に入れてあるよ」

言って朝倉は今日のライブのパンフレットを取り出した。

なんとか空気を変えられる。そう確信した。

「まさか新曲が聴けるとは思わなかったなあ」

彼女がパラパラとパンフを捲っているのを見計らって言った。

「最後の曲よね」

「うん」

その後積もりに積もった今日の事を中心に、朝倉と語り合った。アルコールの副作用も手伝って、二人ともいつの間にか眠ってし

まっていた・・。

#一二二 クリスマスの約束

『先輩、イヴの予定って入ってますか？』

「え！特に予定はないけど…」

『じゃあ、私とデートしてください！』

「え！」

突然舞衣から電話が入った！

「別に…良いけど…」

「本当ですか！？じゃあお昼の十一時にパーティで待ち合わせで良いですか？」

一方的に言う舞衣…。

「良いよ…」

『じゃあイヴに。失礼します』

言って電話が切れた。

（舞衣って、結構強引なんだな…）

携帯を手に持ったまま時刻を確認した。十二月二〇日、月曜日、午後九時二三分…。

数分前、家でぼーっとテレビを観ていると、突然舞衣から電話があり、イヴのデートの約束をした…。

『ピッピポピ〜〜ピ〜』

「！」

再びテレビを観ようとすると、また携帯が鳴り出した！

着信を確認すると、今度は朝倉からだ。

（なんというタイミングだ…）

「もしもし…」

少し戸惑いながら電話に出た。

『もしもし、私…です』

「ああ…どうした？」

『二四日か二五日…って空いてる？』

(うっ!!)

いきなり!

「いや：二四日は予定が…」

朝倉は知らないのだろうか?

『そう：舞衣?』

少しトーンダウンしながら彼女は言った。

「う、うん：でも二五日は大丈夫だよ」

俺は何とか彼女の気分を上げたかった。

『うん、ありがとっじゃあ、二五日会えない?』

「もちろんっ。で、どうする?」

『出来れば、一日居たいの：』

「ああ、もちろん。何時にしようか?」

『一〇時に駅前のコーヒーショップで良い?』

「OK。二五日の一〇時にコーヒーショップだな。じゃあまた明日

学校で。おやすみ」

『うん：おやすみなさい：』

電話が切れた。

舞衣に続き、朝倉ともデートの約束：。クリスマスとイヴにデートの約束がある男って、周りから見れば憎まれる男なんだろうが：。でも朝倉の最後の声が後々になって気になりだした：。

クリスマスのデートに何とも言えない“予感”を感じた：。

もうすぐ長かった高校最後の二学期も終わりをむかえる・・・。

#一二三 彼女の居ない席（前書き）

冬休み

いつしか凍える季節

ゆっくりと歩み続けた想い

春を待つ新芽の様に・・・

#一二三 彼女の居ない席

二月二日水曜日・・・今日は二期の終業式だ。

今日で長いようで短く、充実した？ともかく俺の中で高校生活で最も印象深く残るであろう二期が終わる。

そう思うと何故か居てもたってもいらなくなり、いつもより早く登校してしまった…。

それともう一つ早く登校した訳がある！

二〇日の夜、舞衣と朝倉の二人からイヴとクリスマスにそれぞれデートの約束をした。ところが翌二一日、つまり昨日、朝倉が学校を休んだのだ！

約束をした時の電話では休むなんて一言も言ってなかったのに、心配になり一時間目が終わった休憩時間に彼女の携帯に電話してみた。しかし電話は『電波の届かない所』で繋がらなかった…。

思えばあの電話を切った後感じた直感はこの事だったのかもしれない…。

そしてむかえた今日、未だに朝倉とは連絡が取れず、彼女が休んでる理由は解からず仕舞い…。

(今日は来るんだろうか？)

教室に入り、誰も座っていない朝倉の席を見て考えた…。

「おっ柊、早いな」

いつの間にか俺の背後に立っていたトモが声を掛けてきた！

「おっおう、お前も早いじゃないかよ…」

突然声を掛けられ、ビックリしながら俺は言った。

「二期最後くらい早く来ねーとなっ」

(いつもは遅刻ギリギリのくせして)

等と思いつながら自分の席に着いた。

・
・
・
・
・
・
・
・

『キーン コーン カーン コーン ーン』

豊たちと話をしていると始業のチャイムが鳴った。結局、朝倉は来なかった…。

・
・
・
・
・
・
・
・

体育館での終業式の後教室に戻る途中朝倉の携帯に掛けてみたがやっぱり繋がらない。

「ねえ、麻梨子どうしちゃったの？」

「え？」

月島が訊いてきた。

「まさか、フったの？」

「はぁ！！」

とんでもない事を言い出す月島！

「そんな訳ないだろ！」

慌てて否定する俺。

「よねえ」

「ったく、何言い出すんだよっ」

「へへへ。ごめん」

テレ笑いしながら謝る月島。

（こうして見ると結構カワイイな、月島…）

ふっと思った！

（何を思ってたんだ俺は！朝倉が居るのに！しかも、月島は豊の彼女だぞ！）

「そうだ！」

（ビクッ！）

ってな事を考えていたので、急な月島の言葉にビククリした！

「美夏なら何か知ってるかも」

「水野か…」

教室に帰ると同時に月島が水野に朝倉の事を訊ねたが水野も連絡が取れていない様で、逆に訊かれてしまった…。

(歸りに朝倉の家に行ってみよう…)

#一二四 連絡

学校での行事が全て終わり下校時刻になった。

俺は急いで朝倉の家に向かった。

朝倉の家の前に立つと、そこは人気がなくひっそりしていた…。

『ピンポン』

呼び鈴を鳴らしてみたが応答がない。

その事が余計に俺を不安にさせた。

『ピンポン』

もう一度呼び鈴を鳴らすやはり応答がない。これ以上ここに居ても朝倉に会えない…。俺は後ろ髪を引かれる思いで朝倉の家を後にした。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

家に帰った俺は制服も着替えず、そのままベッドに仰向けに倒れ込んだ。

（どうしたんだ朝倉？）

（舞衣も学校を休んだのか？）

何度も答えの出ない自問自答を繰り返した。

携帯電話を手に取り、アドレス帳から舞衣の番号を呼び出した。

しかし通話ボタンを押すことが出来なかった。

時刻は午後一時を回ったところ、本来なら高校最後の冬休みの始まり。心は浮かれきっていただろうが、今の俺は何もする気が起きず、ただ天井を眺めていた。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

『プルル プルル』

「！」

さらにボーっとしていると突然携帯が鳴り出した！

（通知不可？）

携帯に表示された文字を見て、俺は恐る恐る電話に出た。

『もしもし？』

（！）

先に電話から聞こえてきた女性の声。

『もしもし？ 柊君？』

「あっ朝倉か？」

『うん：ごめんなさい、もっと早く連絡するつもりだったんだけど
その声を聞いた瞬間、俺の中に安堵感が広がった。』

『ゴタゴタしてたのと、自分の携帯の電池が切れちゃって、しかも
充電器が無かったから…』

「一体どうしたんだ？ 皆心配してるぞ」

皆：と言ったが、一番心配したのは俺自身だ。

『ごめんなさい、今ロサンゼルスなの…』

「ロ、ロサンゼルスウー！！」

思いもしなかった朝倉の言葉に俺はただただ驚いた。

『明日には日本に帰るから、帰ったら詳しく話すわ、また連絡しま
す…』

「ああ、気を付けて帰って来いよ」

『ありがとう：ごめんね、急で…』

それだけを言って、電話は切れてしまった。

（ロスって：つか、この携帯国際電話繋がるんだ…）

とりあえず、俺自身安心したのか？ そんなしょーもない事を考え
てしまった。

まあ、明日の朝倉から連絡があるというのだから、その連絡を待
てばいいか…。

ふと時計を見ると午後四時前になっていた！ 何時間ボーっとして
いたんだ…。

#一二五 来訪者

『ぺ〜ラリ〜ラプルリラリピラリラ〜』

「んっ! う〜」

枕元の携帯が鳴っている…。俺は眠い目を擦りながら携帯電話を手を取った。着信音でそれが豊からの着信だと判っている。

「もしもし?」

『やっぱり寝てたか? 今お前んちの下に居るんだけど、煮るなり焼くなりしてくれ〜』

「あ? マジかよ!」

朝から豊のつまらないギャグを聞かされ些か嫌悪感を抱いた。

(このまま放置するって選択肢もあるぞ)

『ああ、それにもう昼過ぎてるぞ。食いモン買って来てやったから開けてくれ』

「ああ…ちよっと待ってろ…」

言って電話を切り、重い身体を起こした。時計を見ると既に一二時二五分だった。

(昨日は早くに寝たのになあ)

インターフォンまで行き、ロックを解除した。

「ふぁ〜あ〜」

大きくあくびをしてから洗面所へ顔を洗うために洗面所に移動した。

『ピンポーン』

「おじゃましま〜す」

豊が玄関を開けて入ってきた。

「おじゃまします…」

「?」

豊に続いて女性の声がした。

(月島か?)

俺は顔を拭いながらリビングへ行った。

「おっすっ」

豊と一緒に月島と水野も居た。

「…どうしたんだ？」

思わぬ訪問者にキョトンとして言った俺に豊は、

「何だよその顔？ 恋人に逃げられて自暴自棄になってねーか心配して見に来てやったのに」

「はぁ？ 何だよそれ」

「くすくすくす」

俺と豊のやりとりを見ていた月島と水野が笑っている。

「なんだ？ お前らのところには連絡なかったのか？」

「えっ？ 柊君、麻梨子と連絡取れたの？」

水野が訊いた。

「ああ、昨日の夕方に」

「俺は昨日の朝倉からの電話の事を三人に話した」

「へー、でも何でロスなんだ？」

「いや、詳しく訊く前に切れたからさ…」

「そこは訊いとけよ」

「まあまあ、とにかく麻梨子が無事だって判ったんだから皆でお昼にしましょう」

言って、月島は持っていたコンビニ袋をテーブルに置いた。

#一二六 親友

「お前何が良い？」

豊が持つて来た袋の中身を取り出しながら言った。出てきたのはコンビニ弁当だ。

「お、豊のおごりか？」

「っんなわけねーだろ、自分の分は自分持ちだ！」

「ケチだな。じゃ、この親子丼いいか？」

「ぷっ」

突然月島と水野が吹きだした！

「え？どうした？」

俺が訊ねると、

「だって、豊が『絶対柊君は親子丼を選ぶぞ』って、それを買ったの。そしたら本当に選んだから」

「うっ…」

「ハハッな？コイツ親子丼好物だから」

「悪かったなっ」

ズバリ中てられ、恥かしさと腹立たしさを同時に覚えた。

「そこのレンジ使っといってくれ、俺はお茶煎れるから」

「あっじゃあ、私も手伝うわ」

俺が言うと、月島も席を立った。

「湯呑、これで良い？」

「ああ、サンキュー」

俺がヤカンを火にかけていると、月島が寄って来て言った。

「実は豊ね、先刻柊君の顔を見るまで凄く心配してたのよ」

そっと小声で言った。それを聞いた俺は急にテレくさくなった。

「おっと！」

そのテレを画すため、火を止めた。

・
・
・
・
・
・
・

「ごっそさん」

空になった容器を置きながら豊が言った。

「なあ、これからどうするんだ？」

「いや、別に用は無いんだけど…」

豊の問いに俺が応えようと、“待ってました！”と言わんばかりの顔で

「じゃあ、俺らと一緒にカルパに行かないか？」
言った。

カルパとは朝倉と初デートに行ったり、キャンプの道具を買いに行ったりあのショッピングセンターだ。

「いや、二人の邪魔になるから遠慮する」

「そんなの気にしないでいいわよ」

間髪入れずに月島が言った。

「そうよ、私も居るんだし」

水野が言った。

「暇なんだったら一緒に行こうぜ！」

強引に俺の腕を引っ張った。

「……わかったよ」

本当に気乗りしなかったのだが、朝倉からの連絡を待ちながら豊たちと行動を共にした。

#一二七 クリスマス・イヴ

通りに飾られているイルミネーションは今日を華やかに彩どる“特別仕様”になるのだろうか？今はまだ太陽が真上に差し掛かるうとしているクリスマススイブの午前一〇時四五分。

昨日は豊たちと意外にも楽しい時間を過ごさせてもらった。絶対本人に言える事が出来ない感謝の気持ちを抱いた。

いつ朝倉から連絡があるのかヤキモキしたが、結局朝倉から連絡があったのは夜の一〇時を過ぎてからだった。長旅で疲れていたであろう朝倉からの連絡は簡潔なもので、詳しくは今日舞衣と会う約束をしていたので、舞衣から聞いてくれとのことだった。

という事で今俺はカフェレスト『パティ』で舞衣を待っている。

『パラッポーン』

店内に客が入店した音が鳴った。

ウェイターに促がされ、舞衣が俺が居る席にやって来た。

「すいません。遅くなってしまいました…」

白いロングコート、首には長めのマフラーを巻いた舞衣が俺の前に立っている。

「いや、俺が早く着き過ぎただけだから」

「すいません」

言って舞衣はコートを脱ぎ席に座った。コートの中はシンプルな服装だった。

・ ・ ・ ・ ・

『コトッ』

舞衣の注文したホットココアがテーブルに置かれた。

「さて、どうする？」

少し間を置いて俺が訊くと、ココアを一口飲んだ舞衣が口を開いた、

「誘ったのは私なんです…特に行きたい所って無いんですよ…た

だ、先輩に逢いたかっただけで…」

「舞衣…」

舞衣の表情は言葉とは別の雰囲気醸し出している…。

「…じゃあ、俺に付き合ってくれないか？」

俺が言うと、

「はいっ」

舞衣は明るい返事をした。

#一二八 海へと

「そういえば今年は泳ぎに行かなかったから、海に来るのは久しぶりです」

「やっぱりこの時期は寒いな。大丈夫？」

「大丈夫です、厚着してきたので」

正直どこに行こうか迷った。こんな寒いところではなく、屋内等の暖かい場所の方が本当は良かったのかもしれないが、今日の舞衣を見ているとあまり人の居ない場所の方が良いと思った。そう思うと自然に思い浮かんだのが海だった。

電車に乗って海を見に来た。海岸沿いの遊歩道を二人でゆっくり歩いている。

この時期の海沿いに人は居ないと思っていたが、結構人が歩いていた。ランニング、ウォーキング、犬の散歩をしている人に、カップルも多い。

何故ロスに行っていたのかをずっと訊きたかったが、昨日の電話での朝倉の声、今日の舞衣の雰囲気考えると何だか簡単に訊いてはいけない気がした。

「ごめん、もっと樂める所にすれば良かったんだけど…」

「いえ、実は私も人の沢山居るところには行きたくなかったので…」

「本当に？」

「はい。…あの、少し座りませんか？」

「ああ」

俺たちはカップルがチラホラいるベンチから空いている場所を見付けて腰掛けた。

「なあ…やっぱり楽しくないか？」

「え！どうしてですか？」

「いや、その…ずっと表情が硬いっていうか…」

今日の舞衣の表情はずっと元気がない。何か悩みがあるんじゃない

いか？そんな表情をしている。もしそうだとしたら何とかそれを少しでも軽くしてあげたい。そう思ってた。

「……やっぱり、先輩にはかないませんね…」

「えっ!？」

「こうみえても顔には出さないようにしてたんですよ! なんてって演技には慣れたものですから」

「!」

そういう舞衣の表情は今までの“どこか思い詰めた”表情から一変した。

「先輩にはもっと早くに言わなくちゃって思ってたんですけど、なかなか言えなくて…。でも、もう迷わず言います! 聞いてくれますか?」

決意を固めた! という様な強い表情になった舞衣。

「ああ」

舞衣の覚悟に俺も覚悟を決めた! 舞衣が何を言おうとしているのか、おおよその見当はついていた。

#一二九 二人の葛藤

「文化祭で上映した演技部の作品を部長がコンクールに応募してたんです」

唐突に話し始めた舞衣だが、俺には何を言おうとしているのか直ぐにピンと来た。あの封筒の事だろう。

（やっぱり柄沢が絡んでたか）

「そしたら、あの作品がそのコンクールでグランプリを獲得したんです！」

「それは凄いな！」

言いながら、次に舞衣が言おうとしている事も判った。

「部長、あんな性格だから応募していた事も言ってくれなかったんです…」

「まあ、アイツらしいな…」

「その流れで…」

舞衣の言葉が詰まる。俺も息を飲んだ。

「その流れで、私のところにも来たんです…」

「来たって、何が？」

何の事だか俺は解かっている。だが、ここは舞衣の口からと思ひあえて訊いた。

「女優として、芸能界へ来ないかって…」

いつか舞衣の口から言われるだろうと覚悟していた言葉…。

「芸能界!？」

既に分かっていた事にたいして俺は知らないフリをした。朝倉から先にそのオフアーの事は聞いていたが、舞衣は俺が知っているという事を知らない風だったので、あえてそうした。

しかし俺のフリなんか舞衣のそれに比べればまったくの素人演技だろう…。

「それで、どうするんだ？」

俺はあえてそのままフリを続けて訊ねた。

「私：中学で演劇を始めてからおぼろげながら、将来そういう事が出来ればと思ってました…。それがこういうカタチで現実のものになろうとしてます…。昨日までアメリカに行ってたのも両親の同意を得るためでした…」

「それで反対されたのか？」

「いえ、両親の仕事上大賛成してくれました…。でも…」

「でも？」

「私は迷ってます…」

「女優になりたくないのか？」

「違います！私自身の夢でしたから」

「じゃあ」

俺の言葉をさえぎる様に舞衣が、

「先輩、好きです！」

「え！」

突然の言葉に俺はドキッとした！

「先輩のことを想うと…先輩と離れたくないんです…」

ちゃんとお互いの気持ちを知ってから二ヶ月…。それから二ヶ月だってしっかりとした時間を過ごしていない俺と舞衣。なのに舞衣は俺のことを好きだと言ってくれている…。

一目惚れなんていうものは、漫画やドラマの作り話でしかないと思っていた俺。そんな俺に実際に体験させてくれた女性に好きだと言われている。正直こんな事が現実になるとは思っていなかった俺は、今もこれが夢なんじゃないかとどこかで疑っている。しかしこれは紛れもない現実。このまま何も考えずにこの夢のような現実に総てを委ねたかった…。

でもこんな俺の所為で舞衣のこれからの無限の可能性を潰してしまいうわけにはいけない！

#一三〇 決意の道へ

「舞衣、それを決めるのは俺じゃない、君自身なんだ」

「え！」

「女優になりたいと思うんだったら、俺の事なんか気にしてちゃ駄目だ！」

少しキツイ口調になってしまったが、舞衣の為だと自分に言い聞かせた。

「先輩…私の事、嫌いですか？」

不安を顔いっぱいに滲ませて問いかける舞衣。

「まさか、俺が初めて一目惚れした相手だよ。嫌いになるわけないよ」

「じゃあ…」

「俺の所為で君の夢を潰してしまうかもしれない…。舞衣が本格的に女優としてやっていきたいなら、俺の事なんか忘れてしまった方が良い…」

「先輩…」

別れの言葉とも取れる俺の言葉…。それを受けた舞衣は俯いてしまった。

・
・
・

少しの沈黙の後俺は口を開いた。

「俺は君が好きだよ、それは君が女優になっても変わらないと思う。それに芸能界に入ったって二度と会えなくなるわけじゃないんだしさ…」

俺は今言える精一杯の事を言って舞衣を見た。

「…ありがとうございます…先輩には一番最初に話しておかないといけない事だったんです。私、決めました！女優として頑張ります！」

そう言って舞衣は勢いよくベンチから立ち上がった！

「舞衣…」

「んっんっん」

傾きかけた冬の太陽に向かって大きく伸びをする舞衣。

その姿はまるで“新しい事にチャレンジする、晴れやかな合図”に見えた。

「先輩、今日はまだまだ残ってますよ！さ、行きましょ」

舞衣が差し出した手を握り、俺もベンチから立ち上がった。

舞衣とのイヴのデートが再開した。

すっかり暗くなった街路地を彩とりどりの特別なイルミネーションが照らし出している。

あれからすっかり元気になった舞衣に俺も安心した。もしかしたらそれは舞衣の演技かもしれないが、俺はそれでも良いと思った。そういうことが出来る力が舞衣にはあるという事に安心した。

「先輩、今日は本当にありがとうございました」

いっぱいの笑顔で一礼する舞衣。

「ああ…」

こうして終わった舞衣とのデート。俺にはこの日が二人にとって大きな一日になった気がした…。

#一三一 一二月二五日

「そう…舞衣は自分で決めたのね…」

「ああ…」

クリスマスイヴが明けて、一二月二五日。

俺は今ファミレスで少し早い夕食を取っている。向かいの席には朝倉が居る。

昨日の舞衣とのイヴデートに続き、今日は朝倉とクリスマスのデート。考えてみればこの二日間を違う女性とこうしているのはおかしい事だろう…。

「で、あなたはどうするの？」

昨日の事を朝倉に話した。

「俺の所為で舞衣の夢を潰させるわけにはいかないよ。まして、俺にそんな権利はないし」

俺は昨日感じたことを正直に話した。

「あなたは…それで良いのかもしれないけど」

「え？」

「それはあなたが勝手にそう思っていることですよ？」

朝倉は問いただす様な口調で言った。

「え！う、うん…」

朝倉の喋り方に少し動揺した俺…。

「あなたが舞衣のことを選んでも、あなたの所為であの子の夢が潰れてしまうなんてないはずよ！」

「？朝倉、何が言いたいんだ？」

朝倉が何を言おうとしているのか俺には解からなかった。

「出ましよう…お店」

「え！ああ…」

今まで見たことのない朝倉に俺はただ従うしかなかった。店を出ると外はすっかり暗くなっていた。

「どうしたんだよ？」

心配になりすぐさま声を掛けた。

「…人が多くなってきたから…」

「？」

レストランの時とはがらりと変わり、今度は元気がない。

「歩きながら、話しましょ」

「ああ…」

と言った朝倉だが少しの間黙って歩みを進めた。

#一三二 終わり・・・

さらに朝倉の言葉が続く、

「ねえ…。今でも舞衣の事…好き？」

何度もその問いに答えてきたが、今はその答えに詰まった。

「ごめんなさい…そんな事、簡単に言えるわけないよね…」

（違う！）

俺が直ぐに言わなかったので、朝倉が先に言った。その言葉に何故か心の中で強く否定した！

何故なのかまったく解からなかったが、その否定の瞬間から胸騒ぎが始まった。

五、六歩二人は沈黙した。その僅かな時間が俺には途轍もなく永く感じられた。

「もう…」

朝倉がそっと口を開いた。

「もう、私たち…」

「！」

「終わりにしましょう」

その言葉を聴いた瞬間自分の全身の血の気が一斉に引いていくのが判った！その場に倒れてしまいそうになる。フラつく足で懸命に踏ん張った！

「どっとうしてだよ！」

気づいた時にはそう叫んでいた！通りには多くの人が歩いている。その内の何人かは俺の声に振り向いただろう。だがそんな事はどうでもよかった。関係ない。今の俺には周りなんか見えていない！見えているのは朝倉だけ。

俺の問いかけを黙殺し、朝倉は歩き始めた。

俺はその場にへたり込んでしまいたかったが、フラつく足取りで必死に朝倉の後を追った。

「私の所為で…」

「え？」

人通りの少なくなった所で朝倉が言った。

「私の所為で、あなたを潰してしまいかも…」

かすれた声で言った。

「なっ何だよ…それ？」

「私が居ると本当の事が解からないでしょ…。だから私の事は忘れてイチから舞衣とちゃんと付き合って」

朝倉は立ち止まり俺の方を振り返って俯いた。

「あなたなら舞衣を泣かせたりしない…私が身を持って実感してるから…」

淡々と言う朝倉。

「ちよっ、ちよっと待ってくれよ！終わりって…別れるって事なのか？」

「フフっ。別れるって、私たちちゃんとした恋人同士だったわけ？」

「な、なんでそんな事…言うんだ…」

無理やり作った朝倉の笑顔から、涙がこぼれた…。

「今まで私の我儘に付き合ってくれて…ありがとう。舞衣を…舞衣をよろしく…ね」

その言葉を言い終えた瞬間、彼女は幾粒もの涙を流した。

そして振り向き、俺の前から去ろうと歩き出した。今までが嘘だった様にあっさりと…。

#一三三 気が付いた本当の気持ち

五月に突然ではあるが朝倉から告白されて、夏を越して秋になつて…そしてむかえた冬。

ゆっくり遠ざかっていく朝倉の背中を見ながらこの半年間の出来事が走馬灯の様に頭を駆け巡った。

（行かないでくれ！）

声にならない叫び！

声にする前に何度も頭の中で行かないでくれ！を連呼した。

どうして良いかまったく思考が働かない！

視界にはどんどん離れて行く朝倉の背中が移っているが体が動かない！

（待ってくれ！）

（待ってくれ！）

その時、俺ははっきりと気付いた！

“俺が本当に愛しているのは朝倉麻梨子だったんだ”と！

すると今まで動かなかった体が自然と動き、俺は無意識に走り出していた。そして彼女の手を掴んだ！

彼女が俺の前から去ろうとしてから俺が走り出して彼女の手を掴むまでどのくらいの時間が経っていただろうか？実際には数秒、あるいは数十秒の出来事だったのかもしれない。

でも自分の感覚では数十分…。

振り返ろうとする朝倉を俺は思いつきり抱きしめ、

「もう…離さない、絶対に離さないっ」
言った。

朝倉は俺の腕の中で震えていた。

「今はっきりと気付いたよ。俺には君しかいないって事に…」

俺はそう言って朝倉を解放した。これでもう一度朝倉が俺の前から去ろうとすれば総てが終わる…。そう覚悟をして朝倉を抱いてい

た腕を解いた。

「柊君：」

彼女はゆっくりと俺の名を呼んだ…。

その言葉に俺は心から安堵感を覚えた。

通りには冬の空っ風が吹き抜け、周囲を歩く人たちは俺たち二人を意に介さず通り過ぎていく。

一二月二五日。年の瀬、クリスマスというだけでいつもと同じ一日。

でも俺にとっては特別な日になった。自分の本当の気持ち解かった特別な日。それだけははっきりとしている！

#134 決意の笑顔

満天の星空！とまではいかないが、いつもより少し多い気がする星達がすんだ冬の空を彩っている。

街のクリスマスネオンから少し離れた、大きな自然公園に俺たちは居る。

通常なら四、五人座れる大きなベンチに俺と朝倉は密着して座っている。

「もうすぐ、クリスマスも終わりね…」

「ああ……」

二人のコートを毛布代わりにして、包まりながら夜空を見上げて
いる。

時刻は午後一時五〇分：あと一〇分で日付が変わる。二人の想いを告げ合い、確かめ合った今日がもうすぐ終わる…。

○
○
○
○
○
○
○
○
○
○
○

数時間前

「柁君……」

朝倉がゆつくりと俺の名を呼んだ…。

「俺のこと、嫌いになったのか？」

俺の問いに朝倉はすぐさま首を横に振り、

「ううん、そんなことあるわけじゃない！大好きよ、絶対に嫌
いになんてなれないよ…」

力強く彼女は言った。

「俺も君が好きだ」

互いに想いをぶつけ合う。

「でも、舞衣……は？」

今度は不安そうに訊く朝倉。

「：舞衣じゃなく、君なんだ：俺に必要なのは：」

どんな言葉を選べば良いのか解からなかった。ただ頭に浮かんだ感情をそのまま言葉にした。

「本当：？」

「ああ、昨日舞衣の話を訊いた時、舞衣の為なら俺は身を引いても良いと思えたんだ。舞衣の夢のためなら舞衣を諦められる：そう覚悟出来たんだ。でも先刻、君に終わりにしようって言われた時目の前が真っ暗になって、朝倉から離れたくないって思った。もし君が舞衣と同じ道に進むとしたら、俺は：絶対に反対すると思う：」

あの俺の言葉を聞いた朝倉の表情は一生忘れない。あの驚きと歓喜の入り混じった表情を。

「ごめんなさい」

「いや、謝らないといけないのはこっちだよ。あんな事を言わせてしまうまで君を追い詰めていたのにそれに気付かなくて：。挙げ句君に言われなきゃ自分の本当に気持ちに気付かなかったんだから。

俺は本当にバカな男だ」

「それで：本当に後悔しない？」

「するもんか！君が、朝倉麻梨子が好きだから」

朝倉の問いに即答えた。少し赤くなる朝倉がカワイイ。

「：それより、君の方こそ後悔しないか？こんな男で：」

「しない！絶対後悔しません！」

決意の笑顔を見せた朝倉。

「でも」

「え！？」

急に真剣になった俺の顔を見て、朝倉は少し困惑した。

「舞衣には俺からちゃんと言わないといけない！これは二人に犯した俺の罪だから：。俺は、朝倉君を選んだ：舞衣にはこれから罪を償わないといけない：。もちろん君にも：」

「柊君：」

潤んだ瞳で俺を見つめる朝倉。俺は今彼女の総てで癒されている

事を実感した。

「ありがとう：でも私の事はいいの。元はといえば私があなたと舞衣の間に割って入った事でこうなってしまったから：。本当にごめんなさい」

朝倉は深く頭を下げて言った。

「あ、朝倉：」

「私は今とても幸せです。あなたと想いが繋がったんだから。だから、舞衣を、あの子をおねがい」

「ああ、がんばるよ」

本心は舞衣を悲しませたくない。だがそれは無理だろう：。朝倉を選んだ瞬間から覚悟している！でも絶対に舞衣だけを悲しませる事はしない。俺は舞衣以上に苦しむ覚悟だ。これからどうなっても、俺はそれを受け入れる。

「ねえ、イルミネーション、観に行こう」

「ああ」

朝倉が俺の手を引いて小走りする。

#一三五 新しい景色

それほど都会ではない俺たちの住む街だが、繁華街の街路樹には都会それを意識したクリスマススのイルミネーションが飾られている。それらを見ながら、ゆっくり歩いた。

「ウフフフ」

甘えた声で朝倉が俺の左腕に寄り添い、しがみついた。今までこんな事を彼女はしたことがない。

朝倉の胸が俺の腕に触れた瞬間、俺は思わず腕を引いてしまった！それに対し、彼女は、

「ごめんなさい、迷惑だった？」

「いいや、ただ…今までそんな事された事なかったからさ」

「ごめんなさい、私…嬉しくて嬉しくて…」

「俺も嬉しいよ。今まで本当にごめんな…でも君が大好きだよ、朝倉」

「私もあなたが大好きっ柊君！」

特に俺たち二人を気にする通行人はいなかったが、傍から見ただけのバカップルだろう。

他人に何を思われたってかまわない。それより今朝倉と一緒に居られる幸福感に酔い痴れていたかった。

昨日までも朝倉麻梨子を好きだった。でも今の好きという気持ちと、昨日までのそれとは明らかに異質なもの。本当の自分の気持ちに気が付いたってだけでこんなにも違うものなのか！と自分自身でも驚いている。

今この場で『朝倉麻梨子が大好きだ！』と叫んでしまいたいくらいの気分だ。

朝倉もたぶんそんな気持ちだと思う。だって、今の朝倉の様子は一時間前の朝倉とはまるで違う。まるで全身から喜びが満ち溢れている様な感じ。それが俺にも伝わってくる。

この感覚が俺一人の思い込みじゃない事を切に願う。

「ねえ…」

朝倉がしっとりした口調で言った。

「ん？」

「綺麗ね」

通りを見ながら彼女は言った。

「ああ、一応クリスマス仕様だからな」

「ううん、そうじゃないの」

「え？」

「いつも見慣れてる景色が今はまるで違う景色を見てるみたいなの……。もちろん、クリスマス用のネオンが綺麗だけど……。なんて言ったらいいんだろ……。今の私の気持ちがいつもと違う景色に見せてるのかな？」

「朝倉…」

「今私、すごく幸せ。あなたとこの景色をずっと見ていたい…」
確信した！今の彼女の言葉で。朝倉も俺と同じ気持ちでいてくれることに！

「綺麗だな…」

俺も朝倉が見ている景色を見ている…。

「明日からの風景も綺麗かな？」

俺は彼女の手を握って言った。

「もちろんよ！」

彼女はその握った手に指を絡める…。

この手を…この温もりを…朝倉麻梨子を手放したくない…。

・
・
・
・
・
・
・

しばらく街を歩いた後郊外の自然公園へ移動した。途中で買ったクレープを食べた。

。。。。。。。。

「あと少しでクリスマスも終わるな…」

「うん、私にとって特別な日…」

「俺たちの特別な日だよ」

「そうね…」

俺はそっと彼女の肩に腕を回した。

朝倉もそっと俺の腕にその身を委ねてくれた。俺たちは身を寄せ合い、

「朝倉…」

「柊君…」

本当の恋人同士になって初めて口づけを交わした。

冬の夜風が俺たち二人をつつみ込み、クリスマスが終わった。

#一三六 愛しい時間

日付も変わり、幾人か居た人の影も今はなくなった夜中の広い公園。この空間には俺たち二人しか居ない。

公園を包むように植えられている針葉樹も冬の夜風に凍えている。風を受けないよう二人のジャケットに包まり身を寄せ合う。寒い、それ以上にこの今の状況が愛しい。

目が合う度俺たちはキスする。

「昨日の今日で家に帰らなかったら、舞衣はどう思うかな？」

朝倉の言葉に俺は不安を覚えた。今は朝倉と離れたくない！でも彼女の言うように帰らないといけない…。イヴの舞衣のこともある…。

「帰るのか？」

思わず訊いてしまった！

「え！」

「離れたくないんだ…君と…」

普段なら絶対に恥ずかしくて言えない言葉…。今の俺の気持ちは何の躊躇もなく言わせてしまう。

「私も離れたくない…今日は…まだ終わらせたくないもの…」

「朝倉…」

二人とも同じ想いだ。

「行こう…」

「うん」

俺たちは誰も居ない公園を後にした。

・
・
・
・
・
・
・

「で、どこに行こうか…」

「…まかせる…あなたとだったらどこに居てもいいの…」

勢いで公園を出たのはいいものの、行き場所がなく彷徨っていた。

「じゃあ寒いし、どこかに入ろうか？」

「う、うん…」

と言ったものの、この時間じゃ開いてる店も少なくなってくる。

「ねえ…二人りきりで居たいの…だから…この前の所は？」

不意に朝倉が言った。その口調は少し恥ずかしそうだった。

この前の所…、ラブホか。

「わかった」

言って俺たちの足取りは速くなった。

#一三七 遭遇！

（うゝ、やっぱりホテル街を歩くのは抵抗があるよな）

ホテル街といっても三、四軒連なっているだけだが。その通りで何組かのカップルとすれ違った。

「ど、どこに入る…？」

おもっいきりどぎまぎしながら言う俺。

（こういうのって女の子に訊くのはまずいよな…）

そんな後悔をしてもあとの祭り…。

「この前の…」

それでも朝倉は答えてくれた。彼女も恥ずかしいのだろう。

（あゝ早く入ってしまいたい！）

やっとの思いでこの前入ったホテルの前に着いた。
が！

入り口の前の看板に『満室』の文字が躍っている…。

やっとの思いでたどり着いた俺たちは呆然とその文字を見た。傍から見れば滑稽な二人だろう…。

（やっどここまで来たのに…！まあ、日が日だから仕方ないか…）
クリスマス（正確には日付は変わっているが）だということで妙な納得をしてしまった。

（他の所にしよう…）

仕方なく、朝倉にそう言おうとした瞬間、

「あれ？お前ら何してんだ？」

（ビクッッッ！！）

こんな場所で突然背後から声を掛けられ、俺と朝倉は飛び上がり
そんな勢いで驚いた！！

恐る恐る二人で振り返った。

「よっ」

そこには陽気に手を振る豊と、その豊を見て呆れている月島が立

っていた！

「バカ！ こういう所で知り合いが居たら、そつとしくものよ！ まったく」

豊の脇腹に肘を入れながら月島が言った。

「痛てて：知らない仲じゃないんだからさあ」

「だからこそよ！ 親しき仲にも礼儀ありって知らないの？」
ごもつともである。

「フフフフ」

二人のやりとりを見て朝倉が笑い出した。

「ハハハ」

俺もつられて笑った。

#一三八 聖なる夜に騒ごう

「そうだっせっかくこうして会ったんだから、これから四人でカラオケでも行かないか？」

豊が提案した。

「何言ってるの！邪魔しちゃ悪いでしょ！」

月島は言うが、

「どうせ今日なんかどのホテルのいっぱいだって、な？」

こういうことを臆気もなく言える豊の性格がある意味うらやましい…。

俺と朝倉が互いに顔を見合わせた。

にっこり頷く朝倉。

「じゃあ…」

「よし、決定！」

俺が言う前に豊が言った。

「本当に良いのか？その…月島は」

さっきからのやりとりを見て心配になった。

「もちろんよ、みんなでワイワイやった方が楽しいし」

そんなこんなでカラオケに行くことになってしまった。

・
・
・
・
・
・
・

「あいにく、小部屋しか空いておりますが…」

「あっおっけーっす、それで」

カラオケ店の店員と豊のやりとりだ。三度目の正直というのか？この店で三件目。先に行った他の二件は総て満室で、ようやく空いている店を見付けた。

月島は最初に行った店がダメだった時から「帰ろう」と言っていたが、豊がほぼ強引に押し切った。頻りに「ごめんね」を連呼して

いた月島。こういう状況を見てみると月島は大変だろうなと思った。

「さゝ騒ごうぜ！」

「てかさ、もうすぐ二時なのよお！」

一人盛り上がっている豊とは対照的に冷め切っている月島。

「何言ってるんだ、閉店まで三時間あるんだぜ！」

「ウソっ閉店まで居る気ィ…」

月島はゲソっとなりながら言った。そんな二人のやりとりを見ていると笑えてしまう。

「さて、どうする」

言って一番に座っていた俺の横に豊が座った！

「あ！そこ、麻梨子の席でしょうが！」

月島がすかさずツツコむ。

「良いのよ由実。さ、座りましょ」

朝倉がフォローする。

「さっすがあ、朝倉は分かってる」

豊が言った。

（コイツ酔ってやがる！）

「月島、コイツ酔ってるだろ？」

俺は月島に訊ねた。

「え！うん…でも、缶一本だけよ！！」

「マジ？コイツ弱え」

「っんだと」

俺の一言に怒る豊。

「うるさいっ酔っ払い！」

俺は豊を一蹴した。

ともあれ、俺たちはカラオケを楽しんだ。

#一三九 終わらない記念日

「じゃあ、おやすみ」

「ごめんね、二人とも…」

月島が本当に申し訳なさそうな顔で言った。

「気にすんなって」

「じゃあな」

豊が暢気な笑顔で言った。

午前五時一〇分。俺たちはカラオケ店の前で豊たちと別れた。

直後、

「ふう〜」

甘いため息とともに、俺に寄り添う朝倉。

「朝倉…」

彼女の気持ちを汲んだ俺は、

「行こう」

言って朝倉の肩を抱いて歩き出した。

・
・
・
・
・
・
・

ボタン、ブロー

俺たちを降ろしたタクシーが走り去る。マンションの下に居る俺と朝倉。ウチのマンションだ。

歩いて帰れない距離ではないが、タクシーを拾って帰った。近距離で運転手には嫌な顔をされたが…。

ロックを開け、エレベーターで上がり、家のドアを開き中に入った。玄関の靴を見ると、姉キの靴が無かった。

（ほっ…）

ひとまず安心した。

真っ暗な部屋の明かりを点け、朝倉を招き入れた。

「おじゃまします…」

少し小声で朝倉が言った。

そして、俺の部屋に入った瞬間、

“ガバッ”

どちらともなく抱き合い、熱いキスを交わす。

一旦点けていた部屋の照明を消して、窓から差し込むうっすらとした僅かな光を頼りにベッドに倒れ込んだ！

「先にシャワー…浴びないか？」

「え！？」

「さっ」

彼女の手を引いて、暗がりのなかバスルームへと移動した。

「な、何か恥ずかしいね…」

「フっ、今さら」

朝倉の一言に思わず吹きだしてしまった。

「もう！」

いたずらに怒る朝倉がカワイイ。

「じゃ、俺が先に入るから、後で入れば良いよ」

言って、俺はバスルームに入った。

#一四〇 麻梨子の母

(うゝ、今日は一段と冷えるなゝ)

完全防寒装備で俺は朝倉の家へと急いだ。一昨日の昼に彼女が俺の家から帰ってから、ずっと彼女に逢いたかった。でも昨日は逢えず。今日二日ぶりに彼女と逢える。

あの夜、自分の本当の気持ちに気付いて初めて朝倉と抱き合った。これまで何度か交わした濃密な時間は、やはり背徳感に支配されていたが。

二人の女性の間で揺れているのに一方の女性と抱き合っていると
いう罪悪感に。

しかし、一昨日の夜は違った。

朝倉が一番好きだという想いで、昨日一日が途轍もなく永かった。昨日という日が終わらないのではないかと何度錯覚した事か。用事があるとかで昨日一日朝倉と電話すらする事が出来なかった。朝倉はどんな気持ちで昨日を過ごしたのだろうか？

今日これから朝倉の家で彼女と逢える。でも正直まだ舞衣に会う勇気がない。舞衣に会ってしまうと朝倉との事を伝えなければならぬ。俺は舞衣ではなく、朝倉麻梨子を選んだという事を。

しかしそれ以上に朝倉に逢いたいという気持ちの方が強い。最低な奴だという事は自覚している。舞衣には絶対に俺の本当の気持ちを伝える。。

自分の家から朝倉の家までは自転車なら一〇分と少しで到着するのだが、今日はその距離すらやたらと長く感じた。

(ふゝ、やっと着いた)

実際はいつもより早く着いたのだが。。

『ピンポン』

「・・・・・・・・・・」

『はゝい』

インターフォンから朝倉の声がした！それだけで嬉しさを感じた。

「あっ俺っ」

『今、開けるね』

「・・・・・・・・・・」

“ガチャ”

玄関のドアが開いた。

「いらっしゃい」

朝倉が微笑みながら迎えてくれた。

「ああ……」

そんな朝倉の顔を見た瞬間、さらなる喜びが込み上げてくる！

「マリちゃん」

「？」

家の中から聴きなれない声がした！

「あっ、昨日からお母さんが帰って来てるの……。さ、上がって、一緒にお昼にしましょ」

明るい口調で朝倉は言うが、それを聴いた瞬間俺はガチガチに緊張し始めた！

まったく準備していない状態で朝倉のお母さんと会う事になってしまった！

（なんて自己紹介したらいいんだ！）

ダメだ、リビングまでの足取りがメチャクチャ重い！

「お母さん、紹介するね」

リビングの戸を開き、朝倉が言った！

「お久しぶりね、了ちゃん」

朝倉が俺を紹介するより先に、朝倉のおばさんが俺に言った。

（！）

「え！」

その言葉に俺と朝倉は驚いた！

俺は恐る恐る俯いていた面を上げた。

（！！）

俺の視線の先に見覚えのある女性が立っていた！

「いっ泉美おばさん！？」

俺は咄嗟に頭に浮かんだその名前を呼んでいた！

「そうよ、了ちゃん」

「何、知り合い！？」

朝倉がいつかと同じ様に驚く。

#一四一 まさかの再会！

目の前に立っているのは紛れもなく俺が知っている泉美お婆さんだった。泉美お婆さんはウチの母親の友達で、俺が小さい頃に良く家に遊びに来ていた。その泉美お婆さんがまさか朝倉のお母さんだったとは！

（じゃあ…）

「かれこれ10年振りくらいになるかしら、了ちゃんと会うのは」重要な事を思い出したが、お婆さんの言葉にそっちの事を思い出した。最後にお婆さんと会ったのは俺が八歳の時だから、もう一〇年前になる…。

「お母さん、どういう事？」

完全に蚊帳の外状態の朝倉が落ち着いた口調で言った。おそらく状況を把握しきれていなくてイマイチ驚ききれていないのだろう。

「母さんと了ちゃんのママとは学生時代からの親友だね。…先にお昼にしましょう。マリちゃん手伝って」

「えっ、う、うん…。テーブルに掛けてて…」

言って二人はキッチンに行ってしまった。

俺は言われるままに椅子に腰掛けた。

「ふー…」

俺は静かに安堵のため息を吐いた。ともかく安心したのだ。いきなり朝倉のお婆さんに会う事になってどうなるかと緊張し切っていたのが、その朝倉のお婆さんがまさかの俺が知っている泉美お婆さんだったんだから…。しかしなんという巡り合わせだろう…？

それにしても一〇年ぶりくらいに会ったのに泉美お婆さんは俺が覚えている頃の泉美お婆さんとほとんど変わっていない。だから即ちに思い出せた。知らない人が見たら母子だとは思わないかもしれない…。

（なんか、運命を感じるな…運命！）

「お待たせ」

俺が想いを巡らせていると、朝倉がテーブルに皿を置いた。

「特製のハンバーグよ」

続いておばさんがハンバーグの乗った皿を持って来た。

俺はまたしても思い出しかけた何かを思い出せなかった。

#一四二 思い出話

「いただきます…」

テーブルに並べられた昼食を頂いた。

「ねえお母さん、先刻の話聞かせてよ」

ニコニコしながら朝倉が言った。

「だから、私と了ちゃんのママが友達でね良く遊びに行ってたのよ。でもお互いの仕事が忙しくなって互いの家に行けなくなったんだけど」

「へ」

朝倉はますます興味津々でおばさんの話を聞いている。

「もう会ってないの？」

「そんな事はないわよ、年に五、六回は会ってるわよ。先月はロスで会ったしね」

（そうだったんだ！）

そんな事まったく知らなかった。

「でもまさかマリちゃんの恋人が了ちゃんだったなんて運命的ね。この間あなたがロスに来た時に聞いて本当にびっくりしたわよ」

「じゃあ、最初から知ってたの？」

「ええ、了ちゃんが同じ学校に通ってるってほるかちゃんから聞いたから名前を聞いた時に直ぐ分かったわ」

（俺は泉美おばさんの子供が同じ学校だって教えてもらってないぞ！母さんっ）

「何であの時に言ってくれなかったの？」

「だって驚かせたかったんだもん。その方がおもしろいじゃない」

泉美おばさんはかなりいたずら心があるらしい…。舞衣は完全におばさん似だな…。

「ねえマリちゃん、覚えてない？」

「何が？」

きよとんとした顔で朝倉が聞き返した。

「何がって、マリちゃん一度了ちゃんと会ってるのよ」

「ウソ！いつ？」

「二人が五歳くらいの時よ」

そうなのである！先刻おばさんと再会した時に昔一度だけおばさんが俺と同じ歳くらいの女の子をうちに連れて来た事があったのを思い出した。その子が朝倉麻梨子だったと気付いたのは今であるが…。

「…ぜんぜん覚えてないわ…」

「そう？二人仲良く遊んでたのに。了ちゃんは覚えてる？」

「え、ええ…今思い出しました…」

「…自分の事なのに、なんか…」

朝倉は少し拗ねた様な口調でそう言うってからハンバーグを口に運んだ。

「でもマリちゃん。了ちゃんにフラれない様にね」

「ぶっ！」

お婆さんの一言に思わず吹き出してしまった！

「どういうこと？お母さん」

「了ちゃんのパパはね、大学の時の母さんの憧れの存在だったのよ」

（あの父さんが？）

「大学でサッカーをしていてね、エースで凄く人気の選手だったの。そんな了ちゃんのパパにアタックするためにまったく興味のなかったサッカー部のマネージャーやったほど憧れてたの」

父さんは大学時代、サッカーでそこそこの実力を持っていたというのは昔に聞いた事があったが、本当だった事を実感した。

「はるかちゃんも了ちゃんのパパに憧れててね、母さん一人でマネージャーになるのに勇気がなかったからをはるかちゃんも誘ったの。そしたら、いつの間にかはるかちゃんと一緒になってたのよ」

お婆さんの口調は少し寂しそうだったが、表情は晴れやかだった。「だからマリちゃんが了ちゃんとお付き合いしてる事に凄く運命を

感じるのよ」

「お母さん…」

「さ、母さんそろそろ時間だから…。悪いんだけどマリちゃん片付けお願いね。短い時間だったけど楽しかったわ」

お婆さんはリビングの時計を見て言った。

「え！うん」

「了ちゃん、ゆっくりして行ってね」

「あ、はい」

言ってお婆さんは手早くリビングを出て行った。

「……………」

「あー、びっくりした。あなたが舞衣と知り合いだった事より今日の方が驚きだったわ！」

「…俺もびっくりしたよ」

「母さんの恋愛話も堪能できちゃったし」

「俺も知らなかった事がいっぺんに分かったし…」

#一四三 二人の記憶

「じゃあ、またしばらくお留守番お願いね」

残った料理を朝倉と二人で食していると、すっかりよそ行き仕様になったお婆さんがリビングに戻ってきた。

「うん、気を付けて」

「了ちゃん、マリちゃんをよろしくね」

「はっはい！」

改めて言われると緊張する。

お婆さんはニッコリ微笑みながらリビングを出て行った。

「ねえ」

朝倉が話し掛ける。

「うん？」

「昔、会った時の事を覚えてる？」

「うーん、バドミントンをしたのを何となく覚えてるんだけど…他の事は…」

俺がそう言うと、

「あっ！思い出した！」

朝倉が声を上げた！

「え？」

「私一度も勝てなくて、悔しくて泣いてたんだ！」

「そ、そうだったけ？」

（全く記憶にない…）

「うん、だってあれから私、お母さんにバドミントンセットを買ってもらって、何ヶ月か猛練習してたんだから！」

「マジ？」

「でも、それから一度も会わなかったから、結局あの練習は無駄になっちゃったけど…」

「でも時間はかかったけど…こうしてまた逢えたじゃん。それも恋

人同士としてさ…」

（もしかして、今俺すげークサイこと言ってしまったか？）

「柊君！」

が、朝倉はすごく嬉しそうだ。

「そうだ、今からあの時の続きをしましょうよ！」

「マ、マジ！？」

「うん、マジ」

かわいらしい笑顔で言う。でも俺のことを知ったらやりたくなくなるかもな…。

「言っとくけど俺、小学校の時にバドミントンで県大会の上位まで行った事があるぞ！」

「ほ、本当に！？」

「ああ」

「本当にスポーツ万能なのね。でもいいの！やるの！」

（やれやれ、朝倉は結構頑固なんだなあ…）

#一四四 バドミントン

昼食の片付けをしてからバドミントンの準備をした。

「確かこの辺に…」

朝倉は庭の物置の中を物色している。しかし朝倉んちは庭も広い…。バドミントンどころかバスケの3on3くらいまでなら簡単に出来そうだ。

「何探してんだ？」

薄暗い物置の中を覗きながら俺は言った。

「ラケット」

「ラケットって、もう二本見付けてんじゃん」

「リベンジの為に買ったラケット！捨てずに取って置いたんだから」（やっぱり朝倉は頑固だ…）

「あった！」

誇らしげに朝倉は見付けたラケットを振って物置から出てきた。ずっと気になっていたが、今日舞衣の姿を見ていない。遊びに行ってるのだろうか？

「なあ…」

「ん？」

「今日…舞衣は？」

もう朝倉に舞衣のことを訊いてはいけない気がしたが…。

「ああ、舞衣？今日は東京に行ってるの」

俺の想いとは裏腹にあっさり答えた朝倉。

「東京？」

「うん、雑誌の取材だって」

「え！じゃあ、もう芸能界に入ったって事！？」

「みたいよ」

「みたいよ…って、そんなあっさり…」

「だって、舞衣本人がやりたいって決めた事だから私が口出しする

様な事じゃないじゃない」

妹の事なのに、他人事の様に言う朝倉。

「…朝倉は芸能界とかに興味はないのか？」

そんな話をしていると急に心配になってきた。

「無いわよ。あなたはあなの？」

「いや、そういう訳じゃないけど…」

「お母さんは私にもなればって言うけど、舞衣みたいに演技が出来るわけじゃないし、何より興味が無いもの」

「…安心した」

「は？」

朝倉は俺の言葉に“何事か？”という表情をした。

「朝倉が遠い所に行かなくて…」

本当に安心した。朝倉と離れる事なんかもう今の俺にはまったく想像出来ないし、したくもない！

「もう、何言ってるの？」

「大好きだよ、朝倉」

俺の言葉にパアッと頬を赤らめる朝倉。

「もう、恥ずかしいじゃない…いくよ」

言いながら朝倉は俺から距離を取り、

“ポーンッ”

シャトルをサーブした。

“パシッ”

俺はそれを返した。

「私も大好きよ」

朝倉の打ったシャトルが澄み切った真冬の青空に舞い上がった。

#一四五 衝撃の雑誌

暮れも押し迫った一二月二九日。

昨日は朝倉とバドミントンで盛り上がったが、今日も彼女と盛り上がる！といっても今日は久しぶりに映画を観に行くので盛り上がるという表現はちょっと違うが…。

朝倉と逢えるというだけでいてもたってもいられなくなり、予定より早いが俺は家を出た。早い時間に彼女の家に行っても迷惑になるので時間を潰すために本屋に立ち寄った。

(そういえば、映画楽の最新号出てたっけ)

そこで今日の映画の予習のために映画雑誌【映画楽】という雑誌を立ち読みする事にした。しかしただ立ち読みするつもりで何気なく手に取ったその映画楽を俺は大慌てでレジに持っていくハメになった！

そしてその映画楽を購入し、その足で朝倉の家へと向かった！

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

『ピンポン』

インターフォンが呼び鈴を鳴らす。

(早く早く！)

『ハイ？』

インターフォンのスピーカーから朝倉の声がする。

「早くっ早くっ」

俺はインターフォンのカメラに向かって急かした！

『えっえ！？』

そんな俺に困惑しながらも朝倉はスピーディーにドアを開けてくれた。

「ど、どうしたの？約束は1時でしょ？まだ用意できてないわよ！」

そういう朝倉の言葉どおり、彼女はまだパジャマ姿でいつもかけている眼鏡すらしていなかった。

「ごめん、でもどうしても早く見せたいものがあるから！」

「？見せたい物……？」

明らかに二人には温度差がある。

「ま、まあ、とにかく上がって……」

「あ、ああ……おじやます」

醒めている朝倉のおかげで何とか俺も冷静になれつつあった。

#一四六 朝のおのろけ

「とりあえずこれでも飲んで。息切らせてたし」

言って、朝倉はリビングのテーブルにオレンジジュースの入ったコップを置いてくれた。

「あ、ありがとう…」

それを飲んでいると妙に恥ずかしくなってきた。朝倉を見るとまだ少し醒めた目で俺を見ている…。

「ね、ねえ私の顔に何か付いてる？…じっと見られると…恥ずかしいんだけど…」

「ぶっ！」

普段目にしない素顔の朝倉をいつの間にか食い入る様に見詰めてしまっていた。そんな俺の視線に気付いたのか？注意されてしまった。

「い、いや…パジャマ姿の素顔に見惚れてて…」

「ちょ！何言ってるのよ！」

少し怒った様な口調だが、朝倉の表情は赤くなって明らかにテレビに判る。

「キスしよ」

そんな朝倉に欲情してしまった俺はリクエストした。

「えーっ。今日はおかしいわよッ」

俺は無理矢理に彼女の唇を奪った！

「んぐっ」

朝倉は喉を鳴らした。

（不意にしたから苦しいのか？）

そう思った俺は口づけを止めた。

瞬間。『ぷは〜』と大きく息を吸い込んだ朝倉。

お互いの目が合う。いつもレンズ越しに見ていた朝倉の裸眼は少し潤んでいる。

「ごめんっ」

「お返しよ!」

言って、今度は彼女からキスしてきた！
俺からの時と違い濃い口付けだ。

（あゝ、すげー心地良い…）

俺は彼女からの快感に酔い痴れた。

#一四七 事の真相

…ディープキスを終えると、

「で、見せたい物って？」

何事もなかった様に平然と訊ねる朝倉。

「え？ ああ…これ」

俺は少し動揺しながら袋から雑誌『映画楽』を取り出した。

「映画楽…？ これで今日観る映画を選ぶの？」

「そうじゃなくて、やっぱり朝倉も知らないのか？」

「何が？」

俺の質問にまったく検討が付かないという表情の朝倉。俺は見せたいページを開いて、彼女に見せた。

「ん？…第十二回アマチュア作品コンクール大賞？」

そのページに書かれた文字をおもむろに読む朝倉。

「そう、その金賞のところ見て！」

「金賞…モーニング・ムーン。柄沢明十八歳…！」

最初淡々と読んでいた朝倉だったが、語尾は明らかに驚いていた。

「これだったんだよ、舞衣がスカウトされた原因は！」

映画楽主催のアマチュアコンクールは毎年開催されていて、ここで金賞を、つまりグランプリを獲得した者の多くは実際にプロとしてデビューしている。あくまでメインは作品に対しての賞らしいのだが、その作品に出演していた素人の役者も何人か本物の役者としてデビューしているケースもある。今若手女優際注目の若瀬真澄もこのコンクールからデビューした。

「ええ！ 最優秀女優賞、朝倉舞衣十六歳！」

続けて読んでいた朝倉がさらに驚く！

「そうなんだよ！」

「…身内がこんな賞を獲るなんて、信じられないわ…」

朝倉は完全に面食らっている。さらに、

「そういえば昨日から東京に行ったきり帰って来ないし…」

「何か：俺らの知らない所で知らない事がどんどん進んで行っているだなぁ…」

「そうね…」

自分にはありえないと思っていた事が実際に起こっている、そのことを二人でしみじみ実感した…。

#一四八 目的地は・・・

「お待たせ」

着替えをしてきた朝倉が言った。

「じゃ、行こうか」

「分かってる？ 昨日の約束」

「分かってますよ、今日は俺のおごりだよ」

「えへへ」

昨日のバドミントンで敗けた方が今日の映画をおごるという賭けをしたのだ！ まあ、女の子相手に勝つのは大人気ないので、ワザと敗けてあげたのだが…とりたいが、実際本当に敗けてしまった。朝倉もかなり運動神経が良いのと、幼少時代、俺と知らずに敗れたリベンジのためにやっていたという特訓が功を奏した様だ…。

「いつもの所で良いか？」

「うーん、せっかくだから他のところでも良い？」

「もちろん、何処にする？」

「…東京…」

「? いいけど」

「ありがとう」

突然東京に行く事になった。自分達の住んでいる場所は千葉の片田舎だが、一時間ちよつとで都心に出られる。

「なあ、聴いて良いか？」

「何？」

電車の中で俺は訊ねた。

「どうして東京なんだ？」

「…それは…」

朝倉は少し口籠もってから、

「どうしてかな…自分でも良く解からないの…ただ、どうしても今日は東京に行きたくなって…」

「・・・・・・・・」

俺はただ黙って彼女の言葉を聞いていた。

「迷惑…だった？」

「！ いやいやっ全然っ！ せっかくのデートなんだから、遠出は大歓迎だよ」

「そう…良かった…」

安堵の表情を浮かべる朝倉。

#一四九 待ちぼうけ

『新宿〜新宿〜』

「着いた〜」

快晴の大会に立った瞬間朝倉が言った。

「さて、どうする？」

俺が訊ねると、

「行きたかったお店があるんだけど…寄り道して良い？
なんだか申し訳なさそうに彼女は言う。

「あ、いいね〜、そこに行こう」

「でも…男の人には入り難いお店なんだけど…」

「へ？」

「下着屋さん…」

「あ！それですか！…良いよ、表で待ってるから行こうよ」

「…うん」

本当に俺には未知の領域で、一体どんな所なのか興味があつたが
さすがに中に入る勇氣はない…。

俺は彼女の手を取って歩き始めた。手袋越しだったが、朝倉の温
もりを感じ取れた気がした。

（ああ…ホツとする…）

思わず朝倉を抱きしめたい衝動に駆られる。朝倉も今の俺と同じ
気持ちだったら嬉しいが。

「ここよ」

「え！」

店は駅のま近くでそんな俺の幸福感は束の間のものになってしま
った…。

「じゃ、じゃあ…俺、待ってるよ」

「うん…」

少し寂しそうな表情をする朝倉を見て俺と同じ気持ちなんだと判

った。店の中に消えていく彼女の背中を見て少し切なくなった。直ぐに逢えるのに…。

朝倉の姿が見えなくなった後、周りを見回すと俺と同じ状況と思われる男が何人が立っていた。この空間に居る男共はおそらく同じ感覚を共有している特殊な集まりになっているに違いない！

・・・数分後。

『ピロロロロロリ』

俺の携帯が鳴った！

「もしもし？」

『ごめんなさい…レジが混んで…』

「気にすんなって、待ってるから」

『うん、ごめんなさい』

言って電話が切れた。携帯を閉じた瞬間余計に切なくなった…。

そんな気を紛らわせるため、自販機でホットコーヒーを買い、しばらくそれを両手で握り締めた後、一気に飲み干した！

十数分後…俺には数時間に思えた頃店の出入り口から朝倉が駆け出してきた！

#一五〇 素直な気持ち

「ごめんなさい、待たせちゃって…」

「大丈夫だって」

言葉とは裏腹に、俺の頭の中は彼女が目の前に居るといふ喜びでいっぱいだった。

「このブランドってアンテナショップしか売ってなくて。いつもは通販で買っただけど、たまに失敗するから一度実際に見て買いたかったの。ごめんね寒いなか付き合ってもらって」

「いや、それは良いんだけど」

「今度、着けて見せてあげるねっ」

「ぶっ！」

（朝倉ってこういう事をサラッと言うようなコじゃなかったはず…）
変わっていく朝倉がなんとなく嬉しかった。

「さあ、映画にしましょっ」

そう彼女は言うが、俺はもう朝倉と一緒に居られるだけで良くなっていた。映画は別に今日じゃなくても…という気になってしまっていた。

「なあ？」

「何？」

「どうしても…映画、観たいか？」

「え？…まさか、賭けを破るつもり？」

「そうじゃないよ…ちゃんとおごるよ。…伝えたい事があるんだ…」

「な、何？」

真剣なトーンで言った俺に対して朝倉もトーンを落として言った。
歩きながらの会話だったがやっぱり周りの人が気になり言葉の続きが言えなかった。

「人の居ない所で言うよ…」

「？」

朝倉はキョトンとしながら俺に手を引かれながら歩いている。
人通りの少ない所を探したが、平日だというのにこの街は何処に
でも人が居て、人の居ない場所なんて無かった。

仕方なく、俺はそのまま歩きながら言う事にした。

「朝倉：聞いてくれる？」

「うん：」

「：俺：今、凄くドキドキしてるんだ：」

「え？」

突然言われた朝倉は何の事だが判っていない様だ。

「君と一緒に居るだけで：すごく安らげるんだ：逆に君に逢えない
時間がすごく苦しい：。死ぬほど君が好きなんだ！」

短く解かり辛い単語に俺は自分の気持ちの総てを込めて伝えた。

「・・・・・・」

朝倉は黙っている。

「あ、朝倉：？」

「：うれしいよ：」

かすれた声で朝倉は言った。

「私はずっとそんな気持ちでいたんだよ：」

「朝倉：」

「今は自由にあなたと逢えるから幸せなの：。でも片想いだった頃
は：。ずっとあなたの事を考えてた：すごく苦しくて、切なくて：。
あなたの姿を見るだけで嬉しかった：。私にとってそんな存在だっ
たあなたが私と同じ気持ちだなんて、すごく幸せ：」

「君の想いに比べたら、俺なんか苦しいって言っちゃいけないな：」

「どうして？」

「中二の時から四年間も苦しい時を過ごしてきたんだから。いや、
そんな想いをさせた俺が悪いんだ。ごめん」

「謝らないで！その四年間も含めて、あなたとの恋だから」

「朝倉：愛してるよ」

「私も大好き」

白昼の路上で愛を語り合うが、待ち行く人々はまったくお構いなし。まるで俺と朝倉二人だけ違う世界に居る様だ。ありがたい事である。

「やっぱり、映画観に行こうか？」

二人の想いを確かめ合って少しすっきりしたのか？急にそう思った！

「うんっ」

元氣良く返事する朝倉。

#一五一 夕食の誘い

「…ふう。どうなんだろう…」

「んー、悪くはないけど…長く感じたわ…」

観光名所の中にある映画館でこの正月に一番話題になるであろう作品を観た俺と朝倉の第一声だった。

「さて、どうしよう？」

「せっかく来たんだからこの中ちよつと見て行かない？」

「いいねえ、興味あったんだ」

「もしかして、ここ初めてなの？」

「うん。だって、今までこんな所に用事がなかったし、特に来たいとも思わなかったから」

六本木のとあるビル。出来てからもう何年も経つがここに来るのは初めてだった。そんな俺に朝倉は何とも言えない眼差しを向けている…。

建物の窓から見える外の景色は映画を観ている間に日が落ちてすっかり暗くなっていた。夕食を摂る前にヒルズの中を見て廻った。

『ピリリリリリリリ』

「！」

少しの間見て廻っていると、朝倉の鞆の中から携帯の着信音が鳴った。

「ごめんなさい」

言って、朝倉は携帯電話を手にした。

「もしもし？ え、お母さん？ うん」

どうやら電話の相手は泉美おばさんの様だ。

「え！でも今東京に居るのよ…。え！本当に？ちよつと待ってね…」

言って、朝倉は俺の方を見た。

「ん？」

「お母さんがね、一緒に夕食でもどうか？って…」

「…って言われても、今東京だし…」

「それがね、母さん達もここに居るんだって」

「ここって？」

「ここ…」

朝倉は地面を指差して言った。

「ここって…ここヒルズ？」

「そうみたい…」

何たる偶然！

「べつに断る理由がないしね」

「じゃあ、良いの？」

「うん」

「もしもし、今私たちもヒルズに居るんだけど…。うん、わかった、そこに行くね。はい、じゃあ…」

「ご飯代、浮いちゃった」

電話を切るなり朝倉は笑みを浮かべて言った。

「まあ、そうだな…」

そんなこんなでおばさんが指定した店に移動した。

#一五二 将来への不安

「本当はね…」

「え！」

移動中、歩きながら朝倉が言った。

「本当はね、舞衣への嫉妬だったの…今日ワガママ言っただけで東京に来たのは…」

俺は黙って彼女の話し始めた話を聞いた。

「私も、今日舞衣が居るこの街に来てみたかったの…舞衣の事が羨ましくて…これからあの娘が観ていくだろう景色を少しでも観たくて…」

「それって、朝倉も芸能界に入りたいってこと？」

黙って聞いているつもりだったが、朝倉の言葉に思わず訊いてしまった！

「ううん！そうじゃないの！」

慌てて否定する朝倉。

「私なんかじゃ、絶対に無理だし」

（そんなことないと思うけど…）

「あの娘は自分の夢に向かって着実に進んで行ってるから…私なんか進むどころか、その進む道すら解からない…目標すら持っていないの…。だからちゃんと将来を見据えてやってるあの娘が羨ましくて…」

この時期に将来のことを考えるのは誰でも嫌だろう…。朝倉も俺たちと同じ様に悩んでいるんだ。

「…目標なんてこれからいくらでも見付かるよ。俺だってまだ何をやりたいかなんて考えてもないし。幸い、大学に行けそうだからそこでゆっくり考えようと思ってる…。焦らないで見付けられればいいと、俺は思うぜ。俺にとっては君と一緒に居られる今が一番幸せだ…」

最後の言葉は関係ないような気がしたが言いたかった。かなりテ

レたが……。何とか彼女の不安を癒せればと。

「終く…ん」

「な、とりあえず焦らないで一緒に探そうぜ！目標」
「うん」

気休めにもならなかったかもしれない俺の言葉に、朝倉は笑顔で応えてくれた。

そんなこんなで泉美おばさんが指定した店の前に着いた。

「まだ着てないみたいね」

俺たちは少しの間、その場で泉美おばさんを待った。

#一五三 早い再会

「マリちゃん、了ちゃん、お待たせ。こっちょ。ささ」

やって来たおばさんに言われるまま、後に付いて店に入った。

（うわぁ）

連れられた先は何とも高そうなレストランだった。

「席はもう取ってあるから」

店内に入ると思ったとおり俺には無縁の空間が広がっていた！

「ママ遅い！」

先にテーブルに着いていた舞衣と目が合った！

「せ、先輩…！お姉ちゃんも！」

舞衣にとって居るはずのない俺と朝倉を見て驚いているが、それ以上に俺のほうが驚いている…。

「や、やあ…」

よそよそしく挨拶をしてしまった…。

「マリちゃんに電話したら、二人とも偶然ここに居たのよ」

おばさんが説明した。

俺と朝倉が並んで席に着いた。俺の向かいには舞衣が座っている…。真正面に居る舞衣の顔を俺はまともに見れなかった…。

「さ、何でも好きなものを注文してね」

おばさんが言う。俺は恐る恐るメニューを開いた。

（うわ！）

案の定良く解からない名前と、高い値段が書かれていた！

（何頼めばいいんだ…！）

「私は子羊と旬野菜のソテーで」

横から朝倉が言った。

（んー…もう分からん！）

「じゃ、フィランデステーキで…」

ステーキと書いてあったので牛肉だろうと思い、それを注文した。

続いておばさん、舞衣もウェイターに注文を通し、あとは料理を待つだけになった。

#一五四 まだ出来ない覚悟：

「今日は東京でデートしてたの？」

「う、うん…」

おぼさんの突然の質問に朝倉が答えた。おぼさんは俺と朝倉、舞衣の関係の事を知らないだろう…。

「でも良かったわ。ママ明日ロスに戻らなきゃいけないから。その前に舞衣ちゃん、マリちゃんと一緒に食事が出来て良かったわ。それにちゃんと食事できたしね」

おぼさんがこっちを見たので、会釈した。

「ママ、先刻から気になってたんだけど…ママは先輩の事前から知ってたの？そんな話し方だから」

どうやらおぼさんは舞衣にも何も言っていないようだ。

・
・
・
・
・
・
・

「へー、すごい偶然！」

おぼさんに簡単な説明を受けた舞衣、驚きながらも納得した様だ。今の舞衣は一体どんな気分なんだろうか？正直俺はまだ舞衣に逢いたくなかった…。

元は舞衣に一目惚れしたことから始まったこの三人の関係。だが俺は一目惚れした舞衣ではなく、朝倉を選んだ。いや俺には二人のうちどちらかを選ぶなんて権利は無い。俺は舞衣より朝倉の方をより好きになってしまった…。

その事を舞衣には伝えなければいけない。朝倉からではなく俺の口から。でも今はまだ言えない…。それは俺にその自信が無いから…。舞衣を悲しませてしまう事に覚悟が出来ていない。舞衣にいくら恨まれようが、それにはもう覚悟は出来ている！でも、舞衣を悲しませたくない、それだけが気掛かり。

今の俺と朝倉を見て、舞衣は一体どう思っているのだろうか？

・ ・ ・ ・ ・

しばらく談話しているとウェイターがワゴンで料理を運んできた。手際よく優雅にそれらの皿を俺たちの目の前に並べて、ウェイターは席を去った。

テーブルに置かれた料理を食しているとおばさんが、

「そうそう、明日のスポーツ新聞を見たらマリちゃんびっくりするわよ」

「ちよっママ！」

おばさんの言葉に舞衣が慌てた！

「どうして？」

そんな二人を見てキョトンとしながら朝倉が言った。

「フッフ、明日を楽しみにね」

「どうやらおばさんはかなり“もったいぶる”のが好きな性格のようだ。」

「お姉ちゃん、見なくていいからね！」

「何よっ」

（そう言われると凄く気になるが…）

#一五五 さよなら・・・

とかなんとかで食事を終え、外に出た。

「じゃマリちゃん、私と舞衣ちゃんはもう一泊こっちでするから」

「え！そうなの？」

「うん、まだ明日もちょっとやることがあるのよ、ね、舞衣ちゃん」
「え！う、うん」

おばさんに促されて舞衣が頷いた。食事中に言っていた明日のスポーツ新聞の事が関係しているのだろうか？それでまた明日のスポーツ新聞が気になった。

「じゃあ舞衣が帰って来るのは明後日？」

「ううん、明日の夕方には帰れるはずよ。私はそのままアメリカに戻らなくちゃいけないの」

「わかったわ」

「マリちゃんはまだちゃんと楽しみたいでしょ。でもあまり遅くならないようにね…。了ちゃん後はよろしくね」

「は、はい」

おばさんはニツコリしながら俺に言った。

「先輩さよなら…」

「ああ…」

舞衣がよそよそしく言った「さよなら」に意味はあるのだろうか…。舞衣は今どんな気持ちで俺と朝倉を見ているのだろうか。

「じゃあね、お姉ちゃん」

「うん、頑張るなさいよ」

「ありがとう、お姉ちゃんもね」

朝倉と舞衣のやりとりを見ていると俺の考えなんて単に独りよがりなのかもしれないと感じた。

俺と朝倉を残し、おばさんと舞衣は一足先にその場を後に行った。

「・・・・・・・・」

「何か足りなくない？」

「へ？」

二人きりになったところで突然朝倉が言った。

「お腹：あれで足りた？」

「あっああ！実はまだいけそう：」

「じゃあ、ファストフードでも？」

「いいね、行こ」

俺たちは近くのファストフード店を探して入った。

#一五六 デートの閉め

「やっぱりこっちの方が落ち着くう。健康には…だけど」
サンドイッチを片手に朝倉が言った。

「でもありがとう…奢ってくれて」

「良いつて、バドミントンに負けたんだから」

「そっか、じゃあ遠慮なくいただきますっ」

「ふっ」

朝倉の言葉、仕草に少し笑ってしまった。

「な、何？」

「いや、朝倉ってなんか変わったなって思ってた…」

「え！変わったて？」

「俺の思い込み…俺の感じた事なんだけど、前はどっか遠慮がちだったっていうか、よそよそしい感じだったっていうか…」

「そ、そう…だった…？」

「だから、あくまで俺のからの感じだから気にしないで！…今はなんていうんだろ、凄く距離が縮まってる気がする。それに…こっう、喋り方も俺に似てきたって感じがするし…」

俺の言葉を受け朝倉は一度飲み物を口にして、

「そうかもしれないわね…」

一呼吸置いて朝倉はさらに続ける。

「…前は…だって…。いつあなたに逢えなくなるのか？そんな事ばかり考えていて凄く不安だったの…。でも今は違う…」

「何度も言うけど…本当にごめん。俺の所為でそんな思いをさせていて…」

「私も何度言うけど、謝らないで」

「愛してる」

「私も愛してる」

この数日間、何度この言葉を言い合っただろう？おれはこのやり

とりをする度に胸が痛く切なくなりそれと同時に幸せを感じている。それは今までの朝倉への罪悪感とこうしてその事を彼女と言い合える事への幸せ。その両方の言い様のない感情を抱いている。

こんな二人のやりとりを他人が見たらどう見えるだろうか？まあ、これは俺一人の感情で、朝倉が俺と同じ感じを抱いているとも思えない。まして他人には解からないだろう。

一通り注文した品物を食べ終えた後もしばらく話込んでいた。

「げ！もうこんな時間！」

「二一時！」

二人して現在時刻に驚いた！

「早く出ないと、終電までにたどり着かないな！」

「うん…」

トレイを片付けさっさと店を出た。

#一五七 離れたくない

「柊君…」

駅まで少し早足で歩いている途中、切なげな声で朝倉が言った。

「ん？」

「私…離れたくないの…」

（メチャクチャカワイイ！）

その朝倉の表情がたまらなく愛らしい！

「でっでも、帰らないと…」

今晚朝倉の家には誰も居ないが、だからってさすがに…。

「そうだけど…この気持ちはどうしようもないの…」

まるで“何か”を我慢しきれない様な表情で朝倉が訴える。俺はそんな彼女の手を握り、自分のコートのポケットに入れた。

「！」

朝倉は少しびっくりした様だが俺は。

「とりあえず…戻ろう」

「…うん…」

渋々という感じで朝倉は頷いた。

電車に乗り、夜の大都会を後にした。

乗客もまばらな車内で俺と朝倉は寄り添い合って座り、流れる窓の外のネオンを眺めていた。時折、見詰め合っては微笑み合う。傍から見ればただのバカップルに見えるだろう。でもそんな事はどうでもいい。他人にどう思われようと、今の二人は離れたくないという一心で、このままずっと電車が停まらなければ良いと思っている。また明日逢えるのだからそれまでの数時間も離れたくない。

だが、無常にも電車は俺達の住む町に着いてしまった…。

「…行こうか…」

「…うん…」

ゆつくりと電車を降りて、先刻まで居た華やかな街並みとは違い、
人気がない小さな駅の外に出てきた。

冬の夜風が吹きぬけ、閑散とした空間が余計に寂しい気持ちにさせる。

「やっぱ、静かなだな…」

駅から少し歩いたところで俺は言った。

「そうね…。ここまで帰ってきたんだから、もう少し寄り道しない？」

「ああ…」

朝倉の言葉にホッとした。

#一五八 ここから始まった…

途中の自販機でコーンスープを買って、朝倉の家の近所の公園のベンチに座った。周りを住宅に囲まれている小さな公園で、寒風が吹き抜けない良いコンディションの公園だ。

「お！これ結構イケるなあ」

俺は一口飲んだ缶スープの感想を言った。すると朝倉は、

「コーンスープ好きなの？」

「まあ、冬になると良く飲むなあ。ホラ、粉のやつ」

「へー。ふふっ、じゃあ今度私が作ってあげる」

「マジ！楽しみにしてるよ」

俺がそういうと朝倉は俺の持っている缶を要求して、それを一口飲んだ。

「…こういう味が良いのね、解かった」

「いや、こんなのより、俺は君のオリジナルの味付けのが飲みたい」
「ありがと」

夜空には、多くはないが星が綺麗に瞬いている。

「この公園…あのブランコに座って…告白したね、私」

俺たちが今座っているベンチの斜め向かいにあるブランコを見ながら朝倉が言った。そう、この公園は五月に朝倉に告白されたあの公園。

「…そうだな…そっか、ここから始まったんだな…俺たち」

「あの時私泣いちゃったね…思えば私、いっつも泣いてるね」

「あれは…ホラ、俺が不躰に変な事を訊いたのが悪いんだから」

朝倉の言葉から俺はあの時の事を思い出していた。まだ半年前の事なのにずいぶんと昔の出来事のような気がする。そう、何年も前の様な気。

「違うの…」

さらに朝倉の話は続く。

「あの時泣いちゃったのは自分への不甲斐無さからかなの…」

「え！」

「本当は教室で言いたかったの…『好き』って。でも勇気が出なくて…。結局口から出た言葉が『一緒に帰ろう』だった…」

彼女はテレ笑いしながら言った。

「俺はそれで良かったよ、一緒に帰ろうって言われて時メチャクチャ焦ったもん！あの時いきなり告られてたら、俺その場で倒れてかもよ」

少し笑わせようと言う気持ちで言ったが、実際あの場で告られていたらそうなっていただろう。

「えへっ、私…あの時のチャンスを逃したら次は無いと思って必死だったの…そしたら…泣いちゃって…」

あの時の朝倉はよほど切羽詰った状態だったのだろう。

「でも、あれから本当にいろいろあったなあ…」

俺は再度この半年間を思い出しながら言った。

「永かった…。告白した時、あなたは別の女性が好きで…それが自分の妹だった…」

(ズキツ)

朝倉の言葉に胸が痛んだ…。

「あの時は…今のこの状態なんてまったく想像できなかったけど…今思えば片想いの頃も良い思い出よ。今が幸せだからそう思うのかもしれないけど…」

何かをかみ締めるように朝倉はそう言った。

「朝倉…これから、もっと良い思い出、いっぱい作ろうな」

「うん」

彼女を引き寄せ、口づけを交わした。

「なんかこうしてると満足しちゃった…」

晴れやかな顔で朝倉が言った。

「え？」

「ごめんね、帰りたくないとか言って困らせちゃって」

「え？あつああ…」

なんなら彼女の家に泊まらせてもらおうかとか思いはじめていたのに…。

「だ、大丈夫なのか？」

彼女の気を変えようと無駄な質問を試してみる。

「うん。…明日も逢える？」

「も、もちろん…」

「じゃあ、また明日ね」

「ああ…」

こうなるんだったら早く言っておけば良かったと後悔する俺…。
二人しか居ない小さな公園を包む夜空を星が一つ滑り落ちた。

#一五九 衝撃と寂しい朝

『チャツチャチャッチャツチャツチャッチャッ』

「ぐっ…う」

ベッドのヘッドボードに置いてある携帯の着信音で目が覚めた…。昨日のデートから一夜明けた自分の部屋。

「も…もしもし？」

着信を確認せずに電話に出た。

『ごめんなさい、まだ寝てたの？』

電話の相手は朝倉だった。

「う、今何時？」

『一二時前よ。それよりスポーツ新聞見て！』

「あ、スポーツ新聞買いに行かないと…」

朝倉のテンションが高いが、寝起きの俺のテンションは低い。いつものパターンと逆だ。

『昨日お母さんが言っていたのは舞衣が映画に出るって事だったのよ！』興奮する朝倉との電話を終え、俺は近所のコンビニへ走り、スポーツ新聞を買った。家に帰って一緒に買ってきたパンを喰えながら新聞のページを捲った。

「あっこれか！」

“村西監督最新作【紅い河 青い空】製作発表”

芸能ページに大きく見出しが載っている。文書によると、

《大ヒット作【早秋の雪】以来二年ぶりの新作は、異世代の女性が現在世界に迷い込み、そこで生活していく物語になる予定で、主演に藍田亜紀子。脇を固めるのは、キリガジョー、八木厚等豪華メンバーがキャスティングされている。そして今回の製作発表でもっとも注目されたのが、村西監督自らが若手育成と称して二人の新人を起用した点。一人はこの作品がデビューとなる女優・朝倉舞衣（16）彼女は女優としてのキャスティング。もう一人は撮影助手とし

てクレジットされている柄沢明（18）。二人とも現役の高校生で同じ高校に在学。今年の『映画楽主催アマチュアコンクール』でグランプリを獲得している注目の逸材。通常こういう発表はされないのだが、この舞台での発表は村西監督の期待の表れではないだろうか。この二人の高校生にも注目。くく」

（柄沢も！）

パンを食べていた事も忘れ、俺は急いで姉キの部屋へ行った。

「姉キ！ちょっといいか？」

ドアをノックし、俺は姉キの部屋へ入った。姉キはそんな事に気付かずまだ寝ている。俺はそんな姉キを放っておき、パソコンの電源を入れた。もっと詳しく知るためにネットにアクセスしたが、新聞に載っている事以上の情報を得る事は出来なかった…。

（つたく、いつまで寝てんだよ）

部屋を出るとき、姉キを見ながらそう思った。

（あゝ、朝倉に逢いたいな）

少し落ち着いて強く思った。昨夜、また今日会う約束をしていたのだが、先刻の電話で今日はおばさんを見送る事になったと言っていたため、彼女とは逢えない事になった…。

（明日で今年も終わりか…）

思い出した食べかけのパンを齧りながら、カレンダーに目をやる。

「もうくくくつ寝るとくお正月く…か」

寂しさを紛らわすため、一人つぶやきながらテレビを点けた。

#一六〇 大晦日

『なあ、初詣にでも行かね〜か?』

「マジ? 朝倉と行こうと思っただけど…」

『そんな事分かってるよ! ラブラブだなあお前ら』

(お前に言われたくないよ)

「豊だって、月島と行くんだろ?」

『もちろん行くよ。だから四人で行こうぜっ』

「…まあ考えとくよ」

『そっか、じゃあまた夜に連絡するよ』

今日は一月三十一日・・・大晦日の真昼。

少量だが、出された冬休みの宿題をやるうと思ひ、冬休みになって初めて部屋の机に座った。が、いざノートを開いた瞬間に自分の部屋が散らかっている事に気付き、宿題をやらずに部屋の大掃除を始めてしまった。そんななか、豊から先の電話があった。結局、宿題も大掃除もまったく捗らなかった…。

もう面倒なので掃除を適当に終わらせ、夜までのんびりする事にした。宿題は…朝倉と一緒にやった方が捗る…。

「了希。私これから出掛けるから、夕飯自分でやってね」

少し掃除をしたところで、休憩がてらコーヒーを飲みながらリビングでポケッとテレビを観ていると姉キが言ってきた。

「何時くらいに帰るんだよ?」

「さあ? 遅くなるはずよ」

多分今夜は帰ってこないだろう…。

「俺も夜には出掛けるから」

「そうなの、じゃあ後は頼んだわよ」

「へ〜い」

言って姉キが出て行った。

大晦日だというのに両親は海外で仕事中。明日中には帰ってくる

らしいが毎度毎度忙しいことで。

（何か：急に暇になったなあ：）

特に目を引く番組を放送していないテレビを消して、俺は自室に戻り掃除の続きを始めた。

#一六一 大晦日の予定

『ジョボジョボ』

「ふう」

残りの大掃除を済ませ、再びコーヒーを飲みながら一息ついた。部屋のテレビを点け、なんとかカッコウが着いた部屋を見渡した。（これでなんとか年を越せるな）

と思っていると、

『ピッピッパッパ』

携帯が鳴り出した！この着信音は朝倉だ。

「ハイ？」

冷静を装った声とは裏腹に、朝倉の声が聞けて嬉しい。

『もしもし？あのね、佐久野君と一緒に初詣に行かない？って』

「ああ、それなら俺のところにも連絡あったよ……って、何で豊が朝倉の番号知ってんだよ！」

『えっ？前に教えたのよ』

「そうなの！」

俺は少し“ムッ”となった。

「どうしようか？俺は君に訊いてからと思ったんだけど……」

『私はべつに良いと思うけど……。あなたは嫌なの？』

「正直、俺は誰にも邪魔されずに君と二人きりで居たいんだけど……」
少々恥ずかしかったが、今自分が正直に思った事を言った。

『……私も、二人っきりがいいけど。でも、皆と一緒に居れる時間
ってもうあまりないかもって思うの……』

……そうだな。三学期は短い。朝倉の言うとおり皆に会えるのも限られてくるんだな……。

「そうだな、じゃあ豊たちと一緒に行くか」

『うん！初詣だけでもみんなで行こっ』

「じゃあ、豊には俺から連絡しとくから」

『よろしくね』

「じゃー一時頃に家に行くから」

『ねえ…』

「うん？」

『もっと早くじゃ…だめ？』

「え？別にかまわないけど、用事とか良いのか？」

『うん、もうする事が無いから…舞衣も映画の仕事で先刻出て行っ
たし…二日間帰って来ないって』

「マジ！？大晦日だぜ」

『新人に休みは無いんだって』

「はー、キツイ世界だな…。分かった、じゃあ今から行くよ」

『うん、待ってるね』

朝倉との電話を切って直ぐに豊に電話を掛けた。

「何時から行くんだ？」

『んー、特に決めてないけどなあ…。また夜に電話する。わるい、
今忙しいから切るな』

「………」

（ったく、自分勝手な奴だ）

大掃除で誇りまみれになった俺は、軽くシャワーを浴びてから朝
倉の家にむかった。

#一六二 思わせぶり

朝倉の家に向かう途中、注連縄などの正月の物が出されている家を発見し、それらを見ながら改めて今日が大晦日だった事に気付きながら自転車を加速させた。

「あれ!？」

朝倉の家へと続くカーブを曲がると、家の前に朝倉が立っているのが見えた!

「あ、いらっしやい」

「待ってたのか?寒いのに」

俺は自転車を停めながら言った。

「ううん、そうじゃないんだけど、そろそろ来る様な気がしたからちょうど外に出てきたの」

「マジ?」

「うん。さっ上がって」

「おじゃまします」

(ん!)

彼女の家に入った瞬間、良い匂いが鼻をくすぐった。

「もしかして、コーンスープ?」

俺が訊ねると彼女はニッコリして、

「うん、まだ出来てないんだけど。もう少し待ってね」

「ありがとう…」

一昨日、公園で言っていたスープだ!

リビングに入ると朝倉は台所へと消えていった…。

(あっ!)

少し一緒に居て欲しかった…。

仕方なくソファーに座り、点いていたテレビを観ていると、

「ハッ」

「うっ!」

突然朝倉が後ろから朝倉が抱き付いて来た！そのまま彼女は背もたれを乗り越えて俺の横に座ろうとした、俺はそんな彼女を力いっぱい抱き寄せ、自分の膝の上に座らせた。

突然の体勢、僅か数センチのところで向かい合う二人。恥ずかしそうにしているのか？朝倉は少し潤んだ瞳を俺に向けている…。そんな彼女の瞳に吸い寄せられる様に口づけをした。

「このまま…押し倒していい？」

俺は冗談めかせて言った。

「うふっ…だゝめっ」

甘えた声で返されてしまった…。

「出来た？」

「うん、あとはねかせるだけ」

「じゃあ、その間、俺たちも寝ようか？」

言って、俺は膝の上から彼女をソファーに横たわらせた。

「ちよっ！」

さすがに驚く朝倉。構わずその横に俺も添い寝をした。

「な、なに？」

「ん？夜のために昼寝。豊たちと初詣行くなら朝まで帰れなさそうじゃん、そのために今寝とこって思ってたさ。もしかしてちよっと期待した？」

「バカ！」

怒られてしまった。

#一六三 コーンスープ

「……っうっ」

(あっそっか…)

あれから朝倉の部屋に行き、本当に昼寝していた。気がつけば外は薄暗くなっていた。

隣に居る朝倉はまだ眠っている。

(よし、キスしてやる!)

薄暗い部屋の中、スヤスヤと寝息をたてている朝倉の顔を見ているとその衝動を抑えられなくなった。

俺はそっと自分の顔をかわいい眠り姫に近づけ、キスをした。お伽噺のようなキスではなく、愛情のデ IPP キスだ!

「!」

無理矢理彼女の口内を食ると、即ぐに朝倉は目を覚ました!そんな彼女と目が合った瞬間俺はキスを止めた。

「お、おはよう…」

何事か状況を理解できていない朝倉に悪い事をしてしまったと後悔する俺。しかし朝倉は、

「もう!」

冗談っぽい怒り方で、今度は彼女からキスしてきた。

・ ・ ・ ・ ・

二人でリビングに下りるとそこにはコーンスープの香りが広がっていた。

「すぐ温め直すね」

「うん」

言って朝倉はコンロに火を点けた。その姿を俺はカウンター越しに見ている。

(あ!)

俺はリビングに置きっ放しになっていた自分の携帯を手を取った。

（豊からまだ連絡はないな）

それを確認していると、

「もうすぐ紅白が始まるわね」

キッチンから朝倉が言った。

「もうそんな時間か…」

夜のためにと昼寝したが、明るい時間を無駄に浪費してしまったんじゃないかと少し後悔した。

「紅白が始まると今年も終わりなんだなあって実感する」

「そうだな…」

言いながら俺はリビングのテレビを点けた。

「お待ちどうさま」

言って朝倉が鍋をテーブルに置いた。蓋を開けた瞬間、スープの香りがより一層リビングに拡がった。

「美味そう！」

「はいどうぞ」

言って朝倉が皿によそってくれた。

二人分の用意が出来たところで、

「じゃ、いただきます」

俺が言うと少し不安そうな顔をする朝倉。おそらく俺の感想を待っているのだろう。

「……んっ！」

「え！」

お約束的な間を空ける…。

「美味い！」

その言葉を聞いた朝倉は、

「本当!？」

「うん、ちょうど良い甘さで、想像通りだよ」

「良かったあ。あの缶スープをもう一度飲んでみて参考にしたんだけど…」

「なかには酸っぱかったり、塩っぱいコーンスープってあるじゃん。

そういうのが好きな人も多いんだろうけど、俺はコーンの甘みが出ての方が好みだから」

「やっぱりそうなのね。あの缶のを飲んでそうじゃないかって思ったの」

「サイコーだよ。これって何か市販されてるやつで作ったのか？」

「うん：まあ、ベースは市販のだけど：味付けは私が」

「やっぱ、朝倉は料理巧いよなあ」

言いながら気が付くと俺の皿のスープは無くなっていた。

「：ありがとう」

少しテレが入りながら朝倉は言った。

「おかわりは？ まだまだ沢山あるわよ」

「じゃ、いただきます」

#一六四 大晦日の夜

「なあ、今年の紅白誰に注目してる？」

「んー、今年の出場者には…居ないかな」

「だよな、毎年興味が薄れてきてるよ」

スープを飲み終え、二人でリビングのソファに寄り添いながらテレビを観ている。結局三杯もコーンスープをおかわりしてしまった。

テレビから流れる興味の無い演歌を聴いていると、俺の携帯が鳴り出した！

「電話…」

テーブルに置いているためにソファから立ち上がった俺。少し寂しそうにする朝倉…。

「豊だ」

俺は一言朝倉に告げてから電話に出た。

「もしもし？」

『今からお前んちに行くぞ』

「え！今、俺家に居ないぞ」

『はあ？何処だよ？』

「…朝倉んち…」

『え！もしかして邪魔したか？』

「バーカッ」

アイツは毎回これだ。

『そっか、せっかくお前んちで暇潰そうと思ってたのに…』

俺はチラッと朝倉を見た。

「ねえ、佐久野君も呼んだら」

「良いのか？」

「もちろんよ、夕食まだだったら一緒に…」

「あっそうだな」

朝倉の提案に俺は良い事を思い付いた！

「豊、メシ食ったか？」

『ん？ただけど』

「じゃあ、今から朝倉の家に来いよ、一緒に食おうぜ」

『マジ！朝倉の手料理食えんの？…でも俺、朝倉の家知らねえぞ』

「アイツ、家知らないんだって…」

俺は朝倉に言った。

「由実が知ってるわ」

「月島なら知ってるだろ」

『あゝ、今由実と一緒にじゃないんだ…。じゃあ由実も連れて行くよ』

「あっそれでな豊、何か食材買って来てくれ、今何もない状態なんだ。出来合いのものでも良いから」

『えゝ！俺あパシリか！？』

「頼んだぞ」

言って、電話を切った。

「ま、一時間は掛かるだろうな」

そう言って朝倉の方へ戻って行った。

「ん、どうした？」

俺の顔を見て朝倉がにこにこしている。

「やっぱり仲良いね、私妬けちゃうよ」

「やめてくれよ！気持ち悪い」

「あははは」

今の時刻は午後八時過ぎ、コーンスープで腹は減ってないが夕食が待ち遠しくなった。

#一六五 友人を待ちながら

「なにか残ってたかな？」

言って朝倉がソファアを立って、歩き出した。

「残ってたって？」

「なにか材料残ってなかったかなと思って。買って来てくれるものだけじゃ足りないかもしれないじゃない」

「どうせ出来合いの弁当でも買ってくるんじゃないか」

「そうかもしれないけど、それだとなおさら何か造らなきゃ」

「そんなもんかねえ」

「そんなもののよ」

んー、こういう性格だから朝倉の料理は美味しいのか？

「えーっと…」

キッチンに移動した朝倉が冷蔵庫を開けて食材を探している。

「あー、何もないなあ…」

「気にする事ないって」

「明日からまた留守にするから、何も買ってなかったのよね…」

たしか朝倉は元旦から祖父の家に行くんだっけ。

「なにか残ってるかなと思ったけど何も無かったわ」

「問題ないって、アイツらだ買ってくるものに期待しよ」

「そうね…」

こうして二人でまたソファアに座りなおして、大晦日の特番だらけのテレビを観ていた。

気が付けばすっかりテレビにどっぷりで、色々チャンネルを回しているとあれもこれも観たくなって、二人で結構楽しめた。

「そのうち、ここにあの子が映る時がくるのかな…」

不意に朝倉が囁くように言った。

「え？」

「ううん…なんでもない」

「そう…」

その後の言葉を彼女は言わなかったが、おそらく舞衣の事だろう。

#一六六 合流

『ピンポン』

テレビを観ていると呼び鈴が鳴った。

「八時五〇分。早かったな」

「行ってくるね」

朝倉が出迎えるため、玄関に向かった。

（何買って来たんだ？）

ますます夕食が楽しみになってきた。

「結構近かったんだな、朝倉んち」

言いながら最初にリビングに入ってきたのは豊だった。

「ごめんね、二人の愛の巣にお邪魔しちゃって」

「何言ってるのよ！由実っ」

（月島も豊化してきたな…）

月島に続いて朝倉が最後にリビングに入ってきた。

「柊君くんばんは」

袋をテーブルに置きながら月島が言った。

「お、おう…」

「寒かったでしょ？ちょっと待ってね、暖まるスープ出すから」

「あっありがとう」

「お、この匂いはそれか」

「何買って来たんだ？」

俺はソファから腰を上げて、テーブルの方へ歩み寄った。

「んー、何にしようか色々迷ったんだけど、豊がどうしてもって」

「ふふふ」

月島の言葉に不適な笑いを浮かべる豊。

「何だと思う？中見てみ」

「んー？」

豊に言われ、俺は袋の中身を確認した。

「ん？卵…」

俺はまず最初に手に掛かった卵1パックを取り出した。続いて、

「で…鶏肉…」

「長ネギ…」

大きなものはこれだけ、後はきざみ海苔が出てきた…。

「これって…」

「お前好きだろ？」

「また親子丼かよ…」

いつかと同じ光景だ…。大晦日になにも親子丼食わなくても…。

「あ、あとそばも買ってきてんだぞ」

続いて豊が言った。

「あ！そういえばおそば買ってなかったなかつたわ！」

キッチンから朝倉が言った。

「多分ないだろうと思ってちゃんと俺が買って来てやったんだぞ」

「へー、お前にしては機転が利いてんな」

「なに自分の手柄にしてるのよ！私が言ったんでしょ！」

空かさず月島がツツコンだ。

「…やっぱりな、お前がそんなところにまで頭が回るわけないもんな」
「うるせー」

と言いつつ、俺も年越しそばのことはすっかり頭になかったのだ
が…。

#一六七 説明と準備

「お待たせー」

朝倉が温まった鍋を持ってきた。

「あー、良い香り」

「美味そう」

二人とも目を輝かせている。

「まずはこれでも食べて」

「「いただきます」」

「うめー」

「ほんと、おいしいわ」

朝倉のコンスूपを一口口に入れた瞬間、豊と月島が絶賛した。

「ありがとう」

それを聞いた朝倉は嬉しそうにしている。そんな朝倉の手料理を俺はいつもご馳走になってるいるという優越感を覚えた。

「あっそうだ、麻梨子お米ある？」

「あるわよ。そういえば夕食何かって来たの？」

「親子丼の材料買ってきたみたいだぞ」

二人の会話に俺が割って入った。

「親子丼？」

「そう、柊の好物」

今度は豊が割って入った。

「そうなの？」

「そう、この前麻梨子が居なかった時にお弁当買って行ったんだけど、その時迷わず親子丼を選択したのよ」

ご丁寧な月島が説明する。

「そんな事があったの…」

“自分の知らないところで…” そんな寂しげな表情の朝倉。

「ほらこの前ロスに行ってた時、みんなが気を使ってくれて…それ

で」

「ああ、あの時」

俺の説明で何とか理解してくれた様だ。

「じゃあ、さっそく用意しないかね」

「あ、私も手伝うわ」

言って月島は残りのスープを口に入れた。

#一六八 大晦日の夕食

「いやゝ、しかし朝倉お手製のスープは美味しいなあゝ」

月島は朝倉と一緒に夕食の準備のためにキッチンへ行ったが、豊はそんな事構わず朝倉のコーンスープを貪り食っている。

「あ、まだ残ってる！全部食ってやろ」

鍋の中に残っているコーンスープを見付け、自分の皿に掻き入れる豊。

（コイツ…）

「麻梨子の技術を盗すまないとね」

「それで佐久野君に作ってあげるのね」

「あのバカ、なにかとキャンプの時の麻梨子のカレーを引き合いに出すのよ！もう、頭くるのよ！」

「あはは、見返してやらないとね」

キッチンでは朝倉と月島が話しながら準備している。豊はまだ食ってる…。俺一人何もする事がない…。

・
・
・
・
・
・
・

「お待たせー」

三〇分ほどでテーブルには四人分の親子丼が並んだ。

「早かったな」

「うん、ご飯は前もって炊いていたから
手際の良いことで。」

「由実は何したんだ？」

「ほとんど手伝ったわよ！」

「まあまあ」

怒る月島を宥める朝倉。

「美味そう」

出来上がった親子丼に俺は率直な感想を述べた。

「でも、改めて麻梨子の凄さを実感したわ」

「何が？」

豊が訊いた。

「この出汁、麻梨子オリジナルなのよ」

「オリジナルって！そんな大袈裟なものじゃないわよ。ただ市販の出汁にひと手間加えただけなのよ」

「それが凄いのよ」

「まあ由実なら市販のままを使って終わりだもんな」

「いちいちうるさいのよ豊は！」

「ささ、冷めないうちに早く食べましょ」

慌てて朝倉が言った。

「」「」「いただきまーす」「」「」

朝倉と月島が作った親子丼は凄く美味かった。

#一六九 年越しそば

「ごちそうさま」

「あゝおいしかった」

賑やかな夕食が終わった。

「もう腹一杯」

先にあれだけのスープを食べばそりゃ腹一杯だろうよ…。

「さあ、なにする？」

豊が言う。

「ちよっと休憩しましょうよ、それに片付けしないと」

月島が返した。

「あとで年越しそばも食わないといけないだろ」

「うっ」

俺がそばの事を言うと、豊は露骨に嫌そうな顔をした。

そのままだらう俺たちはテーブルに着いたまま喋っていた。思えば、冬休みに入って朝倉以外のクラスメイトと会うのは初めてだ。
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「そろそろ片付けましょうか？」

月島が言った。

「え、ああ」

「手伝うわよ」

「ありがとう」

「じゃあ俺たちはテーブルを片付けるよ。豊、布巾取ってきてくれ」

「結局俺はパシリか」

片づけをした後、ボードゲームで盛り上がった。

「そろそろおそばにしましょうか？」

ゲームで一通り盛り上がった後、朝倉が言った。

「そうだなあ」

言いながら時間を確認した。既に一一時を過ぎていた。

「じゃあ、パパッと造ってくるわね」

「ああ、でも皆腹一杯だろうから、三玉を四人で分けた方が良いんじゃないか？」

「さんせえ」

豊がありがたそうに言った。

「そうね。じゃあ、ちよっと待ってて」

「あっ麻梨子、私も」

「いいのよ、おそばなんて簡単だから」

「由実が居ると邪魔なんだって」

「なによ！」

また豊が余計な事言った。

・ ・ ・ ・ ・

「お待たせ」

数分後、リビングのテーブルには四人分のそばが並んだ。

「うまそ」

さっきまで満腹で死にそうな顔をしていた豊が、そばを前にして言った。

（よく食う奴だな…）

#一七〇 カウントダウン

「あっ！あと三分ほどで年が明けるぞ！」

年越しそばを食べ終え、そのままリビングのテーブルでまた談笑していると、豊が時計を確認して言った！その声に皆一斉に時計を確認する。

「いつの間に！かなり熱中してたんだな
時計を見てびっくりした。」

「あっテレビでカウントダウンしょ！」

月島に言われ、テレビを点ける朝倉。

「あ！あと一〇秒！」

「「「五、四、三」」」

テレビに合わせて四人でカウントダウンをする！

「「「二、一：」」」

「「「あけましておめでとーう」」」

四人で一斉に叫んだ！

「何だかんだで年明けたな…」

「高校生でいられるのも、あと三ヶ月か…」

豊と月島がしみじみ言った。

「でも、四人とも同じ大学に行くんだから会うチャンスはいくらでもあるわよ」

朝倉が慰めるように言う。

（大学か…）

あと三ヶ月…あっという間にその三ヶ月が過ぎていくという事は解かっている。でもそのあっという間にやってくる先の自分がまったく想像できない…。大学に行っているという自分の未来が。

「そうだけど、高校生活が終わるって寂しいなあと思って…」

「おいおい、新年早々沈む話はやめようぜ」

俺は三人の会話を止めさせ、

「そろそろ出掛けようぜ！」

「そうね」

手早く支度をして、四人は朝倉の家を出た。

#一七一 おみくじ

「さて、どうする？」

朝倉の家を出た瞬間、豊が言う。

「どうするって。初詣だろ？」

「あ、そうか…」

豊は他にどこかに行こうとしてるのか？

・ ・ ・ ・ ・

俺たちは近くで一番大きな所で初詣を済ませた。

「麻梨子くおみくじどうだった？」

「え？」

「見せて…わっ中吉」

「由実のは？」

「私は末吉。ま、凶よりマシだわ」

「お前は？」

月島と朝倉の会話を聴いて、俺は豊に訊ねた。

「そういうお前は？」

「ふふふ、俺も中吉だ」

言いながら中吉のおみくじを豊に見せた。

「やっぱり、お前と朝倉は相性バツチりなんだな」

「お前は？」

「…俺も末吉…」

「お前らだって相性良いじゃないか」

「なに？ 豊も末吉？」

それを聴いて月島が言った。

「ちよっと見せて？」

「あ！」

月島が豊のおみくじを奪う様にして手に取った。

「なにになに？…隠し事がバレるかもしれません、注意しましょう…」

末吉らしからぬ事が書いてある。

「隠し事って何よ！」

直ぐに月島が怒り露わで言った。

「ば、馬鹿！隠し事なんかあるわけないだろ！」

「正直に言いなさいよ！」

「だから本当に隠し事なんか無いって！信じろよ。それに正月早々目くじら立てるとシワになるぞ」

「なによー！」

「はははっ」

「ねえ、あなたのはなんて書いてあったの？」

豊と月島の相変わらずなやりとりを見ていると朝倉が言った。

「ん、別に大した事書いてないよ」

「見せて」

「はい」

言って、俺は自分のを朝倉に渡し、代わりに彼女のを受け取った。

（想いは必ず成就します。努力は惜しまない事）

と、朝倉のおみくじに書いてあった。

想いは成就…。

俺との事か？それとも他の？

「はい」

言って朝倉は俺のおみくじを返してきた。

「なあ…」

それを受け取りながら俺は言った。

「何？」

「朝倉の想いって、成就した？」

「もちろんよ」

彼女は笑顔で答えてくれた。

#一七二 他人の彼女に相談

「なあ、まさかこれでお開きってことはないだろうな？」

初詣を終えたところで開口一番豊が言った。

「何だよ豊、どこか行きたい所があるのか？」

「おう！せっかく四人が集まってんだぞ！ここはやっぱりカラオケだろ！」

「またカラオケか…」

「なっ由実たちは賛成だよな？」

「…別に良いけど…」

少々呆れながら月島が言った。

「私も良いよ」

朝倉も同意した。

「よし、決定ッ！」

（正月早々カラオケって…店やってんのか？）

俺のそんな心配とは裏腹に問題なくしっかりと営業していた。し

かも正月料金で通常の三割増しの値段で。

「とりあえず二時間、騒ごう！」

相変わらず豊一人がハイテンションだ…。

・ ・ ・ ・ ・

部屋に入って数十分後、朝倉が席を立った。豊はハイテンションで唄っている。

朝倉が席を外した時に月島に訊きたい事があった。

「なあ月島、ちょっと良いか？」

「んっ何？」

「女の子って…何プレゼントされたら嬉しい？」

「えゝその時々によるけど…。どうしたの急に？」

「いや、五日が朝倉の誕生日なんだけど…それで…」

「おい！」

壇上で自分に酔い痴れて唄っていた豊が俺たちに気付き叫ぶ！

「他人の彼女に何してんだよ！！！」

「違うわよッ馬鹿！マイク使ってそんな事叫ばないでよ！」

月島が怒り返す。

「じゃあ何だよ？」

「麻梨子の誕生日プレゼント、何が良いか訊かれたのよ！」

『ガチャッ』

「！」

朝倉が部屋に帰ってきた！

「？どうしたの、曲始まってるよ」

自分の席に着いた朝倉が言った。

「あ！あああ、豊がマイク離さないからさっ！貸せっ」

俺は苦し紛れに豊からマイクを奪い、唄い始めた。

#一七三 新しい一年

「あゝ、二時間って短け」

カラオケが終わって外に出た瞬間、豊かが心底残念そうに言った。
「何言ってるんだよ！半分以上お前が唄ってたんじゃないかよ」

「柊君」

後ろからこっそり月島が話し掛けてきた。

「さっきの事、参考にならなくてごめんね」

「ああ、良いつて、気にしなくて。自分で何とかするから」

「好きな人からなら何貰っても嬉しいわよ」

「…そうか、サンキュー」

月島はそう言ったが、俺自身は迷っている…。

「じゃ、私たちはこれで帰るわ。夕食ごちそうさま」

今度は朝倉に言った月島。

「こっちこそ、じゃあまたね」

「え！もうおひらきかよ！」

そのやり取りに気付いた豊が本気で残念そうな顔をしている。

「何言ってるのよ！もう何時だと思ってるの！」

「まだ良いじゃん」

子供の様にダダをこねる豊。それを咎める月島。この二人は本当に仲が良い。

とかなんとかでカラオケ店の前で豊、月島と別れて俺たちも朝倉の家に歩き出した。

「寒いだろ、もっとこっちへ」

俺は朝倉を引き寄せて密着しながら歩いた。

・
・
・
・
・
・
・

「じゃ：俺も帰るよ、明日、っつかもう今日なんだけど、朝一で親たちが帰ってくるから…」

少し時間を潰しながら帰ってきたが、それでも物足りなかった。

もつと朝倉と一緒に居たい。

「そう：」

俺の言葉を聞いて寂しそうな朝倉。俺も寂しい。本心はこのまま彼女の家と一緒に居たい。

「ちゃんと戸締りして：何かあったら連絡してくれ、直ぐに飛んで行くから」

「もう！子供じゃないんだから：ありがとう」

後ろ髪を引かれる思いを抱えながら朝倉の家から俺は自転車に乗って岐路に着いた。

今日からまた新しい一年が始まる・・・。

#一七四 苦悩の一日

今日は一月四日。

元日に親が帰ってきて、その日の夕方に田舎である群馬に帰省し（両親と姉キは群馬生まれで、俺は千葉生まれ）、四日の朝、つまり今朝家に帰ってきた。

田舎に行っている三日間、頭に浮かんだのは朝倉のことばかり、特に明日に迫った誕生日プレゼントを何にするかを考えていた。

先刻彼女と明日逢う約束をしたが、まだ誕生日プレゼントを何にするかまったく浮かんでいない！

「了希、母さんたちもう仕事に行くわよ」

「分かった。何日帰ってくる？」

「んー、最低二週間は帰れないわよ」

「了解、気を付けてな」

相変わらず多忙な両親を見送った後、プレゼントを買うために出掛けた。

・ ・ ・ ・ ・

というわけで近所で一番大きいショッピングモールへ来てみた…。朝倉と初めてデートした時に訪れた所とは別の場所。

それでもってこういう時に限って知り合いと会ったりする！

「あれ？センパイ何してるんですか？」

あまり会いたくない、広瀬に会ってしまった！

「あっああ、買い物に…」

「一人ですか？」

広瀬は俺の周りを確認しながら言った。

「多分…」

曖昧な返答をする俺…。

「どうしたんですか？」

「ちょっと急いでるんだ…」

「そ、そうですか…」

少し強めの口調で言う。と広瀬はトーンダウンしてしまった。

「悪いけど…またな」

「あ、はい…」

そんな広瀬を見ていると急に悪い事をした様な気分になり、余計な一言を言ってしまった。

（うゝっ）

逃げる様にその場を立ち去った。決まらないプレゼントの事も相まって、俺の思考回路は爆発しそうになる。

（いっそ本人に訊けたら）

何度そう思った事か。そしてそれが出来ればどんなに楽か。

俺はプレゼントを何にするかを悩んでいるのではなく、何をプレゼントされたら朝倉は喜んでくれるのかを悩んでいた。

その後、一通り店を見て回り。

（よし、決めた！）

俺は決心しショッピングモールを後にし家に帰り明日に備えた。

#一七五 ハッピーバースデー

一月五日。

思ったより早い時間に目が覚めた。思考を吹っ切ったらよく眠れた。

「さ、行くか」

用意をして朝倉の家へと自転車を走らせた。

途中で花を買うために寄り道して、朝倉の家にとどり着いた。

『ピンポン』

“ガチャ”

ドアが開くと同時に、

「ハッピーバースデー！」

言いながら俺は途中で買って来たバラの花束を差し出した。

「えっ！」

突然の事に目を丸くして立ちすくむ朝倉。昨日約束を取り付けた時には彼女の誕生日を祝うような事は一切言っていない。それは単純にサプライズ的な事を思っただけ。しかしこれほど彼女が驚くとは思わなかった。

「驚いた？はい」

再度俺は朝倉にバラの花束を差し出した。

「あ：ありがとうございます」

受け取りながら言った。

「へへ：ちょっとキザだったかな？」

「かもね…」

「何の花にしようか迷ったんだけど、花屋でバラがすげー印象深かったから…」

「ありがとうございます、さっ上がって」

「おじゃまします」

いつもはまずリビングに通されるのだが、今日は直で彼女の部屋

に通された、

「なあ：誕生日プレゼントなんだけど：」

「え！そんなの気にしなくて良いよ」

「いや、何にしようか正月からずっと考えてたんだけど、まったく思い浮かばなかったから、君の誕生日を俺なりの祝い方で祝わせてもらおうと思ってさ」

「だからそんなのいいって、あなたの誕生日に私何もしないんだし！」

「俺の事はいいんだよ。俺の誕生日五月三日はまだ：君の気持ちを知らなかったんだし：。それより、俺は君の誕生日を祝いたいんだよ」

「柊君：」

「それで、誕生日プレゼントって言ってもなんか物じゃない方が良いような気がしてさ：」

伝えたい事がうまく言葉に出来ない、でも。

「ありがと：」

そつと微笑みながら彼女は言ってくれた。まるで“俺の意図する事は言わなくても解かるわ”と言わんばかりに：。

「だから、今君が一番望む事を俺が何とかしてあげようと思うんだ」
「ううん、私はその気持ちだけで十分よ。それにあなたの誕生日に何もしてないんだから」

そういえば、九月頃に二人の誕生日の話をした時に、既に俺の誕生日が終わっていた事に彼女は凄く残念がっていたつけ。

「そんな事関係ないよ！こういうことって祝ってもらったから祝うってものじゃないだろ！」

「でも：」

まだ遠慮する朝倉。

「君は何もあげてないって言うけど、俺はいつも君から言い様のないほどの愛を貰ってるよ」

冷静に考えれば。すげークサイ事を言ったな俺：。

#一七六 誕生日のリクエスト

「…じゃあ、お言葉に甘えて良いの？」

少し思案したあと、彼女は口を開いた。

あんなクサイ台詞だったが、朝倉は喜んでくれている。

「ああ」

「…今日一日、甘えさせてもらって良い？」

「へ？」

あまりに予期せぬ言葉に思わず聞き返してしまった！

「そ、そんな事で良いのか？」

「うん」

「じゃあ、どんどん甘えてよ」

正直俺にとっても最高の願いだったりする…。

「…寄り添って、しばらく一緒に居て欲しい…」

彼女のリクエストに応えて、ベッドに座り寄り添いながら互いに
見つめ合った。至近距離にある朝倉の顔…こそばゆくなってくる。

いつもと違う雰囲気朝倉が目の前に居る。いつもの朝倉は道行
く人全員が振り向く可憐で存在感ある花なら、今の朝倉はまるで強
風の中たった一輪で咲いているタンポポの様に感じた。

俺は強風からその花を守る様にそっとやさしく抱き寄せた。

「アア…しあわせ…」

「朝倉…」

俺にとって普段の朝倉は太陽のような存在だった。でも今日の前
に居る朝倉は違う。多分これが本当の朝倉麻梨子なんだ。普段は強
く振舞っているが、本当は太陽が必要な花ではないか？そう感じた。
出来れば俺が彼女の太陽になれば、いや、ならなくてはいけない！

「柊君…」

「ん？」

朝倉に対して俺の勝手な妄想を膨らませていると俺の胸に顔を伏

せながらそつと彼女が話しかけた。

「欲しくない…？」

彼女が聞いてきた。『何が？』なんてヤボな事は聞かない。朝倉が何を言いたいのかちゃんと解かっているし、俺も求めたい…。

俺はそつと彼女の顔を上げてキスした。

「欲しいに決まってるだろ…この三日間ずっと逢いたかったんだぞ…」

「私も…ずっと逢いたかったの…」

か細く、切な気な朝倉の声が俺の胸に響いた…。

再度口づけを交わし、彼女をベッドに横たわらせた…。

#一七七 あの時想い

「ちょっと遅くなったけど、お昼にしましょっ」

言って台所に行こうとする朝倉に、

「待って！今日は俺が作るよ。」

「えっ！いいの？」

「ああ。ってその顔、俺の腕を信じてないだろう？」

少し不安そうな朝倉の顔色を見て言った。

「そっ！そういうわけじゃなくて…悪いなあと思って」

「いっつも作ってもらえばかりじゃさ、それに今日は誕生日なんだからゆっくりしてくれよ。何食べたい？」

「んー…でも、材料あまり無いよ」

「ある物で作ってやるっ」

「じゃ、買い物に行きましようよ。それで夕食を作って」

「え？夕食？」

「ねっ良いでしょ？そうすれば夜もあなたと一緒に居られるから」

「分かった。でも昼は？」

「カップ麺があるわ」

というわけで二人でカップ麺を作った。

——3分後。

「いただきます」

「いただきます」

（やっぱ、女の子って上品に食べるんだなあ）

カップ麺を食べている朝倉を見てそう思っていると、

「あと三日で、冬休みも終わりか…」

朝倉が言った。

「…冬休みは二週間しかないからなあ」

「でも、色々あったわ…。私には夢の様なクリスマス…」

つい先日の事なのに懐かしむ様に言う朝倉。

「…あの時、君に終わりにしようって言われなかったら気付かないままだったよ…自分の気持ちに…。君に言われなきゃ気付かない様な馬鹿な男だけ…」

「ううん。私はただ、舞衣が芸能界に入ったらあなたはますます苦しむんじゃないかと思ったから…だから私は邪魔かなって…」

「俺なんかのために…ありがとう。本当にありがとう…」

朝倉の本心を知った俺はただただその言葉しか出てこなかった。

「私のほうこそありがとう…。さっ食べましょ、のびちゃうよ」

「うん…」

#一七八 あの時真相

「実は…さ」

「ん、何？」

昼食を終えたところで俺が切り出した。別に今なくて良い話だが、先刻の朝倉の話聞いてどうしても言いたくなった…。

「文化祭の時にさ…起こしてもらったじゃん」

「あっ！」

思い出したのか？驚く朝倉。

「あの時…君の夢を見てたんだ…」

改めて言葉にすると…やっぱ恥ずかしい…。

「………」

朝倉は何を話してくれるのか心待ちにしている様に黙って俺の次の言葉を待っている。

「その時見てた夢が真っ暗な空間に俺と君の二人が居て…でも、君は俺から逃げて行くんだ…。で、俺は必死に君を追うけど、思う様に前に進めなくて…。でも君はそんな俺とは違ってスイスイ去って行くんだ…。どんなにもがいても差は広がっていつて…もう君に逢えなくなるんじゃないかって思った瞬間、自然に『好きだ、朝倉』って叫んでた…」

「…うん…知ってた…」

「え！！」

思いがけない朝倉の言葉に俺は絶句してしまった。

「実はね…あの日もっと早くあなたの家に行ってたの…。あなたの寝顔を見たくて…」

絶句している俺に代わって朝倉が話し出した。

（マジ…）

朝倉は笑顔でそう言うが、俺はだんだん背筋が寒くなってきた…。「そしたら、『好きだ、朝倉』って言われて、びっくりしてあなた

を覗き込んだ瞬間：抱かれちゃった…」

その瞬間、俺の背筋がゾクツと凍りついた！

「や！あれはワザとじゃないよ！」

もしかしたら聞かれていたんじゃないかとは思っていたが、実際に聞かれていたのかと思うと恥ずかしい！

「うんわかってる。でも、あの時は嬉しかった…もしかしたら舞衣のことを言ってたのかもって思ったけど、朝倉って言われたから…」（やっぱり聞かれてたのか…もっと早く言えばよかったか…）

「そんな…寝言なんかで…じゃあ改めて言うよ！好きだ、朝倉っ」

「私も好きよ、柊君」

少しの間見詰め合っていたが、急に恥ずかしくなってきた。

「そっそろそろ買い物に行こうか？」

「うん」

・
・
・
・
・
・
・

それから二人で歩いて近くのスーパーへ買い物に行き、夕食の食材を買った。

何にするかなかなか決まらなかったが、朝倉がオムライスをリクエストしたのでオムライスに決定した。たぶん簡単なものをあえてリクエストしてくれたのだろう。

・
・
・
・
・
・
・

「大丈夫？手伝わなくて良い？」

朝倉の家に帰り、料理の支度中彼女に二度も言われた。

だが作り始めればその言葉もなくなった。俺の手際のよさに驚いたのだろう。親が留守がちだから自分で料理を作ることもしばしば。そこで何とかこれくらいは出来る様になった。

・
・
・
・
・
・
・

「おいし」

「だろっつてか、夏休みにも作ったじゃん」

「次はもっと複雑なのをリクエストしよ」

「ハハハッ…」

ともかく彼女の誕生日はなんとか喜んでもらえた様だ。

こうして高校最後の冬休みが終わっていき、高校最後の三学期が始まる…。

#一七九 最後の一期（前書き）

三学期

残されたわずかな時間

誰もが知っている、過ぎた時間は決して戻らない事を
でも認めたくない・・・

残された時間の中で出来る事を・・・

#一七九 最後の一期

上空は澄み切った真冬のスカイブルー。太陽が照り輝く真夏の真夏の青空も良いが、本当に綺麗なディープブルーの冬の空の方が好きだ。

とはいえ、今そのブルーを見ようと首を上に向けても無機質なコンクリートと鉄骨しか見えない。冷たい板張りの床に座りもう五分程校長の好調な話に堪えている。

ここぞとばかりにどうでも良い話をよくもこんなに並べられるもんだと関心に値する…。時折背中をゾツとさせられる体育館を吹き抜ける隙間風も堪える。

（早く終わんねーかな）

と思った瞬間、興味を惹く一言が耳に入ってきた！

『もう既に知っている生徒も居ると思いますが、我が校の生徒が素晴らしい称賛を受けました』

（そういえば舞衣、今日学校来てるのかな？）

校長の言葉で何故かふと舞衣の事を思い出した。朝倉によると冬休み中に家に帰ってきたのはたったの二日だけだったという。年末も正月も家には帰って来なかったらしい。

『今日、この壇上に上がってもらおうと思っていましたが、彼は映画の撮影で今日は学校に来ていません。なので名前だけでも紹介したいと思います。我が校の三年B組の柄沢明君です。彼は演技部部长で』

——と、校長が一通りの柄沢の紹介を終えると体育館中がざわめいた。

（次は舞衣の紹介か？）

と思っていたのだが、校長の話はそれで終わってしまった。

俺は少し拍子抜けしたのと同時に、舞衣がこの場で紹介されなかった事にホッとした。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「柄沢すげ〜な」

始業式が終わった体育館から教室へ帰る途中、豊が言った。

「何だ、お前知らなかったのか？」

「おう、今知った」

「今度公開される、早秋の雪って映画の撮影助手に抜擢されたって雑誌に載ってたぞ」

「マジかよ！もうプロじゃん」

「そうだな…」

言いながら俺はしみじみ実感した。

（本当に凄いよ…柄沢も舞衣も）

朝倉に舞衣の事を訊きたかったのだが…。

#一八〇 遅れた年賀状

「寒いわね、皆冬休みどうだった？」

純子先生がホームルームのために教室に入って来るなり開口一番言った。

「さあ、三学期よ。皆がこの教室に来るのってあと一ヶ月だけなのよ！充実した学園ライフを送るように！私からはそれだけ。今日はこれでおしまい」

相変わらずな純子ちゃん節であつという間のホームルームが終わってしまった。でも先生のその言葉が重く胸に響いてきた。先生の言う通り、後一ヶ月でこのクラスメートと会えなくなるのかと思うと寂しい…。

ともかく高校生活最後の三学期が幕を開けた。

「あ、月島」

皆が帰り仕度をはじめるなか俺は月島に声をかけた。

「なに？」

「年賀状ありがとな、で、本当は送ろうと思ったんだけど…」

言いながら俺は月島に宛てた年賀状を取り出した。

「ああ、別に良いのに。ただ皆に出しと思うただけだから」

言いながら、月島は俺から年賀状を受け取ってくれた。

「じゃあこれで」

「うん、じゃあね」

（次は水野か）

本当に送ろうかと思ったのだが、家族に見られると厄介かな？と思っ出て出すのをためらっているうちに三学期が始まってしまった…。

「水野ー」

ちようど帰り仕度を終えて、朝倉と話している水野を発見した。

「ん？私に用？麻梨子じゃなくて？」

突然俺に呼び止められて驚く水野。

「ああ、年賀状返しとこと思っ」

「あーあ、あれね。ちゃんと届いた？」

「ああ、サンキューな。まさか水野から送られてくるとは思わなかったからさ」

「あれね、麻梨子と一緒に年賀状書いてたんだけど、ついでに柊君にもって」

「って、ついでかよ」

「あはは」

朝倉も一緒に笑っている。

「遅くなってけど、これ」

言っは水野に年賀状を手渡した。

「ありがと、じゃ麻梨子、私はこれでね」

「あ、一緒に帰らないの？」

「遠慮しとくわ、二人の邪魔しちや悪し」

「邪魔って…」

「私の事は気にしないで、また明日ね」

言っは水野は一人で教室を出てしまった。

「もしかして俺、邪魔した？」

「ううん、大丈夫」

「でも、最近水野と一緒に帰ってないだろ…」

「ちゃんと後で電話しとくから大丈夫よ」

「そうか…」

「じゃあ、一緒に帰りましょ」

「うん」

#一八一 三学期初下校

「舞衣？今日は学校に来てないわよ」

始業式の最中からずっと気になっていた舞衣の事…。たまらなくなり下校時に朝倉に訊いてしまった。

「あ：そうなんだ：」

恋人に他の女性の事を訊くのは気が引けたのだが、朝倉にしてみれば妹の事だからか？あっさりと答えてくれた。

「実際あの子の出演部分ってほんの少しみたいよ、後は練習期間みたいよ」

「そうなんだ：なんか華やかなデビューみたいな感じだったのに、やっぱり過酷なんだな：」

「でもあの子は楽しそうよ。最初は戸惑ってたみたいだったけど、最近には本当に楽しそうよ」

「柄沢はどうなんだろう」

「あ、柄沢君は凄いらしいわよ。毎日監督に付き切りで、夜は勉強してるんだって」

その話を聞いて改めてやっぱりアイツは才能あるやつだったんだなと改めて思わされた。

「ねえ、この後暇？」

朝倉がニッコリしながら訊ねた。

「んー：」

（なんかあった様な：）

「あっ！」

「用事があるの？」

俺の言葉に少し不安そうな顔をした朝倉。

「いや用事じゃないけど、借りてたDVD今日までに返さないと：まだ観てないんだよ：」

「そう：」

「じゃあ、一緒に観ようよ」

「良いの？」

「当たり前じゃないか！今からどう？」

「うん！」

別に観ずに返しても良かったのだが、彼女を家に連れて行く口実が出来た。でも朝倉の家のシアタールームで観たかったっていうのも正直なところ…。

#一八二 至福の時

「ただいま」

誰も家に居ない事は解かっていたが、つい言ってしまう…。

「おじゃましまーす」

次いで朝倉が言った。

「先にメシにしようか。お茶でも煎れてくるよ」

「ありがとう、じゃあレンジ借りるね」

帰りにコンビニで弁当を買って来た。

『チーンッ』

朝倉と聞く電子レンジの終了音になんだか幸せを感じながら湯呑みを運んだ。

「何ボーっとしてるの？」

「え！いやっ何でもないよ！」

そんな至福感と制服姿の朝倉に見惚れてしまっていた。

「ささっ食っちゃまおうぜ」

「うん」

（制服姿の朝倉は毎日見てるのに…どうしたんだ…）

まだ恥ずかしさが残っているのを無理矢理消そうと弁当をかき込んだ。

・
・
・
・
・
・

「今日は何かしたかったんじゃないか？」

弁当を食べ終えてから、俺が切り出した。

「ううん、特に何かしたかったって訳じゃないの…ただあなたと一緒に居たかっただけなの…」

「朝倉…」

俺と同じ気持ちでいてくれる事に凄く嬉しい。

「そつそれより、何のDVDなの？」

テレを隠す様に彼女が言った。

「ああ…サスペンスなんだけど…」

「怖い？」

「んー…かも…」

「私一人だと絶対に観ないタイプだわ…」

「やめとく？」

「観るっ」

怖い物見たさってこういう事なのだろう。

二人でリビングの片付けをして、俺の部屋へ移動した。

「適当に座って」

「うん」

彼女はベッドに腰を掛けた。

俺はDVDをセットして、部屋のカーテンを閉めてから彼女とほんの少し間を空けて座った。

すると彼女の方から肩を寄り掛けて来た！それを受け、俺は空けていた間を埋め、そつと左腕を彼女の腰に回した。

甘い時間が流れる…。彼女の家のシアタールームには到底及ばないが、自分では気に入っているこじんまりしたシステム。小さなスピーカーから突如鳴る効果音に驚く朝倉を受け止めた。

そんなこんなでDVDを見終えた後、返却しに行ったついでに二人で買い物等を楽しんだ。

#一八三 召集？

制服の上にはコートを纏い、首にはマフラーを巻いて防寒対策をばっちりしているのに、それでも寒風が身に染みる冬の朝。遅刻ぎりぎりのタイミングで教室に入ると、

「遅いっ！」

「えっ！」

いきなり月島に怒られた！

「何だよっいきなり……」

まったく状況をつかめないままの俺を尻目に月島は、

「お昼食べたら図書室に来て」

言って、ズカズカと自分の席に着いた。

「なんなんだ……？」

まったく理解できないまま、俺も自分の席に座った。

・
・
・
・
・
・
・

三学期は二日目からフル授業で、二学期のような短縮期間がない。

「柊、早く食わねーと由実に怒られるぞ！」

食堂で一緒に昼食を摂っている豊が言った。

「えっ！お前も呼ばれてるのか？」

「なに言ってるんだよ、当たり前だろ」

「ああ……そうだよな、俺が呼ばれてお前が呼ばれないわけがないよな……。それにしても何で呼ばれてんだ？」

「あれ？何も訊いてないのか？」

豊は不思議そうに言う。

「おお……」

「ま、どうせ後で解かるよ。それより早く食えよ」

豊に急かされながら今日の昼食・学食のカラアゲ定食を完食した。

#一八四 計画再び・・・

「悪い、柊がさあ」

図書室に入るなり豊が言い訳した。しかも俺の所為にして！
図書室には月島と朝倉、それに水野も居る。

「あとは優利香たちね」

月島が言った。そのメンバーを聞いた瞬間直ぐに悟った。

(少しメンバーが少ないけど…)

机の上には旅行雑誌が数冊広げられている。

「また何かやるのか？」

俺が言うと、

「当たり前じゃない！もうすぐ高校生活が終わるのよ！だから来月皆でスキーに行こうと思うのよ！」

「スキー！」

「そっ。で、キャンプの時のメンバーで受験の無い人に声を掛けたら、皆ノリノリだね」

「ノリノリって…」

センター試験が数日後という状況で…。他の受験生達が聞いたら殺されかねないこの計画…。

「あっ心配しないで、宿泊費はほとんどタダみたいなもんだから」
月島が続けて言った。

「ほとんどタダ!？」

ってことはどこのスキー場に行くのが既に決まっているのか？

「つか、皆そこに惹かれたんだけどな」

横から豊が言った。どうやら朝のうちに既に具体的なことは決まっている様だ。

「ごめーん、遅くなっちゃった」

言いながら細川がやって来た。その後ろには恩田も居る。

恩田とはクラスが違うから会うのは数ヶ月ぶりになる。夏のキャ

ンプのときより日焼けしている様に思う。サッカー部は先月まで活動していたからか？

「恩田、選手権残念だったなあ」

俺が久しぶりに会った恩田へ第一声を発した。

「フツま、県予選準優勝なら諦めもつくからな」

少しキザっぽく言う恩田。それに細川が、

「何言ってるのよ！サッカーが諦められないから、プロに行くんでしょ！」

「「え！」」

細川の一言に一同が驚いた！

「バカッ！優利バラすなよ！」

慌てる恩田。

「えっどういう事だよ？」

豊が改めて恩田に訊いた。

「：まだ正式に決まってるから誰にも言いたくなかったんだけど
：俺、実は千葉からオフアー受けてんだ」

「マジかよ！すごい」

豊の言葉に少しテレ気味の恩田。

「だから、もしプロ入りできなかつたら恥ずかしいから、もうこれ以上広めないでくれよ」

「分かってるって」

謙遜して言う恩田だが、俺は大丈夫だと思った。何せ創立五年の新設校を王者市舟に詰め寄るところまで導いたプレイヤーだから。サッカー素人の俺でもその凄さは解かるつもりだ。

しかし、柄沢といい恩田といい、俺の周りには才能溢れるやつばかりだな…。

#一八五 由実ちゃんのためいき

「さあ早く本題に入りましょ！もうすぐお昼休みも終わるわよ！優利香には朝のうちに言っておくから大丈夫よね？」

恩田のまさかの事態に話が逸れかけた瞬間、空かさず月島が言った。

「うん」

それに応える細川。

「よー由実、まだ一ヶ月くらい先なんだからよそんなに急いで決めなくても良いんじゃないか？」

月島の呼びかけに豊が水を差した。

「何言ってるのよ！キャンプの時だって早めに決め始めたのに、結局全部が決まったのってギリギリになってからでしょ！今回はそういう訳にもいかないのよ！」

「うっ…」

主犯の豊は月島に何も言い返せなかった。

（豊のやつ、完全に尻に敷に敷かれてるな）

今の二人のやりとりを見て強く確信した。

「メンバーってこれだけ？キャンプの時より少ないな」

恩田が言った。

「…受験とかがあるじゃない」

「ふーん、皆他の大学に行くんだな。ってか、カップルばかりで行く事にしたんだな」

「うっ…」

恩田の一言に水野が落ち込んだ。

「あっ…悪リィ…」

そんな水野に気付き、バツが悪そうにする恩田。

「いいもん！大学で良い男見つけるから」

半分自棄になりながら水野は言った。

「…だめだわ、今日も決まりそうにない…」
月島のため息と共に休憩時間終了を告げるチャイムが鳴った。

#一八六 嬉しいお誘い

「ま、どうせ決まらないと思ってたけどな」

「よねえ、みんな個性あるもん」

今日の昼休みの事を話しながら朝倉と下校中だ。

今日は遅刻ギリギリだったので自転車で通学した。朝倉は徒歩で通学しているため、俺は彼女に併せて自転車を押して歩いている。

こういうパターンがこれまでにたまにあって、二人乗りで帰ったりする事もあった。でも、今はこの二人の時間が愛しくてゆっくり歩いて帰っている。

「ねえ、今日のお昼何食べたの？」

「え？学食でからあげ定食」

「ごめんね」

「は？」

昼飯の話から突然謝る朝倉。

「実は今日ね、お弁当作ってたの…でも、朝に由実からあの話をされて、そのまま渡せなくて…」

（なんてもったいない！）

「ああ…そういう事ね…そんな、謝るのは俺の方だよ、俺がもっと早く学校に来てれば…。それまだ残ってる？」

「うん、手を付けてないからそのままよ」

「じゃあ今から食べさせてもらうよ。頂戴」

「もちろん！」

朝倉に笑顔が戻った。

「じゃあ、私の家で良い？」

「うん…」

このまま朝倉とわかれて家に帰るのは嫌だと思っていたところに彼女からこの誘い！

本当にこういう事が嬉しくて幸せに感じる。

俺は浮かれる足取りで、朝倉とともに彼女の家に急いだ。

#一八七 覚悟の瞬間

「どうぞ。入って」

朝倉の家に入ると、彼女はそう言ってスリッパを出してくれた。

「おじゃッ：まします：」

玄関に既にあつた一組の靴を見て、思わず言葉に詰まってしまった。

「舞衣：帰ってたんだ：」

朝倉が言った。

「：俺、言うよ。二人の事：」

クリスマスのあの日からずっと考えていた、俺と朝倉の関係を舞衣に伝えなければいけないと。今日の前にある舞衣の靴を見て今日覚悟を決めた。

「でも：」

朝倉が不安を溢れさせて言った。

朝倉の胸中は俺より複雑だろう：。自分達の事を実の妹に伝えなければならぬのだから：。毎日顔を合わせる事のない他人の俺が言うよりもっと複雑な関係：。さらにその事によって自分の妹が傷ついてしまうかもしれないという恐怖もあるだろう。

俺だって舞衣を傷つけたくはない！出来れば舞衣に二人の事を伝えたくない。でもいつまでも伝えずにいると、いずれ朝倉と舞衣の二人を傷つける事になるだろう。

「君の気持ちは解かるよ：でも：」

俺が言うと。

「本当に？：本当に私の気持ちが解かるの？」

「え！？」

小声でだが、強い口調で朝倉は言った！それは今まで見たことのない朝倉だった。

「あっ朝倉：」

「私…恐いの…」

言いながら一粒の涙が彼女の瞳から零れ落ちた。

「言わなきゃいけないって、私だって解かってるの。でも、言ってしまうと全てが終わってしまう気がして、恐いの…」

「！」

そうなんだ！朝倉の言葉で大事な事を気付かされた。

俺は、自分と朝倉二人のことしか考えてなかった。朝倉と舞衣は姉妹。俺が舞衣に言ってしまうと、二人の姉妹の関係までも壊れてしまうかもしれない…。どうして俺はそこまで頭が回らなかったのだろう。

「ごめん！本当にごめん、俺が馬鹿だった。俺は自分と君の事しか考えてなかった…。君と舞衣のことまでも考えられなかった…。ごめん…ごめん…」

彼女の前に崩れ、何度も「ごめん」を繰り返した。

“フツ・・・”

「っ！」

うなだれていた俺の頭を温もりが包んだ。

「やめて…謝らないで…あなたは悪くないの…。私に勇気がないのがいけないんだから…」

俺の頭を両腕で包みながら朝倉は言った。俺は彼女の腕の中で黙ってそれを聞く事しかなかった。

「もう少し…時間をください。高校生活が終わるまでに私は覚悟を決めますから…」

最後の言葉はまるで自分に言い聞かせる様に力強く言った。

そして、震える手で俺の面を上げると、

「私に勇気をください…」

消え入りそうな小声でそう言うと、そっと口付けした。俺は何も出来ずに身を委ねていた…。

この時、彼女の頬を伝った幾つかの涙の味を俺は忘れる事はないだろう。

「こんな…私だけど…嫌いに…ならないで…」
唇を離すと彼女はそつと言った。

「なるわけないよ！もう君を嫌いになれないよ」
俺は心の底からそう言った。

#一八八 緊張の再会・・・

「ありがとう」

朝倉はそう言って、涙を拭うと続けて、

「お弁当：食べてくれる？」

言った。

「もちろん」

こんなところを他人が見たら、ほんとうにおかしなやつらだと思うだろう。それで良い、俺たち二人にしか解からない感覚で云いだ。

もし、今ここに舞衣が来たらどう思うだろうか？その時は逆に二人の事を知ってもらう良い機会になるかもしれない…。幸いにも家に居るはずの舞衣は気付いていない。いや、もしかしたら俺たちの気付いていない間に目撃されていたのに見ていないふりをしているのかもしれない…。もしそうならこの場に来てくれれば良い…。

だが、玄関から窺う朝倉の家は不自然なほど静かだった。まるで人など居ないかのように…。

「舞衣？」

俺と同じ事を思ったのか？平然を取り戻した朝倉が舞衣を呼び掛けた。

「・・・・・・・・・・」

しかし家の中は恐ろしいほど静まり返っている。舞衣の返事がないので俺と朝倉は互いの顔を見合わせ、首を傾げた。

「先にリビングに行ってて、ちょっと部屋見てくるから」

「ああ…」

朝倉は足早に階段を上り、二階へと消えていった。

（靴はあるのに…）

もう一度玄関にある舞衣の靴を確認してリビングに移動した。

『ガチャ』

リビングの扉をそつと開き、中を見渡したが舞衣の姿はなかった。
「ふう…」

たまらず一息吐いた。

「部屋には居なかったわ」

朝倉がリビングに入って来た。

「じゃ、どこの居るんだろう？」

「あつ地下室でDVDでも観てるのかも」

たしかにあそこなら外の音は一切聞こえない。

朝倉と俺は地下のシアタールームへと足を運んだ。

（やっぱり朝倉んちはすげえなあ）

地下に行く度にそう思う。

朝倉がドアを開けた。

『♪♪♪♪』

シアタールームのドアを開くと同時に大音量の音楽が流れて来た

！それはフロルド。

（すげえ防音だ…）

これだけの音が全く外に漏れていない防音壁にただただ驚いた。

「舞衣っ！！」

朝倉が大声で言った！

『♪♪♪♪……』

「あっお姉ちゃん、お帰り、あ！先輩…」

朝倉の後ろに立っていた俺と舞衣の目が合った。

「やあ、久しぶり…」

なんとなく顔を合わし辛かった…。

#一八九 変化?

「あんたそんなに音上げて! しかも人のDVD観てるし!」

よそよそしく感じる俺とは対照的に、朝倉が言った。

「だって置いてあったじゃん。勝手に封開けたけど」

(あ!)

脇の机に置かれたDVDのパッケージを見て驚いた。

(そういえばあのDVD出てたんだ…)

先日発売になったフロルドのDVD。買うのを忘れていた事に気が付いた。

「夕飯は?今日は舞衣の当番でしょ」

「んゝ、まだ決めてないよ。お姉ちゃん何食べたい?」

(!?)

一瞬フロルドのDVDに思考を奪われていたが、ふと我に返ると二人の会話に俺は違和感を感じた。

「何でも良いわよ」

「えーっ。何か言ってよ…どうしよう…んー…何にするか買い物中を考えよ。じゃ、行って来まーす」

言って、舞衣は機械スイッチを切って地下室を後にした。

「…何か変わったな…」

舞衣が居なくなっただけで俺は朝倉に言った。

「え?何が?」

「舞衣」

「そう?」

「いや、君がそう感じないんだったら、俺の思い違いかな…」

今の舞衣は俺の知らない舞衣なのか、俺には見せていない舞衣なのか?とにかくこれまでの舞衣と違う感じがした。

「あー、舞衣に開けられちゃった…」

朝倉はフロルドのDVDを手に取りながら残念がっている。

「一緒に観たかったのに…って、もう持ってるか…」

「いや、買いに行く暇がなくてまだ買ってないんだ。せっかくだから今から一緒に観ようよ」

「お弁当は？」

「後で、夕食と一緒にするのはダメか？」

「ううん、じゃあ、舞衣が帰ってくるまで…」

言ってDVDを再生した。

そんなこんなで結局舞衣には何も言えなかったが、朝倉の気持ちに気付いて良かったと思う。

#一九〇 勇気と臆病

それは突然やってきた…。

下校中の俺と朝倉の前に現れた亜津！

「二人とも聞いてくれ！」

同じクラスでありながら、夏休みのキャンプ以来、朝倉と一緒に時は亜津の事を避けていた。というより、校内で朝倉といるときは豊と月島以外との接触を避けていた。学校内の人目に付く所では極力朝倉と二人きりにならないようにしてきた…。

学年一の美女と謳われた朝倉と付き合っているということを隠したかったという事と、これまでちゃんとした恋人同士ではなかったという現実が後ろめたかった…。そんな事より、一番の理由は中学からの親友で、朝倉麻梨子の事を俺よりずっと先に好きになった亜津に気をつかっていたから。

去年、朝倉の事が好きだという事を亜津本人が他人に相談した初めての手が俺だったから…。

その時は朝倉の事を好きとかそういう感情で見た事がなかった俺は、そういう相談を他人に出来る亜津が羨ましく思え、ただただコイツの恋が実れば良いと素直に思っていた。だが現実、朝倉麻梨子は俺の事が好きで、俺も朝倉麻梨子が大好きだ。

あの時は素直に亜津の恋を応援していたが、今は違う！朝倉麻梨子は誰にも渡したくない！親友であろうと誰であろうと！そう強く思っている！

恋愛感情の有無に関わらず、今でも朝倉はラブレター紛いの物を貰っている事を俺は彼女から聞いて知っている。今どきラブレターはないだろうと思ったが、実際に彼女は貰っている。そんな名前も書けない手紙を渡してくる奴らに朝倉を奪われる心配など全くしていないが、純粋に朝倉に恋愛感情を抱いている者のそれは恐い！

亜津の場合がそれにあたる！

亜津の朝倉への想いを一番に解かっている俺……。一番敵にしたい相手だ。友人の好きな女性を後から好きになった……。そのある種罪悪感とも言える感情と向き合った事もある。だから亜津の事を最も避けていた。朝倉を巡って亜津と対立したくなかったから。

卑怯者となじられても構わない。アイツとは争いたくない。争わなくて済むなら逃げて卑怯者呼ばわりされても良かった。

おそらく亜津は夏休み以降、直ぐに俺と朝倉の關係に気付いていただろう……。そんな亜津が今、俺と朝倉の前に居る。

「二人とも聞いてくれ！」

その後の言葉を言うために亜津は再度口を開いた。

何を言おうとしているのか直ぐに理解った。おそらく朝倉理解っているだろう。

「朝倉：俺は：お前の事が好きだ：ずっと前から：」

その言葉を言うことは予測していたが、実際に聞いた俺は動けずにいた。何故俺がいる時に亜津は告白したのか？その理由を訊きたかった。

俺は横目で朝倉を確認した。彼女はただジッと亜津を見詰めている。

「：お前らが付き合ってるって事は、二学期から知ってた……。正直、柊お前が憎かったよ」

そう思われても仕方ない。

「でもよ、悪いのはお前じゃなくて俺なんだって気が付いた：毎日学校で朝倉を見ると、二学期以降本当に幸せそうだった：」

（違う！あの頃の朝倉は明るく振舞っていたんだ！）

「俺がもっと早く告白しなかったのがいけなかったんだ。フラれるのが恐くて言えなかった自分が：悪いんだ」

亜津は噛み締める様に言って、

「朝倉！」

強い口調で亜津は朝倉に呼びかけた！

「はい：」

それに対して朝倉は少し弱い口調で応えた。

「急にこんな事言ってごめん：困らせたくて言った訳じゃなくて、俺、この春から他の大学に行くから、もう会えなくなる前にせめて俺の気持ちだけでも知って欲しくてさ…。こんなどうしようもない馬鹿な奴が居たってことをさ」

最後は笑いながら言った。

その時俺は心の底から亜津を称えた。逃げる事で亜津との関係を終わらせようとしていた俺に対して、亜津は逃げずに真っ向から自分の気持ちを伝えてきた。俺が逆の立場だったら、おそらくそこでも逃げていただろう。ただ亜津の事を憎み、決して自分の気持ちを伝えるなんて事はしなかっただろう。それをやってきた亜津に心から賞賛の言葉を掛けたかった。でもそれすら出来ない…。俺は臆病で卑怯な奴だ。

#一九一 麻梨子の気持ち

「柊っ」

「！」

朝倉に一言言い終えた亜津は次に俺に言った。

「俺は、お前の事を恨んだりしてないからな。お前も朝倉のことが好きだったって事を見抜けなかったただけだから」

「あ」

「違うの！亜津君っ」

俺が口を開こうとする前に朝倉が言った！

「え！？」

困惑する亜津。

「私が：私から柊君に告白したの、中学のときからずっと柊君のことが好きだったの！」

「朝倉が…」

「私も恐かったの：告白するのが：何年も言えなかった…。私がつと早く告白してれば…。でもようやく一学期にフラれるのを覚悟して告白したの…」

その先の事は言わなかった…。

「そっか、俺ももっと早く告つとけばもしかしたらチャンスがあったかな？でも、今はほんとスツキリしてんだ。ほんとごめんな、変な事で困らせて」

「変な事じゃないよ…」

「へっ…。おい柊！朝倉を泣かせたりすんなよ！」

「ああ：分かってる」

やっと言葉が出た。もう泣かせたりするかよ！

「じゃそういう事だからよ、また明日なっ」

そう言うのと亜津は足早に俺たちの前から立ち去っていった。少しの間二人してその場から動けずにいた…。

「……………いつかは告るだろうとは思ってたけど…まさか、俺一緒の時とは…」

俺は尊敬の念を込めて沈黙を破るために口を開いた。

「…うん…」

朝倉はただ小さく返事をした。

彼女が今どう思っているか知りたかった。俺は朝倉麻梨子の恋人で朝倉麻梨子は俺の恋人。恋人がどう思っているのか知っても良いんじゃないか？そう思った。

「どうした？」

とは思ったものの、どう訊くか迷いながらこう言った。

「えっ!!」

不意を突かれた様に反応する朝倉。

「考え込んでるみたいだったから…」

「…うん…いきなりだったから…」

「へー、告られるのには慣れてると思ってたけど…」

「バカな事っ」

少し張った声で言おうとした朝倉だが、途中で止めてしまった。

「いや、俺は平気だからさ気にしないで教えて欲しいんだ。君が今思ってる事とか、これまでの事とか」

俺がそう言くと、彼女は俺と向き合う形になり、

「…あのね、」

「ちょっと待った、どっか入ろうか？外じゃ寒いし」

長い話になりそうだ。俺は彼女を制止した。

「うん…」

そうして俺たちは近くのファーストフード店に入った。

#一九二 過去・麻梨子

店内は下校中の学生で賑わっていた。これくらいざわついていれば他人に会話を聞かれる事もないだろうと安心した。

朝倉に席を確保してもらって、俺はカウンターへ注文に行った。

・
・
・
・
・
・
・
・

「お待たせ、込んで遅くなった」

「ありがとう」

「先に食っちゃおうぜ」

二人で先に食事にした。

・
・
・
・
・
・
・
・

「…あのね」

少し食べた後、朝倉から先に口を開いた。

「先刻言おうとしてた事んだけど…」

「うん…」

「あなたも知ってると思うけど、今までも何人かの男の人に告白されたの…」

分かっていた事とはいえ、改めて本人の口から言われるとあまり良い気はしない。でもその反面、そんな朝倉と、今恋人同士であるという優越感もあったりする。

「でも、今日みたいに直接会って告白されたのって、ほんと三、四人なの…」

「え！」

そんな優越感に浸っていると朝倉の話は続いていて、その内容に驚いた！

「それだけしか居ないのか!？」

俺は驚き聞き返した。

「…うん、全部手紙とか…中には名前も書いてないのもあったわ…
ってこれは前にも言ったわね…」

「そう…だな。でも、名前も書いてないラブレターって意味ないじゃん」

（今どきラブレターって…でも、連絡手段がなかったらそうなるか…）

なんだか話が横道に逸れてきた。

「あと…後輩の女の子からも…貰った事も…」

「ああ、憧れのファンレターみたいなものだろう？」

「ううん、そういうのじゃなくて、好きです付き合ってくださいって…」

「マ、マジ! そんな少女漫画みたいなのが本当にあるんだ…」

小学生の時に、姉キが妙に勧めて来た漫画がそんな内容だった…。

「あるみたい…男の人からのラブレターって中身見た事がなかったんだけど、それだけは気になって開けてみたの…」

恥ずかしそうに言う朝倉。

「その手紙って今でも取ってあったりする？」

話がますます逸れていっているが、俺はその手紙が気になっていた。

「ううん、最初はくれた人に悪いと思ってクラスが変わるまでは置いていたんだけど、あなたに告白した日の夜に全部捨てたの…もうあなたの事しか想わないって誓ったから…」

（ドキッ!）

彼女の言葉が嬉しく心に響き、またその表情がたまらなく愛らしかった。

#一九三 麻梨子のリクエスト

「そ、そんな事じゃなくて！」

話が逸脱している事に気付いたのか？朝倉は慌てて話を戻そうとした。

「あっああ…」

「でね、今まで直接告白してきた人って知らない人ばかりだったの。手紙も知らない人からばかりだったわ」

この話を始めた時は緊張からか？重苦しく話していたが、今は気分が和らいだのか、普段の会話とまではいかないものの、明るい口調になっていた。

「知らない人からの告白だったからかな？告白されてもほとんど何も感じなかったの…うん、何かは感じてたのかもしれないけど、それがいつまでも残るものじゃなかったの。もちろんその事で戸惑った事はあるけど…」

「うん、解かるよその気持ち、うまく言えない感じだね…」

「…うん、でも今日のはそれとは違う。知ってる人に告白された…。クラスメイトで毎日顔を合わせて、話もする人。そんな人に告白されたのって初めてだから戸惑ってるの…。明日から亜津君とどう接すれば良いのかなって…」

「…そんなに深く考えなくても良いと思うよ」

「え…」

俺は彼女の中にある不安を取り除いてやりたかった、

「ほら、アイツ言ってたじゃん…気持ちを知って欲しかったただけだって…。朝倉を困らせようと言ったんじゃないから、君もその…深く考える必要はないと思うよ」

何とか不安を取り除いてあげようと言ったが、巧く言葉に出来なかった。でも、俺の言葉を噛み締める様に少し沈黙して。

「…うんっ」

朝倉は言った。

「明日のアイツはいつもの亜津だよ。昔からアイツの事を知ってる俺が言うんだから間違いない！」

俺は強引にそう言った。それは自分にも言い聞かせる言葉だった。実は俺も不安だった、亜津の事が…。一番悪いのは俺だから…。朝倉を不安にさせる様な事になったら、俺はどんな事をしてでも彼女を守ると誓った。

話が一段落した…。二人で同時にジュースを啜る…。

「ねえ…」

ジュースを飲み終えた朝倉が口を開いた。

「ん？」

「今度は柊君の恋話が聞きたいなあ…」

「お！俺のお！」

思いもしないリクエストをする朝倉！

「うん…嫌ならいいけど…」

恋話と言われても何を恋話と言うのだろうか…。

「いや…恋話って言われても…」

「絶対モテたもん、テニスしてた時とか…」

（まあ、あの時が絶頂期だったか…）

「あ！」

突然朝倉が言った！

「何？」

「ごめんなさい！テニスの事は…」

心底申し訳なさそうに謝る朝倉。

一度彼女に話した富長さん事を言ってるのだろうか。

確かに朝倉には話しておかないといけないか…。俺もいつまでも引きずってっても仕方ない…。

#一九四 了希の過去

「そうだな……。でも、もしかしたら君にとっては聞きたくない内容かもしれないよ……」

俺は自分の昔話をする事にした。朝倉にばかり過去の話をさせておいて自分はしないわけにはいかない。

意図して自分で遠ざけていた、忘れようとしていた過去。

朝倉に吐露してしまう事で逆に払拭できるかもしれない。でも朝倉にとってこの話はどう受け取られるのか解からない。その不安はあったが。

「うん、大丈夫……」

朝倉は笑顔でそう言った。その表情を見て俺は完全に決意した。

「富長さんとみながっていうんだ、前に言った先輩マネージャー」

唐突に離し始めたが、彼女は即ぐに理解してくれた。

「うん」

「最初はまったく何とも思ってたんだけど、先輩の方からいつの間に話し掛けて来るが多くなって……そのうち俺は……先輩は自分だけを特別扱いしてるんじゃないか？って思うようになって……俺の言葉をただ黙って聞いてくれている朝倉。」

「そう思うこと自体が馬鹿だったんだけど……。そうしたら俺がインターハイで優勝した時に、突然先輩から……」

これ以上言って良いのか迷った。

「それがあなたのはじめて……なのね」

彼女が話しやすくしてくれた。そんな事朝倉に言わせてしまった自分が情けなかった。

「……うん。それまでの先輩の言動とそれで……てつきり先輩は俺の事を好きなんだって思ってた……。でも、直ぐにそれは俺の馬鹿な勘違いだって理解って……。後から知ったんだけど、先輩にはちゃんと彼氏が居て、そのうえ彼氏以外の男と何人もそういう事してて……俺

も単なるそのうちの一人だったんだ…」

「……………」

黙りこんでいる朝倉。

「ごめん、聞きたくなかっただろ？こんな話…」

その沈黙を破りたくて、朝倉に問いかけた。

「ううん、私こそごめんなさい。思い出したくない過去を話させて…」

「いや、君に聞いてもらえてすっきりしたよ」

「最後に一つ聞いても良い？」

「うん」

「その人の事…好きだったの…」

彼女の不安そうな瞳が俺に問いかける。

「…男って単純なのかもしれないよ…俺は好きだったのかもなあ…。
何も知らない頃だったから」

朝倉に問われて初めてあの時の自分の気持ちが理解できた。

「去年の話でしょ？」

「今と比べると初心だったよ」

「そんなに変わるものなの？」

「かもね……。でもこれだけは言える、今君に抱いてる恋心はあの時のとはまったく違うもので、本当に君の事が大好きで、絶対に君を話したくないって強く思ってるから…」

それは本心からの言葉。

「っ！…ありがとう」

勢いあまって言ってしまったが、朝倉は嬉しそうに言ってくれた…。

#一九五 すっきり

「…すっきりした？」

店を出てから俺は朝倉に訊いてみた。

「うん、ありがと。本当は自分ひとりで解決しなきゃいけない事だったのに…助けてもらって。本当にありがと」

「いや、俺も聞きたくないだろう話を聞いてもらったし…」

「ううん、とんでもないわ。私が聞きたいって言った事だし。それに私の知らないあなたが知れて良かったわ」

そう言ってもらえると俺も少し救われた気がする。

「私、いつもあなたに助けてもらってばかりだなあ」
続けて朝倉が言った。

「へ？」

助けてもらってばかりって、そんなに朝倉を助けた覚えがない…。

「あなたが傍にいてくれるだけで私は救われてるの…あなたが居ないと、私壊れちゃいそうだよ…」

「おいおい、何言ってるんだよ…？」

「あなたが居ないと頭がおかしくなりそうなの…こんな事言ってる、もうおかしい人よね。でも、あなたが居ないと私はダメになりそう…」

少しテレ笑いしながら言う朝倉だが、俺は彼女が言いたい事が理解する気がする。

「それって、つまり…」

「あなたが好き！大好き！」

言いながら朝倉は俺の左腕にしがみ付いた。

何だか答えをはぐらかされた気がするが。

「俺も好きだよっ」

そう言いながら、朝倉をもっと自分に引き寄せて歩いた。

日が暮れかけてますます寒くなってきた帰り道で、朝倉の温もり

を感じながら家路を歩いて行った。

そして翌日、教室にはいつもと変わらない亜津の姿があった。

#一九六 機密事項漏洩

(うわっ積もった!)

マンションを出た瞬間、眼前に広がった真っ白な景色に思わず圧倒された!

昨夜寝る前に雪が降り出したのは知っていたが、ずっと降り続いていたとは…。

子供の頃はこうなるとはしゃぎながら登校してたのに、今となつてはそんな感情はなくなっている…。いつ頃からこうなってしまったのだろうか。そんな事を考えながら登校しているとんだか寂しく感じた。

・
・
・
・
・
・
・
・

「なあ、お前たちまたどっかに行く計画を立ててるんだろ?」

昼食(朝倉お手製弁当)を食べ終えた俺に、トモが言ってきた。

「……ああ」

俺は周囲を気にしながら返事をした。

「ん、どうした?」

それに気付いたトモ。

「ちよつと来いっ」

言って俺はトモを教室から連れ出した。

「おいっ! どうしたんだよ?」

「それどっから聞いたんだよ?」

月島から参加メンバー以外にスキーの事は他言するなと念を押されている。

「え!?! いや、先刻食堂で豊と月島が話してたのを聞いたんだよ」
(アイツら〜!)

念を押してた奴から洩れてんじゃないか!!

「で、それがどうしたんだよ？」

これ以上隠しても仕方ないので、俺はトモに言った。

「いや、俺もまぜてくれねーかなと思ってさ…」

「まあ良いとは思うんだけどよ、俺一人じゃ決められないからなあ…。それに行っても気まずいかもよ」

「何で？」

「いやー、今回月島がカップルばっか集めたからさ…あつ水野はフリーか…」

「そうなのか！？あー、そしたらあいつを誘うか…でも大丈夫かな？」

「え！誰かいるのか？」

トモの言葉に俺は驚愕した！

「何だよっその言い方！俺に彼女がいちゃー悪いのかよ？」

「い、いやそういう訳じゃなくて…なんちゅーか…」

（いつの間に彼女が出来たんだ？）

「まあ…そう思うよな。付き合いだしたのは二学期の終り頃だったからな」

トモはテレ笑いしながら言った。

#一九七 追加メンバー

「そっそうなら早く教えてくれよ！ハハッそうか、おめでとう」

俺はかなりびっくりしながらもトモを祝福した、

「でも、行くのって来月だろ？ってことはまだあいつ学校があるしな…」

「学校があるって…年下か？」

「おう、広瀬だよ、知ってるだろ？女子テニス部の広瀬由比だよ」

「！！ッ……」

トモの発した名前に俺は口を開いたまま何も言えずにただ驚いていた。

「おいおい、驚きすぎだぞ！」

驚くに決まっている！あの広瀬がトモと付き合ってるって！

「まあ…驚くよな、広瀬はお前の事をずっと追っかけてみたいだらな」

淡々と言うトモだが、俺は二人の経緯を詳しく知りたかった。どうしてそうなったのか？たしかに香港から帰ってきて以降、広瀬から何か言ってくることはなくなってたがまさかそんな事になったとは…。

「あれ、どうしたの二人ともこんな所で」

急に背後から声がした！

「お！月島、ちょうど良いところに来た」

俺が振り向く前にトモが言った！振り返ると月島と豊、それに水野と朝倉も居た。

「どうしたの？」

月島が問いかける。

「いや、お前らの計画に俺もまぜてもらおうと思って…」

「え！何！どこで知ったの？…柊君が教えたの！」

「バカ、月島と豊の話を先刻聴いたんだってよ！」

俺は少しムツとしながら言った。

「ウソ…」

それを受けた月島が呆然となった。

「そういう事」

トモが半笑いで追い討ちをした。

「ごめんなさい、柊君」

（慌てて謝る月島。気が強そうに見えるけど結構素直な性格なんだな、月島って）

「俺は別に良いと思うぜ、人数は多い方が良いし」
豊が言った。

「だろ？」

それに反応するトモ。

「そうね、キャンプの時のメンバーだし」

続いて水野も言った。

「まあ、一人くらいなら増えても大丈夫か…。それは良いんだけど…その…」

その後を言い難そうにしている月島だが、

「ああ、その点は大丈夫！もう、柊に聞いてるから」
トモが割って入った。

「そ、じゃあ問題ないわね」

それを聴いた水野が少し安心したように見えた。多分自分の仲間が出来たのだと思ったんだろうか？残念な事に…。

#一九八 追加参加決定！

「で、何をするんだ？まさか真冬にキャンプか？」
「へっ！？」

トモの質問に全員が呆気にとられた。

「柊君から聞いてないの？」

月島が言う。

「おう」

（あっ！知ってると思って、言ってなかったな…）

「スキーよ」

月島が言った。

「え！スキー！俺やった事ないぞ」

スキーと聞いていきなりテンションが上がるトモ。

「じゃ、やめとく？」

「いや、行く！行くに決まってるだろ！」

「ま、とにかく廊下じゃなんだから教室に入りましょう」

言って、皆で教室に移動した。

・ ・ ・ ・ ・

「で、言いにくいんだけど…今回のスキー旅行ってカレシ、カノジヨが居る人達が多いんだけど…」

「お、それはもう柊から聞いている」

「じゃあ、話は早いわね」

「おう」

その話になった時、なんだか水野が嬉しそうな表情をした様に見えた。それって単に一人身のやつが増えたという喜びか？それとも水野ってトモの事…。

『キーンコーン カーンコーン』

という事を考えていると昼休憩が終わってしまった。

「ま、また皆で集まって取り決めするからその時に詳しく話すわね」

「おう」

何だかんだでお一人様追加が決定したようだ。

それにトモが加わる事を皆歓迎している様な雰囲気だし、まっ良かったか。

でも、広瀬も来るんだろうか？ 時期的学校があるから無理だと思うけど…。

#一九九 真冬の帰り道

「まだ雪が残ってるね」

「ああ、おかげで歩きにくくて…」

一旦は止んでいた雪だが、下校前からまた降り出した。

雪が解けかけてグチヨグチヨになった道を朝倉と二人で帰っている。

「あ、また雪だるま」

道端にある雪だるまを指差し朝倉が言った。下校途中の小学生が作っていったであろう雪だるまが道路脇の所々に立っている。

「やっぱり伴城君も加わったね」

そんな雪だるまを見ながら歩いていると、彼女が言った

「やっぱり？」

「うん、なんかキャンプの時のメンバーが集まる気がしてたの」

「ふーん、でもトモで終りだよ…多分、増えるのは」

俺がそう言うと、

「…うん、そうでしょうね。でも寂しいね、あの時のメンバーが集まればまた楽しくなるのにね」

「仕方ないさ」

「うん…。あっそうそう、美夏が独り者が増えたって喜んでたよ」

「うっ…」

やっぱり水野はそう思ってたか…。

「どうしたの？」

「あいつ、最近彼女が出来たんだって…」

「え！そうなの？私も知ってる人かな？」

朝倉は興味津々で聞いてきた。

「…：広瀬だって」

一瞬躊躇したが、俺は言った。

「ひろせ？」

「…ほら、二年の女テニの…」

広瀬の事を朝倉に話すのは何となく気が引ける…。

「え！あのコってあなたに…」

「…何がどうなったのか、今はトモと付き合ってるらしい…」

「そうなの…。で？あのコも来るの？」

朝倉のトーンが少し落ちた様な気がした。

「まだ学校があるから、多分来ないと思うよ」

「そう…」

俺の勝手な思い込みかもしれないが、朝倉の顔に安堵感が感じ取れた。

#二〇〇 楽しいな昼食

「本当はどうなの？伴城君に取られたってカンジ？」

「なに言ってるんだ、怒るぞ！そんな事思わないだろう！」

「ごめんなさい…」

朝倉の質問の口調は勝者の余裕が感じられた。

「俺は君の事しか考えてないんだよ」

「ありがとう…私もあなたの事しか考えてないよ」

二人でギュッと手を握り合った。

「なあ？」

「うん？」

「もしかして水野ってトモの事が好きだったりするのか？」

先刻の会話のときに感じた事を朝倉に聞いてみた。

「それはないはずよ」

しかし朝倉はそれをあっさり否定した。

「そうか…。あっ弁当ありがとうな、美味かったよ」

あまりこの話はしない方が良い様な気がして、俺は即座に話題を変えた。

「よかった、ごめんね渡すだけ渡して。美夏が学食で待ってたから…。明日も作ってくるね」

「ありがとう、でも今度は一緒に食べたいなあとか思ったりして…」
鞆から弁当箱を取り出しながら、俺はしみじみ言った。

「え！」

これまで人目に付かないところで二人で昼食を摂った事はあるが、教室で堂々というのはない。校舎の外の非常階段とか、校舎から離れた屋外とか。それも今の様な寒い時期になると辛い。それにもうすぐ学校で昼食をとるという事も終わってしまう。その前に…。

「じゃあ、明日一緒に食べましょ」

満面の笑みを浮かべて朝倉が言ってくれた。

「じゃあ、明日は教室で食おう！」

「え！ほんとに？」

やっぱり驚く朝倉。

「もう同じクラスのやつで俺たちの事を知らないやつはいないよ。それに一度は教室と一緒に食べたいし…」

「あなたがそう言うなら、私はかまわないわ」

「じゃ、決まり！」

昼食が楽しみになったのは初めてかもしれない。

「ねえ。どうせなら皆で食べるっていうのは？」

「ああ、別に俺はかまわないけど、あいつらほとんど学食だから教室で食べるって事ないからなあ…」

「そっか、じゃあ明日皆に言ってみて、明後日なんとかならないかな？」

「それなら大丈夫だろ。パンとか買って来れば良いだけだしな」

「なんか楽しみたい」

「そうだな」

「じゃあ、明日はあなたと二人きりで…」

「ああ…」

また一段と降ってくる雪の中家路を急いだ。

#二〇一 緊急事態！

昨日は一面真っ白な雪景色だったのが、今日は一転冬晴れに恵まれ冬の太陽がサンサンと降り注いでいる。

そのおかげで昨夜まで降り積もっていた雪が融けて地面はべちゃべちゃ…。そんな道を学校に向け歩いている。

足元の悪さと相まって身に染みる寒さの所為で重くなりがちな足取りだが、今朝の俺の足取りは軽い！それは昨日の朝倉との約束がそうさせている。

今日は朝倉と教室で堂々と昼食を食べる！しかも彼女のお手製弁当を！そう思うといつもより短時間で学校に到着…したような気がした。

教室に入るとまず真っ先に朝倉の席を確認した。彼女は自分の席で水野と話をしていたが、ちょうどこっちを見た朝倉と目が合った！

(！)

まるで初恋の片想いの女の子と目が合った様な嬉しさと同時に、何か違和感を感じた。

(なんだ…？)

その違和感がなんなのか解からないまま自分の席に腰を下ろした。直ぐに朝倉と話をしたかったが、いつも俺が朝倉を独り占めしている状態。せつかくの水野との時間を邪魔してはいけない様な気がしてその場は止めておいた。

自分の席に着いたと同時に一時間目の授業の開始を告げるチャイムが鳴った。いつもより早く登校した様に感じたのに、実際はいつもと同じ時間だった…。

午前中の授業中、事ある毎に朝倉に目をやってしまっていたが登校時に感じた違和感を感じなかった。単に俺の思い違いだったのか…？

・ ・ ・ ・ ・

『キンコンカンコン〜』

四時間目の授業終了を告げるチャイムが鳴った！待ちに待った昼食の時間だ。うちのクラスの大半は教室を出て行く。食堂に行く者、他のクラスに行く者：行き先は皆それぞれだ。俺は教室に残る者の一人。

（さあ…朝倉は…）

そう思いながら彼女の席を見た。

「！」

朝倉の姿を確認した瞬間、俺は彼女の席に走っていた！

朝倉は自分の机に覆いかぶさる様にして体勢を伏せていた。ちょうど俺たちが授業中に寝る時の格好。普段そんな体勢をした事が無い彼女だからこそ俺は直ぐに異常を感じた！

「おい！大丈夫か朝倉！」

俺は彼女の背中を擦りながら言った！

「どうしたの？」

俺の声を聴いたのか？近くに居た水野も駆けて来た！

「ん…大丈夫！」

弱々しい口調でそう言ったが、朝倉は上体を起こそうとした。

「大丈夫じゃないだろ！」

本気で心配する俺に彼女は笑顔で、

「ちよっと眩暈がしただけ…お昼食べたら治ると思うわ…」

「なに言ってるんだ、顔真っ赤だぞっ」

「そうよ、保健室に行ったほうが良いわよ！」

俺と水野が畳み掛けるように言う！

「でも…」

「でもないの！付いて行ってあげるから、さっ！」

渋る朝倉の腕を掴んで、半ば強引に保健室に連れて行こうとする水野。

「あ！」

今まで見たことのない水野を見た…。

「ごめんね…お弁当、鞆に入ってるから先に食べてて…」

「あ！ああ…」

そう言って朝倉は水野に連れ添われて教室を出て行ってしまった…。

「……………」

急に静かになった教室で、自分ひとりが浮いた存在に思えた…。
本当は俺がおぶってでも朝倉を保健室に連れて行こうと思っていたのだが、水野の行動力の速さに何も出来なかった…。

“ポンッ”

「ひっ！！」

いきなり肩を叩かれ、思わず声を出してしまった！振り向くと豊が立っていた。

「残念だったな、代わりに俺と一緒に食ってやるよ」
満面の笑みで言う豊。

「…お前、いつから居たんだ…」

「最初から居たぞ」

「そうか…ありがたいけど、今はそんな気分じゃない…すまん」
豊の行為は本当にありがたいが、今はとても弁当なんか食べられる気分じゃない。

「なんだ…、まあ仕方ないか、朝倉…風邪か？」

「わかんねえ…」

今朝感じた違和感はこれだったんだ。あの時何となくだが気付いていたのに何もなかった…。

「くそっ！」

なんともやりきれない気分になり、思わず口を突いて言ってしまった！突然の言葉に豊が驚く。

「心配だろうな…後で見に行ってみれば…」

「…すまん」

豊かなりの気遣いが嬉しかった…。

#二〇二 焦る想い

五時間目の始業チャイムと同時に水野が教室に戻って来た。朝倉の様子を聞きたかったが、先生の入りが早かったため、訊く事が出来なかった。

何も情報が得られないまま午後の授業を受ける事になってしまった。

朝倉の事が心配でたまらない五十分間は絶望的に永く感じた。

大嫌いな数学の授業、声を聞いているだけで嫌悪感に苛まれる先生の授業時間よりも圧倒的に永く感じられる。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

永遠に終わらないんじゃないかと思えた五時間目の授業がようやく終わった！

「柊君…」

急いで朝倉の状態を水野に聞こうと思い立った瞬間、水野から話し掛けてきた。

「朝倉は？」

即ち俺は朝倉の容態を訊いた。

「それがね、たぶん風邪だと思うんだけど熱が高いから保険の室本先生が病院に連れて行っただの。その後家に送るって」

「そうか…」

それを聞いて少しホッとした。

「でね」

水野が続けて言う。

「後で鞆を届けるって言ったんだけど、柊君に頼めないかな？」

「ああ、全然構わないよ。どうせ帰りに寄るつもりだから」

「ごめんね、私も心配だけど今日ちょっと用事があるって…」

「わかった」

「よろしくね」

「ああ」

そう言うとき水野は去っていった。

朝倉に電話しようかと思ったが、まだ病院かもしれないので止めておいた…。

（早く声が聴きたい…）

強く思った。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

『キンコンカンコンコン』

（ハッ！）

今日最後の授業、六時間目終業のチャイムが鳴った！

朝倉の状態を水野から訊いていたため、五時間目の時の様な絶望的な長さは感じなかったが、それでもいつもより長く感じた五十分間だった。まるで午後の二時間だけで三日分の授業を受けていた気分だ。

即ち教室を出て行きたかったのだが、このあとホームルームがある！

（うーっ）

何も出来ない待っている時間が異常にもどかしい！

数分後純子先生が入室し、ホームルームが始まった。

二、三分程のホームルームが終わると同時に俺は朝倉の鞆を持って教室を飛び出した！

#二〇三 彼女の表情

『ピロ〜リ〜リ〜イ』

(朝倉だ!)

教室を出た瞬間携帯が鳴り出した! 朝倉からの着信音。急いでポケットから取り出した。

なんというタイミングだろうか、俺は走っていた足を止め電話に出た。

「もしもし!」

かなり荒げた声で言ってしまった!

『…もしもし、心配かけてごめんなさい…』

弱々しい声だが、朝倉の声が聴けて安心した。

「大丈夫か?」

言いながら俺は廊下を歩き出した。

『うん…もう、学校終わった?』

「ああ、今玄関に向かってるとこ。体は?」

『うん、病院で注射を打ってもらったから今は楽よ』

「そうか、良かった…。今家か?」

『うん』

「じゃあ今から鞆持っていくから、何か要る物あるか?」

『うーん…別にないわ、ありがと』

「じゃあ、行くから」

『うん、待ってる』

電話越しとはいえ、彼女の声が聞けて本当に安心した。

電話を切り俺は速足で玄関に向かった。

家を出る時に今日は徒歩にしようか自転車にしようか迷ったが、結局自転車で登校して良かった。

俺は下校している誰よりも速く自転車を走らせた。

・ ・ ・ ・ ・

彼女の家の前でチャイムを鳴らそうか迷った。起こすのも悪いと思ったのだが、ドアの鍵が開いてなくて、結局呼び鈴を鳴らす羽目になった。

『ピンポン』

…“ガチャ”

思ったより早くドアが開いた。隙間から朝倉の顔が見えた。ドアが完全に開き、彼女の顔がすべて見えた。注射のおかげか？昼より顔色は良い。

「お待たせ…」

俺が言うと、制服のままその上にコートを羽織った彼女がニッコリと微笑んだ。

「どうぞ…」

「邪魔します」

俺は家に入った。

「気にしないで寝てて」

「うん…あれ？」

手渡した鞆の中身を見て朝倉が言った。

「お弁当食べてないの？」

「ああ…どうしても君と食べたかったからさ…」

そう言ったが本音は朝倉の事が心配で食べる気力がなかった。

「でも…風邪染つるよ…」

「あつ、やっぱり風邪だった？」

朝倉が思ったより元気そうだったので、訊くのを忘れていた。

「うん、ちょっと熱が高かったけどただの風邪だって…その…アレの日と重なって熱が高くなったんじゃないかって…」

「アレ？」

（ハッ！！）

何の事か解からず訊いてしまったが、彼女の表情を見て直ぐに何

なのかを悟った！

「ご、ごめんっ」

慌てて謝る俺。

「ううん…気にしないで」

そう言って彼女の部屋に入った。室内は暑いくらい暖められていた。

#二〇四 安堵の炊事

「ふう良かった、インフルエンザとか流行ってるから」

彼女の部屋に入った瞬間、安堵感たっぷりに俺は言った。こうして声に出す事で本当に安心した。

「私も急に眩暈がしたからびっくりしたけど、大丈夫だった…」

「あまり見られたくないだろうけど、寝てたほうが良いよ」

「うん…あなたになら見られてたって平気よ」

「……………」

言われて照れくさくなった。

「何も食べてないんだろ？」

「うん…食欲なかったから…」

「でも何か食わないと治らないぞ。無理にでも、俺がお粥でも作るから」

「でも…」

「でもないよ！台所借りるぞ！」

朝倉の「でも…」は「でも食べたくない」なのか「でも俺の作ったものは不安」なのか解からないが、強引に言った。

「うん、ありがと」

朝倉の笑顔を確認した俺は彼女の部屋を出て、一階に下りて台所に移動した。

（とは言ったものの、ご飯あるのか？）

少し罪悪感を感じながらキッチンを物色した。電子ジャーの中に今日の弁当の残りと思われる白ご飯が少し残っていた。

（よし、少な目だけどちょうど良いか）

鍋に水を注れ、火にかけた。

「ふ〜」

今になってもう一度全身で安堵感を感じた。今日半日は生きた心地がしなかった。でも朝倉が元氣そうで本当に良かった。

そんな事を考えていると鍋の水が沸騰していた！

「おわっ！」

急いでご飯を鍋に入れた。

（何か味付け出来る物は）

再度罪悪感を感じながら台所を探さてもらった・・・。

#二〇五 遅いランチ

“ガチャ”

「お待たせ」

彼女の部屋のドアを開けながら、俺は言った。

「ありがとう」

そう言う朝倉はパジャマに着替え、ベッドに横になっていた。

「ここに置いとくぞ」

言ってお粥の入ったトレイをベッドの傍のテーブルに置いた。

「うん」

言って朝倉がベッドに座った。

「じゃあ、俺も一緒に食べさせてもらおうかな」

言って俺はテーブルの向かいに座った。

「朝倉のも貰って良い？」

一緒にレンジで暖めておいた二つの弁当箱をテーブルに置きながら言った。

「えっあ、うん」

二人で遅いランチを食べ始めた。

「おいしい」

「良かったよ口に合って。ポン酢と卵で味付けしただけだけど。いつもご馳走になってばかりだからさ、たまには俺も作らないと」

「といっても、彼女の家のものを使ったのだが」。

「うふっ。でも、早く風邪治さなきゃ間に合わなくなるね」

「何に？」

「もうすぐテストが始まるじゃない。そうになると、もうお弁当も無くなるから一緒に食べられなくなるじゃない」

「あ！そうか」

気が付けば一月もあと一週間ほどで終わってしまう。二月になれば学年末テストがあるだけで、それが終わると三月一日の卒業式ま

で登校する日もほとんどなくなってしまおう。

「一度でも良いから、あなたと教室でお昼を食べたいわ」

「そうだな。それと…」

「ん？」

「また一緒にテスト勉強したいなって」

「もちろんよ」

つーか、朝倉に教えてもらわないと学年末でとちったら大学進学が危うくなる。下手したら卒業だって危ないかも！

「……………」

いつの間にか自分の食事の手を止めて、朝倉の食事姿をジッと見つめていた…。

「！な、何？」

俺の視線に気付き、ちよつと恥ずかしそうに朝倉が言った。

「いっいや…、そうだ食べさせてあげようか」

「え！ええ！」

「いいからいいから」

恥ずかしがる朝倉からスプーンを取り上げて、

「ふっつあゝん」

文化祭の時に同じ事を彼女に迫られたときは無性に恥ずかしかったのに、今は平気。二人しか居ないこの絶対的状況がそうさせるのだろうか？

「あ、あゝん…」

あの時は臆気もなく応じた朝倉が、今は妙に恥ずかしそうにしている。

その一つ一つの仕草がたまらなく可愛い。思わずキスしようと顔を近づけたが、

「それはダメ」

「え！」

拒否されてしまった！

「風邪…治ったら…ね」

朝倉に染つされるのなら全く構わないのに…。

#二〇六 食後のひととき

「ごちそうさま」

先に食べ終えた朝倉が言った。

「あ、早いな」

「量少なかったし、おいしかったです」

「良かったよ。あ、薬飲むんだろ？」

「うん」

「ちゃんと水も用意してるから」

言って俺は用意していた水差しから、コップにミネラルウォーターを入れた。

「はい」

「ありがとう」

朝倉が薬を飲んでいる間に俺は残りの弁当をかき込んだ。

「俺もごちそうさま」

「本当に二人分食べたの？」

「うん、美味かったよ」

正直さすがに二人分の弁当はキツイ！

「さて、ちょっと片付けてくるよ」

言って俺は立ち上がろうとした。

「待って」

「！」

突然朝倉が呼び止めた。

「ん？」

「もう少し話…しよ」

「ああ…」

朝倉の要望を受けて俺はもう一度座りなおした。

「何の話をする」

「んー、じゃあ今日の午後の授業の話」

「う！」

「どうしたの？」

「いや、午後の授業は…君の事が気になってまったく聴いてなかったんだ…」

「え…」

急に静かになった。

「ありがとう…でもごめんなさい、心配させて…」

「ううん大丈夫。今こうして元気な朝倉に会えてるんだから」

「柊君…」

・
・
・
・
・
・
・
・

その後しばらく話をした後、食事の後片付けを済ませた。

「そろそろ舞衣が帰ってくるわ」

「じゃあ…俺はもう帰っても大丈夫だね」

「うん…あまり長居させて染つしちゃ悪いもんね」

「明日は？」

「うーん、とりあえず休むつもり…」

「じゃあ、明日学校が終わったらまた来るよ」

「うん、待ってる」

「じゃあ、今日はこれで」

「うん…」

病人の朝倉を置いて帰るのは気が引けるし、ずっと一緒に居たかったが、俺は家に帰った…。

#二〇七 最後の合宿

いよいよ明日から高校最後のテストが始まる。

卒業後、進学を希望しない者にとっては文字通り最後のテストになるかもしれない。俺は一応大学への進学を希望している身。最後のテストにならないためにもこのテストは重要。

まだ具体的にどの学部に進学するか決めていないが、このテストの結果で進学できる学部が決まるだろう…。

三日前から放課後は朝倉の家で勉強会、今日からテストの間はまた合宿モード。今日もテスト前日という事で午前中で学校が終わったり、午後一時から午後一〇時まで約九時間、ずっと朝倉の家でテスト対策をしている。

驚かされるのは朝倉の集中力。ほとんど俺に付き合ってくれているという本当に彼女にとっては迷惑極まりない状況なのに、まったく逸脱する事なく続いている！

それどころか俺が休憩を申し出ると、拒否されてしまう！どうしてそんなに集中力が持続するのか理解に苦しむ…。でも、それが出来るから朝倉は成績が良いのだろう。俺のような出来の悪い人間には到底至れない領域だと思う。

「朝倉…」

「ん？」

彼女も自分の勉強をしているのに、俺の質問に瞬時に応えてくれる。

「これって、さっきの代入法と同じだよな？」

「えっと、そうよ」

彼女のおかげでだいぶ効率が良くなってきた！なんと言うか、教えるのがめっちゃくちや巧い。指示が的確なのだ。

彼女が小学校の先生になれば優秀な小学生がいっぱい誕生するんじゃないかと強く思った。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

さらに二時間経った。

「ね、少し休まない？」

ようやく朝倉先生から休憩の申し出があった！

「ふっ」

安堵の一息。

途中一〇分間くらいの休憩を何度か入れながらやっていたが、ようやく本格的な休憩がおとずれた。

「コーヒーでも淹れて来るね」

言って朝倉が部屋を出て行った。

（なんだかんだで我ながら頑張ったなあ）

部屋の時計を見てしみじみ思った。でも、朝倉と勉強していると全く勉強が苦痛に感じない！学校の授業も朝倉が先生なら成績もあがってただろう！

「んっ」

床に手を付いて背中を伸ばした。勢いが余って右手がベッドの下に潜り込んでしまった。

「イテテテッ。ん？」

その右手に何かが触れた！

#二〇八 悶々と休憩

（何だ？）

俺はベッドの下で手に触れたそれを取り出し見てみた。

「うっ！」

何とそれは男性用のスキンだった！しかもハードケースに入った高級なやつ…。

（なんでこんな所に…）

おそらく夏に使ったものの残りがベッドの下に潜り込んでしまっていたのだろう…。それをボーっと眺めていると、次第に良からぬ感情が沸き上がってきた！

“ガチャ”

朝倉がコーヒーを持って部屋に戻って来た！持っていたスキンを慌ててポケットにしまってしまった！

「ケーキでも食べましょ、頭を使うときは甘いものが良いのよ」

「ああ…」

俺はテーブルの上を片付けた。何とか気分を沈めようとしているが、先刻までテスト勉強というストレスに晒されていたため、なかなか抑えられない…。

「いただきます」

学校の帰りにコンビニで買って来たケーキを朝倉が一口口に入れた。

「食べないの？」

「ああ、食べる」

ムラムラしながら俺もケーキを食べ始めた。

そうそう、朝倉が風邪を引いた翌日、さすがに学校を休んだ彼女だがその翌日には元気に登校した。その時朝倉は本当に人気者なんだという事を実感した。

あんな事があったのだから当然といえば当然なのかもしれないが、

登校してきた朝倉を皆が心配していた。

その日に念願になっていた教室で朝倉と一緒に昼食を食べるとい
うイベントを実行した。

やっぱり俺と朝倉の関係は既にクラスメートにばれていたのか？
周りのリアクションは大してなかった…。

何かヒヤカシの類を受けると思っていたのだが、俺たちに気付い
たクラスメートは皆何のリアクションも起こさなかった…。ちょっ
と寂しかった…。

それから弁当が終わる昨日まで三日間そのイベントを実行できた。
そのイベントの最終日になった昨日は伴城、豊、月島、水野も弁
当を持参して一緒に皆で食った。

あの一時が凄く楽しくて、もう二度とこんな事が出来ないんだな
あという残念な思いと、もっと早くこうしたかったという気持ちを
抱えながら、最高の昼食を摂る事が出来た。

「ズーっ…ふう〜」

コーヒーが美味い…。ケーキを食べ終えコーヒーも飲み干し、再
び一息ついた。

「コンビニのわりに結構美味かったな」

「いっぱい頭使ったからよ」

「疲れた時には甘いものをもって言うもんな」

ようやく悶々とした気持ちも治まった。

「今日はほとんど数学しかやらなかったけど、明日の科目はいいの
？」

朝倉が言った。どうやら休憩時間はこれで終了の様だ。

「数学がまったく自信ないからなあ…明日は現国だっけ？」

「あと、現社と保体」

（保体…）

朝倉の「保体」でまた先刻の感情が沸々と蘇ってきた！保体…保
健体育の言葉で欲情する俺って…。

#二〇九 振り切ったリミッター

「どうする現国もやる？ 現社はいつも良い点よね」

「ああ…」

もう朝倉の言葉はほとんど頭に届いていない。

「ねえ、どうする？」

“ガチャッ！”

「え！」

俺は欲情を抑え切れなくなり、テーブル越しに無理矢理彼女の唇を奪った！

「っんぐ！」

突然の俺の行為に驚く朝倉、だが俺は止めずに彼女の口内を食った！今まで食べていたケーキの甘い香りとコーヒーの香りが朝倉の口内から俺の口内に伝わってくる。

「なっ何するの！」

唇を開放すると同時に彼女が声を荒げた！

「俺…もう…限界なんだ…」

「柊…君」

そういえば俺の方から彼女を求めるのは初めてか？でも最近は、風邪をひいていてキスを拒否されたりで俺も限界に来ていた。

「したい…」

「…テスト勉強は？」

俺の言葉に順応するように彼女のは瞳を潤ませ言った。

「今日は十分だよ…」

「本当に？」

「ああ…絶対明日は満足のいく点を取るから…」

「約束、よ…」

「ああ…。こっちへ…」

朝倉は俺のリクエストに応じて隣に座ってくれた。ベッドを背も

たれにして二人で寄り添う。

「俺は本当にダメな男だな…」

朝倉を抱きしめながら言った。

「どうして？」

「本当はテストが終わるまで我慢しなきゃいけないのにな…」

「…うん、そんな事ないよ。二学期の期末の時、私もちょっとそんな気分になったもの…」

「朝倉…」

彼女のカミングアウトに正直驚いた。言った本人は少し恥ずかしそうにしている。

「今は俺が…」

彼女の腕を取って、自分の股間に持っていった。

「ッ!!」

声にならない驚きを見せる朝倉。当然だ、既にズボンの中ではちきれんばかりに俺の欲棒が膨張している!

「柊君…」

最初は驚いていた朝倉だが、自らの意思で俺の股間をまさぐり始めた!

「朝倉…」

たまらなくなり彼女を抱きしめ、キスした。

もう二人は完全に勉強モードから愛欲モードに切り替わっていた。学校から帰ってそのまま勉強に入っただけ二人ともまだ制服のまま。その制服を二人で脱がせ合う。

「ちょっと待って」

ブラウスを脱がせようとした瞬間、彼女が言った。

「え!」

「先に、シャワーでも浴びさせて…」

「でもっ」

「じっ時間はたっぷりあるから…、舞衣も今日はいつもの勉強会で帰ってこないから…」

「でも、俺我慢できないんだ」

「一緒に入ってもいいから、シャワーだけでも浴びさせて、このままじゃ…」

「わかった…」

二人とも脱ぎかけていた制服をもう一度羽織ってバスルームに移動した。

「ちゃんと着替え持ってきた？」

「着替えっていつでもパジャマと下着だけだけど。どうせ昼は学校じゃん」

「そっか」

「脱がせてあげようか？」

「ううん、自分で脱ぐ」

朝倉に拒否されてしまった。

「じゃあ、私が脱がせっ」

言いながら俺の方を見た朝倉が言葉を詰らせる。

「まだ…」

「ああ、先刻から興奮しっぱなし…」

下着姿の朝倉を目の前にして余計に膨張している…。

「ごめんなさい…苦しいでしょ？」

「大丈夫…」

朝倉は俺のシャツを脱がせながらそっとキスしてくれた。

#二〇 感傷

“立春”暦のうえでは今日から春ということらしい、という二月四日…。

外の気温は多分五度くらい！一体誰が今日から春だと決めたのだろうか？そんな事を考えながら、教室の窓から外を眺めた。

昨日で高校最後（そうであると願いたい）のテストが終わり、今日はその答案が一斉に帰ってくる日。

もう授業はないので今日は午前中で終わり、明日から二月二三日まで、補習を受けなくて良いものは学校が休みになる。

俺が補習を受けなくてはならない者になるか、受けなくていい者になるかはこの後返ってくるテストの結果次第！

「なあに黄昏てるんだ？」

ずっと窓から景色を眺めていた俺に対して後ろから豊が話し掛けてきた。

「そんなところで後悔してもテストの点は変わらねえぞ」

「お前と一緒にするんじゃないよ」

もうここからの景色を眺めるのもそんなにないのだと思うと、いつも観ている風景が違って見えた気がした。それを豊が邪魔をした。

「おい、ぶっちゃけどうなんだ？」

豊が先とは違い真面目な口調で訊いてきた。テストの手応えのこただろう。

「数学と物理以外はなんとかなってると思うけど」

理数系は全くと言っていいほど苦手なので、朝倉にそれを重点に教えてもらった。彼女の勉強の手を止めてしまっただけに申し訳なく思っている。自分の勉強を後回しにしてまで俺に付き合ってくれた朝倉には言葉に出来ないほど感謝している。

「お前解かってるのか？補習になったら明後日行けなくなるんだぞ！」

「わっ解かってるよそれは！」

豊が言っているのは、明後日から行く卒業旅行のスキーの事。

「ってか、人の心配より自分の心配をしろよ！」

俺が言くと、豊は不適な笑みを浮かべながら、

「へへへ、今回は自信があんだよ」

どんな自信を根拠にそんな面が出来るんだよ！

『キーンコーンカーンコーン』

等と言っているうちに始業のチャイムが鳴った。

チャイムが鳴ってから少しして、純子先生が大量のテストの答案用紙を持って教室に入ってきた。

「あゝ、重い」

言いながらそれらを教壇に置いた。

「誰かに運ばせれば良いのに」

それを見ていた女子が言った。

「答案用紙を他人に見せる訳にはいかないでしょ」

「そっか…」

生徒がこうして気兼ねなく話せる先生って純子先生くらいだろう。こういう光景もあと何日かで見れなくなるのかと思うとやっぱり物悲しく感じる。

#二二 緊張の返還

『ザワザワ』

皆最初はおとなしく自分の席に着いていたが、最初の一人が答案用紙を受け取った瞬間、皆自由に動き出し、仲の良い者同士が集まりあってテストの点に一喜一憂し始めた。

「亜津は良いよな」もうこのテストの点なんて関係ないもんな」
豊が亜津に言った。

いつの間にか豊、亜津に伴城が俺の席に集まっていた。

「その代わり受験苦労したんだぞ！」

亜津は無事センターを突破したようだ。

「佐久野ー！佐久野ーっ！」

教壇で純子先生が叫んでいる！

「おい豊、愛しの純子先生が呼んでるぞ」

俺がそう言うと、

「佐久野ー！早く取りに来ないと答案張り出すぞ！」

「わっわっ！はいはいっ」

慌てて取りに行く豊にクラス中が笑いで包んだ。

・
・
・
・
・
・
・

「終」

ついに俺の番だ！

ゆっくりと全九教科の答案用紙を受け取った。

（いつもみたく、一教科ずつ返してくれた方が良い様な気が…）
そんな事を思いながら席に着き、一つずつ点数を確認する…。

「ふう…」

思わず安堵のため息を吐いた。

「どうだったよ？」

すかさず豊が訊いてきた！

「おう、大丈夫だったぞ！お前は？」

「誰に言っただ！愚問だぞ」

「数学何点だったよ？」

豊も数学が苦手科目なのを俺は知っている。

「そんな事問題じゃないんだよ！要は赤をとらなければ良いんだよ！」

焦る豊！

「何だよその言い方！本当は赤なんじゃないのか！？」

「バツバカ言うな、五一点あったよ！」

「自信あるってそんなものなのかよ」

「何だよ！お前こそ何点だよ？」

「数学は六三点あったぞ」

「うっ…」

とても他の者に自慢できる点ではないが、豊がに勝ったという微妙な優越感に浸った。

数学は朝倉に重点的に教えてもらったところがドンピシャで出題された！さすが朝倉、そういう対策もばっちりだった！ちなみにもう一つ危惧していた物理も五八点で何とか切り抜けた。これもとても他人に言える点ではない…。

「そういえばトモちゃんは大丈夫か？」

「ああ、トモは大丈夫だろ」

俺たち二人が伴城の方を見ると、丁度こっちを見たトモが小さくガッツポーズした。どうやら大丈夫だった様だ。

「朝倉」

そうこうしていると女子の一番手、朝倉が呼ばれた。

「まあ、才女朝倉がコケるわけではないよな」

冗談めかして豊が言ったが、俺に付き合ってくれた所為で点が悪くなってないか心配なのだが…。

「さっすが麻梨子！一〇〇点二つに他も九〇点以上！」

「ちょっと美夏っ！そんな大声で言わないでよ！」

その会話を耳にした瞬間、俺の勝手な心配は彼女に対して失礼極まりないものだったと実感した…。

#二二二 カフェで打ち上げ

「やっぱり朝倉は凄いな」

帰り道、テストの結果について俺が言った。

「あなたと一緒に出来た事が励みになったのよ」

謙遜する朝倉。

「何言ってるんだよ、励みになったのは俺の方だよ、本当に助けてもらったんだから。君と一緒に勉強できて本当に良かったよ」

「柊君…」

「俺に付き合わせて迷惑だったんじゃないかって心配したほどだよ」

「迷惑だなんてとんでもないわ。私はとても楽しかったもの」

俺も凄く楽しかった。勉強が苦にならなかった事は初めてだった。

二学期の期末テストの時もそうだった。

俺は彼女の手を握り、

「このまま何か食べて、遊びに行かないか？」

俺が提案した。

「うんっ」

それに彼女は快く受け入れてくれた。

「テスト巧くいったお礼に、ケーキでも奢るよ」

「え！」

「遠慮しなくて良いって、本当に感謝してるんだからそれくらいさせてくれよ」

「うん、わかった」

というのは口実で、今日を含め本当に後僅かになってしまった制服が凄くいとしくなって、このまま一日を過ごしたくなった。

そして、いつもの帰り道とは違う道にあるケーキ店に隣接したカフェの前に着いた。

「ここ、来た事ある？」

「ううん。柊君は？」

「男がこんなとこに来ると思う？」

「そっか…」

「ここで良い？」

「うん、あなたとならどこでも」

可愛いことを言ってくれる。

『カラncカラnc』

店の扉を開けると店員のお姉さんが笑顔で迎えてくれた。

「店内でお召し上がりですか？ お持ち帰りですか？」

「えっと、店内で…」

「ハイ、かしこまりました。ご注文がお決まりになりましたらどうぞ」

「何にする？」

俺が朝倉に訊ねると、

「うん…」

ショーケースに並んでいるショートケーキを眺める朝倉。

「迷うなら二個でも三個でも好きなだけ良いよ」

「そんなに食べられないよ」

「クスッ」

俺と朝倉のやりとりを見て店員のお姉さんが笑った。

「すいません、彼女ですか？」

「え、ええ…」

なんか恥かしくなった。

「じゃあ、このモンブランを…」

朝倉が注文した。

「はい」

「じゃあ、俺は…生チョコショートを」

「はい、お飲み物はどうしますか？」

「じゃあ、オリジナルブレンドのホットを。朝倉は？」

「んー、私も同じので」

「はい、以上でよろしいですか？」

「ハイ」

「お会計、合計で一五三〇円になります」

（結構な値段だな！）

少し金額にびっくりしながらも、昨夜財布に足しておいて良かった。

「では商品はお席までお持ちしますので、お席でお待ちください」
「はい」

俺と朝倉は隣の客席フロアに移動した。そこには俺たちと同じ制服を着た学生が何組か座っていた。

#二二三 理想のプロポーズ

「あそこにするか？」

俺は空いていた窓際の席を指差して言った。

「うん」

思えば二学期の頃、こうして朝倉と二人で外で食事をする際は絶対にこんな席は選ばなかった。

でも今は違う、あの時とは正反対の気持ちで俺の彼女朝倉麻梨子を皆に自慢したい気分が駆られる。

「なかなか良い雰囲気ね」

「ああ、そうだな」

客席は七つ。そんなに広い店内ではないがゆったりと時間が流れるような心地良い雰囲気とする店内だ。

「お待たせしました」

少しして注文を聞いていたさっきのお姉さんが品物を持って来た。

「こちらがモンブランです」

朝倉の前にモンブランが置かれた。

「生チョコシヨートです」

そして俺の前にも置かれた。

「ブレンドコーヒーです」

「すいません」

テーブルにコーヒーが置かれた瞬間香ばしい香りが鼻腔をくすぐった。

「それから…」

店員のお姉さんがトレーに手をやりながら言った。

「こちらはサービスです」

言って、もう一皿ケーキが置かれた。

「これって!？」

朝倉が驚きながら訊ねた。

「気にしないでください、可愛い後輩に私からプレゼントですから」
「え？」

「私もあなたたちと同じ光応の卒業生だから」

「そうなんですか？」

「ええ」

朝倉の問いに笑顔で答えるお姉さん。

「私が高校生の時にこの店で彼氏に初めてご馳走してもらったケーキなんだけど」

「そうなんですか」

俺は言いながらその白いケーキを眺めた。

「これ、なんていうケーキですか？」

「ホワイトスノー。この店のオリジナルなのよ」

「へ」

「彼が私のためにこのケーキを作ってくれて、その時プロポーズされたの」

少しテレながら他の客に聴こえないように小声で言った。

「じゃあ、彼氏って…」

朝倉が好奇心を溢れさせながら言う。

「そっ今のこのお店のパティシエさん」

「すごい！」

驚く朝倉、テレルお姉さん。

しかし女子高生にケーキでプロポーズとは！俺にもそんな才能があれば迷わず朝倉にプロポーズ出来るのに…。

「まっそんなケーキだから、あなたたちも幸せそうなカップルに見えたから勝手にサービスしちゃったの」

「ありがとうございます」

「お幸せにね」

「ありがとうございます」

俺も自然とお礼を言った。

「じゃあ、ごゆっくりしてってください」

そう言ってお姉さんはレジの方に戻って行った。

「いい話だな…」

「そうね」

「あ、朝倉も…そんなプロポーズが理想…だったりする？」

「え！」

「いやっ！なんでもない…」

「柊君…」

「さっ、食べようぜ」

「うっうん…」

二つ用意されたスプーンで一つのケーキを二人で同時に食べ始めた。

#二一四 出発の朝

『ピピピピッ』 『ピピピピッ』

普段は使わない目覚まし時計が鳴る！時刻は午前四時。就寝が午前一時くらいだったから、睡眠時間は三時間弱。

そんな短い睡眠時間だが、学校がある日とは違い体が軽い。気分次第でこうも違うものか？と驚いている。ササッと洗顔と歯磨きをするために部屋を出た。

廊下の気温は身震いするほどで、蛇口から出る水もかなりの覚悟が必要な冷たさ。その覚悟を決め、一気に顔を洗う！予想以上の冷たさに瞬時に目が覚めた！

何故こんなに朝早くにこんな事をしているかという、今日からスキー旅行に出掛けるからだ！

昨日最終のミーティングがあって、月島から告げられた出発時刻が午前五時！始発電車で出るという…。

『ピロロロ』

そうこうしていると携帯が鳴り出した。朝倉からの着信だ。

「おはよ〜」

『あっちゃんと起きてた？今タクシーに乗ったから、あと一〇分ほどで着くよ』

「OK、了解」

電話を切ると急いで残りの支度を用意した。

スキーに待っていく物は昨日のうちに用意していたので今は簡単な身支度のみで完了する。スキー用品は全てレンタル出来るというので荷物もそんなに多くない。というか、スキー用品なんか持っていないし。

（そろそろ下りとくか）

昨日用意した荷物を確認し、

「じゃあ、俺出るから」

まったく起きる気配のない姉キに一言言つて家を出た。

(うゝ寒みいゝ)

白々と夜が明けてくる空をマンションの前で見上げた。するとすぐ一台のタクシーがやって来た。

(おッ来た来た！)

停車したタクシーの後部座席から朝倉が出てきた。

「おはよう、荷物入れて」

「ああ」

俺は既に幾つか荷物が入っているトランクに自分の荷物を入れた。

“バタンツ”

俺が助手席に乗り込むとタクシーは駅へとむかった。

後部座席には朝倉と水野が乗っている。確か水野は朝倉の近所に住んでいるので、一緒に来たのだろう。

「お兄さん達、高校生？」

出発から少しして、運転手のおじさんが愛想良く話し掛けてきた。

「ええ…」

俺が答えると。

「スキーに行くの？」

ズバリ言い当てた！

「ええ、どうして解かったんですか？」

「こんな朝早くに学生三人が大荷物で行く所ったら、スキーしかないからねえ」

「へ」

運転手の洞察力に俺は感心した。

「実は昨日も同じ様な客を乗せたからね、もしかしたらと思ってさ」
(なんだ、そういう事か)

「そうなんですか」

「へ」

俺の後に後ろの二人が言った。

「この時期は…卒業旅行か？良いね。おじさん男子校だったから

彼女と旅行なんて夢のまた夢だったよ」

「いや：駅で大勢と待ち合わせしてるんですよ…」

「ハハハ、青春だね」

そんなこんなで駅に到着した。

#二一五 気になる謎

「ハイ、三千円にまけとくよ」

「あ、ありがとうございます」

言って俺は三千円を運転手に渡した。

「良い思い出作りなよ」

「ハイ」

朝倉が先に荷物を降ろしていたので、タクシーは素早く走り去っていった。

今日はいつも使っている近所の小さな駅ではなく、遠いが便が良いターミナルステーションで待ち合わせしている。

「一一〇円まけてもらった」

「じゃあ、一人千円ね」

言って水野から千円札を渡された。

「あっ」

断ろうとした俺の手に少々強引に握らせ、さっさと自分の荷物を持って行ってしまった。

「はい」

つづいて朝倉からも受け取った。

「水野…機嫌悪いのか？」

「え、どうして？」

「いや、何となくそんな感じがしたから…」

「…朝早いからまだ眠いんじゃない？ 私たちも行きましょう」

「ああ…」

俺も自分の荷物を持って集合場所へと歩き出した。

「なあ、どうして宿泊費がタダになるんだ？」

途中、ずっと疑問に思っていた事を朝倉に訊いてみた。

「私も知らないの、由実が教えてくれないから…」

「そうなんだ…」

「おせーぞ！」

集合場所の切符売り場で豊に怒られた！

「お前どうしたんだ？いつもは一番遅いのに」

「私が連れて来たのよ、こんなに朝早いと絶対に来れないと思ってね」

月島が言った。

「俺らは二番手か…」

時刻は午前四時五〇分。俺たちが乗る予定の電車は五時一〇分に出発する。

「なあ月島、どうして宿泊費がタダなんだ？」

今度は張本人の月島に訊いてみた。

「そうそう俺もそれが気になってったんだよ」

どうやら豊も知らないようだ。

「ふふふ。皆集まったら説明するわ」

悪戯な笑みを浮かべながら月島は言う。

「なんだよそれ！」

「うふふふ」

豊と月島のやりとりを見ると、本当にこの二人は似たもの同士だと思った。

#二一六 集合時間

「お！皆早いな」

言いながら伴城が現れた。

「おいトモちん、五時ギリギリだぞ」

ここぞとばかりに豊が偉ぶる。どうやらトモは一人の様だ。やっぱり広瀬は来れなかったか。俺としては少しホッとした。

「伴城君も私と同じ一人身だね」

なんだか喜んでいる様な口調で水野が言った。

「ああ、彼女も誘ったんだけど明日からまた学校だからな。さすがに無理だった」

「カノジョ〜！」

トモがさらった発した言葉に俺と朝倉以外の三人が驚いた。

「誰？誰？私の知ってる人？」

水野が訊く。

「えっ知らなかった？」

「知らなかった？ってお前そんなこと一言も言ってなかっただろ！」

「いや、柊には言ったぞ」

俺に話が回ってきた！

三人の視線が一斉に俺に向けられる！

「いや：他人の俺が言う事じゃないだろ…」

「で、誰なんだよ！」

豊が再度訊く。

「多分言ってもわからないと思うけど：女テニの二年の広瀬って…」
改めて言うのと照れくさいのだろう。淡々とトモが言った。

その話の中で水野がなんだか寂しそうにしている気がした。

「っかし、やっぱり遅いわねあの二人！」

そのままだトモの話になりそうだったが、携帯を開きながら月島が言った。

「おわ！五時三分！」

俺も時間を確認してびっくりした！

「五分になったらホームに行きましょう」
少し怒りながら月島が言う。

「恩田に電話してやろうか？」

トモが言った。

「あっおねがい」

月島が言うとすぐさまトモが電話を掛けた。

「なあ、俺たち長野に行くんだよな？」

何とかギリギリで電車に乗り込むことが出来た、早朝という事で車内はガラガラだった。

「そうよ、東京で特急に乗り換えるのよ」

豊と月島が会話している。そこへ俺が、

「そろそろ教えてくれよ。なんで宿がタダなんだよ？」

さっきからこればかり言っている俺。ずっと気になって仕方ないのだ！

#二一八 卒業旅行の真相

「仕方ないわねえ…。フフフ、実はね」

俺の質問に悪戯な笑みを浮かべながらもったいぶる月島。

「私たちがお世話になるペンションの名前がね、シロミっていうの」「シロミ？」

恩田が言った。それにいつの間にか皆がその会話に加わっている。

「シロミってまさか！？」

ピンっと来た俺が言う。と。

「あっ柊君、解かった？」

皆は一樣にまだ解からないという表情をしている。

「もしかして、純子先生の実家か？」

俺が言う。と、

「ピンポーン！ 私たちが泊まる場所は、純ちゃんの実家なのよ」

「えっ！」

「うそ！」

「二学期の時に純ちゃんから聞いたのよ、実家が長野のスキー場の近くでペンションを経営してるって。一二月に卒業旅行にスキーに行きたいって相談したら、タダにしてあげるって言われたのよ」

「それって、先生にタダにしてくれて言ったようなもんじゃないか？」

「実はそうなんだけどね…」

豊の指摘に月島が照れ笑いする。

「「ははははは」」

まさか純子先生が絡んでいたとは！

「明日、純ちゃんも来るんだって」

「先生がくるのか！」

トモが驚いて言った。

なんだかエライ事になるような気がした。

担任の先生も参加する卒業旅行って普通あるのか？

そんな話をしながら、電車は着実に俺たちを雪の長野へと運んで行った。

#二一九 たじろぐ一行

「あゝやっとな着いたゝ！」

バスを降りた瞬間に豊が大きな伸びと共に言った。

この冬は暖冬で雪も少ないと聞いていたが、想像していたよりずっと壮大な雪景色が広がっていた。

「で、泊まるペンションってどこなの？」

細川に訊かれた月島が辺りを見渡して、

「えーっと、多分あれね」

月島が指差した先にはとてもペンションとは言えない程大きな建物が建っていた！

「あれってホテルじゃないのか？」

俺が月島に確認の意で言うが。

「あれのはずよ！バス停から見える白い建物だもの。さっ行きましょ」

月島に言われるままに俺たち一行は荷物を提げながらその建物を目指して歩き出した。

「すっげー」

豊の一言で全員がその建物を見上げた。

建物の前の看板には確かに“SHIROMI”と書かれているが、建物は三階建てのマンションの様な造り。ペンションと聞いていたので、てっきり俺は民宿の様な建物を想像していたのに…。

この建物を見ると本当にタダで泊まれるのか不安になってきた。

「早く入ろうぜ！」

恩田が臆することなく入り口に近づくと“サーッ”と自動ドアが開いた！中に入るとまるでホテルのロビーの様なエントランスが広がっていた。

「純子先生の実家ってすげー金持ちじゃん…」

「ああ…」

トモの言葉に、俺は周囲を見渡しながら自然に相槌を打っていた。
「いらっしやいませ」

(あっ…)

呆然と立っていた俺のところに純子先生にそっくりな女性が歩み寄って来た！

「あ、あのお…私たち、城美先生の…」

月島がシドロモドロで言った。

「まあ、あなたたちが純子の生徒さん？ お待ちしました。ささ、こちらへ」

その女性に導かれロビーのフロントへ案内された時、ようやくここで合っていたと実感した。

#二二〇 部屋割り

「では部屋割りはどうしましょうか？」

「えっと…、ダブルを三部屋とシングルを二部屋お願いしてもいいですか？」

「かしこまりました。…あいにくシングルとダブルは別フロアになるのですが」

「あ、ハイ。お願いします」

月島がフロントのお兄さんとやりとりをしている。

二人のやりとりをよそに、俺は壁に掛けられている料金表を眺めていた。そこに書かれている一泊の料金はシングルで九千円から一万八千円…。結構高い…。

「凄いところね」

「ねえ！想像していたのと全然違うもん」

俺の背後で朝倉と水野が話している。俺もこんなところだとは全く想像していなかった。てっきりアットホームな雰囲気のみ宿だと思っていた。

「森野君っ」

最初に声を掛けてきた女性が呼び掛けると一人の従業員がやって来た。

「シングルへご案内して」

「ハイ、ではシングルのお客様…どうぞこちらへ」

「じゃあ麻梨子、後でね」

そうやって水野とトモは従業員の後に着いて行った。

「では、ダブルのお客様はこちらへどうぞ」

どうやらシングルとダブルはロビーを隔ててちょうど左右に分かれるようだ。俺たちは最初の女性に連れられて、シングルの方とは逆の方へと案内された。

「あとで水野の部屋に遊びに行くと良いよ。俺もトモの部屋が見た

いし」

「うん」

歩きながら俺は朝倉に行った。

ロビーの横にあるエレベーターに乗り込む俺たち。

「あのー…」

「ハイ？」

月島が女性に声を掛けた。

「もしかして、城美先生のお姉さんですか？」

「えっ！うふふ」

すると女性は月島の質問に一瞬驚いてから一笑した。

「ごめんなさいね。私、純子の母ですよ」

「え！」

（ウソ！）

女性のその言葉に俺たち全員が驚いた！

俺も最初『純子』と言っていたのを聞いて、てっきり先生のお姉さんだと思っていた。

「てっきりお姉さんかと…」

「ふふ、ありがとう」

本当に若々しい女性だ…。

“チーンッ” エレベーターは俺たちを三階へと運んだ。

「こちらです」

エレベーターの横からの三部屋が俺たちが泊まる部屋らしい。

#二二 部屋で

「シングルのお客様はちょうど向こうのエレベーターの横の一階となっております。それと本日の夕食は一階の離れにあります食堂でバイキング形式になっていますので、午後六時半以降にお越しください」

「はい」

「では、ごゆっくりして行って下さいね」

「あっ、ありがとうございます。お世話になります」

「「お世話になります」」

月島のあとに続いて全員で言うところ、先生のお母さんはニッコリと一礼してエレベーターに乗った。

「じゃあ、俺らはここにするわ」

恩田がエレベーターから一番遠い部屋の鍵を月島から受け取った。

「一〇分後くらいに一度ロビーに下りてきてね」

「オッケー」

言って、恩田と細川が部屋に入ってしまった。

「麻梨子たちはどこにする？」

「じゃあ、ここで良いよ」

俺は今前に居るエレベーターの横の部屋を選択した。

「はいこれ鍵。じゃあ一〇分後にね」

「ああ」

“ バタンッ ”

俺は朝倉と共に部屋に入った。

室内はこれまたホテルのようになっていて、ソファとテレビ、小さな冷蔵庫、ベッドが二つあった。

「ふっ」

荷物を床に置いて、俺は一息吐いた。

「今日はもう滑りに行けないね」

朝倉が荷物を整理しながら言った。

「もうすぐ三時だもんな」

言いながら俺はベッドに腰を降ろした。早起きをした所為か？瞬間鈍い眠気に襲われた。

（ダメだダメだ！）

首を左右に振り、目元を何度か擦り何とか襲ってきた睡魔を振り払おうとした。気を紛らわせようと朝倉を確認すると彼女は丁度コートを脱ぎようとしていた。

「朝倉もこっちに来て座ったら」

「うん」

言いながら朝倉はコートをクローゼットに掛けて俺の横に腰を降ろした。

「あれ？その服…」

何となく見覚えのある彼女の服。

「今頃気付いたの？」

前に俺のウチで姉キを交えて鍋をした時に姉キがあげた服だった。

「だって、今までコート着てたから」

「あのコートもお姉さんに頂いたものよ」

「そうだったのか？コートは初めて見たからさ」

「そうなんだ」

「ふーん」

「なっなに…？」

「あ！ごめん」

家に吊ってあったのは見ていたが、実際に誰かが着ているのを初めて見て、それを着ているのが朝倉だったので思わずまじまじと見てしまった。

「…その、可愛いなあと思って…」

「…………ツ」

正直に思ったことを言った俺。

驚きにも似た表情を見せる朝倉。

「あっありがとう…」

照れた様に俯いてしまった朝倉。

「どうした？」

「…その…初めて言われた気がするから…」

まだ俯いたまま言う朝倉。

「え？なにが？」

「可愛いって…」

「え！そうだっけ…？」

改めて言われて俺も恥かしくなった。

「柊君…」

「朝倉…」

彼女を抱きしめると朝倉も順じて俺を抱きしめてくる。そして同時に唇を求め合う…。

思えば自分の母親がデザインした服を纏った女性を抱きしめ、キスしてる今の状況が妙な気分させる。

「朝倉…俺…」

キスを止め、背中に回していた右手を彼女の胸にそっと重ねた。

「んっ…ダメよ…」

吐息混じりに拒否する朝倉。

「どうして？」

「だって、すぐにロビーに行かなきゃ…」

「あっ…そっか」

「今は我慢して…私も我慢するから…」

「朝倉…」

「んっ」

朝倉の方からそっと唇を重ねてきた…。

少し二人休んでからロビーに下りた。

#二二二 久しぶりの談笑

「あつ来たわね。えっと…」

俺と朝倉がロビーに下りて行くと、既に全員揃っていた。

「一応この後三時からスキーの半日券が買えるんだけど、今日は行きたい人は行くなって事で良い？」

月島が話し始めた。

「で、夕食はどうする？六時半から八時までは食堂でバイキングがあるんだけど、どうする？皆で揃って食べる？それとも各自が好きな時に行く？」

「じゃあ、今日は皆で食おうぜ」

「良いね」

恩田の提案に皆賛成した。

「じゃあ、七時頃で良いわね。それまで自由行動って事で良い？」

「オッケ」

「じゃあ、七時にまたここでね」

「了解」

こうして皆それぞれ行動し始めた。朝倉は水野と過ごすというので俺は伴城と外へ出た。

「うゝ寒むゝ」

外に出ると痛いぐらいの寒風が容赦なく襲い掛かってきた！

スキーに来てるのに、こうしてスキー場に行かずウロウロしてるのも何かおかしい話だが…。

「なんかお前とこうすんのってすげえ久しぶりだな」

突然トモが言った。

「何だよ！気持ち悪いなッ」

俺はマジでそう思った。

「いやー、なんかそう思ったからよ」

「…そう言われると俺がテニス部だった頃はよく二人で遊びに行っ

てたな」

二人で合宿を抜け出し、合宿先の町を徘徊してた事を思い出した。少しそんな昔話をした後。

「なあ、やっぱり朝倉と会えない時って…不安になったりするか？」

トモは急に真面目な顔で訊いてきた。

「んー、不安は無いなあ…寂しいって気はするけど」

そんなトモの顔を見ると、俺も真面目に答えてしまった。

「そっか…俺は今すげえ不安なんだよ…。アイツに他の男が寄って来たらって思うと…」

アイツとは広瀬の事だろう。

「解かるぜその気持ち。でも大丈夫だって、相手を信じろよ。お前がそんな気持ちでいると相手も同じ心配をしてるぞ」

そう言いながらも俺はどうやって広瀬と付き合い始めたのか気になった。

「もう学校終わってる時間だから電話してみろよ。あつても今は部活中か」

「…アイツ、携帯持っていないんだよ…。家が厳しいみたいで」

「そ、そうか…」

今どきの高校生にしては珍しいな。

「テニスも本当は反対されてるらしいんだ。二年である程度の成績を残せなかったら辞めて受験に専念しなきゃいけなかったんだって。そしたら全国大会優勝だもんな」

トモは俺の知らない広瀬を知っていた。当たり前の事だが。

そんなトモの話を聞いていると広瀬を支えていたのは伴城かもしれないと思った。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「でさ、あつ。悪りいな俺ばっか喋って…」

「いや、気にすんな」

「ありがとな、なんかスッキリしたよ」

「体はすっかり冷え切ったけどな」

「はははっ」

気が付くと周囲は薄暗くなっていた。何だかんだで1時間以上ウロウロしながら話しをしていた。

「そろそろ戻るか？」

「ああ」

トモの言葉に俺は応じた。

#二二三 疎外

ペンションのロビーに戻ると、休憩スペースの様な場所に数個のソファアが置かれていて、その一角に全員が集まっていた。俺とトモはそれを見付け近寄った。

「あれ！？全員集まってたのか？」

俺はそう言いながら一団の中心を確認した。どうやら全員で人生ゲームをしている様だ。

「おっ柊、帰ってきたのか？」

豊が俺の顔を見ずに言った。

「楽しそうだな…」

俺はゲームをしている全員に向け、僻み混じりに言った。

「ごめん、もう少しで終わるからちょっと待ってて」

月島が言った。

「どうぞごゆっくり…」

かなりの疎外感を味わった。

「俺ら完全に除けもんだな…」

トモも同じ気分なんだろう、小声で俺に言った。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

数十分後、ゲームが終わったようだ。

「結局最初から最後まで麻梨子の独走ね！」

「ミスコンに弁護士、おまけに子沢山だから勝てねーよ」

聴くところによると朝倉の圧勝だった様だ。その会話を聴いて朝倉を見た。

「！」

楽し気に会話をしているが、どこか寂しげな表情をしていた。

「ごめんね二人とも、食事にしましょうか」

月島が俺達に歩み寄りながら言った。

俺はそれをうけて、読んでいた漫画を本棚に直した。

「あっもしかして、拗ねてる？」

（うっ！）

表に出さない様に気を付けていたが、月島に指摘されてしまった！

「最初は豊と二人でやってたんだけど、いつの間にか皆集まってる

…。後で柊君たちもどう？」

無邪気な笑顔の月島を見るとなんだか自分がちっぽけな奴に思えてきた…。

#二二四 終わってほしくないこの一刻

月島たちがゲームの片づけを終えると、俺達は食堂へ移動した。時刻は午後七時を少し過ぎたところだったが食堂は思ったより人が少なかった。しかしバイキングの食材は豊富にあった。

「うまそー」

豊が片っ端から器に料理を放り込んでいった！

「もう！」

それを見て月島が怒る。

「こういう時って性格出るよね」

細川がぼそつと言った。その瞬間細川の横に居た恩田の手が止まった。おそらく恩田も豊みたいな性格の様だ。体育界系のやつは皆そうだと思うけど。

合宿なんかでこういう形式で食事が出されると“無くなる前に食う！”が鉄則のため、壮絶な争いになる！食べるというより奪う光景が俺が居た頃のテニス部の合宿でも繰り返された…。

皆それぞれ自分の好きな料理を皿に盛って席に着いた。豊の皿は大盛りだった。

「あんたそれ全部食べれるの？」

月島のツツコミ。

「んー、大丈夫だろ」

言って笑顔で両手を合わせると、

「いただきます」

マイペースで食べ始める豊。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

一通り食事を終わるとその場で全員で談笑が始まった。時間内なら出入りが自由な食堂は他の宿泊客が入れ替わりで利用しているが、

俺達はずっと居座る形になっていた。

話の内容は先刻までやっていた人生ゲームの話から学校での話。ついに最後には高校三年間を振り返る思い出話にまで及んだ。

しかし午後九時。食堂の開き時間が終わってしまい終わらない談笑は無理やりという形で幕を閉じた。

実を言うと食事を始めた最初の頃は除け者にされたという気分が拭えずにいた（特にその人生ゲームの話で盛り上がっている時）が、気が付くとわだかまりは消えうせていた。

出来る事ならこのままこの夜が明けないで欲しいとさえ思うようになっていた。

しかし無常にも時は進んでいく…。

こうして始まった卒業旅行もあっという間に終わりの瞬間をむかえることになるのは解かっていた。

でも、出来るなら永遠にこのメンバーで馬鹿騒ぎして居たかった…。

#二二五 素直な感情

「あー、楽しい食事だったわね」

「よく次から次に話が出てきたよな」

離れになっっている食堂からの帰り道、皆まだ思い思いに話をして
いる。

そんななか朝倉の目を気にしながら水野が、

「今日はごめんね、麻梨子取っちゃって」

俺に話しかけてきた。

「え！ああ…」

「たぶん今日一日柊君と逢えなくて、麻梨子すごく寂しかったと思
うよ」

そういえば食事中時折朝倉の表情が切なげに見える事があった…。

「柊君、これは私にはどうしようもないから…」

「ああ…わかった」

他の者には解からない朝倉の変化。長年の親友である水野だから
見抜けていたのだろう。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「～ということで、じゃ明日九時にロビーに集合ね」

月島が明日の予定を言うのと、それぞれ自室に引き上げていった。

俺と朝倉、豊と月島、恩田と細川はエレベーターから出ると、

「じゃあ」

皆、部屋に入ってしまった。

俺も朝倉と共に部屋に入った。

“バタンッ”

部屋に入ると同時にどちらともなく抱き合い、唇を求め合う！
抱き合い、もつれ合いながらも口づけは止めず、息を荒げながら

必死に互いの唇を求め合いながら部屋の奥へと進入していく。

寝室にたどり着くとそのまま抱き合いながら二人ともベッドに倒れ込んだ。

そしてようやく口づけを止めると、

「はぁはぁ…、今日一日…ずっと寂しかったの」

朝倉が切なげな表情で言った。

「俺もずっと…逢いたかった…」

俺も本心からそう言って、また唇を求め合った。

今日一日、昼間、夕食時、ずっと朝倉の事を考えていた。逢おうと思えばいつでも逢えるのに、ずっと不安だった。トモとそんな事を話していたからだろうか？解からないがずっと不安な気持ちに支配されていた。

夕食前ロビーで彼女の顔を見た瞬間、思わず彼女に抱き付きそうな感情に駆られた！今は余計に感情が高ぶってしまふ。

今の朝倉を見て、彼女も同じ気持ちだったんだと解かった。

キスを止め、横になったまま彼女を抱き寄せた。彼女はそれに素直に体を預けてくれた。

「愛してるよ朝倉…明日は絶対に離さないから…」

「ひい…らぎ…君？」

少し不思議そうに俺の名を呼んだ。

「ハハ…なんか俺…今日おかしいな」

「ううん。私も…美夏には悪いけど、ずっとあなたの事ばかりを考えてたの…」

三度目の口づけ。

「絶対…離さないでね…」

「ああ…」

思いつき朝倉を抱きしめたい！彼女の体温を感じる…。

#二二六 バスルーム

「朝倉…」

「うん…」

彼女の上着をゆっくりと脱がせた。

「風呂…どうする？」

「………」

俺が訊ねると、朝倉は思案した。

「…一緒に入ろ」

「当たり前じゃん」

本当は風呂なんかパスして即には彼女を抱きたかったが、最低限のエチケットは…と思い言った。

「一瞬でも…」

「え？」

風呂の準備をしようとしたその場を離れようとした時、彼女が口を開いた。

「一瞬でも離れたくない…」

その言葉を聞いた瞬間、俺は彼女の腕を掴んで、

「じゃあ…」

彼女の手を引いて浴室に移動した。

想像していたより豪華な客室ではあったが、バスルームはいたってシンプルだった。

トイレと一緒にになったユニットバスで、バスタブも一人が入るのがやっとという大きさ。

（無理矢理入れば何とか二人で入れるか…）

「このまま入る？」

朝倉に訊ねると、彼女は無言で頷いた。

お湯の蛇口を捻りバスタブに湯を張りながら彼女の残りの衣服を脱がせた。

ブラを取った瞬間思わず彼女の片丘にむしゃぶりつく様に吸い付いた！

「あぁっ！」

昼間未遂に終わった欲求がついに爆発した。

「まっ待って！」

彼女の制止する声を見捨て夢中で彼女の美丘の先端を吸った！

「んっ！もうっ！」

まるで腹を空かせた赤子の様に休めることなく吸う俺。静止しようとする朝倉だが次第に快感が勝ってきたのか？引き離そうとして俺の頭に置いていた彼女の両手がぐちゃぐちゃと頭部を擦り始めた。「あと…で好きなだけさせてあげるッから。あッお湯！溢れちゃう！」

最後にいやらしく舌を這わせて一旦彼女の乳房から離れた。

「ハアッハアッ…もう！」

息を乱しながら怒る朝倉。

「我慢できないんだよ」

言って俺は自分のズボンを下ろし、いきり立った欲棒を見せ付けた！

それをしっかりと見据えながら、彼女は蛇口を閉めてから自分のショーツを脱ぐと、

「来て…」

先にバスタブに入り言った。

俺もシャツを脱いで彼女に続いてバスタブに足を踏み入れた。

「そこに座って…」

朝倉が水が飛ばない様にするビニール製のカーテンを閉め、言った。

俺は彼女に言われるままバスタブの縁に腰を下ろした。すると朝倉は俺の頭上の棚から使い捨ての小さな石鹸を取ると、それを浴槽に浸け、両手で泡立てていった。

十分な泡が彼女の両手を覆ったところで、するりと石鹸を湯船に

落とした。

そして泡まみれの両手をそっと俺の首に当てた。

「朝倉…？」

「私に洗わせて…」

そのままの体勢で彼女がキスしてくれた。それだけで俺は果てそうになってしまう。

#二二七 泡

朝倉はキスしたまま俺の首にあてていた両手を背中に回し、擦り始めた。

「んっ」

懸命に俺の体を洗ってくれる朝倉を我慢できず抱きしめた。

その勢いで俺の体が壁に当たり、もたれる格好になった。それでも彼女はキスを止めず、懸命に両手を動かしている。

「ほえもあらっへあへる（俺も洗ってあげる）」

彼女のキスを受けながら俺は言った。でも何を言いたいのが伝わってないだろう…。

俺は自分に付着している泡を拭い取り、彼女の背中を洗い始めた。しかし少量の泡しか掬えていないため、すぐに泡が足りなくなった。

「ひゃッ！」

俺は渾身の力を込めて、朝倉を持ち上げると自分の膝の上に座らせた。そのショックでずっと付けていたままだった唇が離れた。

「なッなに？」

突然の出来事に朝倉は理解出来ていないようだ。

「だから俺も洗ってあげるって」

数センチの距離にある朝倉の表情が少し恥かしそうに見えた。

挿入こそしていなが、対面座位の格好の二人。

膨張した欲棒が彼女の下腹部に触れているのが解かる。

「…：辛いならいつでも入れて…：良いよ」

「…：なにを？」

朝倉が言おうとしている事は即に解かったが、ワザと言った。

すると朝倉は俺の背中に回していた右手を、自分と俺の間に滑り

込ませ、

「これ…」

言った。

「あおッ！」

刹那、何もしなくても暴発しそうな感覚をさらなる快感が俺を襲った！

朝倉の下腹部と手の間に欲棒を挟む様にして擦り始めたのだ！

「あッ朝倉ッ！」

暴発を必死に堪える俺の表情を見て、彼女の表情が悪戯な笑みに変わった！

恥かしい言葉を彼女に言わせてやろうと思ったのに、一瞬で形勢が逆転してしまった！

「ダメだッ朝倉！」

「何があ？」

完全に悪戯少女の表情で言う朝倉。

「それ以上したら…出るッ」

「1回くらい…平気でしょ…？」

朝倉がそつと俺の耳元で吐息混じりに囁いた！

「このツままで良いのか？」

「ちゃんと洗ってあげるから…」

そう言う朝倉はよりいっそう激しく欲棒を弄び始めた！

上下左右、円を描く様に、起用に右手を擦り、自分の下半身にぐりぐりと押し付ける。

「朝倉ッ！」

果てる瞬間、思いっきり彼女を抱きしめた！

朝倉の掌と下腹部の間で脈打つ欲棒、全身を駆け巡る電気ショックの様な快感…。

夢中で彼女を抱きしめ、精を放った。

「…ごめん」

脱力しながら彼女の耳とに囁いた。

「大丈夫」

俺は抱きしめていた朝倉を解放すると同時にどうなっているのか確認した。

快感に酔い痴れた欲棒は徐々に勢いを失いつつ、朝倉の下腹部は白く泡立っている。

気持ち悪いのか？朝倉は右手をくちゃくちゃさせている。

「手…大丈夫？」

「うん…あなたのだから…」

朝倉のその言葉は気まづかったが、妙な嬉しさを感じてしまった…。

「はっ早く洗おう！」

彼女に膝の上からどいてもらい、湯船から石鹸を拾い上げ彼女に手渡した。

せっかく張った湯を一旦抜き、シャワーで互いに体を洗い合ったあと少し狭い湯船に二人で浸かりながらしばらくじゃれあった。

#二二八 果てない愛情

「うゝクラクラする」

「ちょっとのぼせちゃったね」

「大丈夫か？」

「うん、私は平気」

「タフだな…」

「え？」

キョトンとする朝倉。俺が何を言っているのか解からないようだ。
「なんでもない」

普段一五分ほどしか風呂に入らないのに長湯した所為かそれとも
激しく愛し合ったからか？頭がくらくらする。

「あ、裸のままでもいいじゃん、どうせ即に脱ぐんだから」

下着を着ようとしている朝倉に言った。

「え！？休まなくて大丈夫…その…」

先の俺の言葉と、風呂での行為に心配する朝倉。

「大丈夫！俺まだまだ足りないから」

「だって、三回も…」

「四回だって五回だって、君となら大丈夫。…もしかして朝倉」

「ううん、私だって…その…まだしてないし…」

恥かしそうに言う仕草がたまらなく愛らしい！

「やべっ俺また…」

体を拭くだけでそのまま部屋に移動した。

室内はあらかじめ暖房を点けて置いたので全く寒くない。スキー
場に来ているという事を忘れるほどの室温。

ベッドに腰掛け有線のスイッチを入れた。室内に良く聴くヒット
曲が流れる。

「はい」

言って彼女は部屋に昼間部屋に入る前に買っておいたウーロン茶

を差し出してくれた。

「サンキュー」

彼女から受け取ると同時に、火照った体にそれを流し込んだ。

「おいで…」

ウーロン茶を飲み干して、俺は朝倉を自分の胸に導いた。

そっと近づく朝倉を抱き寄せ、優しくキスした。

ベッドの脇にある有線のボリュームを少し大きめにして鳴らした。たぶん大丈夫だと思うが隣の部屋にこれからの行為の音が漏れない様にした。もし聴こえるならこの有線の音も漏れているだろう。

右隣はエレベーター。左隣は豊たちの部屋。もう俺たちがする事だって判っているだろうし、あいつらも多分今頃は…。

「柊君…早く…」

朝倉が恍惚の表情で言う。

今日一日近くに居ながらまったくコミュニケーションが取れなかった反動か？浴室であれだけ愛し合ったにも関わらず俺も朝倉も激しく求め合った！

隣の部屋の豊と月島に聴こえてもかまわない！ただただ今は朝倉との愛の行為に没頭したかった！

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「あっあんっああっ」

「あさくらあ、俺っ」

「いいよっ私の…中へ」

「！」

求めたのは朝倉だった！

「いいいいのか？」

瞬間、冷静になる俺…。

「うん、あなたが欲しいのっ…お願いっ」

「イクよ、朝倉…」

「うっんっあっあんッ大好きッ愛してる柊君ッ」

俺は思いつきり律動を繰り返し、最後の時をむかえた！

「ああああああ」

初めて彼女の中に全てを注ぎ込んだ！

今までに味わった事のない施行の快感に包まれる。

「朝倉…、大丈夫？」

「う、うん…ごめんね…」

「何で謝るんだよ…」

「愛してる」

「俺も愛してる」

まだ一つになったままでキスする。

俺が彼女から離れると、

「きゃっ！」

「！どうした！」

朝倉の声に驚き、慌てて訊ねた！

「いや、ダメッ！」

素早く秘部を両手で隠す朝倉！

彼女の秘部から二人の白い愛情の雫が流れ出していた。

「ダメ！見ないでッ恥ずかしい！」

本気で恥らう朝倉がすごくカワイイ。

「今さらなに言ってるんだよ」

恥じらい戸惑う朝倉に俺は笑いながら言った。

「でも…シートも汚れちゃうし…」

「しっかり拭いとけば大丈夫だよ、今夜はそちのベッドで寝れば

いいし。さっもう一度一緒にシャワー浴びよう」

後処理をし、疲れた体を夢の中へと投げ込ませた。

#二二九 卒業旅行二日目はじまる・・・

『PURURURURU』 『PURURURURURU』

「うっ…」

突然ベッドの脇にある電話が鳴り出した！

鈍い意識の中、重い体を引きずり受話器を取った。

「ハイ、もしもし？」

エアコンを入れっぱなししていたので喉が痛い！

『おはようございます、モーニングコールです』

受話器から爽やかな女の人の声がした。

（へ？ モーニングコールなんか頼んだっけ？）

しかしどこかで聞いた事のある声…。

『ちゃんと起きてる？ 柊？ 朝倉も一緒でしょ？』

急に変わった口調で寝ぼけていた頭が覚めた！

「せっ先生！？」

『お、起きたか？ もうすぐ七時よ。朝食奢ってあげるから、八時にロビーに下りてきなさい、わかった？』

完全に教師の口調に変わった…。

「ハ…ハイ、わかりました…」

“ガチャッ”

「おはよう…何純ちゃん？」

眠そうな目を擦りながら朝倉が言った。どうやら目が覚めてしまったようだ。

「おはよう。先生がモーニングコールして来た…」

「あ…そういえば、昨日由実が来るって言ってたわっ！」

そう言う起き抜けの朝倉の表情がたまらなくなり、キスしてしまった！

「んっ…」

「……………」

「…ごめん」

「ううん」

怒られるかと思ったが、朝倉は笑顔で言ってくれた。その表情を見てると自分からしたのに恥ずかしくなった。

「…それで純ちゃんなんて言ってたの？」

「ああ、朝食奢ってやるから、八時にロビー降りて来いって」

「先生に奢ってもらうのって不思議な感じね…」

「そうだな…」

眠い目を擦りながら時計を見ると、デジタルは7…03の表示。寝癖でボサボサの頭を何とかしないと思ひ、

「俺、シャワー浴びてくるよ」

と言うと、

「あっ私も入る」

朝倉が慌てて体を起こしながら言った。
こうして二人で浴室へと移動した。

卒業スキー旅行二日目が始まる。

#二三〇 期待感！

「あー写真？とっくに出来てるよ。ああ、お前らの写ったのもちゃんとあるよ。：うん、じゃあ明日な」

卒業スキー旅行から帰ってきて早五日。豊からお互い撮った写真を交換しようという電話があった。

「ってか明日はバレンタインデーじゃん…早いなあ…」

ふと壁のカレンダーを見て一人呟いた。去年までは特に欲しいと思わなかったチョコだが、今年は貰いたい！と強く思う。もちろん朝倉から。

「つーか、くれるのか？もうチョコとか省かれそうな気もするなあ…」

『ピーピラッ』

と、独り言を言っていると携帯が鳴り出した！

（朝倉！）

「はいはい」

『…どうしたの？変なテンションで…』

ちようど掛かってきた朝倉からの電話が嬉しくて、つついハイテンションになってしまったが朝倉はそんな俺に完全に引いている…。しかも変なテンションって言われた…。

「んんっ…で、どうした？」

咳払いをして声を整えた。

『明日…暇？』

俄然チョコの期待が膨らむ朝倉の言葉…！

「明日は豊がスキーの写真を取りに来るだけだから、暇あったら暇だけど。あ、朝倉も来たら？」

『由実も来るの？』

「さあ？聞いてないけど豊が来るんだから一緒に来るんじゃないか」
『じゃあ行くわ。私も写真渡したいし』

「オツケー、じゃあ明日昼頃俺んちに来てよ」

『うん、わかった』

「あ、今から逢えない？」

『…ごめんなさい、今日は色々用事があるの…』

「そう…」

『…私もあなたに逢いたいよ』

（キュンとなる言葉）

「わかった、じゃあ明日」

『うん…』

後ろ髪引かれる思いで電話を切った…。この寂しさは明日思いきり晴らしてやる！

（そういえば、何の用の電話だったんだ？明日のチョコの話だったんだろうか？）

そう考えると朝倉からの電話で現実味を帯びてきた。

#二三一 物思いにふけながら：

（もう二月一三日なんだな…）

もう一度カレンダーを確認した。

そういえば卒業まで半月を切っている事に気付き、なんだか余計に寂しさが増した。

そんな気分を抱えながら俺は明日のために写真を整理し始めた。

スキー旅行二日目は、まず純子先生に朝食をゴチになって、そのまま先生を含めてスキーに行った。

プライベートの純子先生は学校にいる時の先生とは全く違って、かなり気さくだった。（学校での先生も先生とは思えないほど気さくだが）まるで、同じ歳、あるいは一つ二つ上の女友達のような感覚だった。こんなに違和感なく俺たちの輪に溶け込めるんだ！と思った。あんな先生は他に居ないだろうと思う。

そんな純子先生に対して元から“純子ちゃん信者”だった豊は終始デレデレで、そんな豊に対して恋人である月島は終始不機嫌だったが…。

ともかく俺たちにとって、高校最後の思い出旅行は最高のものになった。

旅行から帰ってきてからは毎日の様に朝倉と一緒に過ごしていたが、今日は逢えない…。

「ふう…こんなもんか…」

写真データが並ぶパソコンの画面から目を離して一息ついた。

デジカメを持っていない俺は、わざわざ姉キに頭を下げてカメラを借りることに成功した。そんなカメラだから最初は気を使って使っていたが…。

そんなこんなで調子に乗って撮った写真は一〇〇枚以上。現像するのが億劫になり、豊にはデータで渡すことにした。

撮写真の八割以上が朝倉を撮ったもの。思えば普段カメラなんか持ち歩かないため、ここぞとばかり朝倉を撮った。

最初は恥かしがってなかなか撮らせてくれなかったが、次第に慣れてきたのか？抵抗なく撮らせてくれるようになった。

「…四時か…」

姉キの部屋の窓から差し込む夕日に誘われて、外を見た。

もうすぐ終わってしまう高校生活を少し思い重ねながら、その夕日を見送った。

「さて、これをCDに…っと」

慣れない作業のため、肩こりを感じながら明日の準備を終わらせた。

#二三二 バレンタイン前夜の懺悔

『チャーチャチャチャー』

夜になって携帯が鳴りだし、メールを受信した。発信者は舞衣からだ！

“先輩、明日会えますか？もし良かったら連絡ください”

短い文章だが、舞衣からの連絡は本当に久しぶりだった。クリスマスイブのあの日以来…。

早く舞衣には会わなければならないと思っていた。これは俺の勝手な思い。卒業までに舞衣に償わなければならないと。

（明日言おう！舞衣にも朝倉にも…）

俺は一人心に決意し、携帯の返信ボタンを押した。

“良いよ、夕方になるけどそれで良いか？”

俺も短い文章で返信した。

少しして舞衣からの返事が返って来た。

“私は明日も学校なのでその方が良いです。また連絡します。ありがとうございます”

（ありがとうございます…か）

明日、俺の言葉で舞衣がどんな気持ちになるのか？それを考えるとどうしようもない感情が俺の脳を支配した。

そして朝倉…。

事ある毎に舞衣に俺と朝倉の事を告げなければならないと思うながら、ここまで引きずり続けている…。

自分ひとりで決められない弱さから朝倉に相談してしまう。そして彼女も困らせてしまう。

この悪循環をもう振りほどかなければならない！

明日朝倉に告げ、舞衣にこれまでの事を告げる！

たとえ朝倉が反対しても…。

朝倉にとってもすごく辛い状況になる事は俺自身十分解かってい

る。それでも彼女の辛さを俺が何とかしてやる！

そういう覚悟がなければならぬ！と自分に言い聞かせた。

数時間前の浮かれた気分から一八〇度違う今の気分。

しかしこれが俺が朝倉と舞衣にしてきた事への仕打ちだと認識している。

その俺の仕打ちでまた二人を苦しめてしまう…。

眠りに就くまでの日常の動作の中、その考えがずっと頭を巡り、逃げ出してしまいたい衝動を必死に抑える。

様々な考えが頭を巡り、寝付けない夜が更けていく…。

#二二三 ニブイ男

『ぴゅぴゅららら〜ぴゅ〜』

「!」

突然の携帯の着信音で目が覚めた!意識がなかったところをみると、どうやら寝付いていたようだ!

「もしもし?」

『あと三分くらいで着くぞ!ロック開けてくれえ』

豊からだ。

「着いたらチャイム押してくれ:」

『OK』

何時に寝てしまったのだろうか?時計が午前五時を指していた時はまだ起きていたのに:。今の時刻は午前十一時二一分。

「:よっ」

ベッドから体を起こすと意外と軽かった!

(結構寝れたみたいだな)

そんな事を考えながら洗面所に移動した。

『ピンポーン』

顔を洗っているとチャイムが鳴った。途中だったので終わるまで放っておいた。

“ガチャ”

「おじゃましまーす」

「あれ?お前一人か?」

「おう、どうしたんだ?」

「いや、月島と一緒に来るかと思って:」

「あー、呼べば良かったか?」

「:俺に聞くなよ」

「呼ぶか?」

「だから俺に聞くなって。呼ぶなら呼べよ」

「そうするか」

言って豊は自分の携帯を取り出した。

・
・
・
・
・
・
・
・

「……………うん、じゃあ待ってるから」

「来るって？」

「おう…でも最近由実のやつなんか機嫌悪いんだよ…」

豊の言葉に俺は思い当たるフシがあった。でもそれを俺が指摘するべきではないと思った。これは豊自信が気が付かないとまらない事だと思ったから。

「なんでだろ？」

また俺に訊ねる。

俺が指摘する事ではないが、あまりに鈍すぎるこの男に、

「…お前が謝れば良いんだよ」

俺はボソツと呟くように言ってやった。

「はあ？何で俺が謝るんだよ？俺なんにもしてないぞ！」

やっぱりコイツは全く気付いていない。

「なんだよ？お前何か知ってるのか？」

さらに俺に問い詰める豊。やっぱり言うべきではなかった。

「…スキーに行った皆が知ってるよ…」

仕方なく言った。

「はあ？」

「おまえ自身が気付かないと月島は許してくれないぞ」

「……………」

まだ完全に理解していない様子の豊。ほとんど指摘してしまったも同然になってしまった。

#二三四 バレンタイン狂想曲

『ピンポン』

少しして呼び鈴がなった。

「！由実？早いな…」

豊は月島だと思ったようだが、ドアモニターに映ったのは朝倉だった。

俺はロックを解除し、彼女を迎え入れた。

「おじゃましてーす」

「あっ！朝倉」

部屋に入ってきた朝倉に豊が言った。

「あれ？由実は？」

室内を見渡しながら朝倉が言った

「後で来るって」

「ふーん…じゃあ、今のうちに渡しておこうかな…」

そう言って朝倉は持っていた小さな紙袋から包みを取り出した。

（！）

その包みを観た瞬間、俺は中身が何なのか即に解かった！

「ハイこれ、佐久野君に」

「え、何？」

朝倉から包みを受け取った豊。

「チョコレート、今日はバレンタインだから」

「マジ！俺にくれるの！そっか、今日はバレンタインかぁ」

「あ…」

「なんだろ柊いヤキモチ妬くなよ、どうせ貰えるんだろ。ありがとう朝倉」

「うん」

思いもしなかったであろう朝倉からのチョコレートにデレデレと満面の笑みを浮かべる豊。それを見て嬉しそうにしている朝倉。

俺が言った『あ…』はヤキモチではなく、今の月島との状態で他の女の子からチョコを貰っても大丈夫か？という事への危惧の『あ…』だったのだが。まあ多少はヤキモチというか、モヤモヤしたものは感じるが…。

「おい豊、それ月島に見付かるなよ！」

「えっ！？由実ってまだ怒ってるの？まずいかなあ…」
俺の後に朝倉が言った。

「何だよ？朝倉も由実が不機嫌な理由知ってんのか？」

「コイツ…気付いてないんだよ」

「ウソ…」

朝倉はマジで心配そうな表情をしている。

「何だよ一体？」

「自分で気付いた方が良いんだよ」

「そうね…。やっぱりそのチョコ返してもらった方が良いかな？」

「何でだよ！大丈夫だよ、他の女からならともかく、朝倉から貰ったって言えば」

「そっそうかなあ…」

「そんな顔で言うと、朝倉からって言っても怒らせるぞ…」

俺も本気で月島と豊の事が心配になってきた。二人の心配というより豊の心配だが…。

#二三五 バレンタイン狂想曲2

「私も写真持ってきたよ」

言って、朝倉はさっきの紙袋から簡易アルバムを取り出して袋を畳んでしまった！

「えー！！」

朝倉のその行為に思わず声を発してしまった俺。

袋を畳んでしまったという事は、もう袋の中には何も入っていないという事になる。

「どうしたの？」

キョトンとなる朝倉。

「いや…俺の分は？…チヨコ…」

「えっ？無いわよ」

「うそ…？」

当たり前の様に言い放つ朝倉。俺は一気に落胆した。

「くくくくく…」

そんな俺を見て笑ってやがる豊！

「だって今更他人行儀じゃない？そんなのって。実は佐久野君にあげたのは来る時にコンビニで買ったものだし」

「え、そうなの？でも貰えないより全然良いから」

朝倉から貰った包みをこれ見ようがしに振りながら言う豊。

（このヤロー！なに嬉しそうに言ってるんだ）

『ピンポンン』

その時また呼び鈴が鳴った。俺は豊に憤りを感じながら、呼び鈴を鳴らした月島を迎え入れた。

「月島が来たぞ！その包み隠せよ！」

このまま能天気なバカ男の悲劇を見ていたかったが、長年の友人として忠告した。

「何でだよ？別に良いじゃん、朝倉から貰ったんやつなんだから。」

なあ？朝倉」

「んー…私もそのままでは由実に会うのはやめた方がいいと思うけど…」

「朝倉まで何だよ！」

「ともかく、そのバカみたいなニヤケ顔をやめろ！」

「何だよ！バカみたいって」

『ピンポーン』

今度は玄関の呼び鈴が鳴った。

「ほら来たぞ！これ以上月島を怒らせたくないからその顔やめろ！」

言いながら俺は玄関に月島を迎えに行った。

#二三六 バレンタイン狂想曲3

「いらっしゃい」

そう言って俺は月島を家に迎え入れた。

「こんにちは柊君。今日も寒いわね」

「ああ、俺今日はまだ外に出てないから」

「家の中は暖かいわ。お邪魔します」

言いながら月島は皆が居るリビングに足を踏み入れた。

「あれ？麻梨子来てたの」

「うん」

「そりゃそうね」

「あら？」

月島の目線が豊の手の包みで止まった！あのバカ隠さずにまだ持ってたのか。

「それなに？」

「ああ、朝倉からバレンタインのチョコ」

「あっそっ。麻梨子から貰ったんなら、私のはもう要らないわね」

「え！」

想像していた状態が実際に目のまで起こった…。

「これは義理で…本命のお前から貰うのが一番嬉しいに決まってんだろ！」

ようやく自分の立場が理解出来たのか？豊は慌てて弁明し始めた。

「ふーん、本当にそう思ってる？」

「思ってる思ってる」

「麻梨子、あんなこと言ってるよ」

「え？ハハハ…」

突然この雰囲気飲み込まれた朝倉が困惑する。かなり険悪なムードだ！

「まっまっ、今はそんな事いいじゃないかつ。月島寒かっただろ、

なにか暖かいものでも入れるけど、コーヒーか紅茶、ココアもあるけど何がいい？」

このまま放っておくと余計話がこじれるような気がした俺は何とかこの雰囲気壊せないかと思いつた。

「えっ！ああ、ごめんなさい。じゃあ：ココアで」

「オッケー、豊は？」

「あっ！俺はコーヒー」

「分かった、ちょっと待ってな」

「あっ私も手伝うわ」

言って俺に続いて朝倉もキッチンへやって来た。

「ふゝ：やっぱりこうなったか：」

キッチンに着くと同時に、豊たちに聞こえない様に言った。

「由実、相当怒ってるわね」

朝倉も小声で言った。

「まあ、月島があんな事言い出したくらいだからな：」

「そうよね、あれにはさすがにビックリしたわ」

「それだけ豊を好きなんだろうな：」

「・・・・・・」

「ん、どうした？」

「：同じ状況だったら、私も由実みたいに嫉妬するかな：って」

「バカ：俺が他の女になびくと思ってんかよ：」

言いながら自分の胸に何かが突き刺さる感覚を覚えた。

「ごめんなさい」

「良いんだよ」

ここで彼女を抱きしめたかったが、豊たちが居るのでさすがに出来なかった。

あの二人は無言でリビングのテーブルに向かい合って座っている。

「はっ早く戻らないとな」

「そうね：」

丁度ヤカンが沸騰し始めたので、二人で手早くココアとコーヒー

を淹れてリビングに戻った。

#二三七 バレンタインの宴

「お待たせ」

言って俺は四人分のカップをテーブルに並べた。

「よっと」

俺は豊の横に、朝倉は月島の横に座った。

「砂糖とかはそこにあるから適当に入れてくれ」

「おう」

なんとか雰囲気は和みつつあるようだ。

「じゃあ、柊君にこれあげる」

「え！」

言って月島は俺に包みを手渡してきた。

「これって…」

「バレンタインだから。ごめんね麻梨子」

「ううん、私も佐久野君にあげたし」

そんな朝倉を確認しつつ俺は、

「ありがとう…。これ結構高そうだぞ…」

言った。

「気にしないで、もとは豊用に買ってきた物だから」

「！ッおい、それはなんでも…」

「ふふ、冗談よ。豊のはちゃんとあるわよ」

慌てる俺をよそに月島はもう一つ包みを取り出した。

「ハイッ」

「あ、ありがとう…」

さすがに俺が貰ったのより豪華な包みだ。

「ホワイトデー楽しみにしてろよ！」

月島からのチョコプレートで息を吹き返した豊。まあ、この状態だったら大丈夫だろ。

「じゃあこれ、みんなで食うか。お茶菓子に…いいか？」

「うん、もちろん」

俺が言うと、月島はニッコリして言った。
何とか和んだか…。

・
・
・
・
・
・
・
・

月島から貰ったチョコレートに舌鼓を打ちながら、本題に入った。

「今日は写真交換のために集まったんだぜ」

豊が言った。まあ写真交換するのは皆が集まるための口実なんだが。

「ちゃんとプリントアウトしてきたよ」

言って朝倉がポケットアルバムを取り出した。

「やっぱ写真は見なきゃ始まらないもんな」

そう言って豊も自分の鞆からアルバムを取り出した。

「私はこれ」

言って月島はデジタルフォトフレームを取り出した。

「それって結構高いよね」

「そうね、でもこれは安いモデルだから。これと同じデータをそれぞれ持ってきてるから」

「お前は？」

「え！」

皆直ぐに見れるように持ってきているが、俺はCDに焼いただけ…。

「いや：俺はプリントアウトしてないんだけど…」

「何だよ！見れないと意味ないだろ」

豊に説教されてる…。

「柊君のメモリーカードって何？」

「え？SDだけど」

「じゃあ、これに差して見れるよ」

「丁度良いじゃん！」

（う！）

メモリーの中身は全く整理してなくてそのまま月島に任せると、調子に乗って撮った朝倉の写真が…。

「ああ：メモリーの中身全部パソコンに移したから、全部、消したんだよッ」

慌てて思い付きのまま言い訳をした！

「そうなの？」

でも効果はあったようだ。

「そうだ！もう一回SDカードに移して来るから、ちょっと待っててくれれば」

「そう？」

「なんならもう一杯ココアでも飲んでて…。ごめん朝倉！」

「え！」

「皆にもう一杯淹れてもらえるかな？」

「あ、うん、わかった」

月島たちは朝倉に任せて、俺はパソコンのある姉キの部屋に直行した！

#二三八 バレンタインの宴終了

「あぶねー、こんな写真見せられるわけがない！」

パソコンの画面に並ぶ朝倉の裸の写真を見ながら呟いた。

本当にあの時のテンションだけで撮ってしまったが、今は後悔している…。

朝倉は先刻のやりとりをどんな心境で見ていたんだろうか…？

（あの時は朝倉もどうかしてたんだろうな、ってか写真撮ってたの覚えてるのか？）

そんな事を思いながら、SDカードの写真を消去し始めた。

途中、ちよっとムラムラしていた自分が恥かしい。

（よし、これで皆に見せられるな）

俺は素早くリビングに戻った。

「お、戻って来たな」

「悪いな…」

チラッと朝倉を見たが彼女はいたって平然としている。

（まさか、気にしてないのか？）

「じゃ仕切りのおして。豊、あんたからね」

「おう」

待ってましたとばかりに豊が自分のポケットアルバムを取り出した。

・
・
・
・
・
・
・

そんなこんなで二時間後。

「じゃあ、私たちはこれで」

「ああ、またな」

「柊、朝倉またな。それとチョコサンキュー」

「うん、じゃあね」

エレベーターの前で月島と豊を見送った。

別れ際の豊と月島はもう普段どおりの二人に戻っている様だった。本当にもう心配ないだろう。

なんだかんだあったが、四人でスキーの写真を見ながら思い出話に花を咲かせながらワイワイやった楽しい二時間だった。

#二三九 バレンタインの宴の余韻

「ふう…」

豊たちを見送り家に戻って一息吐いた。

「どうしたの？」

「いやあ…なんとかやり過ごしたなあと思って…」

「何が？」

「写真だよ」

「え？」

「え？」

朝倉が何の事？という顔で言ったので、俺も思わず同じ言葉を言っってしまった。

「だから、二日目の夜の…」

「二日目……っあ！」

ようやく思い出した朝倉の表情が一気に赤くなった。

「でも、あれは撮ってないって言ってたじゃない！」

「え！」

（そっそんな事いつてたのか！？）

「本当に撮ってたの！」

「う、うん…わざわざポーズまでとってくれてたし…」

「……………」

黙ってしまった朝倉。その表情には怒りと羞恥心が入り混じっている。

「ごめん…」

「…誰にも見せないよ…ね？」

「当たり前だよ！」

「…じゃあ、良い」

「へ？」

「もう良いよ。撮っちゃったんだし」

「ごめん…直ぐに消すよ」

正直勿体無い気がしているが、仕方ない。

「…別に消さなくていいよ…」

「え！」

「どんなふうに映ってるか…見せて…」

「あ、うん…じゃあ、こっちへ」

俺は朝倉を姉キの部屋に連れて行った。

「散らかってるけど…気にしないで…」

「お姉さんの部屋？」

「うん、散らかってるだろ…」

改めて部屋を見渡すととても他人が入れるような状況じゃない…。
服は脱ぎっぱなし、読んでた雑誌はそのまま…。

俺の部屋も片付いてるとは言えないが、ここまで酷くない…。自分
の姉だと思うと恥ずかしい限りだ。

「勝手に入って怒られない？」

「平気平気…」

言いながら俺はパソコンの電源を入れた。

#二四〇 バカップル

「いい？」

「…うん」

俺は朝倉に確認して、写真の入っているフォルダを開いた。

同時に何百かの写真データのサムネイルが一斉に画面に写し出された。

「先刻の写真は豊たちと一緒に写ったものだけだったから、よかつたら俺たちだけで写ったのを見る？」

「そうね…」

何となくおかしいな雰囲気が二人を包む…。

俺はドキドキしながら最初の写真を表示させた。

「あ…」

最初の写真は俺たちが泊まった部屋の写真。

そしてそこで笑顔で写っている朝倉の写真が続いた。

「これ、部屋に着いた直後のだよ」

「そうね」

写真は撮った順に表示されていく。しばらく写真を見ながら思い出話をした。

・
・
・
・
・
・
・
・

「そろそろなんだけど…」

「…うん」

問題の写真が画面に写し出された。

「…ごめん…」

瞬間、思わず謝ってしまう…。

「…思ったより普通に撮れてるのね…」

「へ？」

「ううん…ヌードモデルの人ってこんな感じなのかな？って…」

「ああ…」

「柊君も…一人のときはお世話になるの？」

「は？」

「その…こういう写真に…」

恥かしそうに言う朝倉。その朝倉の言葉が何を意味しているのか解かった瞬間、俺は驚きを隠せなかった。

「バツ！バカ言うなよ、今はそんな本に世話になってないよ。…君に悪いよ…」

「嬉しい…」

「そりゃあ…君と付き合う前は、俺だって男だから…」

何を口走ってるんだ俺は！

「これからは…」

「？」

「一人で寂しい時は…この写真を使ってね…」

「！……」

（俺と付き合う前は絶対こんな事言うような子じゃなかったよな…）

「朝倉…」

彼女の顔を見ながら言った。朝倉は目線を反らし俯いている。

でも、妙にその言葉に幸福感を感じてしまった。

「ねえ…こっち向いてよ」

「ちよっと…今は恥かしいの…」

あんな事を言って、しかも目の前のパソコンの画面にはデカデカと自分のヌード写真が写っている今の状況では当たり前か…。この状況で平然としていられるのはおかしな奴か？

「でも、俺は君の顔がみたいの」

言って俺は朝倉の顔を覗き込んだ。

「ッ！」

と、同時に朝倉の頬に軽くキスした。

「好きだよ…」

そつと彼女の耳に吐息交じりに囁く。

「卑怯だよ…」

「卑怯でもいいの」

言いながら、俺はパソコンの電源を落とした。

#二四一 待っている間・・・

「っんん・・・」

「朝倉・・・」

パソコンの画面に写っていたのは動かない朝倉。今、俺の目の前には本物の朝倉が居る。

隣に座っていた朝倉を抱き寄せた。

「俺の部屋に行こ・・・」

やわらかい朝倉の感触を体一杯に感じて、もう我慢できなくなっていた。

「でも、写真・・・」

「え？」

「これ、お姉さんのパソコンなんですよ？」

「え、うん」

「もしかしたら見付かっちゃうかも・・・」

それは俺も解かっていた。姉キが帰ってくる前にパソコンの中のデータは削除するつもりだったが、どうやら朝倉は早急に何とかしてほしい様だ。

「わかった」

「ごめんね・・・」

「良いよ、気にしないで」

そう言って俺は再度パソコンの電源を入れ直した。

「辛いよね・・・」

「へ？」

そう言っていると朝倉はあぐらを掻いている俺の股間に視線を移した。

「ど、どうしたの・・・」

「・・・作業してる間・・・」

「おっおい！」

突然、俺のジーパンのファスナーを下ろしはじめた朝倉！

「ちょっと！」

「少しでも楽に…」

言ってそっと左手で股間をまさぐりはじめた！

先刻まで見ていた朝倉のヌード写真とその後の密着で、半分反応していた欲棒が一気に膨張し始める！

「朝倉ッ」

「気にしないで続けて」

「こんな状態で気にせずにいられるかよ！」

俺の言葉を受けて彼女の手が止まった。

「…そうよね、私…変態ね」

「そんな言い方はよせ！」

「でも…自分でもおかしいって解かってるもの」

「自分でおかしいって解かってるなら、正常だよ」

「でも…私はエッチな女だよ」

「エッチな女の子は大歓迎だよ」

言ってそっとキスした。

「俺だってエッチだから」

「柊君…」

「パパッと済ませるから、それからゆっくりさ」

「うん」

気持ちを切り替えて、俺はデータを写す作業に取り掛かった。

「もう一度SDカードに戻すか…」

普段まったくパソコンなんか触らないため、ぎこちない作業の仕方…。横で朝倉が見ているので恥かしい。

「……っと、これで待つだけだな…ってなんでデータ移動に五分も掛かるんだよ！」

「じゃあ、待ってる間…」

「へー！」

俺に有無を言わず朝倉が股間に顔を近づけた！ファスナーを閉めるのを忘れていた事に気付いた時には、もう俺の欲棒は下着から

出ていた。

「おっおい！」

「大丈夫」

さっきの朝倉の行為からまったく予期していない事ではないが、いざ現実になると戸惑う！

「そのままって…汚いぞ」

「あなたのだから汚くない」

そう言ってやさしく欲棒を口内に含んだ！

#二四二 至極の時間

「オッおい…」

下半身から脳に突き上げる快感。

半反応状態だった欲棒を器用に舌で欲棒を絡める朝倉。その舌技で一気に膨れ上がる。

「んっ」

悩ましく喉を鳴らす朝倉。

もう朝倉の与えてくれる至高の快感に甘えさせてもらう事に…。

「良いのか？もう、抑え利かないぞ」

「うん…」

そう言う朝倉はより一層激しさを増していく。

「はぁ…」

思わず吐息を漏らしてしまった。

朝倉の奉仕は回数を重ねるほど巧くなっている。今のは一瞬でも気を逸らすと即ぐに果ててしまいそうなほど気持ちいい…。今居るのは姉キの部屋。その姉キの部屋を汚してしまわないために俺は必死に堪えている。データ移動が終わるまで…。

でも朝倉はそれまでに俺を果てさせようとしている。このまま快感に身を任せてすっきりしたかったが、妙なプライドがそれを許さなかった。

眼下では懸命に首を動かす朝倉。今朝倉はどんな感情なんだろうか。俺と同じく快感を求めているのだろうか？

思うように身動きが取れない俺は、そっと彼女の髪をなでた。

すると、彼女の首の動きが止まった。でもそれは一瞬で、またより一層の快感を与えてくれるために動き出した。

（すげー幸せ）

大好きな女の子にここまでしてもらえる事が本当に幸せな事だと思った。これからもずっと朝倉とこの幸せを共有したいと強く思っ

た。

『ポンッ』

突然パソコンから電子音が聴こえて来た！データ移動が終了した合図。

「あつ朝倉：終わったから、もう…」

「はだ、ほわっへはいよ（まだ、終わってないよ）」

データ移動が終わったのを期に一旦終わらせようとしたが、朝倉はまだ続けている。

「今はもういいから、続きは俺の部屋でゆっくり…さ…」

「だって、まだ出してないよ…出さないと苦しいでしょ？」

一旦欲棒から口を離して言った。

「大丈夫だよ、それにここ姉キの部屋だから…万が一汚したら…」

「大丈夫、ちゃんと全部受け止めるから」

「え！」

驚く俺を尻目に奉仕を再開させた。同時にまた痺れる様な快感が脳を刺激した。

「……………」

仕方なく俺は朝倉の望みどおり、ここで果てる事にした。

「…ちゃんと受け止めてくれよ…」

「うん…」

俺はパソコンの電源を落とし、快感に身を任せた。

「んんっ」

「ふう…」

「出る…」

「うん…」

言いようのない快感の波が俺の脳を痺れさせる！

思わず彼女の頭を抱え込むように掴んでしまった！

「んんっ」

少し苦しそうに吐息を漏らす朝倉。

「ごっめ…んっ」

そんな朝倉に俺はそれしか言えなかった。

「ハアハアハア…」

激しい脱力感が全身を襲い、後ろに倒れそうになるのを必死で堪えた。

膨張力を失っていく欲棒からゆっくり丁寧に口を離していく朝倉。それを受けて俺は慌ててティッシュに手を伸ばした！

「だっ大丈夫か朝倉！これに出せよ！」

二、三枚手に取ったティッシュを差し出したが、朝倉はそれを受け取らずニッコリしながら、

「ゴクリッ」

喉に流し込んだ。

俺はその光景を見て、彼女を抱きしめ夢中で口内を貪った！

突然の行為に朝倉はびっくりしただろうが、ここまでしてくれた朝倉に俺が咄嗟に出来る事をした！

「きゃっ！」

そのまま朝倉を抱きかかえた。お姫様抱っこだ。

「早く、俺の部屋に行こ！」

言って彼女を抱きかかえ姉キの部屋を出た。

#二四三 冬のひととき

朝倉を抱きかかえたまま俺は一目散に自分の部屋へと向かった。部屋に入り、鍵をかけてキスをする。お姫様抱っこでのキス。傍目に見るとお伽噺に出てくるようなロマンチックなものに見えるだろうか？少なくとも俺の心境はそんなロマンチックなものではなく、性への欲望だけのキス。お伽噺とは大きくかけ離れたもの。

案外白雪姫や眠り姫の王子様だってそんな心情ではなかったかと思ってしまう。

キスを止めると、朝倉は恍惚の表情で俺を見つめてくれた。

そっと彼女をベッドに横たわらせて再度口付けした。

「脱がせて良い？」

俺がそっと訊くと、

「うん：私も脱がせて良い？」

朝倉が訊き返してくる。

「もちろんだよ」

互いに衣服を脱がせ合う。

「ちよっと寒いな」

お互いが下着姿になった時に肌寒さを感じ、慌ててエアコンのスイッチを入れた。

「少ししたら暖まるから、我慢して…」

「うん」

「暖まるまで…」

そう言って俺は朝倉をそっと抱きしめた。

「あったかいよ…柊君」

「俺も…麻梨子…」

「…また…」

「ん？」

「名前で呼んでくれた…」

「嫌か？」

「ううんっ嫌じゃないよ。ただ恥かしいなって…」

「二人きりの時くらい良いじゃないか」

「うん」

体温を分け合いながらキスする。

「シャワー浴びてくるか？」

「ううん。来る時に朝シャンしてきたから大丈夫…あっ！別にこういうつもりで浴びてきたんじゃない」

急に慌てる朝倉。

「くすっ。そんな事思っただけだよ。それにそのつもりで浴びてきても俺は大歓迎だよ」

「もうっ」

「ははは。…今度は俺が君を気持ちよくする番だ」

「え！？やっ！」

先刻の朝倉の口でのご奉仕に応えて、俺も口でご奉仕する事にした。

軽く唇にキスした後彼女の頬にキスして、そのまま首筋へといやらしく舌を這わせていった。

「いやあ…」

もしかしたら気持ち悪いのかもしれないが、俺は止めずにそのまま続けた。

首筋から彼女の左肩へ、そして女の子が恥かしがるわきの下へ。

「いやあ！ダメよ」

やっぱ朝倉も嫌がる。固く閉ざされた脇に下の先端を滑り込ませそこを弄った。

「やっやっ！」

朝倉は恥かしさからかいたいやいやと身をよじらせた。その仕草がたまらなく愛らしくもつとしたくなる。

もっと嫌がる朝倉を見ていたかったが、俺は舌を真横に滑らせた。と同時に彼女のブラジャーをゆっくり剥ぎ取った。

わきに注意がいていたのか？ブラジャーを取られたことに一瞬
気付かなかった朝倉。

完全に露わになる真っ白な双丘が目の前に広がる。

#二四四 覚悟の時

心地良い疲労感が全身を襲う。まるで水面を漂っているようなふわふわした感覚。

思わずこのまま眠りに落ちてしまいそうになるのを必死で堪える。横ではスヤスヤと朝倉が寝息を立てている。

つい数分まで激しく愛し合って、終わったあともベッドで二人でじゃれていたのだがいつの間にか朝倉は眠ってしまった様だ。

俺も彼女に身を寄せて一緒に眠りたかったが、この後の予定がそれを許さなかった。

このあと舞衣と会う約束をしている。そこで俺は朝倉との関係を告げようと思っている。その事をまだ朝倉には伝えていない…。

朝倉と約束した。彼女の心の準備が出来るまで舞衣には告げないという事を。

今夢の中に居る朝倉をわざわざ起こしてまで伝える事ではない。

「ひ…いらぎ…くん」

「！」

朝倉が俺の名前を呼んだので起こしてしまったのか？と彼女を確認したがどうやら寝言の様だ。まるで子供の様なあどけない寝顔の朝倉は今どんな夢を見ているのだろうか？

（四時半か…）

枕元に置いてある目覚まし時計で時刻を確認する。もう学校は終わっている時間だが舞衣は今日も部活だろう。

もう少しこのままで居る事にしたが、いつか寝てしまいそうで怖い。

（それにしても可愛いなあ…）

普段まじまじと見る事が出来ない朝倉の寝顔を思う存分堪能させてもらう。

「ッ！」

不意に彼女が俺の腕に抱きついた！しかし朝倉は眠ったままだ。
俺の腕だと認識してるのだろうか。

・ ・ ・ ・ ・

「：っつと」

何度目かの意識トリップ、時刻は午後五時を過ぎた。

（そろそろ起きないと、姉キが帰ってくるなあ）

罪悪感を感じながら隣の眠り姫を起こす事にした。

「朝倉：朝倉：」

言って軽く彼女の肩を揺すった。

「っん：」

すると朝倉が目を覚ました。

「おはよう」

「え！」

俺が挨拶すると、朝倉は目をぱちくりしながら驚く。

「私、眠ってたの？」

「うん、気持ち良さそうだったからこのまま朝まで起こしたくなかつただけど：もうすぐ姉キが帰ってくるから：」

「あっ！ごめんなさい。何時間くらい寝てたの？」

「一時間も寝てないよ」

慌てて朝倉も目覚まし時計で時刻を確認する。

「やばい！今日の夕飯私の番だわ！」

「え！じゃあ、早く帰らないと」

「今日は舞衣に会うんでしょ」

「うん：」

「じゃあ夕食、一緒にどう？」

「ありがとう」

「うふっ」

「一緒にシャワー浴びるか？それくらいは時間あるだろう？」

「うん」

二人でバスルームに移動した。

#二四五 覚悟の出発

「ドライヤー使う？」

「うん、ありがとう」

「じゃあ、俺先にリビングに行ってるから」

「わかった」

二人で素早くシャワーを浴びて彼女の家に移動しなければならぬ。

舞衣が帰ってくるまでに何とか夕食の形を作りたいそうだ。

「ふう…」

俺は外に出られる用意を終えて、リビングのテーブルに着いた。

「由実からチョコ貰えたね」

リビングに入ってきた朝倉が言った。おそろく豊たちが居た時に開けた包みがまだテーブルの上にそのまま放置してあるのを見て言っただろう。

「違う！俺は君から貰いたかったんだよ。…君のじゃなきゃ意味が無いんだよ…」

俺はこの底からそう思い、言った。

「…嬉しい…」

「え！」

「実は作ってあるの…あなたのためのチョコレート」

思いもしなかった言葉が返ってきた！

「！…なんで言わないんだよ…しかも手作り？」

「だって、本当に今更って思ったの…。私だけが気にしてるんじゃないかって…。私は渡したいって思っても、あなたはどうでも良いんじゃないかって…」

「そんな事思ってるわけじゃないか。俺、昨日からずっと楽しみにしてたんだぞ」

二人とも考えすぎていた様だ。

「…ごめんなさい。…今から貰って…くれる？」

「もちろんだよ」

「ありがとう！」

言って俺の胸に飛び込んできた朝倉。俺はそんな彼女を力強く抱きしめた！

「ずっとこうしていたいけど、そろそろ出なきゃな…」

「そうね…」

家を出る前にこの後のことを朝倉に話しておきたかったが出来なかった…。多分、潜在的に俺自身もまだ逃げていたいのだろう。

「帰りに買い物に行きたいんだけど」

「ああ、分かった」

数時間前の楽しかった出来事を忘れる様に、テーブルの上の物を片付けて家を出た。

#二四六 言えない本当の事

外に出るとまだまだ冷たい冬の風が容赦なく俺と朝倉を襲う。

「買い物ってどこに行くんだ？」

「時間もないし、近くのスーパーよ。どうして？」

「いや、特にどうしたって訳じゃないけどさ。…何作るのかな…って」

本当はそんな事を言いたかったんじゃない！この後舞衣に俺たちの事を話す…という事を言いたかったのだが、言えなかった。

まだ俺が躊躇しているのと、こんな道端という事じゃない気がしたから。

「何食べたい？」

「え？」

「何作るのって訊かれたから、だから何か食べたいのかなって」

「ああ、そうだな…」

特に何か食べたい物は無くて、いざ訊かれると咄嗟に出てこない。最初に思い浮かんだのは親子丼だった…。本当に親子丼が好きなんだなあと自分でも呆れてしまう。

「なにになに？」

朝倉が俺の言葉を心待ちにしている。早く決めなければ！

「オムライス…」

次に頭に浮かんだものをそのまま口にした。

「そんなので良いの？」

「あ、ああ…」

「オムライスかあ…」

「嫌ならほかので良いよ」

「ううん！そうじゃなくて、どんなオムライスにしようかなあって」

「どんなんて、オムライスはオムライス一種類だろ？」

「そんなことないよ、オムライスって色々種類があるんだよ」

「そんなもんかねえ」

俺の中ではオムライスといえば、ケチャップご飯に卵を乗せたものって感じだけど。

「あっ！」

「どうした！？」

突然朝倉が何かを思い出した様だ！

「オムライスっていえば、冬休みに作ってもらったね」

「…っ、そういえばそうだったなあ」

すっかり忘れていた…。

「じゃあ、今度は朝倉の美味しいオムライスを食わせてよ」

「あなたが作ってくれたオムライス、美味しかったよ」

「ありがとう」

朝倉に美味かったと言われると嬉しい。

「オムライスで良いの？」

「ああ」

「じゃあ、ホワイトクリームの蟹風味にしようかな」

「既に名前だけで美味そうなんだけど…」

「ふふふっ」

何だか無性に腹が減ってきた！少し足早にスーパーに向かった。

#二四七 少し幸せな買い物

「卵はまだ残ってるから…」

スーパーに到着すると同時に手際よく買い物始めていく。

この辺はさすがというか、慣れている。そういえばこのスーパー、以前舞衣と一緒に来た所だ。

その時の舞衣の手際の良さにも驚いたが、やっぱり姉妹。後ろから見てみると良く似ている…。

「鶏は、胸肉とも肉どっちが良い？」

「へ？」

突然訊かれた。

「どっちがいいかなあって」

「どっちって…。この前俺が作ったのって…？」

「あれは胸肉だったわ」

「そうだったのか？」

まったく気にしてなかった…。

「どっちが良い？」

「じゃあ、やわらかい方で」

「それじゃあ、もも肉ね」

固い肉より柔らかい肉の方が好きだ。

「マリちゃんじゃない？」

肉を選んでいる朝倉の横からおばさんが話しかけた！

「あ、こんにちは」

朝倉がそのおばさんに挨拶している。どうやら知り合いのようだ。

「マリちゃんも夕飯の買い物？」

「はい」

「いつも大変ねえ」

「いえ、楽しいですよ」

「あら！もしかして彼氏？」

そのお婆さんが朝倉の後ろに居る俺に気付いて言った。

「え！はあ、まあ…」

シドロモドロになる朝倉。

「あらあ、じゃあお婆さん邪魔しちゃったかな？」

「いえ、そんな…」

「いいわねえ、こんな男前」

今度は俺の方を見て言ったので、俺はかるく会釈した。男前と言われて妙に嬉しい…。

「じゃあ、今日は彼氏に手料理を振舞うのね」

「ははは…」

「じゃあお婆さんはここで退散しましょうかね。じゃあマリちゃん」

「あ、はい」

なんだかお婆さんは嬉しそうに俺と朝倉を見て去って行った…。

「誰…？」

「お向かいの吉田さん」

「え！」

「いつもウチって舞衣と二人のことが多いでしょ、だから家の面倒を見てくれてるの」

「へ…」

近所の人に俺と一緒に居るところを見られたのに朝倉は嫌そうにしていない。

・
・
・
・
・
・
・

「由実たち、仲直り出来るかな？」

買い物を終え朝倉の家に行く途中、彼女が言った。

「まあ、今日の様子なら大丈夫だろ」

「そうよね」

「そういえば俺たちって、ケンカらしいケンカしてたことないなあ…」

「…そう言われればそうね…。これから先はどうなるんだろう」

「俺は大丈夫だろうと思うけどね」

「え、どうして？」

「…俺と君なら何があっても乗り越えていけるって自信があるから」
「柊君…」

またクサイ事を言ってしまったのは分かっているが、朝倉は感激してくれている…と思う。

二人で自転車を押しながら、ゆっくり歩いて彼女の家へ向かった。

#二四八 決意の時

「おじゃまします…」

言って、俺は彼女の家に入った。

「先に渡しとこかな…ちよっと待っててね」

俺をリビングに残し、彼女は行ってしまった。

玄関には靴がなかったから舞衣はまだ帰ってきていないということだろう。しかしこうして朝倉の家に来てしまったという事はもう後戻りは出来ない…。その事を考えるとこの場から消えてしまったくなった。

“ガチャッ”

「お待たせ…改めてだけど、受け取ってもらえる？」

言って包みを差し出した朝倉。バレンタインのチョコだ。

「もちろんだよ…」

一度貰えないかもしれないと思った分、余計嬉しく感じる。

その包みを受け取った俺は、

「ごめん…」

「え!？」

いたたまれなくなり、脈略無く言葉を発してしまった。

突然この状況にまったく合わない言葉を発した俺に、朝倉が困惑の表情を浮かべた。

「ごめん…って？」

「いきなりごめん。…俺、今日…舞衣に言おうと思う、君との事を…」

俺のその言葉を聞いた朝倉は少し沈黙した後、

「…そう…。大丈夫、私ももう覚悟は出来てるから」

「…朝倉」

「舞衣がね、昨日あなたにチョコを渡していいかって訊いて来たの…。多分あの子はもう私たちの事に気付いてるんだと思う…」

「だとしても、ちゃんと俺から言うよ。言わなきゃいけないと思うから…」

「うん」

そう言ってくれた朝倉だが、総て納得して同意したわけではないだろう…。これから先の事を考えると完全に同意できるはずがないのだから…。

「とにかく、舞衣が帰ってくるまでに夕飯の用意しておくね」

「ああ…手伝おうか？」

「大丈夫、手間は掛からないから」

「そうか…」

何か動いていないと間が持たない。

「どうする？ 舞衣が帰ってくる前に二人で食べようか」

「いや、食べてる時に帰ってくるとちょっとタイミングが悪いから…」

「そうね。あの子が帰ってきたらすぐに出来るようにだけはしておくわ」

言って台所で支度に入った朝倉。

#二四九 待つ時間

「とりあえずこんなものでいいわね」

言いながら朝倉がリビングに戻ってきた。

材料を炒めた香りがリビングにも広がっている。この匂いを嗅ぐと空腹感を煽られる。

「それにしても遅いわね、舞衣」

「映画の方は？」

「しばらくは舞衣の出番無いみたいよ。もうあとワンシーンくらいだっ」

「じゃあ今はずっと学校に行ってるのか？」

「そうよ」

「大変じゃないのか？」

「そうでもないみたい。舞衣がこういう事になったのを知ってるのって演技部と仲の良い友達だけみたいだから」

「そうなんだ！」

「事務所が巧く隠してくれてるみたいよ」

「へ」

ウチの学校は私立だからこういう事をネタにして生徒を呼び込もうとするかもしれないもんな。

「でも、柄沢は全集で大々的に紹介されてたのに」

「あれは柄沢君の事務所の方針みたい」

「あいつもどっかに所属してんの？」

「確か、村西プロダクションに所属したって」

「それって、今やってる映画の監督の？」

「みたいよ」

「じゃあ、完全にプロじゃん…」

時刻はもうすぐ午後七時。

「コーヒーでも飲む？」

「ああ、じゃあ頼もうかな」

「はい」

朝倉がコーヒーを煎れるために席を立つと同時にテレビを点けた。俺と朝倉の会話以外は静寂が支配していたリビングにニュース番組が響く。

今日一日、豊たちと別れてからは朝倉と二人だけの世界に入り浸っていた。その間に外界で起こっていた事をテレビが伝えている。本音を言うと、朝倉と二人きりの世界ならその他の世界は要らない。今この時この空間以外が滅亡していたってかまわない。そんな気分だ。

「お待たせ」

ボーっとテレビを見てると、朝倉がコーヒーを持ってきてくれた。

「ありがとう」

言って一口飲んだ。

もう彼女は俺の好みのコーヒーを狂いなく煎れてくれるようになっている。

こういう事が幸せなんだと実感しながら、二口目を飲んだ。

俺と朝倉は舞衣が帰宅する時間まで待った。

#二五〇 伝え始めた想い

「ただいま」

永かった数十分。玄関から舞衣の声がした。

その声を聞いた瞬間俺の緊張感が一気に高まった。朝倉も同じ心境なのか？明らかに先刻より強張った表情をしている。舞衣が玄関からリビングに入ってくる数秒の間に覚悟を決めなければならない！待っていた数十分間は思っていたほど緊張感はなかった。今日言うてしまう！そう覚悟を決めたことで気が楽になっていた：と思っていたが、いざ舞衣が帰ってきて今にも自分の目の前に現れると考えると先刻までの軽かった気分が嘘の様に重い。

舞衣がリビングに入ってくる数秒の間までにこの場から逃げ出したい衝動に駆られる。

しかし俺の目の前には同じく覚悟を決めた朝倉が居る！彼女は俺以上の覚悟を決めてここに座っているだろう。

“ガチャッ”

リビングの戸が開いた！制服姿の舞衣がリビングに入ってきた！

「ただいまお姉ちゃん、こんにちは先輩」

玄関で俺の靴を見ていたのだろう、舞衣はあっさり言った。

「すいません、部活が遅くなって…」

しかし真剣な俺と朝倉の表情を見て舞衣の表情から笑顔が消えた。おそらく何かを察したのだろう。

今ならまだ戻れる…。

ここでいつもの様に接すれば良いだけ…。

何も言わずに普段の会話をここですれば…。

しかしこれ以上引き伸ばすわけにはいかない！

朝倉もこうして覚悟を決めてくれている。いつも顔を合わせる自分の妹に現実を伝える覚悟を。

「舞衣…」

俺は舞衣の名前を呼んだ…。

「はいっ」

俺が名前を呼ぶと、舞衣は緊張した声でそれに応えた。

「いきなりで悪いんだけど…ちゃんと聞いて欲しいんだ…」

もう…戻る事が出来ない状態に自分を追い込んだ。

「はい…」

俺が椅子から立ち上がりそう言うと、舞衣も鞆を床に置き俺の向かいの席、朝倉の隣に座った。

その表情はもう何を言われるのか解かっている様な表情だ。でも俺はちゃんと伝えるつもりだ。

少し沈黙してしまったが、俺は意を決して、

「俺は…君じゃなくて、朝倉麻梨子を好きになったんだ…」

何から伝えれば良いのか解からず、いきなり話を話し始めてしまった。でも舞衣は黙って聞いていてくれる。俺はそれを確認し続けた。

「君に一目惚れしてから、君のお姉さんに告白された…。そんな状況で君のお姉さんと中途半端な気持ちで接していたんだ…。それから君に告白して…。でも結局は君のお姉さん、朝倉麻梨子を選んでしまった…。俺の勝手で君を惑わした挙げ句、君をフツた事になってしまった…本当にごめん」

自分でも何を言っているのか全く解からない。支離滅裂な言葉を並べただけだが必死に俺の気持ちを彼女に伝えようとした。

「違います！」

そんな俺の言葉を遮り、舞衣が強い口調で言った！

#二五一 新たな決意と始まり

「違います…、私が先輩を惑わせたんです」

「え！」

舞衣は隣の朝倉をチラッと見て話しはじめた。

「私が興味本位でお姉ちゃんの好きな人を詮索して、勝手にその人を好きになった事で…それを先輩に告白してしまったからおかしな事に…。私が言わなければ二人はもっとスムーズに…」

舞衣は罪悪感を抱いていた様だ。

「私が独り胸に秘めていればそれで良い事だったのに…。ごめんなさいお姉ちゃん」

俯いたまま舞衣は言った。

「舞衣…」

「それは違う。俺は君の気持ちを知る前から君の事が好きだった。いや、今も好きだ。これは変えようもない事実なんだ！君が告白してくれて良かったと思ってるし…それで良かったんだ。ただ俺はそんな君じゃなく、朝倉麻梨子を選んでしまった…。全部俺が悪いんだよ。君は何も悪くない…。」

「そんなに謝らないでください。私はお姉ちゃんと先輩が恋人同士になっているという事が嬉しいんです」

「え？どういう事？」

舞衣の言葉が理解できず思わず訊いてしまった。

「イヴの日に先輩に相談した時に解かったんです。先輩は私には手の届かない人なんだって」

「……………」

「私の先輩への恋は、頼れるお兄さんの感覚だったんだって」

「舞衣…」

「もう私の事は気にしないでください。はやくお姉ちゃんと結婚して、本当の義兄さんになってくださいね。そのためにお姉ちゃんを

よろしくおねがいます」

「あんたは母親か！」

朝倉のツツコミが飛んだ。

「ごめん舞衣……」

「だから謝らないでください。もう……この話は終わりにして、何か食べませんか？」

「舞衣……」

俺は舞衣の名を呼んだが、『聞こえない！』『もうこの話はしたくない！』と言わんばかりに台所に移動してしまった。

「ホットケーキを焼きますけど、食べますか？」

舞衣は台所で少し何かを探してから言った。

「あ、ああ頂くよ」

「お姉ちゃんは？」

「私もね」

「ハ……イ。ちょっと待っててください、着替えてきます」

言って舞衣はリビングを出て行った。

「……これで、良いんだよ……な？」

自分にも言い聞かせる様に朝倉に言った。

「うん、舞衣が良いのなら」

彼女はそっと頷いて言った。

俺としては言いたかった事の半分も伝える事が出来なかった。というよりどうもすつきりしない終わり方だった。

しかしもうこれ以上は止めておこう。舞衣が涙を流さなかっただけでも良しとしなければ。

「愛してるよ、朝倉」

「私も」

そっと口づけを交わす。本当はもつとしっかりと舞衣に伝えなければいけないと思いながら……。

そして舞衣のためにも朝倉を幸せにしようと強く思った。同時に俺も幸せになると。

#二五二 三人の交差点

静寂がリビングを包む・・・。

舞衣がリビングを去ってまだたったの数分なのに、俺と朝倉を包む空気は異様なものとなって時間の感覚を麻痺させる。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

（舞衣、大丈夫かな？）

この言葉を何度吐き出そうとして飲み込んだか判らない。

言いかけて飲み込む。言いかけては飲み込む・・・。これの繰り返しで数分が経った。まだたった数分。

朝倉も何かを言おうとして止めているのか？一定時間の間隔でソワソワしているのが判る。

不意にテーブルに肘を突き、額を擦る。

「！ッ」

テーブルに置いていたもう片方の手に温もりを感じた！面を上げると朝倉が上体を乗り出し、そっと両手を覆い被せてくれていた。

「：朝倉」

やっと声を発する事が出来た。

すると彼女はゆっくり顔を左右に振り、
「一人で思い込まないで：」

そっと言った。

「朝倉：」

俺はもう一度彼女の名前を呼んだ。

「私も居るんだから：」

すると廊下から足音が聞こえてきた！

「！」

慌てて朝倉が両手を引っ込めたのと同時に舞衣がリビングに戻ってきた。

「うわっ、なんか暗いよ」

開口一番舞衣は言った。

その声に振り返り、俺は舞衣の姿を確認した。

そこには笑顔で立っている舞衣の姿があった。

「あっ…」

「え？」

「舞衣、ホットケーキも良いけど、これから夕飯にするのよ」

思わず声を出してしまった俺に舞衣は不思議そうな表情を見せた

が朝倉が咄嗟に話し掛けた為その表情は朝倉に向けられた。

「えっ、まだ食べてなかったの？」

「当たり前でしょ、あんたが帰ってくるのを待ってたんだから」

朝倉の口調はいつもの舞衣に対するものだった。

「帰って来た時に匂いがしてたから、てっきり食べたんだと思ってた」

「もしかしてあんた何か食べてきたの？」

「え…うん、絵里と帰りにハンバーガーを…」

申し訳なさそうに言う舞衣。

見慣れたというか、見た事のある光景に俺は少し安心感を覚えた。

「じゃあ、もう要らないのね？」

「何するの？」

「オムライスよ。もうあんたの分を含めて下準備はしてあるの」

「…じゃあ、少しだけ食べる」

「当然よね」

「はい…」

「クスッ」

二人のやりとりに思わず笑ってしまった。

「先輩ッ」

俺が笑い出してしまったので舞衣が恥かしそうにしている。

「ごめんごめん」

「もう」

朝倉は呆れに少しの怒りを調味した声を発しながら台所に移動した。

先刻まで俺は心配し過ぎていたのではないかと思えてしまう光景が目の前で繰り広げられている。

#二五三 新しい三人の食事

「お姉ちゃん手伝おうか？」

舞衣が台所に向かいながら言った。

「：そうね、じゃあ手伝ってもらおうかな」

「もうちよっと待っててくださいね先輩」

「ああ」

舞衣はリビングのテレビを点けてから台所に行った。

俺もいつまでも終わっていることを考えるのを止め、テレビに映るバラエティー番組を見始めた。

少しすると台所から油を炒める音と同時に食欲をそそる香りが再びリビングに漂い始めた。

・
・
・
・
・
・
・
・

「お待たせしましたあ」

舞衣が皿を二つ持ってリビングに戻ってきた。

テーブルに置かれた皿にはケチャップご飯だけが乗っていた。

「舞衣ちよっとごめん」

言いながらすぐ後に朝倉がフライパンを持ってやって来た。

「よいしょっ」

朝倉が器用にフライパンの中身をご飯に載せると半熟の卵焼きが綺麗にケチャップご飯に覆いかぶさった。

「おうまそう」

その光景を見ているだけで美味そうだった。

「まだちよっと待ってね」

その間に舞衣がもう一つの皿とフライパンを持ってきて、先の朝倉の様に器用に卵焼きを乗せた。本当にこの二人は料理が巧い。

「はい、これを掛けてね」

言って朝倉が持ってきた鍋にはホワイトソースが入っていた。

（そういえばホワイトソースのオムライスにするって言ってたな）
数時間前のことなのに、買い物していたことが遠い昔のように感じた。

「じゃあ食べましょうか」

「ああ」

朝倉と舞衣が席に着いて夕食が始まった。

数時間前まではこうして三人で夕食を食べている光景なんか想像できなかった。

でもこうして現実として目の前で三人が食事している。

「美味しい！」

心を縛り付けていた荊が解けたような開放感を感じながら二人が作ってくれたオムライスを俺は頬張った。

「あっ、お姉ちゃん」

「何？」

「明日、急に撮影の追加が入ったの」

「え！」

「だから明日は学校休むね」

「あんた、もっと早く言いなさいよ」

「だって帰りに連絡入ったんだもん」

「学校には？」

「大丈夫、絵里が伝えてくれるって」

「ふーん」

「な、なあ…」

気になって思わず訊いてしまった。

「はい？」

「芸能活動って、学校は知ってるのか？」

「もちろんです」

「じゃあ、学校で大変なんじゃないのか？」

「いえ、学校は知ってますが生徒には伝わってないので」

「で、学校は協力的なのか？」

「はい。最初はどうかになって思ってたんですけど、以外にもあつさり協力してくれてます」

「へー、ウチの学校がねえ」

先刻朝倉のも聞いていたが、本人の口から聞くと改めて不思議な感じがする。

「楽しいか？」

「はい」

舞衣は満面の笑みでそう言った。

#二五四 卒業まであと少し

「久しぶり〜元気してた？」

「なんかお前変わったなあ」

約一ヶ月ぶりに登校するとまるで皆同窓会の様な盛り上がり方で話をしている！夏休みより短い休みなのにそれとは違う雰囲気だ。

やっぱり高校生活の終わりを皆現実として受け止めている現われなのか？

俺もあと三日でこの教室や校舎に来る事がなくなるかと思うと感慨深くなる。

今日は三年生だけでの卒業式の練習のために久しぶりに登校している。明日は全校生徒での予行練習。なんだか今日行われる三年生だけの練習はあまり意味がないような気がしないでもないのだが、今となっては学校でしか会えない者と会う事が出来る、貴重な時間を過ごす事が出来ている。

「お前、休みどうしてた？」

「俺はずっとハワイに居たからな」

「嘘つけ！」

伴城と亜津が話をしている。

トモとはスキー旅行に行ったからそんなに久しぶりじゃないが、亜津は休みの前の日に会って以来で本当に久しぶりだ。去年まで夏休みだろうが冬休み、春休みだろうと豊と三人で毎日の様に遊びまくっていたのに。

「お、柊！元気だったか？」

ボーっと二人のやりとりを眺めていた俺に亜津が気付き話しかけてきた。

「ああ、お前も元気そうだな」

「当たり前よお！受験から開放されて毎日充実してたぜ」

「そりゃ良かった」

「ははは」

「お！皆揃ってんなあ！」

そこに登校してきたばかりの豊がやって来た！

「あつつん久しぶりだなあ！」

「おう豊も元気そうだな！ちゃんと生きてたんだな」

「なんだよそれ」

「てっきり馬鹿やって野たれ死んでんじゃないかと思って」

「おい！俺何もんだよ」

「「ははははは」」

俺と豊、トモに亜津。この四人がこうして揃って大声で笑ってるのってほんとうに何年ぶりだろうか？

懐かしい感覚と心底楽しい思い、そこに確実に忍び寄る非常な時間が増かった。

「はあゝい、皆騒ぎたい気持ちは分かるけど一旦席に着いてー、チャイムはとづくにチャイム鳴ってるわよ！」

言いながら純子先生が教室に入ってきた。その声にも俺もチャイムが鳴っていた事にはじめて気付いた！

「この後九時から体育館で練習があるからそのまま体育館に移動ね、その後に教室でホームルームするから」

一ヶ月ぶりに聴く純子先生の教師としての口調、通称純子節。

こうしてるとプライベートの純子先生を知っているのって結構優越感に浸れる気がする。純子先生のプライベートの姿を知っているのはスキー旅行に行った俺たちだけだから…。

そんな事を考えながら体育館へ移動した。

#二五五 それぞれの進路

「はあ」

小一時間ほどの練習が終わり、手短だったホームルームも終わって下校中。朝倉が大きなため息を吐いた。

「どうしたんだ？」

「あゝ、あと二日で皆とも離れ離れになるんだなあって思うとなんだかね…」

「そうだよな：皆同じ大学に行くとはいっても、学部によっては遠く離れることになるもんな…」

朝倉に連られ、俺もしんみりしてしまった。

「美夏ともお別れだもん」

「水野ってどこにいくんだ？」

「経済学部。将来は新聞記者になりたいんだって」

「え！水野って新聞記者になりたかったのか？」

「ええ、中学の時から言ってたわ」

「へ」

（すげゝ意外）

「私は教育学部だからキャンパスが違うのよね」

そう、朝倉は教師を目指すというのだ！きっかけは三年の、今の担任である純子ちゃんこと城美純子先生なんだとか。『純子ちゃんみたいになフレンドリーな小学校の先生になりたいの』と、冬休みの前に話してくれた。

「経済学部のキャンパスってどこなんだ？」

「神奈川の平塚市」

「そんなに離れてないじゃん」

「でも高校卒業後はあっちで一人暮らしするって言うし…。そんなに遠くないけど、頻繁には会えなくなるから…」

「そっか、寂しくなるな…」

「でも、あなたがそばにいてくれるから：大丈夫なの：」

急に改まった口調で言うので俺は思わず照れてしまった。

朝倉の言うとおり、俺は大学でも朝倉といつでも一緒に居れる。俺も教育学部の合格を受ける事が出来たのだ！これには本当に純子先生にお世話になった。純子先生が担任じゃなかったらおそらく教育学部には入れなかっただろう。冬休みから三学期頭まで、本当にギリギリまで先生と相談してなんとか取り付けた体育推薦。

その事は既に朝倉にも伝えてあるが、もう一つ彼女に言ってなかった事があった。

「俺さ：大学でもう一度テニスをやろうと思うんだ」

「本当！？」

「ああ、最初に教育学部に決まったって言った時に言わなかったんだけど、テニスをやるって条件で体育推薦を受けたんだ。そしたら純子先生の尽力もあって何とか合格したんだ」

「そうだったの？」

「ああ、なんか朝倉たちみたいに学力で掴み取った合格じゃなくて、なんかズルしたみたいでなかなか言い出せなくて：」

「ううん、推薦だってあなたの日々の努力の結果じゃない。堂々と胸を張れるよ」

「ありがとう。どうせやるならもう一度本格的に目指そうと思うんだ」

「プロを？」

「ううんううん。プロにはもう遅いよ。俺が目指すってのは、大学日本一！」

「そう！頑張ってね」

朝倉は自分の事のように嬉しそうに言ってくれた。

「トモもずっと、もう一度一緒にやらないかって言ってくれてたし、この一年なんだかんだでテニスを完全に捨てることも出来なかったから。俺にはこれしかないって気もするしな」

朝倉の瞳を見つめながら俺は続けた。

「朝倉：応援してくれるか？」

「もちろんよ！でも、嬉しい：」

「嬉しい？」

「うん、またカッコイイ柊君が見れるから」

「何だよその言い方、テニスをやってない俺はカッコよくないのかよ？」

少しイジけた口調で言ってみた。

「そういうわけじゃないのよ。普段のあなたは大好きなあなたで、テニスをしてる時のあなたはカッコイイあなたなの」

「：それって誉められてるのか？」

「最高の誉め言葉じゃない？フフフ」

言いながら、彼女は最高に可愛い笑顔を見せてくれた。

「でも、不思議なもんだよなあ」

「何が？」

「いや去年の今頃なんか一年後、こうなってるなんて全く想像してなかったのになあって思ってたさ。朝倉とこうして並んで下校して、教師を目指して大学に進学するって想像」

「：そうね、私も先生目指すなんて去年の今頃は考えてなかったわ。：でもこうしてあなたと並んで下校する姿はずっと想像してたわ。うん、一緒に下校できたら良いなって思ってたの。それが実際に叶うなんて：」

俺の腕に寄り添う朝倉。

「ま、まあ未来なんてどうなるのかなんて解からないものってことだなっ」

「私はこの先もずっとこうでありたい：」

そう言ってよりいっそう俺の腕に寄り添う朝倉。

「俺も」

言って俺はもっと彼女を密着させた。

春が近づき、暖かくなりつつある歩道が二人の明るい未来に続いている様に願いながら朝倉とゆっくり家路を歩いた。

#二五六 卒業式

『いま、わかれのときとびたとうみらいしんじて』

練習なんかすると本番での有り難味が薄れるんじゃないかと思っていたのだが、いざその時が来るとかなり感慨深くなる！さすがに俺は泣く事はないが時間の経過と共に周りからはすすり泣く声がチラホラ聞こえてきたりする…。そんな声を聴いているとやっぱり自分も刺激されてしまう…。

ついにむかえた卒業式…。少し肌寒さを感じる体育館に俺は立っている。

周りの雰囲気を感じ取ると、この学校を卒業するんだという事を徐々に実感していく…。

別に高校生活に未練はないのだが、これまで一緒に過ごしてきたやつらと会えなくなるという事が本当につらい事に思える。正確に言えば会えなくなるのというのではなく、このメンバーで共同生活できる事が嫌に感じる。

これから卒業証書の授与が始まる。実際に受け取るのはこの後教室に帰ってからだから、ここでは一人一人名前を呼ばれその場に立つだけ、クラスの代表が全員分を受け取りに壇上に上がる。

『終了希っ』

「はいっ」

俺は歯切れ良く返事をし、席を立った。

『朝倉麻梨子』

「はい」

少しして女子の一番手朝倉が呼ばれた。俺は朝倉の方を確認した。横に居る男子の所為でまともに彼女を確認する事は出来なかったが、朝倉が泣いていない事は確認できた。

しばらくしてウチのクラス全員の名前が呼ばれ、代表である豊と月島が全員分の証書を受け取るために壇上に上がった。

絶対にやりたくはないが何となく良いなあと思った。あの二人は
二学期の学級委員という事で代表で受け取る事になった。

・
・
・
・
・
・
・

卒業式最後のセレモニーが終わり、在校生のおざなりな拍手に送
られ俺たち卒業生は体育館を出た。もうこの体育館に足を踏み入れ
る事もないだろう。

体育館を出ると同時に皆それぞれ仲の良い者同士集まって、泣き
崩れたり、別れを言い合ったりしている。

俺も豊、トモ、亜津の四人で、最後の教室にむかった。

（こうやってコイツらとこの廊下を歩くのも最後か）

「違う大学に行っても…俺たち友達だよな？」

途中で亜津が言った。

「何だよ…キモチ悪いなあ」

その言葉に豊が茶化し気味に言った。

俺は、

「当たり前だろ！連絡一つで俺たちはいつでも集まるんだよ！」
言った。すると、

「そうだぜ！な、豊」

「ああ」

トモと豊が言った。

クサいけど俺たちはずっと友達だ！

#二五七 最高のSEASONS

教室に戻ると卒業証書の授与などの一連の行事が始まった。

ほとんどの者が同じ大学に進学するのだが、やっぱり長年親しんできた友達との別れは寂しいものなのだろう、特に女子が感慨深くなっている。

そしてそれら一連の行事が終わると、二学期（実質三学期も）の学級員だった月島がどこからともなく花束を取り出し、それを教壇に居る純子先生のもとへ持って行った。

「先生、一年間お疲れ様でした」

言って月島は花束を純子先生に手渡した。

予期していなかったであろうサプライズにびっくりする純子先生。
「純子ちゃん、泣きたい時は思いっきり泣いて良いんだよ！」

クラスの男子がおもむろにチャカした。

「うるさいっ！」

それを冗談交じりに一喝すると、純子先生は続けて、

「このクラスは私が初めて担任を任されたクラスで：この一年、皆と一緒に私も学ぶ事が多かった一年でした：。未熟ながら歩んできたこの一年という時間は本当にアツという間で、何とか皆とこの日を迎えることが出来ました。えー、皆さん卒業おめでとう！これから皆が進んでいく道が素晴らしいものになる事を影ながら応援しています。一年間ありがとうございました」

『パチパチパチパチパチ』

一礼とともに純子先生の言葉が終わる。

同時に教室中に全員からの惜しみない拍手が響き渡った。そんななか何人もの女子が涙を拭っている。俺もその空間の中で一瞬涙腺が緩んだ。

やがて拍手が止み、誰がともなく仲の良い者同士集まったり、先生のもとに駆け寄る者。皆それぞれ残された本当に僅かな高校生活

最後の一時を惜しみながら味わった。

「これ書いて！」

言って俺の前に先刻全員に渡された卒業アルバムが差し出された。差し出してきたのは朝倉。

「オッケー」

何を書こうか少し考え、彼女から卒業アルバムとマジックを受け取った。

“最高の思い出をありがとう 終了希”

その一文を書いて彼女に返した。

「じゃあ、俺のも書いてよ」

言って朝倉に俺の卒業アルバムを渡した。

「お！寄せ書き？俺にも書かせろ！」

俺と朝倉のやりとりを発見した豊が叫ぶと、瞬く間にクラス中全員の卒業アルバムが飛び交う！

『キンコンカンコンコン〜』

そうこうしていると高校生活最後のチャイムが鳴り響いた！

皆名残惜しそうに教室を後にする。

（じゃあな・・・）

この一年色んな事があった三年G組の教室に俺はそっと別れを告げた。

「ねー、もっと詰めないと写らないわよっ」

デジカメをセットしながら月島が指示した。

校門の前で写真を撮るためにクラスの仲の良いいつものメンバーで整列している。

「あ！この位置だと校名が入らないわ！皆もっと右によってっ、あ！そっちじゃない！」

「これで良いか？」

豊が訊く。

「オッケー、じゃあ撮るわよ！」

月島がシャッターを押し、急いで列に加わる。

俺の横で朝倉が手を握った。俺もその手をそっと握り返した。

『カシャッ』

季節はまたあの日と同じ春。また夏が来て、秋になり、冬が過ぎてまた春が来る。そうして幾度となく季節は巡っていく。

この先もきつと色んな事があって、色々な季節が巡ってくるだろう。でもこの一年間の季節は今後俺の中で絶対に色褪せる事はない。この先も巡ってくる季節をずっと朝倉と過ごせると信じている。

最高のSEASONSをありがとう・・・。

・・・fin

あとがき

終わっちゃいました。

途中、番外編を挟んだので足掛けですが一年掛かりました。

この作品を作ったきっかけは、数年前に小説や映画などでどちらかが病氣等で亡くなる悲恋ものの作品が流行った時に、お涙頂戴の恋愛作品も良いけど、本来恋愛って明るく楽しいものなんじゃないか？と思ったところからでした。

小説はサスペンスやミステリーものが好きで、普段恋愛小説は読まないのですが、ハッピーエンドの恋愛ものが読みたい！と漠然と思い始めて、イチからそういう作品を探して読むのは面倒なあと思い、思い切って書いてみました。

しかし小説なんか書いたことがなく、どうやって書いたらいいのか？という状態から何とか完成させた作品です。

なのでひどい文面で最後まで押し切った事をお許しください。

さて物語に関する事なのですが、上記の様にハッピーエンドの恋愛小説を書きたいと思ったのですが、ただ主人公とヒロインがラブラブで終始するという物語では面白くないなあという所から、この物語の柱である微妙な三角関係を構築しました。

でも、この微妙な三角関係が凄く難しくて、それに加えて貧困な文章力からなかなかこちらの意図することが伝わっていないなあ：と日々反省し通しでした。

何か物語の幅を広げられないかと期待して登場させたキャラクタ

ーを完璧に使いこなすことが出来ずに中途半端で終わらせてしまったり…。

広瀬由比というキャラクターがまさにそれ。登場させた時は四角関係までも想定に入れていたのですが、さすがにそうすると終わった主人公になってしまうので、自重しました。

後半の二人のラブラブな内容はそんな苦悩の前半の反動でした。

肝心の柱の三角関係の決着に関しても本心ではもっとすっきりする終わりが出来たんじゃないか？と今でも後悔しています。

主人公・柊了希、ヒロイン・朝倉麻梨子、朝倉舞衣の三人キャラクターが何とか傷つかないようにしようと無理な画策を最後までした結果が本編の答えです。

この内容でそれは絶対に無理だったのですが…。

と、他にも技量の無さから情けない終わらせ方で締めてしまった部分があります。

でも、この作品を書き切った事にはまったく後悔はしていません。ベタな展開や、自分的に譲れない展開等やりたい事は全部つぎ込みましたから。

最初から最後まで読んでいただいた方、途中から読み始めていただいた方、一部またはこのあとがきだけを読んで頂いた方々に厚く御礼申し上げます。

こういうラストを期待していたんじゃない！と思う方も居ると思いますが、SEASONSはこれで完結です。

大学編を読みたいという本当にありがたいお言葉を頂きましたが、自分自身としては今のところこの物語の続きを書くのは止めておこうと思っています。

臆気ながら、こうしたい、ああしたいという簡単な構成は考えていたりしますが、それはまたいつかどうしても書きたくなった時ま

で抑えておきます。

さて今後の予定なのですが、次の作品は既に殆ど完成していたりします。

SEASONSの続編は書かないと言いましたが、次の作品もSEASONSです！

何言ってるんだ？と思われるかもしれませんが、次作品は本編の続きではないSEASONSです。

本編を一旦休んで書いていた『SEASONS memory』あれと同じスピノフ作品です。

本編は主人公・柊了希の目線で展開していて、物語で描かれている事例には全て柊了希が絡んでいなければならなかったのですが、どうしても柊了希以外のキャラクターの話が書けませんでした。

自分の頭の中で、このキャラクターはこういう事を歴て今柊了希と接しているという事を考えながら書いていたのですが、それを本編で書く事が出来ませんでした。それを次の作品で書いてみたいと思います。

つまり柊了希以外のキャラクターが主人公を務める短編物語です。もちろん柊了希が主人公を務める物語もあるのですが、一年間書いていて、SEASONSのキャラクターにも愛着が湧いてますし、それを物語にしたいと思います。

具体的な開始時期はまだ決めていませんが、今はとりあえず少し休憩してなるべく早く開始したいと思っていますので、ご興味のある方は是非見てください。

詳細はTwitter <https://twitter.com/LORON>の方でお知らせする事になると思うので、そちらを参照していただければ。

休んでいる間もほぼ毎日心をかけてツイートするので、そこで開

始時期もお知らせします。

読み返してみるとやっぱり支離滅裂なあとがきになってしまっています。このあたりであとがきを終わらせていただきます。

最後にもう一度。ここまでお付き合いいただいた皆様、本当にありがとうございます。また次回作でお目にかかれれば幸いです。

2010年8月29日 COLOR

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7965h/>

SEASONS

2010年10月8日12時05分発行